新潟県埋蔵文化財調査報告書 第179集

日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書XXV

中部北遺跡

桜林遺跡 Ⅱ

2008

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書XXV

中部北遺跡（ちゅうぶきた）
桜林遺跡Ⅱ（さくらばやし）

2008

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

日本海沿岸東北自動車道は、新潟市の新潟空港インターチェンジから日本海に沿って北上し、山形県を経て秋田自動車道と接続し、青森県に至る高規格幹線道路です。新潟県内では、胎内市の中条インターチェンジまでが平成14年度に完成しています。

高速自動車道建設を取り巻く状況は厳しいものがありますが、平成15年末の国土開発幹線自動車道建設会議（国幹会議）において、日本海沿岸東北自動車道の中条－朝日間は、旧日本道路公団が有料道路として建設を進めることになりました。その後、公団の分割・民営化に伴い、平成17年10月に設立された東日本高速道路株式会社に引き継がれましたが、平成18年2月の国幹会議において、荒川－朝日間については国土交通省が新直轄道路として建設することになりました。日本海沿岸東北自動車道は、この地域内外の経済的な交通・流通を促すだけでなく、救急患者の搬送・災害時の緊急輸送などの「命の高速道」としての役割も期待されており、早期の開通が望まれています。

本書は、この日本海沿岸東北自動車道建設に先立って発掘調査を実施した「中部北遺跡」および「桜林遺跡」の報告書です。中部北遺跡は、縄文時代中期から後期の遺跡です。縄文土器や石鏃・石錘などが出土しましたが、定住的な痕跡は少なく、狩りや漁などの短期的な活動の場として注目されます。一方の桜林遺跡は、室町時代を中心とする遺跡です。井戸や掘立柱建物などの遺構や、曲物・臼・漆器といった木製品が見つかり、当時の集落の様子を伝える貴重な資料として期待されます。

今回の発掘調査が、考古学研究者はもとより、地域の歴史を知り、学ぼうとする多くの方々に活用されることを願っております。

最後に、この調査に参加された地元の方々や区長並びに神林村教育委員会、荒川町教育委員会には多大なる御協力と御援助をいただきました。また、国土交通省北陸地方整備局新潟国道事務所、東日本高速道路株式会社新潟管理局村上工事事務所、荒川沿岸土地改良区には、調査に際して格別のご配慮をいただきました。ここに厚くお礼申し上げます。

平成20年3月

新潟県教育委員会

教育長　武　藤　克　己

例　　言

1　本書は、新潟県岩船郡神林村大字牛屋字中部1048ほかに所在する中部北遺跡、同　荒川町大字金屋字桜林1372ほかに所在する桜林遺跡の発掘調査記録である。

2　発掘調査は日本海沿岸東北自動車道の建設に伴い、新潟県教育委員会（以下、県教委とする）が国土交通省北陸地方整備局新潟国道事務所から受託したものである。

3　発掘調査は県教委が調査主体となり、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団とする）に調査を依頼した。埋文事業団は発掘調査作業および関連諸工事を株式会社吉田建設（以下、吉田建設とする）に委託し、埋文事業団の管理・監督のもと平成18年4月3日～8月24日（中部北遺跡）、平成18年8月25日～11月16日（桜林遺跡）にかけて吉田建設が発掘調査を実施した。発掘調査面積は中部北遺跡が3,620㎡、桜林遺跡が3,263㎡である。

4　整理および報告書作成に係る作業は埋文事業団の指導のもと、平成18年6月～平成19年3月の間に吉田建設が行った。

5　出土遺物および記録類は、県教委が新潟県埋蔵文化財センターにおいて保管・管理している。遺物の注記記号は、遺跡名の前に調査年度を付し、「06中ブ」（中部北遺跡）、「06サクラ」（桜林遺跡）とした。また、出土地点および層位などを併記した。

6　引用文献は、著者および発行年（西暦）を文中に［ ］で示し、巻末に掲載した。

7　本書に掲載した遺物番号は、すべて遺跡毎に通し番号とし、本文・図面・写真・観察表の番号は一致している。

8　本書の方位はすべて真北である。ただし、ここでいう「真北」とは日本平面国家座標のX軸方向を示す。

9　自然科学分析（第Ⅲ章4・第Ⅳ章4）は、パリノ・サーヴェイ株式会社に分析・原稿を依頼した。

10　航空写真撮影は、J・T空撮に委託した。

11　中部北遺跡で出土した石器については、実測の一部を株式会社みくに考古学研究所に委託した。また、石器のデジタルトレースは、すべて有限会社アルケーリサーチに委託した。

12　遺構・遺物の各種図版作成に関しては以下のとおりである。遺構図はＣＡＤ・Adobe社Illustratorで作成・EPS化し、遺物写真はデジタルカメラ（キャノンEOSKissDigitalN・ニコンD100）で撮影したデータを用いた。遺構写真は、モノクローム新潟がデジタル化したものを使用した。

13　平成17年度以前に刊行した報告書には、法定路線名の日本海沿岸東北自動車道〈略称、日沿道〉と東日本高速道路株式会社の営業路線名である日本海東北自動車道〈略称、日東道〉が事業者の意向により使用され、結果として両路線名称が一冊の報告書に混在していた。しかし、平成17年度末に高速自動車国道法第6条により荒川インターチェンジの北側については新直轄方式を導入し国土交通省の建設区間となったことから、この区間の路線名称は日本海沿岸東北自動車道〈略称、日沿道〉に統一することとした。

14　本書の執筆は、石川智紀（埋文事業団調査課日沿道担当班長）、継　実・松井　智・山本友紀（以上、吉田建設調査員）、パリノ・サーヴェイ株式会社がこれにあたり、編集は石川の指導のもと継が行った。執筆分担は以下のとおりである。
第Ⅰ章1…石川智紀　第Ⅰ章2、第Ⅱ章、第Ⅲ章1・2A・2B4)・5)・3B・5C、第Ⅳ章1・2A・2B・2C4)～7)・3・5…継　実
第Ⅲ章2B1)～4)・3A2)・5B、第Ⅳ章2C1)～5)…松井　智　第Ⅲ章2B3)・3A1)・5A、第Ⅳ章2C1)～3)・3B2)…山本友紀
第Ⅲ章4・第Ⅳ章4は千葉博俊の管理のもと、伊藤良永・金井慎司・斉藤崇人・高橋　敦・松元美由紀・馬場健司（以上、パリノ・サーヴェイ株式会社）が分担して執筆した。

15　下記の方々・機関から多くのご教示とご協力を頂いた。記してここに厚く御礼を申し上げる。（五十音順、敬称略）

青木　学　金子　拓男　作田　一耕　宗台富貴子　関　雅之　田代　郁夫　田中　耕作　田辺　早苗
長澤　展生　高濱　信行　中島　栄一　野田　豊文　浜野　浩美　前川　雅夫　水落　雅明　水澤　幸一
山田　昌久　湯原　勝美　吉井　雅勇

目　　次

第Ⅰ章　序　　説

1　調査に至る経緯 …… 1

2　調査の方法と経過 …… 2

A　中部北遺跡 …… 2

1）試掘確認調査 …… 2　2）本調査 …… 2

B　桜林遺跡 …… 4

1）試掘確認調査 …… 4　2）本調査 …… 5

C　調査・整理体制 …… 7

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

1　地理的環境 …… 8

2　歴史的環境 …… 10

第Ⅲ章　中部北遺跡

1　調査の概要 …… 13

A　グリッドの設定 …… 13

B　基本層序 …… 13

2　遺　構 …… 15

A　遺構の概要と記述の方法 …… 15

B　各　説 …… 16

1）土　坑 …… 16　2）炭化物集中 …… 17

3）ピット …… 17　4）杭 …… 17

5）自然流路 …… 17

3　遺　物 …… 18

A　縄文時代の遺物 …… 18

1）土　器 …… 18　2）石　器・石製品 …… 23

B　古代の遺物 …… 28

4　自然科学分析 …… 29

A　はじめに …… 29

B　試　料 …… 29

C　分析方法 …… 29

D　結　果 …… 29

1）放射性炭素年代測定 …… 29　2）珪藻分析 …… 30

3）花粉分析 …… 31　4）植物珪酸体分析 …… 31

5）種実分析 …… 32　6）樹種同定 …… 32

E　考　　察 …… 32

1）古環境変遷 …… 32　2）植物資源利用 …… 33

5　まとめ－縄文時代を中心として－

A　土　器 …… 35

1）概　観 …… 35　2）大木9～10式土器について …… 35

3）円形刺突文を有する土器について …… 36

B　石　器 …… 39

1）石器組成 …… 39　2）石器組成からみた遺跡の性格 …… 39

第Ⅳ章　桜林遺跡

1　調査の概要 …… 41
A　グリッドの設定 …… 41
B　基本層序 …… 41
2　遺　構 …… 42
A　概　要 …… 42
B　記述の方法 …… 42
C　各　説 …… 43
1）掘立柱建物 …… 43　2）井　戸 …… 44
3）土　坑 …… 47　4）溝 …… 48
5）ピット …… 50　6）性格不明遺構 …… 50
7）近世墓 …… 50
3　遺　物 …… 51
A　概　要 …… 51
B　各　説 …… 51
1）土器・陶磁器類 …… 51　2）木製品 …… 52
3）石製品 …… 53　4）金属製品 …… 53
5）銭　貨 …… 53
4　自然科学分析 …… 54
A　はじめに …… 54
B　試　料 …… 54
C　分析方法 …… 54
D　結　果 …… 54
1）放射性炭素年代測定 …… 54　2）樹種同定 …… 55
3）種実分析 …… 55　4）動物遺存体分析 …… 57
E　考　察 …… 57
1）動・植物利用 …… 57　2）木製品 …… 59
5　まとめ …… 61
A　遺跡の時期 …… 61
B　中世における遺跡の性格 …… 61
C　近世墓について …… 61

《要　約》 …… 63
《参考・引用文献》 …… 64
《観察表》 …… 69

挿図目次

第 1 図　試掘確認調査トレンチと本発掘調査実施範囲 …… 2
第 2 図　層序確認ベルトと遺跡内容確認トレンチ …… 3
第 3 図　試掘確認調査トレンチと本発掘調査実施範囲 …… 5
第 4 図　層序確認ベルトと遺跡内容確認トレンチ …… 6
第 5 図　遺跡周辺の地形分類図 …… 8
第 6 図　下越地方の荘園・国衙領分布図 …… 10
第 7 図　瀬波郡絵図に描かれた集落と境界 …… 11
第 8 図　遺跡周辺の縄文時代・中世遺跡分布図 …… 12
第 9 図　グリッドの設定と基本土層堆積図 …… 14
第 10 図　土器部位名称 …… 19
第 11 図　土器出土分布図 …… 20
第 12 図　主な器種の並べ方及び部位名称と計測基準 …… 24
第 13 図　石器分類図 …… 24
第 14 図　石器分布図 …… 25
第 15 図　花粉群集の層位分布 …… 31
第 16 図　植物珪酸体含量の層位的変化 …… 31
第 17 図　中部北遺跡の花粉 …… 34
第 18 図　中部北遺跡の植物珪酸体・珪藻・種実遺体 …… 34
第 19 図　中部北遺跡の木材・炭化材 …… 34
第 20 図　39 と県内出土土器 …… 38
第 21 図　グリッドの設定と基本土層堆積図 …… 41
第 22 図　遺構分類図 …… 42
第 23 図　桜林遺跡の木材（1） …… 59
第 24 図　桜林遺跡の木材（2） …… 59
第 25 図　桜林遺跡の種実（栽培植物） …… 59
第 26 図　桜林遺跡の種実（木本・草本） …… 59
第 27 図　桜林遺跡の種実（草本） …… 59
第 28 図　桜林遺跡の出土骨 …… 59
第 29 図　新潟県における中世の木棺墓 …… 62

表目次

第 1 表　石器組成と縮尺率 …… 25
第 2 表　放射性炭素年代測定結果 …… 29
第 3 表　暦年較正結果 …… 29
第 4 表　珪藻分析結果 …… 30
第 5 表　花粉分析結果 …… 30
第 6 表　植物珪酸体含量 …… 31
第 7 表　種実分析結果 …… 32
第 8 表　樹種同定結果 …… 32
第 9 表　中部北遺跡の土器型式と周辺遺跡編年対応表 …… 35
第 10 表　39 と各土器型式の要素対照表 …… 37
第 11 表　縄文時代中～後期の県内遺跡石器組成表　39
第 12 表　放射性炭素年代測定結果 …… 54
第 13 表　暦年較正結果 …… 54
第 14 表　樹種同定結果 …… 55
第 15 表　種実分析結果 …… 56
第 16 表　検出分類群一覧 …… 57
第 17 表　骨同定結果 …… 57
第 18 表　多摩丘陵の遺跡における埋葬形態の変遷　62

図面図版目次

中部北遺跡

図版 1　遺構全体図
図版 2　遺構分割図（1）
図版 3　遺構分割図（2）
図版 4　流路 1・2
図版 5　遺構個別図　杭 1・SK1・SK2・SK3・SK4・SK9・SK10・SK16・SC101
図版 6　遺物実測図（1）縄文時代の土器（1）
図版 7　遺物実測図（2）縄文時代の土器（2）
図版 8　遺物実測図（3）縄文時代の土器（3）・古代の土器
図版 9　遺物実測図（4）縄文時代の石器（1）
図版 10　遺物実測図（5）縄文時代の石器（2）
図版 11　遺物実測図（6）縄文時代の石器（3）

桜林遺跡

図版 12　遺構全体図
図版 13　遺構分割図（1）
図版 14　遺構分割図（2）
図版 15　遺構分割図（3）
図版 16　遺構個別図（1）SB1・SB2・SX203
図版 17　遺構個別図（2）SB3・SB4・SX207
図版 18　遺構個別図（3）SB5・SB6・SD2・SD148・SD178・SD204・SD205・SD208・SD209
図版 19　遺構個別図（4）SE3・SE4・SE26・SE41・SE66
図版 20　遺構個別図（5）SE102・SE103・SE127・SE130・SE141

図版 21　遺構個別図（6）SE142・SE161・SE162・SE168・SE169
図版 22　遺構個別図（7）SE145・SE149・SE167・SE189・SE191
図版 23　遺構個別図（8）SD1・SD31・SK13・SK128・SK129・SK132・SK133・SK134・SK144・SK180・SK210
図版 24　遺構個別図（9）近世墓（SK131）・P45・P51・P53・P84・P87・P158・P174
図版 25　遺物実測図（1）陶磁器・土器類
図版 26　遺物実測図（2）木製品（1）
図版 27　遺物実測図（3）木製品（2）
図版 28　遺物実測図（4）木製品（3）

写真図版目次

中部北遺跡
図版 29　遺跡近景
図版 30　基本層序・杭・遺構（1）土坑
図版 31　遺構（2）土坑
図版 32　遺構（3）炭化物集中・流路 1
図版 33　流路 1・流路 2
図版 34　流路 2
図版 35　縄文時代の土器（1）
図版 36　縄文時代の土器（2）
図版 37　縄文時代の土器（3）・古代の土器・縄文時代の石器（1）
図版 38　縄文時代の石器（2）
図版 39　縄文時代の石器（3）
図版 40　縄文時代の石器（4）
桜林遺跡
図版 41　遺跡近景
図版 42　遺跡全景・遺跡近景
図版 43　基本層序・遺構（1）掘立柱建物
図版 44　遺構（2）掘立柱建物
図版 45　遺構（3）井戸
図版 46　遺構（4）井戸
図版 47　遺構（5）井戸
図版 48　遺構（6）井戸・土坑
図版 49　遺構（7）土坑
図版 50　遺構（8）土坑・溝
図版 51　遺構（9）溝
図版 52　遺構（10）溝・ピット
図版 53　遺構（11）ピット・性格不明遺構
図版 54　遺構（12）近世墓
図版 55　陶磁器・土器類
図版 56　木製品（1）
図版 57　木製品（2）
図版 58　木製品（3）

第Ⅰ章　序　　説

1　調査に至る経緯

法定路線名「日本海沿岸東北自動車道（以下、「日沿道」）」は、新潟市の新潟空港インターチェンジ（以下、「IC」）を起点に、日本海に沿って北上し、山形県、秋田県を経て青森市に至る高規格幹線道路である。日本海側の縦貫軸として、沿線地域の相互交流、発展、活性化が期待されている。また新潟中央ジャンクション（以下、「JCT」）～秋田県河辺JCT間は、営業路線名「日本海東北自動車道（以下、「日東道」）」とも呼称される。日沿道の新潟～朝日間における基本計画は、平成元年２月に新潟～村上間、平成３年12月に村上～朝日間が決定した。中条IC以北は第13次区間にあたり、平成10年４月に中条～荒川間、同年12月に荒川～朝日間の施工命令が出された。これを受けて、日本道路公団（以下、「道路公団」）と新潟県教育委員会（以下、「県教委」）との間で、道路法線内の埋蔵文化財の取り扱いに関する協議が本格化した。

中条IC～朝日IC間の分布調査は、県教委から委託を受けた財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、「埋文事業団」）が平成11年度に実施した。分布調査の結果、道路法線上には８か所の周知遺跡と27か所の遺跡推定地が存在し、これらについて試掘確認調査が必要である旨を県教委に報告した。

中部北遺跡に係る試掘確認調査は、「周知遺跡１」として平成14年10月から11月にかけて実施した。周知範囲から離れて、新たに縄文・弥生時代の遺物が良好な状態で出土したため、中部北遺跡として新規登録した。桜林遺跡に係る範囲は、「推定地10」として平成14年８月と11月に調査した。古代の遺物と当該期の可能性がある遺構を検出したことから、小字名から桜林遺跡として新規登録した。この時点で推定された本発掘調査面積は、中部北遺跡が6,000㎡、桜林遺跡が10,200㎡である。

試掘確認調査終了後、平成14年12月18日の道路公団、県教委及び埋文事業団との協議で、日沿道早期開通のため、当面は暫定二車線分に調査範囲を限定することを決定した（以下、「限定協議」）。その結果、今期の本発掘調査対象面積を中部北遺跡3,620㎡、桜林遺跡2,670㎡とした。

平成16年１月８日の国土開発幹線自動車道建設会議（以下、「国幹会議」）が終了後、民営化を控えた道路公団から、膨大な調査量を短期間に終了することが要望された。それに対応するため、県教委と埋文事業団は調査体制などの協議を行い、日沿道建設に限り、平成16年度以降の調査を埋文事業団職員の管理・監督の下に民間調査機関に全部委託することとした。その後、日沿道の事業は、道路公団の分割民営化に伴い、平成17年10月１日に設立された東日本高速道路株式会社（以下、「東日本高速道路」）に引き継がれた。また平成18年２月７日の国幹会議により、荒川IC以南は東日本高速道路が「有料道路方式」で、荒川IC以北は国土交通省（以下、「国交省」）が「新直轄方式」で整備することになった。

平成18年度の本発掘調査か所は、最終的に平成18年３月３日の国交省、県教委、埋文事業団による協議で決定した。また平成14年12月の限定協議内容も、国交省に引継がれることが確認された。調査対象は神林村・村上市内の７遺跡、調査面積約54,240㎡である。中部北遺跡はこの協議に基づき、４月３日から調査を開始した。同年５月、荒川町内の一部に追越し区間を設けて四車線とする計画変更が示され、桜林遺跡が追加調査対象となった。年度内調査が可能か検討し、中部北遺跡が８月で終了する目途が立ったことから、調査着手を決定した。調査面積を3,340㎡に変更し、同年８月25日から調査を開始した。

2　調査の方法と経過

A　中部北遺跡

1）試掘確認調査

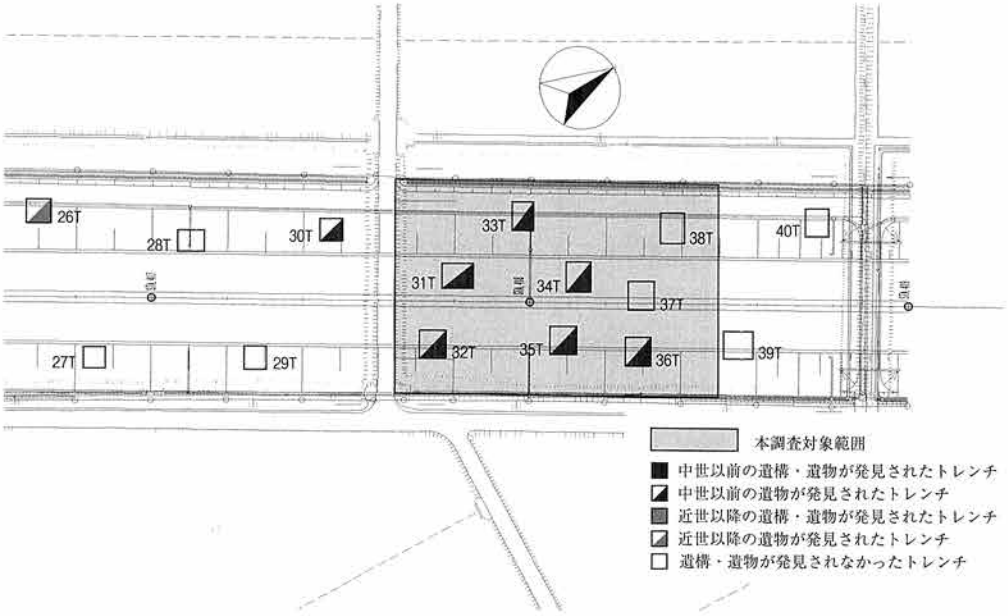
試掘確認調査は「周知遺跡１（西部遺跡）」の隣接地として、道路法線センター杭 STA.412 から STA.422 の間の約 75,000 ㎡を対象に平成 14 年 10 月 15 日～ 11 月 15 日の期間で実施した。調査範囲内に任意にトレンチを設定し、重機（バック・ホー（以下、固有名称省略））及び人力による掘削・精査を行い、遺構・遺物の有無を確認した。その後、土層堆積状況、トレンチ位置、遺構・遺物の検出状況等を図面・写真等に記録した。掘削は３ｍを目途に行ったが、上層での遺構の検出状況や湧水の状況により、３ｍに達しなくても掘削を取りやめたトレンチがある。

本遺跡周辺では、中世以前の遺物は７か所のトレンチ（以下、「T」）から出土している。このうち、31 ～ 36T から縄文土器をはじめ、石器、搬入礫などが現地表下１～ 1.5 ｍに堆積するⅥ層（本調査のⅥｂ・Ⅵｃ層）から出土した。遺構は検出できなかったが、炭化物が多く検出される部分が存在することから、より詳細な調査により遺構が発見される可能性が高いと考えた。一方、30・32T では現地表下約 50cm に堆積するⅢ層からは中世・古代の土器が散発的に出土している。しかし、Ⅲ層の土質は未分解の植物遺体を比較的多く含む粘土であり、湿地的な環境で堆積したものと考えられることから、この時期の遺跡の存在を示すのものではないと判断した。

以上の調査結果から、中部北遺跡については約 6,000 ㎡に対して本発掘調査が必要であることを県教委に報告した。その後、平成 14 年 12 月 18 日に東日本高速道路、県教委、埋文事業団の三者で工事内容による調査範囲の限定協議がもたれ、中部北遺跡の本発掘調査面積は約 3,620 ㎡と決定した。

2）本　調　査

本調査は４月３日に着手した。調査対象となる縄文時代の遺物包含層（Ⅵ層）は現地表下約１～ 1.5 ｍ

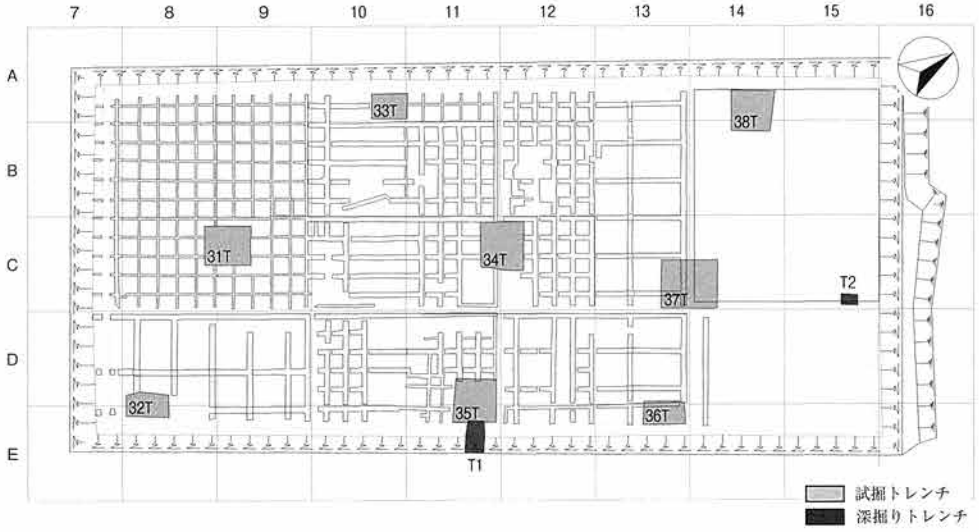


第１図　試掘確認調査トレンチと本発掘調査実施範囲（S=1/2,000）

と深い所に存在し、そこまでの堆積土は重機を用いて除去する計画であったため、まず、重機による表土掘削から開始した。掘削範囲については、調査区南端付近（6・7グリッド）を横断する農道部分が稲刈り後まで掘削に着手できないことから、当初の表土掘削は農道以北を対象に行うことにした。重機掘削については、現地表（標高約3m）から中世・古代の遺物包含層であるⅢ層上（標高約2.5m）までの堆積土除去を一次掘削、そこからⅥ層上5cmまでの堆積土除去を二次掘削と作業工程を分けて行った。試掘確認調査の結果から、遺構・遺物が希薄と予想される北側部分については、包含層掘削も重機で行うこととし、14A～14Cグリッド・15A～15Cグリッド約500㎡をこの対象範囲とした。また、遺跡は沖積地であることに加えて調査対象となる土層が深く、相当量の湧水が予想されることから、一次掘削と同時併行で暗渠の設置も行った。これらの作業には、おおよそ一か月程度の期間が必要なことから、人力掘削は5月15日からとすることをこの時点で決定した。4月13日には建物（プレハブ3棟）、駐車場の設営が終了し、あわせて備品の搬入も行った。

表土掘削作業は試掘確認調査で中世・古代の土器が出土した調査区南端部から開始した。開始直後、7C1グリッドで杭1本を検出したが、周囲から遺物が出土せず、また、単独の杭であったことから、速やかに図面・写真等を記録し、取り上げた。5月12日までに重機掘削は大半が終了し、予定通り5月15日から発掘作業員40名を投入し、本格的な調査を開始した。なお、中世・古代の遺構は、前述の杭1本のみであり、遺物も8グリッドで破片が数点出土しただけにとどまった。

調査はまず、土層確認用ベルトとトレンチの整形・掘削から開始した。ベルトは南北方向はDラインの1本のみ、東西方向は8ラインを振り出しに20m間隔で4本設定し、土層観察面は南北ベルトでは東面、東西ベルトでは南面に設定した。さらに縄文時代の基盤層であるⅧ層の観察と、調査区の排水を兼ねた幅60cmのトレンチを土層観察面に沿って掘削した。5月17日からは前述の作業に加え、Ⅵ層の掘削及び遺構確認作業も開始した。調査は7～11グリッドを当初の範囲とし、10ラインを境に南北2分割して調査員と作業員を振り分け、併行して調査を進めた。10ライン以南では地震による液状化現象の痕跡である噴砂が多数確認され、Ⅵ層の土質もこの付近では粘性が非常に強く、しまりにやや欠けていた。遺物は希薄であり、遺構も平面的な検出が困難な状況であったため、途中（5月25日）から平面的な調査方法を、遺構・遺物確認トレンチにより断面から遺構や遺物の検出・分布状況の確認を行う方法に転換した。



第2図　層序確認ベルトと遺跡内容確認トレンチ（S=1/800）

すなわち、試掘確認調査で遺物が出土した31T周辺（7～9A・B・Cグリッド）は2m方眼で幅20cmのトレンチを、7～9D・Eグリッドでは4m方眼で幅50cmのトレンチをそれぞれ設定し、遺構や遺物が検出された部分のみ面的な調査を行うこととした。結果として、10ライン以南では土坑2基（9Dグリッド）を検出したにとどまり、遺物についても8B4、8C14グリッドで小規模な集中がみられたほかは散発的な出土にとどまった。

一方、10グリッド以北では、10グリッドで調査区を東西に横断する自然流路を検出し、流路北岸の10～13グリッドにかけて縄文時代中～後期の土器、石器、搬入礫などが多く出土した。遺物はⅥa・Ⅵb層を中心にⅧ層直上まで出土がみられ、自然堤防上ということもあって多数の遺構の検出が期待されたが、遺物の密集により平面での検出が困難であった。10グリッド以南同様、遺物の分布が密な部分は2m方眼、散発的な部分では4m方眼で幅50cmのトレンチを設定し、断面観察から遺構の検出を試みた。その結果、土坑6基、ピット6基、溝1基、炭化物集中1か所を検出したが、住居等は検出できなかった。

自然流路は当初、遺物を最も多く含むⅥb層が堆積する段階に形成され、Ⅵa層が堆積する段階で埋没してしまった一過性の流路と認識していたが、調査中に流路をはずれた南側で河床堆積物を思われる腐植物層が新たに確認され、さらに層中からは縄文土器片も出土したため、全景写真撮影後に流路を再調査することとした。全景写真は遺構や遺物の検出が一段落ついた7月31日より準備を開始し、8月2日に撮影した。撮影にあたっては調査区外にローリング・タワーを4段組で設営し、タワーを移動させながら遺跡を4方向から撮影した。その後、遺構・遺物の計測、取り上げなどを行い、8月7日から本格的に自然流路の調査に着手した。遺物が河床付近にしかみられないことや、掘削にあたって多量の残土が発生することなどから、河床部分を除く堆積土は重機により除去した。調査の結果、流路は遺跡が営まれた縄文時代中期の段階では、当初検出した流路のおよそ2倍の川幅を有し、その後、南側から多量に灰色粘質土が流入して急速に幅が狭まり、遺跡の終焉と前後する時期に埋没したことが判明した。流路はさらに古い段階のものも確認されたが、遺跡が出現する以前のものであり、本格的な調査は行わなかった。

以上のように、本遺跡では自然流路の北側周辺以外では遺構・遺物ともに希薄であった。そのため、当初、調査を予定していた農道（7グリッド）以南は調査を中止、また、14グリッド以北は重機による包含層掘削で遺物が検出できなかったことから、人力による包含層掘削を予定していた14D・E、15D・Eグリッドについても本格調査は行わなかった。最後に、11Eグリッドと15Cグリッドで縄文時代以前の堆積環境を探るため、重機で約4m（標高0m）前後まで掘り下げたが、遺構・遺物とも確認されなかった。深掘部分は堆積土層を記録した後、埋め戻し、8月2日に県教委が終了確認を行った。8月24日には国土交通省に引き渡して調査を終了した。

B　桜林遺跡

1）試掘確認調査

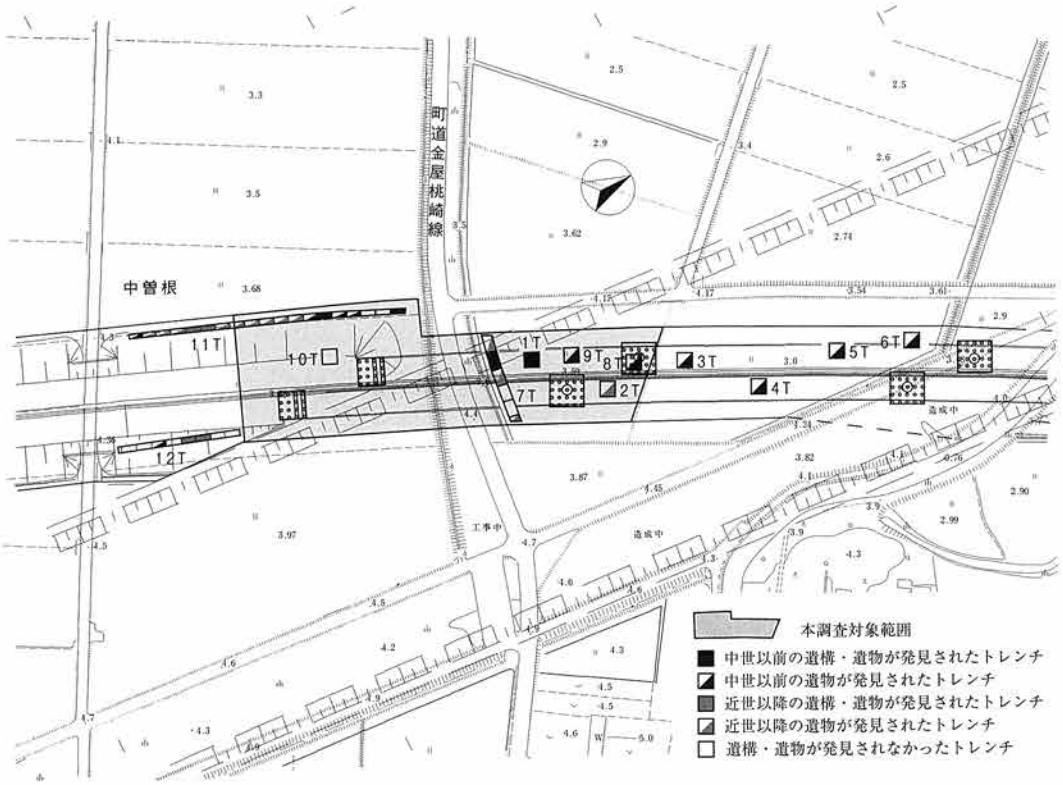
試掘確認調査は「推定地10」として平成14年8月1日～8月9日、同年11月18日～11月21日の期間で実施した。調査方法は、調査範囲内に任意でトレンチを設定し、重機及び人力による掘削・精査を行い、遺構・遺物の有無を確認した。その後、土層堆積状況、トレンチ位置、遺構・遺物の検出状況等を図面・写真等に記録した。掘削は3mを目途に行ったが、上層での遺構の検出状況や湧水の状況により、3m以下でも掘削を取りやめたトレンチがある。

調査の結果、１Ｔでピット６基、７Ｔで井戸１基、11Ｔで溝４条、12Ｔで溝１条、土坑１基などを検出した。１・７Ｔの溝と11Ｔ北側の溝は出土遺物から古代の所産、このほかの溝は近世以降とされたが、それ以外はこの段階では時期不明であった。また、今回の調査範囲の北側では、水田面が60～80cmも低いだけでなく、その水田耕作土自体も調査区側から土を取って盛土したものであることが予想された。すなわち、これによって遺跡地は古代の包含層と遺構の一部が削平され、当該期の包含層や遺構の一部が失われている可能性が高いと推察された。しかしながら、残存する遺構も多く、遺構・遺物の性格から対象地は居住域と考えられることから、桜林遺跡については約10,200㎡に対して本発掘調査が必要であることを県教委に報告した。その後、平成14年12月18日に東日本高速道路、県教委、埋文事業団の三者で協議がもたれ、桜林遺跡の本発掘調査面積は約2,670㎡と決定した。

2）本　調　査

試掘確認調査の成果に基づき、本調査は町道金屋桃崎線を挟んで南北２か所にまたがる調査範囲を対象に実施した。桜林遺跡では、平成17年度にも同じ日沿道の建設に伴って2,000㎡を対象とした調査が行われ、時期不明の溝２条・ピット１基、近世以降の陶磁器・寛永通寶などを検出している［小村ほか2006］。今回の調査はその北側隣接地にあたる。当初の調査面積は、町道の南側部分（以後、南区）813㎡、同 北側部分（以後、北区）2,450㎡、合計3,263㎡である。

調査は平成18年８月25日から着手した。まず、試掘確認調査で確認された古代および中世の遺構確認面上に堆積する耕作土（Ⅰ・Ⅱ層）を、遺構確認面上約５cmまで重機を用いて除去した。Ｄグリッドライン、13・15・17グリッドラインには土層確認用ベルトを設定、60cm幅で堆積土を掘り残した。８月29日には建物（プレハブ２棟）を設営し、あわせて調査機材も搬入した。重機による表土掘削もほぼ終了したの

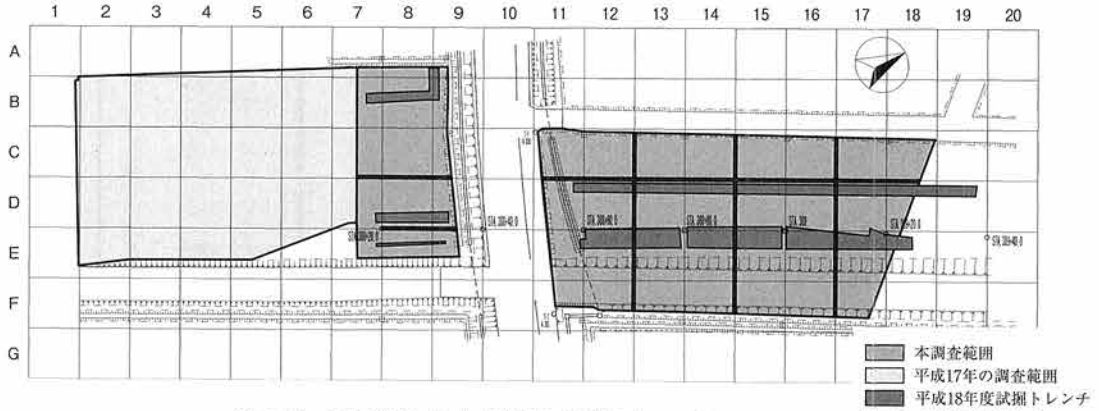


第３図　試掘確認調査トレンチと本発掘調査実施範囲（S=1/3,000）

で、同日、グリッド杭を打設した。翌、8月30日から作業員40名を投入し、排水溝の掘削、ベルト・コンベアやトイレの配置といった環境整備から作業を開始した。排水施設については、南北各調査区ごとに幅50cm、深さ50cmの開渠を周囲に巡らし、既存の排水溝が敷設されている部分についてはこれを利用した。8月31日から人力による耕作土の除去および遺構確認作業、土層確認用ベルトの整形などの作業を北区南端から開始した。土層観察面は南北ベルトでは東面、東西ベルトでは南面に設定し、それに沿って排水を兼ねた幅30cm、深さ30cmのトレンチを掘削することで遺構確認面下の土層確認にあてた。なお、作業道具は、トレンチや耕作土の掘削についてはホソを、遺構確認については大ジョレン・両刃鎌を主に用いて行った。遺構発掘には移植ゴテ・竹ベラ・両刃鎌・ホソなどを併用した。また、調査に伴い発生した排土については、北区ではベルト・コンベアを、南区では一輪車を用いて調査区外に排出した。

北区では、作業開始早々から遺構を多数検出したが、同時に12グリッドをはじめとする調査区各所に後世の攪乱も検出した。攪乱部分についてはその下に遺構が残存する可能性が考えられたので、遺構確認面から30cm前後の深さまで人力で攪乱を除去した。9月15日には遺構確認や攪乱土の除去が終了し、遺構分布状況の把握も兼ねてローリング・タワー上から写真撮影を行った。

遺構の調査は9月19日から開始した。本遺跡では遺構覆土の認識が比較的容易であっても基盤層との境が不明瞭なものが多く、遺構はすべて半裁前にトレンチによる断面観察を行い、正確な形状把握に努めた。14グリッドでは、検出当初、土坑と認識していたものの大半が井戸であることが判明し、深さ1mを越えるものについては段階的に掘削を行うという調査方法を採った。しかしながら、基盤層が脆弱なため遺構壁が崩落しやすく、作業員の安全確保と遺構の保護に注意しながらの作業となった。25日には11Eグリッドで近世墓（SK131）を検出した。検出当初は時期不明であったが、後に寛永通寶を主とする銭貨が6枚出土し、近世墓と判明した。10月に入ると北区の調査も一段落し、13日から南区の表土掘削に着手した。南区は北区以上にⅠ・Ⅱ層の堆積が薄く、中央部は表面の草を剥ぐ程度で遺構確認面が露呈するといった状況であったので、重機掘削はよりいっそう慎重に行った。遺構確認の結果、西壁と北壁沿いで溝4条が検出され、23日から遺構調査を開始した。北区・南区とも調査は10月中にほぼ終了し、11月1日にはラジコン・ヘリコプターによる航空写真撮影を行った。5日の日曜日に現地説明会を実施し、近隣住民を中心に多数の見学者が訪れた。その後、井戸底の再確認、遺構図面の測量など残務を行い、11月15日に県教委が終了確認を行った。翌16日には国土交通省に現地を引き渡し、調査を終了した。



第4図　層序確認ベルトと遺跡内容確認トレンチ（S=1/1,500）

C　調査・整理体制

試掘確認調査と本調査および整理作業は、以下のような期日と体制で行った。

【試掘確認調査】

調査期間　中部北遺跡　平成14年10月15日～11月15日

　　桜林遺跡　平成14年8月1日～8月9日、11月18日～11月21日

調査主体　新潟県教育委員会（教育長　板屋越　麟一）

調　　査　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長　板屋越　麟一）

管　　理　黒井　幸一（　同　専務理事・事務局長）

　　長谷川司郎（　同　総務課長）

　　岡本　郁栄（　同　調査課長）

庶　　務　高野　正司（　同　総務課班長）

調査指導　寺崎　裕助（　同　調査課長代理）

調査担当　中部北遺跡　沢田　　敦（　同　調査課班長）

　　桜林遺跡　石川　智紀（　同　調査課班長）

調査職員　中部北遺跡　佐藤　優一（　同　調査課主任調査員）

　　後藤　　孝（　同　調査課主任調査員）

　　阿部　友晴（　同　調査課文化財調査員）

　　桜林遺跡　片岡　千恵（　同　調査課嘱託員）

【本調査・整理作業】

調査期間　本発掘調査　中部北遺跡　平成18年4月3日～平成18年8月24日

　　桜林遺跡　平成18年8月25日～平成18年11月16日

　　整理作業　中部北遺跡　平成18年6月8日～平成19年3月31日

　　桜林遺跡　平成18年11月17日～平成19年3月31日

調査主体　新潟県教育委員会（教育長　武藤　克己）

調　　査　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長　武藤　克己）

管　　理　波多　俊二（　同　事務局長）

　　斎藤　　栄（　同　総務課長）

　　藤巻　正信（　同　調査課長）

監　　督　鈴木　俊成（　同　調査課課長代理）

　　石川　智紀（　同　調査課班長）

　　杉田　和宏（　同　調査課主任調査員）

庶　　務　長谷川　靖（　同　総務課班長）

調査組織　株式会社吉田建設

現場代理人　瀬戸　一之（株式会社吉田建設土木部）

調査担当　継　　実（　同　埋蔵文化財調査部調査員）

調　査　員　松井　　智（　同　埋蔵文化財調査部調査員）

　　山本　友紀（　同　埋蔵文化財調査部調査員）

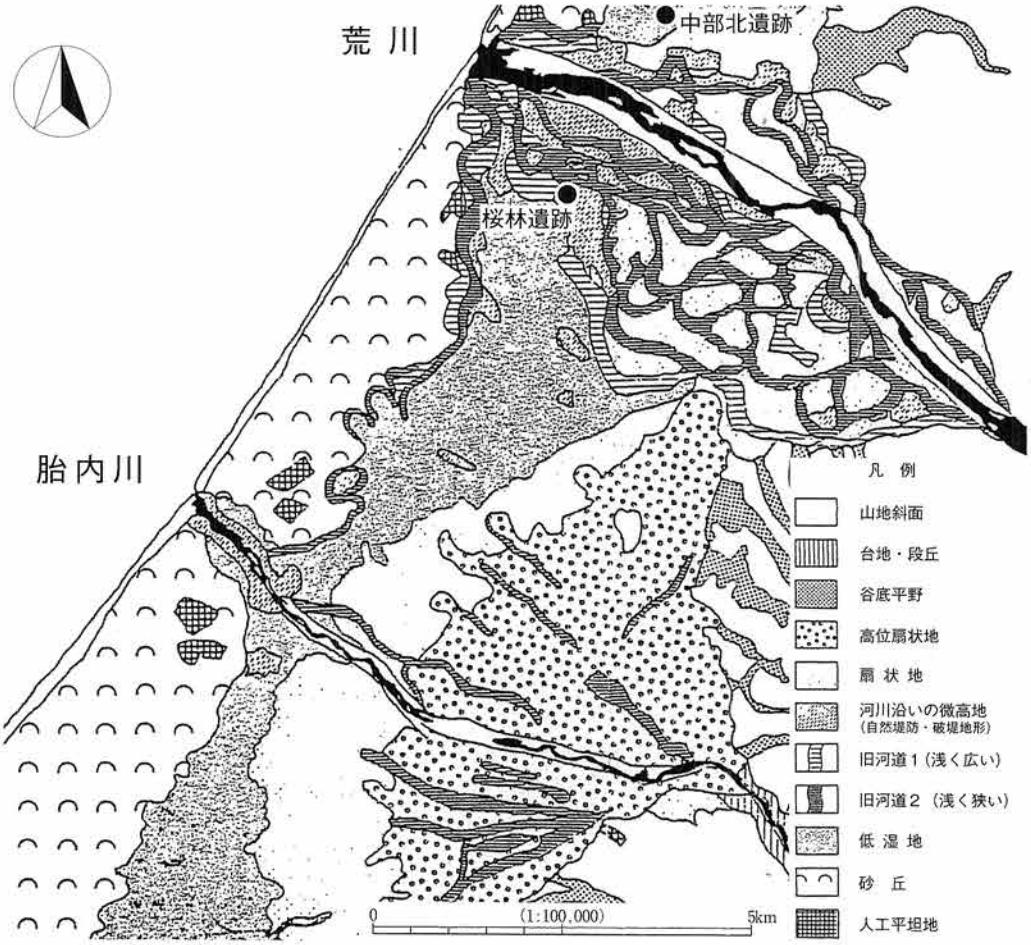
調査補助員　大川原　忍　長沼　直美　佐々木美紀　桜井　克志（以上、株式会社吉田建設埋蔵文化財調査部補助員）

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

1　地理的環境

中部北遺跡は岩船郡神林村、桜林遺跡は岩船郡荒川町に所在する。山形県との県境にある大朝日岳に源を発する荒川を隔てて神林村と荒川町は隣り合い、北は村上市と、南は胎内市と接する。このあたりは、西に新潟砂丘、東に朝日山地、飯豊山地、櫛形山脈、岩船丘陵といった山地や丘陵、中央に沖積低地という３つの異なる地形が南北に平行し、変化に富んだ景観を作り出している。

遺跡の立地する沖積低地は越後平野の北端部にあたる。越後平野は完新世以降の堆積土によって形成された沖積平野で［岡本 1986］、北は岩船丘陵の南裾から南は長岡市と小千谷市の市境に至る、面積約2,000km^{2}に及ぶ北陸地方最大の平野である。新潟平野は海岸沿いに長大な砂丘が形成されるため、河川の海への円滑な流出が妨げられる事に加え、勾配が緩い地形や日本海の潮汐変動の少なさなどの条件が重なって慢性的な排水不良が生じ、ほぼ全域が低湿地帯となっている［岡安 2005］。遺跡の周辺でも、山地部から流れ出る大小さまざまな河川は砂丘により行き場を失い、網の目のように乱流を繰り返し、さらに



第５図　遺跡周辺の地形分類図　［寄藤・大矢 1988］挿図に一部加筆

は潟湖などとも連結しながら、阿賀野川や荒川からようやく日本海へと注いでいた様子が正保２（1645）年に描かれた越後国絵図にみえる。近世以降は潟の干拓や人工流路の開削といった治水事業が精力的に進められ、岩船潟は天明年間（1781～1788年）に、紫雲寺潟（塩津潟）は享保18（1733）年に干拓［鈴木2004］、それまで砂丘の手前で北上し、荒川と合流していた胎内川も明治22（1888）年には現在の河口が開削され、地盤の安定化が図られた。

こうした内陸からの流水を遮っていた砂丘は、新潟砂丘と呼ばれている。南は旧巻町の角田山麓から北は岩船に至る総延長約76kmにわたって海岸沿いに形成されるこの砂丘は、表面に形成された腐植土層の厚さと砂丘砂の風化の程度をもとに、内陸側から新砂丘Ⅰ（Ⅰ－１～Ⅰ－４の４細分）、新砂丘Ⅱ（Ⅱ－１、Ⅱ－２の２細分）、新砂丘Ⅲ（Ⅲ－１、Ⅲ－２の２細分）と３群に大別されており［新潟古砂丘グループ1974］、その形成時期については、新砂丘Ⅰが縄文時代前期、新砂丘Ⅱが縄文時代後期、新砂丘Ⅲは縄文時代晩期～現代というように考えられている［新潟古砂丘グループ1996；中条町2004］。これらの砂丘は最も砂丘が成長する越後平野中央部では列状に分布し、新潟東港付近では10列を数えるが、北に行くに従い収斂し、遺跡の周辺では上下に重なる形で形成され、岩船港のあたりで浦田山丘陵に遮られて止まる。

遺跡の東側には山地や丘陵が連なる。朝日山地、飯豊山地といった山地部には2,000ｍ級の起伏の大きい急峻な山々が連なり、県境を越えて山形県や福島県側に広がる。山地と沖積低地の間には、櫛形山脈、岩船丘陵といった標高1,000ｍ以下の比較的起伏が小さい丘陵が連なる。

次に遺跡周辺の微地形についてみてみよう。中部北遺跡は沖積低地に立地し、現地標高約３ｍ、縄文時代の遺物包含層であるⅥ層上の標高は1.7～2.2ｍ（層厚は30～60cm）、基盤層となるⅧ層上の標高は1.0～1.8ｍを測る。包含層、基盤層共に調査区中央の自然流路の北岸（11グリッド列）が最も高く、そこから南北に向かって緩斜面となっている。Ⅵ層の厚さもこの部分が最も薄く、この時期には自然堤防が形成されていた事がわかる。この付近の土質は砂質の強い粘土であり、乾きやすい性質をもっていたが、流路の南側や14グリッド以北では同じⅥ層でも粘土質が強い上に湧水も多く、ぬかるんだ状態が長く続いた。この部分の堆積土は荒川をはじめとする周辺河川の氾濫によって堆積したものとみられ、不安定な地盤の状況が窺える。

荒川は朝日山地の大朝日岳（標高1,870m）を源とする河川で、飯豊山地に源を発する横川、玉川などの支流を合わせて胎内市桃崎浜で日本海へ流れ出る。河口付近では砂丘縁辺を南西から流れてくる乙大日川が合流するが、これは胎内川旧流路の名残である。流路が山地部を抜けて新潟平野に出たあたりを扇頂として、下流側には扇状地が形成されるが、整った扇形に形成された胎内川扇状地と比べ、荒川扇状地は扇形が不鮮明で狭く、規模も小さい。この狭い扇状地の扇端部に中部北・桜林遺跡が位置する。桜林遺跡も中部北遺跡同様、沖積低地に立地し、現地標高約3.7ｍ、遺構確認面の標高は約3.5ｍを測る。調査区は現地表、旧地表共に概ね平坦地であるが、調査区のすぐ北側は60～80cmほど低くなっており、荒川の旧河道の一部にあたるものと思われる。荒川流域の地形分類図をみると［寄藤・大矢1988］、胎内川の右岸には乙大日川以外に目立った旧河道跡がないのに比べ、荒川左岸には網目状に幾筋もの旧河道跡が形成みられる。慶長２（1597）年に描かれたとされる「瀬波郡絵図」（米沢市市立上杉博物館所蔵）［村上市史編纂委員会2000］には、川の合間や川沿いに点々と島状に集落が営まれている様子が描かれているが、こうした流路の状況によって微高地は島状に分断されてしまうのであろう。

2　歴史的環境（周辺の縄文時代・中世遺跡分布）

この一帯では縄文時代以降、多くの遺跡が営まれてきた。縄文時代には山地や丘陵部に、弥生時代以降は沖積地や砂丘を中心に多くの遺跡が発見されている。ここでは今回調査した遺跡の主体的な時期である縄文時代と中世の遺跡について概観する。

縄文時代

これまでに確認された神林村における縄文時代の遺跡数は60を超える。このうち、これまでに中部北遺跡を含め7遺跡で調査成果が報告されている。城田遺跡（6）［田辺ほか2001］は谷内の沖積地に位置する中期後葉～後期後半の遺跡で、三十稲場式・南三十稲場式土器を含む土器捨て場、加曽利Ｂ２～Ｂ３式土器を伴う住居跡11軒をはじめとした遺構群が検出されている。樋渡・堀下遺跡（160）［田辺・大賀2003］は城田遺跡と同じ谷の開口部に位置する遺跡で、中期前葉の土器捨て場をはじめ、後期や晩期の土坑や溝などが検出されている。飯岡山崎遺跡（83）［田辺・近江屋1998］は沖積地に面した丘陵裾部に位置する遺跡で、フラスコ状土坑、土坑、小ピットなどが検出されている。遺構に伴う遺物の出土がなく、詳細時期は不明である。水口沢遺跡（194）［田辺・大賀2002］は小支谷開口部に位置する遺跡で、丘陵上から流れ込んだとみられる前期前半の土器が溝から出土している。八幡山遺跡（88）［田辺1994］は谷を見下ろす尾根上に位置する遺跡で、前期末（大木６式併行）～中期前葉（北陸系上山田古式Ｉ式期併行）のフラスコ状土坑･円形土坑･竪穴状遺構などが検出されている。報告書では稲葉下遺跡（101）､大聖寺遺跡（1）にも触れ、八幡山遺跡は前期末、稲葉下遺跡は中期前半、大聖寺遺跡は中期中葉～後葉にそれぞれ集落規模が最大になると推測している。長松遺跡（97）［田辺1991］では沖積地に面する砂丘縁辺部から１点だけではあるが晩期の注口土器が報告されている。一方、荒川町ではこれまでに18遺跡が確認されており、このうち14遺跡が荒川扇状地の扇頂付近の丘陵部や扇状地に面する河岸段丘に立地する。残る４遺跡は低地部に位置し、その一つに桜林遺跡がある。

以上のように、本格的な調査が実施された遺跡は数少なく、縄文時代各期における遺跡分布の変遷を追う事は難しいが、少なくとも中期の段階には中部北遺跡のみならず、城田遺跡や樋渡・堀下遺跡といった集落の存在が窺われる遺跡も沖積地に出現し、低地を舞台にした活動が本格的に開始されるものとみられる。

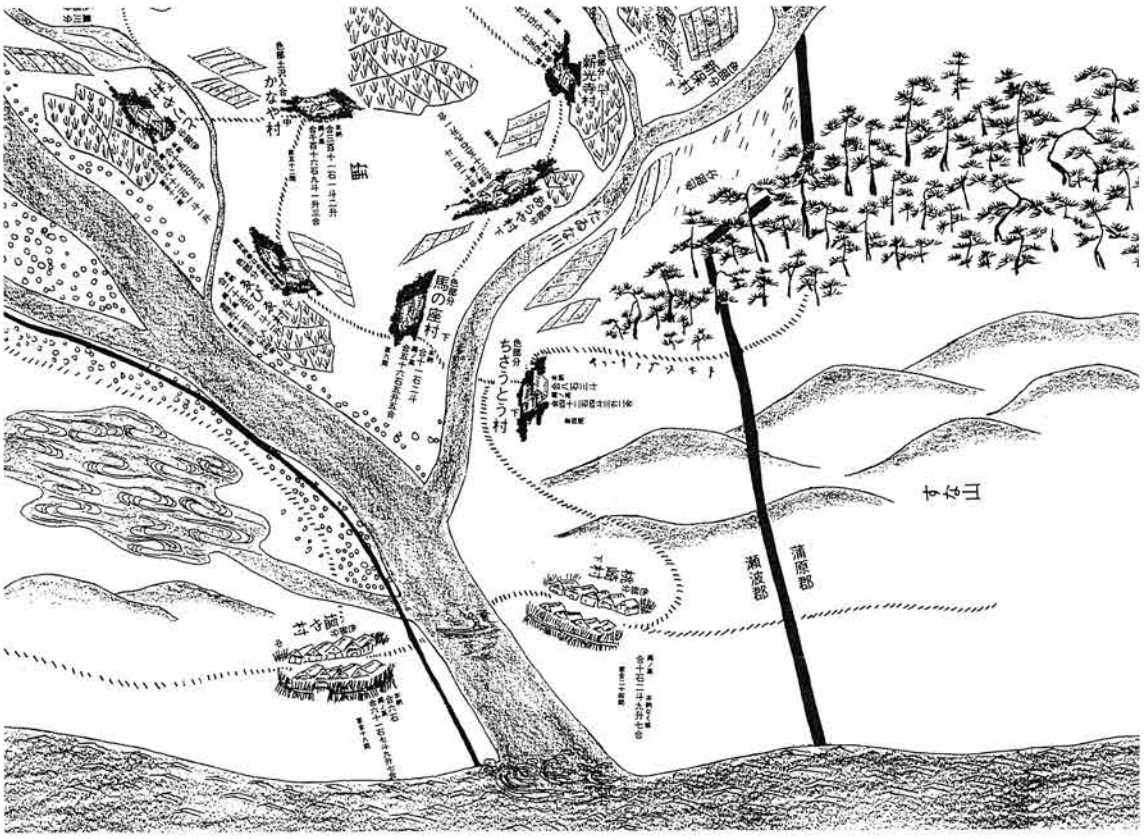
中　世－荒川保を中心として－

平安時代末期には、全国的に荘園が増加した事によって、それまでの国・郡制による地方支配にかわって、荘園や国衙領の郷・保などが支配単位となる荘園公領制へと変わっていった。越後の荘園の大部分は11世紀後半から12世紀にかけて成立したと考えられている［田村1987］。この時期の荒川町周辺は越後最北の国衙領である荒川保､荒川以北は皇室領小泉荘の領域となっており、荒川保の南側には摂関領奥山荘が成立していた。鎌倉時代に入ると、荒川保は地頭に任じられた河村氏が領有するが、新田氏に組した河村氏は新田氏が足利氏に敗れると次第に勢力を失い、遂に

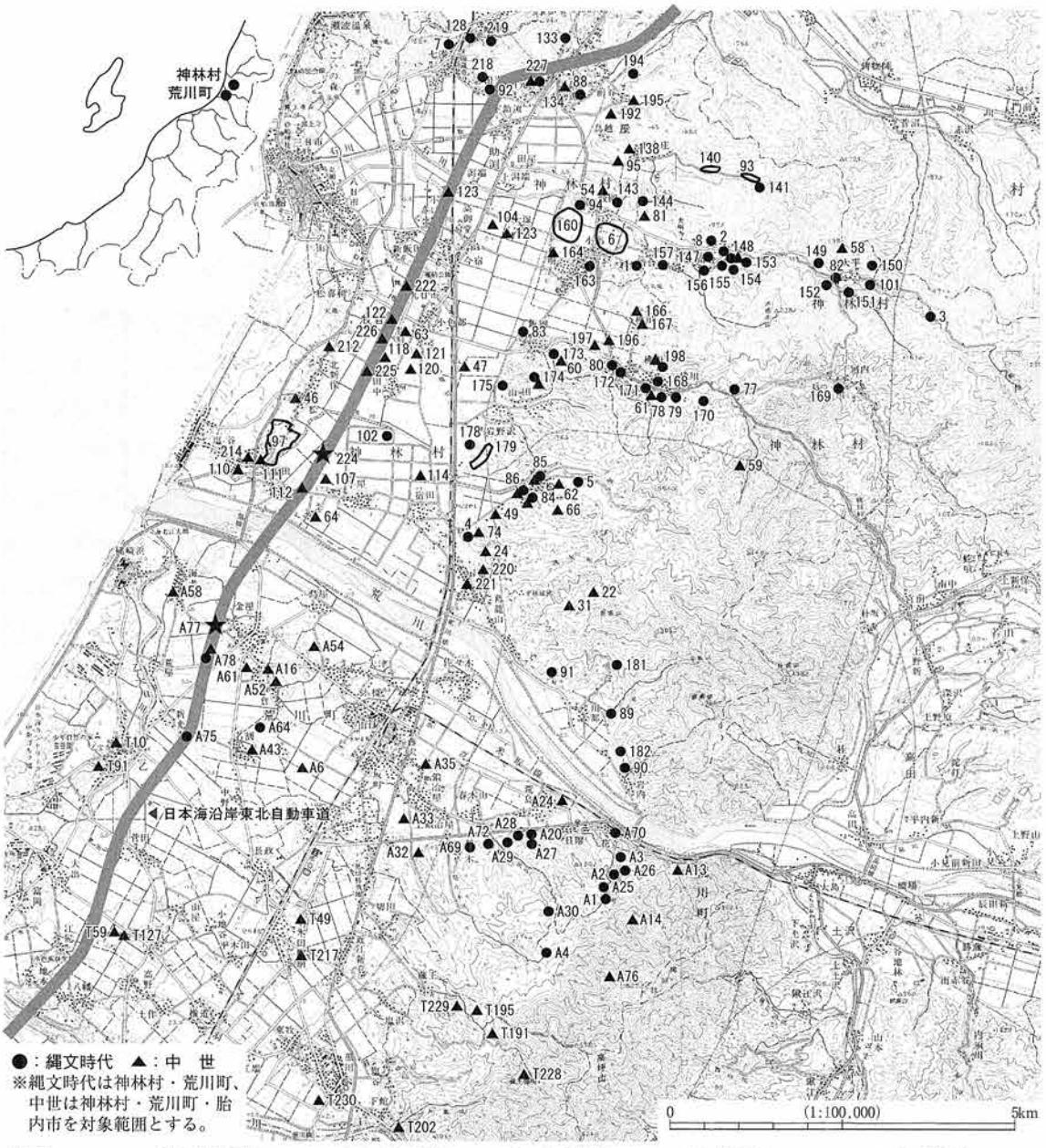
第６図　下越地方の荘園・国衙領分布図
（中条町史通史編より転載　一部加筆）

は陸奥国（岩手県）へ移る。これ以降、荒川保は奥山荘の和田、小泉荘の色部・本庄といった近隣の地頭に交錯支配される事となる［山本 1974］。慶長２（1597）年に描かれたとされる「瀬波郡絵図」には、瀬波郡（岩船郡）と蒲原郡の境界も記されているが、荒川を超えた桃崎浜の南で境界が引かれており、当時、荒川左岸一帯が色部氏の領域となっていた事が知れる。また、これをもとに桃崎浜とその南方にある荒井浜の間を荒川保と奥山荘の境とする見解もある［青山 2004］。

荒川町では、これまでに桜林遺跡を含め７遺跡、中世の遺跡が調査されている。馬場館跡（16）［吉井 1998；2003；2004］は奥山荘北条黒川氏の家臣の居館と推定される遺跡で、これまで３次にわたって調査が行われている。堀や郭内が調査され、出土した陶磁器類から 15 世紀～ 16 世紀初頭の居館跡である事が判明した。また、調査者は館の構造が奥山荘江上館跡や古館館跡などと同じく主郭と副郭で構成されていると推測している。赤井遺跡（61）［吉井 1994］では、15 世紀末～ 16 世紀末の井戸・掘立柱建物・溝などが検出されている。馬場館遺跡との位置関係から、調査者は馬場館との関連が高い集落と想定している。屋敷添遺跡（58）［吉井 1998］は乙大日川沿いの微高地上に位置する遺跡で、調査では堀の可能性がある遺構や 14 世紀前半～ 16 世紀前半の遺物が出土している。坂町宮ノ腰遺跡群（43）ではＣ遺跡［吉井 2003］、Ｄ遺跡［吉井 2000；2006］で中世の遺構・遺物が検出され、12 世紀後半から中世集落が形成され、土塁や堀をもつ居館も登場する事が報告されている。田屋遺跡（６）［吉井 2003］では中世の遺構・遺物が確認されている。これらの遺跡は現在の坂町・金屋・海老江集落の縁辺に位置しており、中世の段階には荒川左岸に点々と形成された微高地に集落や館が営まれている事が窺える。



第７図　瀬波郡絵図に描かれた集落と境界（村上市史 別編より転載）



神林村
224　中部北遺跡
1　大聖寺遺跡
2　中村遺跡
3　開墾地遺跡
4　神上り遺跡
5　館野遺跡
6　城田遺跡
7　山崎遺跡
8　大門遺跡
22　馬洗場遺跡
24　小丸山墳墓
31　平林城跡
46　正樹院屋敷
47　中沢遺跡
49　下谷地西遺跡
53　王塚
54　うしろ山塚
58　南大平城跡
59　桃川城跡
60　飯岡城跡
61　桃川館跡
62　松沢館跡
63　牧目館跡
64　牛屋館跡
66　古四王神社
77　追分遺跡
78　大関平遺跡
79　細田遺跡
80　桃川遺跡
81　引地遺跡
82　南大平家の前遺跡
83　飯岡山崎遺跡
84　寺田遺跡
85　鯉池遺跡
86　下谷地南遺跡
88　八幡山遺跡
89　川部遺跡
90　小岩内(居浦)遺跡
91　湯ノ沢(岩ノ上)遺跡
92　志田平遺跡
93　里本庄遺跡
94　糟山遺跡
95　内御堂遺跡
97　長松遺跡
101　稲葉下遺跡
102　衣田遺跡
104　千作り遺跡
107　中部遺跡
110　長三郎山遺跡
111　十日市遺跡
112　西部遺跡
114　道上東遺跡
118　水下4遺跡
120　水下1遺跡
121　水下2遺跡
122　田屋道遺跡
123　宮ノ下遺跡
128　大沢遺跡
133　丸山遺跡
134　前田遺跡
138　内御堂C遺跡
140　開キ遺跡
141　カゲバ遺跡
143　下引地遺跡
144　宮ノ沢遺跡
147　八百地遺跡
148　木原木A遺跡
149　浅尾遺跡
150　松原遺跡
151　鶯の巣遺跡
152　漆木畑遺跡
153　滝の前遺跡
154　木原木B遺跡
155　木原木C遺跡
156　木原木山遺跡
157　大聖寺Ⅱ
160　樋渡遺跡
163　浦山添遺跡
164　堀下遺跡
166　北山塚
167　元千眼寺跡
168　野地山遺跡
169　河内家ノ前遺跡
170　細田遺跡
171　古館
172　館ノ内遺跡
173　沢田の二遺跡
174　飯岡赤谷B遺跡
175　飯岡赤谷A遺跡
178　黒田B遺跡
179　黒田A遺跡
181　川部長峰遺跡
182　下山遺跡
192　フケ田遺跡
194　水口沢遺跡
195　大場沢遺跡
196　石川遺跡
197　草田遺跡
198　堤下遺跡
212　在ヶ付Ⅱ遺跡
213　在ヶ付Ⅲ遺跡
214　福田伝古銭出土地
218　上ノ山遺跡
219　大沢Ⅱ遺跡
220　千眼寺跡
221　平林町屋
222　堂田遺跡
225　窯田遺跡
226　松蔭東遺跡
227　八太郎遺跡
荒川町
77　桜林遺跡
1　大山A遺跡
2　大山B遺跡
3　花立遺跡
4　前山遺跡
6　田屋遺跡
13　貝附城跡
14　貝附山城跡
16　馬場館跡
20　発堀遺跡
24　荒島館跡
25　大山C遺跡
26　花立前山遺跡
27　荒島前山A遺跡
28　荒島前山B遺跡
29　荒島前山C遺跡
30　山田遺跡
32　堤下遺跡
33　宮田遺跡
35　向屋敷遺跡
43　坂町宮ノ腰遺跡D
52　舘ノ腰遺跡
54　石橋B遺跡
58　屋敷添遺跡
61　赤井遺跡
64　名割古谷地遺跡
69　谷内遺跡
70　山ノ内遺跡
71　梨木城跡
72　春木山遺跡
74　田島遺跡
75　道端遺跡
76　雨俣城跡
78　中曽根遺跡
胎内市
10　乙宝寺
49　章駄天山墳墓
59　古館館跡
127　古館館東
191　蔵王権現
195　蔵王権現経塚
202　黒川館跡
217　切田遺跡
228　蔵王城跡
229　蔵王砦跡
230　黒川西館跡

※遺跡番号の重複をさけるため、荒川町はA、胎内市はTと付けている。

第８図　遺跡周辺の縄文時代・中世遺跡分布図

（国土地理院発行 平成10年「村上」平成15年「塩野町」「中条」「小国」1:50,000原図）

第Ⅲ章　中部北遺跡

1　調査の概要

A　グリッドの設定

グリッドの設定は、日沿道道路法線センター杭STA417（X = 239812.618m・Y = 82297.248m）とSTA419（X = 23942.028m・Y = 82192.863m）を結んだラインを南北方向の基線として10ｍ方眼で設定した（ちなみに8Bグリッドの座標値はX=239363.046ｍ・Y=82495.277m以上、座標値は世界測地系）。この10ｍ四方がグリッドの基本単位となるが（大グリッド）、遺構や遺物の位置把握の利便性などを考え、大グリッドを更に2ｍ方眼で25分割させて小グリッドを設定した。なお、基線の方位は真北から31°46’41”東偏する。

グリッドの名称については、南北ラインには算用数字、東西ラインにはアルファベットを用い、両者の組み合わせで「7D」というように表した。また、小グリッドの名称については1～25の番号を用いた（第9図）。

B　基本層序

基本層序は試掘確認調査で確認されたものと相違ないため、分層及びその名称は試掘確認調査のものを踏襲し、本調査で細分したものについては土層名称にアルファベットを付加して表した。また、調査の最後に調査区中央（11E区）と北端（15C区）でトレンチによる深掘りを行い縄文時代以前の堆積土を確認したが、その際、新たに確認された土層についてはX～XⅣの名称を付した。以下、基本層序を記す。なお、調査区内で存在を確認できなかったⅦ層は欠番となる。

Ⅰ：灰色粘土（5Y6/1）　Ⅰ層表面が現在の田面とほぼ同じ標高である。旧耕作土。

Ⅱ：灰色粘土（5Y6/1）　しまり、粘性共に強。炭化物粒子を少量含む。

Ⅲ：褐灰色シルト質粘土（10YR6/1）　しまり、粘性共に強。古代の遺構確認面。

Ⅳ：灰黄褐色粘土（10YR5/2）　しまりやや強、粘性強。

Ⅴa：暗灰色粘土（N3/）　しまりやや強、粘性強。灰黄褐色粘土を基本とし、炭化物や暗灰色粘土が多量に混入する。

Ⅴb：灰褐色粘土（5YR4/2）　しまりやや弱、粘性強。腐植物を多く含む。炭化物粒子を少量含む。

Ⅴc：暗赤褐色腐植土（5YR2/2）　しまり弱、粘性やや強。腐植物層。

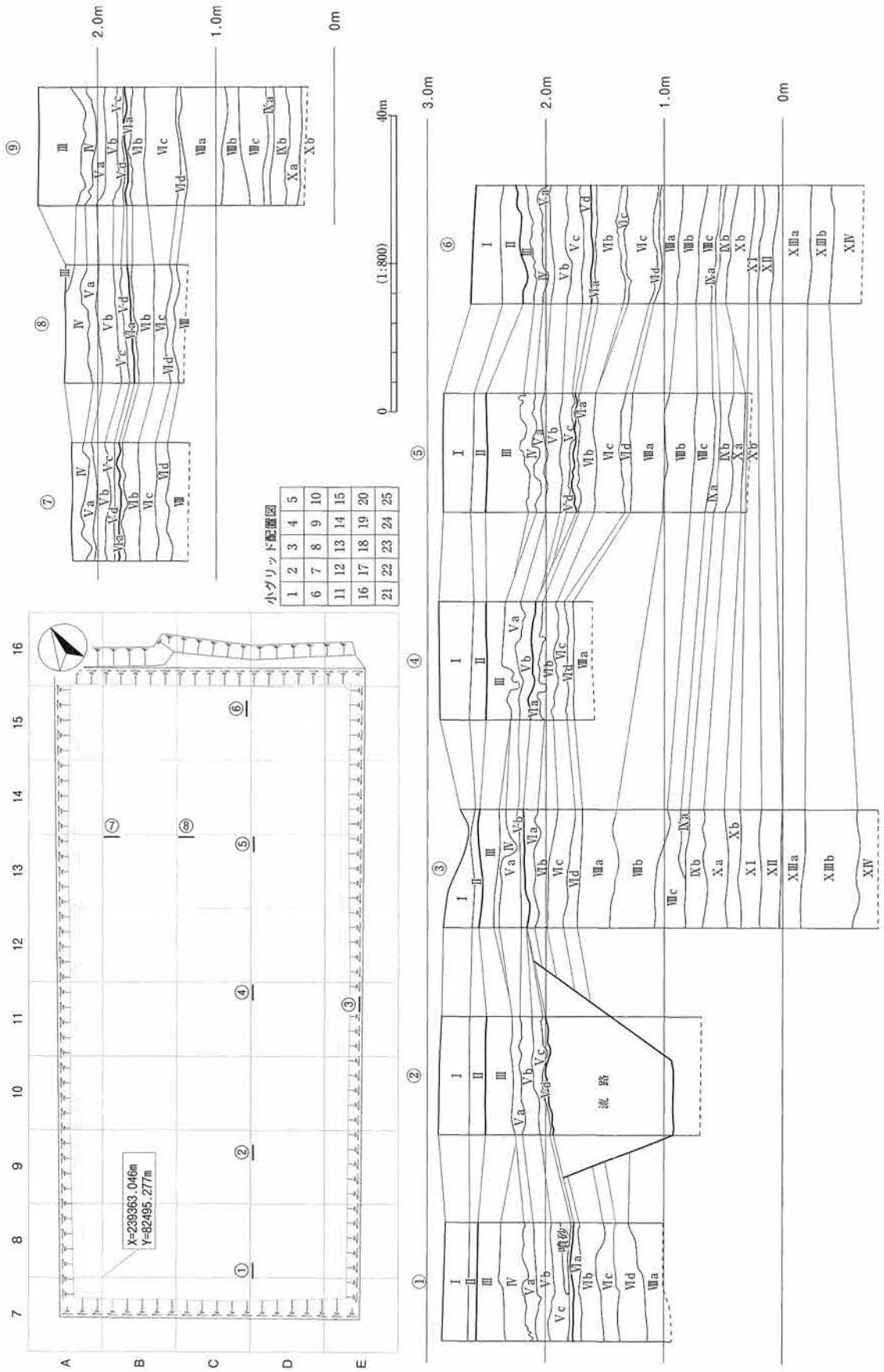
Ⅴd：灰褐色粘土（5YR4/2）　しまりやや弱、粘性強。Ⅴc層を基本とし、暗灰色粘土がブロック状に多く混入する。

Ⅵa：灰色粘土（5Y5/1）　しまりやや強、粘性強。有機質に富み、土色は黒みがかる。炭化物粒子をやや多く含む。炭化物の少ない部分もある（Ⅵa'）。縄文時代の遺物包含層。

Ⅵb：灰色粘土（5Y6/1）　しまりやや強、粘性強。部分的に直径5mm以下の炭化物細粒を少量含む。縄文時代の遺物包含層／遺構確認面。

Ⅵc：灰色粘土（5Y6/1）　しまりやや強、粘性強。Ⅵb層と比べわずかに粘土分強く鉄分の含有も多い。15グリッド以北では本層上に有機質に富んだ暗灰色土層が形成される。縄文時代の遺物包含層。

Ⅵd：灰色弱シルト質粘土（5Y6/1）　しまりやや弱、粘性強。Ⅵ層とⅧ層の漸移層的な土質である。縄文



第9図　グリッドの設定と基本土層堆積図

時代の遺物包含層。

Ⅶ：調査区内では該当する土層なし。

Ⅷａ：灰色砂質シルト（5Y6/1）　部分的に砂分少ない。しまり強、粘性やや強。直径1mm大の炭化物をわずかに含む。縄文時代の基盤層。

Ⅷｂ：灰色シルト（5Y6/1）　Ⅷａ層より粘土分強い。しまり、粘性共に強。

Ⅷｃ：灰色弱シルト質粘土（5Y6/1）　しまり、粘性共に強。灰白色微粒子を少量含む。

Ⅸａ：褐灰色弱シルト質粘土（10YR4/1）　しまりやや弱、粘性強。直径1mm大の炭化物を少量含む。

Ⅸｂ:黒褐色粘土(10YR3/1)　有機質に富む土層。しまりやや弱、粘性強。直径1mm大の炭化物を少量含む。

Ｘａ：灰色砂（5Y6/1）　中～細粒砂。しまり、粘性共に弱。

Ｘｂ：灰色砂質粘土（5Y5/1）　Ｘａの粘土分強い土層。しまりやや強、粘性強。層表に直径3mm大の炭化物をやや多く含む。

ＸⅠ：黒褐色粘土（10YR3/1）　しまり弱、粘性強。ブロック状のＸｂ層をわずかに含む。直径1mm大の炭化物粒子を少量含む。

ＸⅡ：灰色粘土（5Y5/1）を基本に直径5mm大の炭化物粒子を多量含む土層。しまりやや弱、粘性強。

ＸⅢａ：黒褐色粘土（10YR3/1）　しまりやや強、粘性強。直径5mm大の炭化物を含む。灰色粘土とのラミナ層。

ＸⅢｂ：黒褐色粘土（10YR3/1）　ＸⅢａ層と比べ、ラミナが不明瞭となる。

ＸⅣ：灰色シルト質粘土（5Y5/1）　しまりやや弱、粘性やや強。腐植物含む。

2　遺　　構

A　遺構の概要と記述の方法

検出した遺構は古代の杭１本、縄文時代の土坑７基、炭化物集中１か所、ピット４基で、古代の杭はⅢ層、縄文時代のものはすべてⅥｂ層で検出した。縄文時代の遺構ではSK 1とSK16で土器片が数点出土したが細片であり、時期の詳細は不明である。遺構はすべて自然流路北岸に形成された自然堤防上に設けられている。

遺構番号は、現地調査で付したものをそのまま使った。効率よく調査を進めるために調査区を２つに分け、併行して調査を行ったため、担当した調査員がそれぞれ個別に連番を付した事（001～、101～）と、現地調査終了後に再検討を加え、自然の起伏と判断したものは除外した事から、遺構番号には欠番が生じている。遺構種別の表記についてはアルファベットの略号、すなわち、土坑：SK、炭化物集中：SC、ピット：Ｐというように、一般的に用いられている遺構略号を用いて表記した。また、本文及び遺構一覧表の記載に際しては、和泉Ａ遺跡［荒川ほか1999］の分類に準拠して平面・断面形態の表記を行った（第Ⅳ章2.B参照）。

B 各　説

1) 土　坑

７基検出した。SK16 以外は非常に浅く、性格は不明である。SK16 はＶ層が遺構に落ち込む事から、遺跡廃絶時には埋没しきっていなかった事がわかる。遺物はSK １･SK16 から土器細片が数点出土したが、時期的な詳細は不明である。

ＳＫ１（図版３・５・30）

11B 区に位置し、平面形は楕円形、断面形は弧状を呈する。長径 87 ㎝、短径 30 ㎝、深さ９㎝を測り、緩やかに立ち上がる。長軸方向はＮ－23°－Ｅを指す。覆土は炭化物を少量含む灰色粘質土である。２層に分層し、１層には腐植物が含まれる。遺物は縄文土器細片が数点出土したが、図版に掲載し得るものではない。

ＳＫ２（図版３・５・30）

11A･B 区に位置し、平面形は楕円形、断面形は弧状を呈する。長径 74 ㎝、短径 56 ㎝、深さ９㎝を測り、緩やかに立ち上がる。長軸方向はＮ－62°－Ｗを指す。覆土は２層に分層した。炭化物を少量含む灰色粘質土がレンズ状に堆積する。遺物は出土していない。

ＳＫ３（図版３・５・30）

11A 区に位置し、平面形は不整形、断面形は弧状を呈する。長径 40 ㎝、短径 30 ㎝、深さ８㎝を測り、緩やかに立ち上がる。長軸方向はＮ－58°－Ｅを指す。覆土は２層に分層した。いずれも炭化物を含む。遺物は出土していない。

ＳＫ４（図版３・５・31）

11A 区に位置し、平面形は方形、断面形は弧状を呈する。長径 32 ㎝、短径 24 ㎝、深さ４㎝を測り、緩やかに立ち上がる。長軸方向はＮ－48°－Ｗを指す。覆土は単層である。遺物は出土していない。

ＳＫ９（図版３・５・31）

11B 区に位置し、平面形は円形、断面形は弧状状を呈するが、全体的に壁面には起伏がみられる。長径 84 ㎝、短径 82 ㎝、深さ８㎝を測り、緩やかに立ち上がる。長軸方向はＮ－84°－Ｅを指す。覆土は２層に分層され、いずれも炭化物を含む。遺物は出土していない。

ＳＫ１０（図版３・５・31）

11B 区に位置し、平面形は楕円形、断面形は弧状を呈するが、壁面には全体的に起伏がみられる。長径 64 ㎝、短径 54 ㎝、深さ 11 ㎝を測り、緩やかに立ち上がる。長軸方向はＮ－45°－Ｗを指す。覆土は２層に分層され、１層には腐植物や炭化物が少量含まれる。遺物は出土していない。

ＳＫ１６（図版３・５・31）

11C 区に位置し、平面形は楕円形、断面形は長軸方向は弧状、短軸方向は穏やかな台形状を呈する。長径 3.45m、短径 1.86m、深さ 45 ㎝を測り、西壁以外は急激に立ち上がる。長軸方向はＮ－55°－Ｗを指す。覆土は炭化物を少量含むシルト質粘質土単層である。遺物は１層から土器細片数点が出土しているが、図版に掲載し得るものはない。

2）炭化物集中

ＳＣ１０１（図版3・5・31）

13C区に位置し、平面形は楕円形、断面形は凸凹した弧状を呈する。東端は攪乱により失われる。長径1.58m以上、短径1.14m、深さ0.13mを測り、立ち上がりは緩やかである。長軸方向はＮ－59°－Ｗを指す。覆土はシルト質粘土で２層に分層され、１層は全体的に直径３～10mm大の炭化物粒子を多く含み、特に下方には直径20mm前後の炭化物塊が多くみられる。覆土中からは骨片や炭化した種子が出土し、自然科学分析を行ったが（第Ⅲ章４参照）、遺構の性格を決定づけるような所見は得られなかった。

3）ピット

調査区西端の11Ａ区で３基（P3～P7）、11Ｂ区で１基（P8）検出した。深さはいずれも５cm前後と浅く、断面形も弧状やそれに類するもので占められており、建物の柱穴の可能性は低い。平面形は円形もしくは隅丸方形を呈し、直径は10～30cmを測る。覆土はⅥｂ層を基本とし、粒子状炭化物や小ブロック状の粘土が混入する。Ｐ５～Ｐ８では覆土全体が酸化してやや黄色がかる。遺物は出土していない。

4）杭（図版２・５・30）

一次掘削中に８Ｃ区で検出した唯一の古代の遺構（杭１）である。直径20cm、全長約50cmで樹皮のついた丸太材が用いられている。周辺に杭やピットは検出できなかった事から、建物に伴うものではなかろう。材は水を含んで脆弱であり、取り上げられなかった。

5）自然流路（図版１～４・32～34）

９～10・Ａ～Ｅ区に位置する東西方向の流路である。新旧２本の重複した流路を検出したが、当初、古い方の流路（流路２）は識別が困難で、Ⅵ層と認識していた。土器の年代や土層堆積状況などからみて、遺跡が営まれていた時期（Ⅵｂ・Ⅵｃ層堆積過程）を通して流路２は序々に埋まっていき、流路１は遺跡の廃絶前後に形成されたものと考える。なお、更に古い流路もこれらの下で確認したが、Ⅷ層堆積以前のものであり、調査は行わなかった。こちらは砂や砂利が堆積し、湧水も非常に多い事から、現在も地下流路として機能していると考えられる。

流 路 １（図版２・３・５・32・33）

流路２の埋没後に再形成された流路である。Ⅵａ層堆積段階にほぼ埋没し、Ⅴ層堆積時には消滅する。川幅は調査区東端が最も狭く2.9ｍを測る。10B区付近で最も広くなり（5.8ｍ）、調査区西端では約４ｍと少し狭まって調査区外に延伸する。深さは調査区東端で約110cm（川底標高0.8ｍ）、Ｄグリッドライン上で約120cm（川底標高0.8ｍ）、調査区西端で約80cm（川底標高1.1ｍ）と、海岸に近い方が川底がやや高くなっている。断面形は調査区東端では弧状、Ｄグリッドライン上では台形状を呈し、川底は約２ｍ幅の平坦面を形成するようになる。この付近で断面形態は最もはっきりするが、西へ向かうにつれ川底が上昇し相対的に浅くなると同時に川幅も5.8ｍと広くなり、断面形は浅い窪みのようなはっきりしない形態となる。調査区西端では川幅は約４ｍと狭まるが、断面形に変化はなく、浅い窪み状のまま調査区外に延伸する。Ｃグリッド以西では川底に流木が多数残存しており、これらの多くは流路と直交する形で検出しているが、橋として流用されたような痕跡は窺えなかった。

遺物は縄文時代中～後期の土器片数十点と石錘２点、不定形石器１点、自然礫９点が出土した。土器は11Ｄの川底から北岸立ち上がりにかけて（７層）集中するが、10Ｂの川底中央部でも若干、まとまって出土した。周辺の遺物分布からみて、これらは北岸から廃棄されたか流れ込んだものであろう。前者は流路２の北岸立ち上がり付近で出土したものとの関連が窺え、流路１と２が一部、北岸を共有する可能性が高い。１～６は11Ｄから、６・７は10Ｂから出土している。石錘（78・89）は10Ｂの川底中央部から、不定形石器（70）は11Ｄ21の川底際から出土している。

流 路 ２（図版２・３・５・32～34）

流路１調査中に川底から南側に腐植物の薄層(8層)が延びているのが確認され、流路である事が判明した。川底の遺物出土状況から、北岸の一部は流路１と共有する可能性がある。湧水量は非常に多く、常時３～４台のポンプを稼働させても追いつかない状況であり、遺物も流路１との重複部分に限定される事が判明したため、堆積土の除去は大半を重機で行い、川底と重複部分のみ人力で行うという調査方法を採った。

流路２の川幅は調査区東端で12.4ｍを測る。前述の状況からみて川幅はおおよそ12ｍ程度で一定していたものと推測する。深さは調査区東端で約150cm（川底標高0.5ｍ）、Ｄグリッドライン上で約140cm（川底標高0.6ｍ）、調査区西端で約160cm（川底標高0.4ｍ）と、西に向かって若干深くなる。断面形は基本的に弧状を呈するが、川底は幅の広い平坦面（幅約5.5ｍ～7.2ｍ）を形成する。南側は川底から50～60cmほど立ち上がって一度棚状に平坦面を形成し、そこから緩やかに南岸に向けて立ち上がる。

堆積土ははじめに述べたとおりⅥ層と酷似する灰色粘土を基本とし、下層～川底には腐植物が多量に混入する。中～上層の粘土は南側から流入して流路を埋めており、調査区の南側に大規模な氾濫を繰り返す河川の存在が予想される。

遺物は流路１との重複部分、特に10Ｃ・10Ｄ付近（10層）に大半が集中する。これらは前述したように北岸から廃棄されたか流れ込んだものであろう。縄文時代中～後期の土器片が大半を占めるが、細片が多く、図示し得たものは図版６－４・８～22と少ない。土器以外では、石鏃１点（57）、敲石２点（95・96）、不定形石器（65・69）２点、軽石１点、自然礫27点、トチ・クルミなどの種子類がある。

3　遺　　物

遺物は古代の土師器・須恵器・杭、縄文時代の土器・石器で、そのほかに自然礫・植物種子などが出土した。遺物の総量はコンテナ15箱分である。自然礫は流路を中心に、包含層からも出土しているが、被熱や人為的な使用痕は確認できず、基本的には流路によって遺跡にもたらされたものと考えた。植物種子にはトチ・クルミなどがあるが、これらについても人為的な痕跡は窺えない。以下、遺物の主体を占める縄文時代の土器・石器、古代の土器・木製品の順に説明をする。

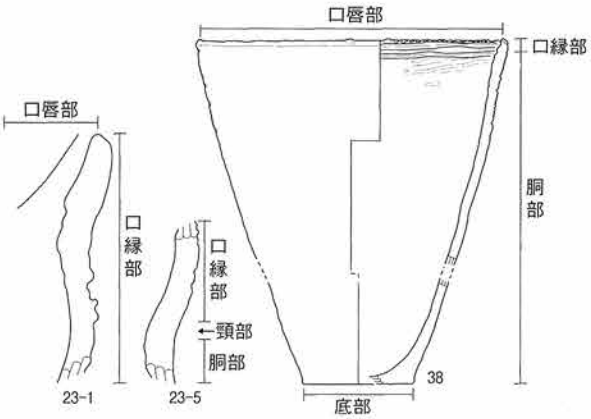
Ａ　縄文時代の遺物

1）土　器（図版６～８・35～37）

概　　要

土器は、包含層（Ⅵ層）を中心に、流路１・２からもまとまって出土している。時期的には中期前葉、中期後葉～後期中葉に比定されるものであるが、主体を占めるのは後者で、土器型式的には大木９式新

段階～加曽利B1式期に概ね収まりそうである。出土した土器は小破片が大半を占め、器形全体が把握できるまでに復元できたものは、わずか2個体のみであった（15・38）。個体数が算出しやすい底部片だけで見ると、図化していないものも合わせ、28個体分を数える。縄文原体はRL（R）がほとんどを占めた。なお、遺構に伴うものはわずかな細片のみであり、遺構の時期判別に有効なものはない。



第10図　土器部位名称
［高橋ほか2005を一部改訂］

分布状況

概して、土器の大半は自然流路の北側である10～12グリッド（特に11グリッド）に集中し、流路の南側（7～9グリッド）にはわずかしか存在しない。そのほか、13グリッドには遺物が少量出土したが、14グリッド以北では遺物は確認できなかった。次に垂直分布についてみてみると（第11図）、Ⅵb・ⅥC層の境付近に集中する傾向がある。また、下記のように上下幅をもって接合する例もあるが（38）、時期的に古い土器が下位にまとまって位置している。

土器の接合状況についてみてみると、各々がまとまった範囲で出土しており、原位置がほぼ保たれているものと判断する。特に38に関しては、平面的にまとまるだけでなく、垂直分布に30cmほどの上下幅がある。38の周辺は土層中に炭化物が混じる状況であったが、壁の立ち上がりは確認できず、調査時には遺構と認定しなかった。しかし、このような分布状況からみると、遺構が存在した可能性は否定し得ない。

記述の方法

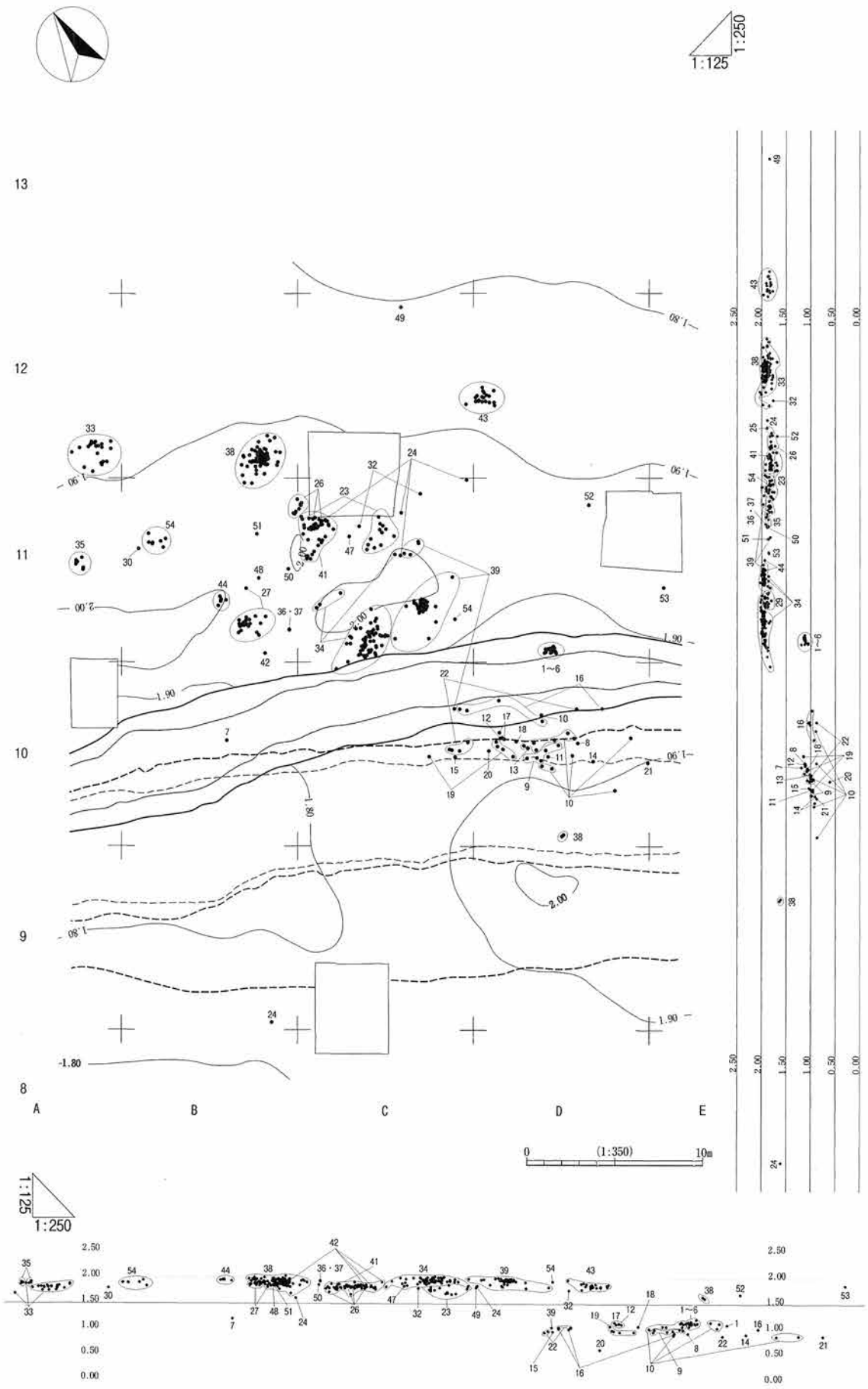
記述に際しては、自然流路、包含層の順に記述する。報告番号の付与については、個体ごとに報告番号を付し、個々の破片に関しては枝番号を追加して表した。また、包含層出土土器に関しては、土器型式をもとに3時期に分けて記載し（中期前葉、中期後葉～中期末葉、後期前葉～後期中葉）、最後に時期細別不能なものを載せた。土器の分類については資料数が少ないことなどを勘案し、本稿では器形及び型式による分類項目を設けず、詳細は第Ⅳ章5で述べることとする。土器の部位名称については『北野遺跡Ⅱ（上層）本文編』［高橋保雄ほか2005］の「第18図 土器計測基準及び部位名称」を参考に、本遺跡における名称図（第10図）を作成した。なお、土器観察表に関しては、個体ごとに一つの観察結果を掲載し、報告番号は枝番号を省略して整理した。「残存率」に関しては、破片が大半で割り出しが困難であるため、確実に分かるもののみ記載することとする。

各　　説

流 路 1（1～7）

流路1では、主に11D11（北岸斜面部）より土器が出土したが、小破片が多く、図化できたものは口縁部や比較的施文が分かりやすいものにとどまった。いずれも最下層である7層からの出土である。主に中期後葉（大木9～10式併行期）～後期前葉（三十稲場式併行期）の土器が出土した。

1～6は大木9～10式土器の小破片で、11D11より出土した。1は深鉢片で、口縁部（1－1）は外反気味に開き、端部は丸くおさまる。胴部施文は、弧状の沈線区画内に縄文RLを施す。後述する11・12と同一個体の可能性がある。2～4はそれぞれ沈線区画内の縄文が充填された部分であろう。区画の形状にそって縄文原体を転がしているため、縄文は異方向に施文される。5の口縁部は内湾気味におさまる。



第 11 図　土器出土分布図

破片下部には沈線が付く。7は三十稲場式の可能性が高い深鉢底部片である。底部外面は剥落しているが、後述する33－5のような台付きの底部と考える。施文は爪形状刺突文が施され、その下部はヨコナデされる。外面のみススが付着する。

流 路 2（8～22）

流路1の南側に位置し、若干古い流れになる。流路1と同時期の遺物が混在しており、流路1と2は北岸部分を共有している可能性がある。土器は、自然流路1と2の重複する付近、特に10D中央付近に多く出土した。出土層位はいずれも最下層である10層（腐植物層）からの出土である。主に中期後葉（大木9～10式併行）～後期前葉（南三十稲場式併行）の土器が出土した。

8～14は大木9～10式の深鉢破片である。8・9は同一個体の可能性がある。残存部位より推測すると、胴部で膨らみ、頸部が緩く括れ、口縁部はやや外反する器形である。文様モチーフは沈線による渦巻文や横位のJ字状文であり、その中を縄文RLで充填する。内外面共に磨かれ、器壁が薄く硬質である。大木9式新段階か。10は胴部片である。10D8・9・13・18より出土した。下方に向かって器壁が厚くなり、かつ内傾する様子から推測すると、胴部中位から下半にかけての破片である。地文は縄文LRで、磨消や沈線により文様を区画している。外面にはコゲ状の炭化物がこびりつく。11・12は外反気味に開く大木式の深鉢口縁部である。11は弧状の沈線区画内に縄文LRが施され、1と同一個体の可能性がある。14は口縁部付近の胴部片で、弧状の沈線区画内を縄文RLで充填する。後述する24と同一個体か。15は沈線文系の深鉢である。10C22からつぶれた状態でまとまって出土したが、底部付近を欠く。口縁部には4単位のC字状の貼付文が付され、その頂部が口唇部にいたって波状口縁の形態を成す。さらに、口縁部に沿って1条の横位沈線をめぐらせ、口縁部無文帯を作り出している。その横位沈線直下から、胴部には斜行沈線による格子目文が描かれる。小さめの底部から内湾気味に立ち上がり、胴部上半がやや膨らんで口縁部にいたり、そのまま内湾気味におさまる。三十稲場式新段階（綱取Ⅱ式併行）に比定されようか。内外面ともに炭化物の付着が顕著で、とくに口縁部にはコゲ状の炭化物が厚くこびりつく。16は南三十稲場式最新段階の深鉢片である。口縁部（16－1）には扁平な円形突起が付され、比較的緩やかな波状口縁を呈する。更に口縁部に沿って1条の横位沈線がめぐり、その両脇には縦位の短沈線による刻みが施される。胴部片（16－3·4）には細密な集合沈線が描かれ、空白部には不整円形刺突文が充填されることから、磨耗で判然としないが、これと同じ施文が16－1・2にもされていたと考えたい。いずれも内面には炭化物が付着する。

17～19は粗製の深鉢片である。17の地文は縄文RLで、緩やかな波状口縁を呈する。19は器壁が厚く、比較的大きな深鉢であろう。20～22は底部片である。

包 含 層（23～54）

中期前葉（23）

23は大木7b式の深鉢である。本遺跡出土土器中、最古相を呈する土器で、中期前葉に位置づけられる。この時期の土器は当該資料のみである。11C14からまとまって出土したが、口縁～胴部上半の破片のみで下半部を欠く。周囲からは石器の剥片も多く出土した。口縁部は4単位の大波状口縁を呈し、波頂部のモチーフは少なくとも2種類ある（23－1・2）。胴部から口頸部にかけては緩やかに屈曲し（23－5）、口縁部は内湾しながら開くが口唇部は短く外反する（23－1～3）。横位の隆起線に沿う2条の側面圧痕文Lによって、口縁部上方に無文帯が区画される。これより下位には、大枠を隆起線が縁取り、それに沿って側面圧痕文Lを施した円形か半円形などのモチーフが描かれ、胴部には縄文RLが施される。ほかには、極

小さな破片が数点出土したのみである。

中期後葉～中期末葉（24～32）

いずれも大木9～10式に比定される。24～26は、それぞれ口縁部及び口縁部付近の破片である。24は浅鉢の可能性がある。口縁部は内湾しておさまり、平面形は楕円形を呈する。二重の楕円形区画の内側には、縄文RLが充填される。半径2.5m圏内に破片が散在していた。25は口縁部に1条の沈線をめぐらせ、口縁部無文帯を作り出し、楕円形の沈線区画内には縄文RLを充填する。26は波状を呈する口縁部で弧状の沈線区画内を縄文RLで充填する。24～26はいずれも内外面ミガキが施される。破片のため全体の文様モチーフには言及し難いが、大木9式新段階のものと考える（第Ⅳ章5で詳述）。27～30は充填縄文の胴部片である。いずれも内外面にミガキが施され薄手で硬質な土器片である。27は同一個体の破片が20点近く、11C6よりまとまって出土した。29・30は自然流路2出土の9と同一個体の可能性があるか。31・32はともに大木式の粗製土器である。31は単位縄文LRが施された深鉢の胴部片で、9D5（流路2南側）からの出土である。32は口縁～胴部にかけてで、大波状口縁を呈し、地文には縄文RLが施される。口縁部は丸みを帯びながら内湾し、口唇部はナデが施され丸くおさまる。

後期前葉～後期中葉（35～40）

33は、三十稲場式最新段階に比定される深鉢片である。「く」の字状に屈曲した口縁部（33－1）には、口唇部および口縁部縁辺に沿って器面に対し斜め前面から施文具を入れた（場合によっては起こして粘土を隆起させたような）、横位の爪形状刺突文が施される。胴部（33－2～4）は、棒状具で施文された円形刺突文と、前述した爪形状刺突文、沈線で構成される。縦位沈線間は、円形刺突や爪形状刺突が充填される。底部（33－5）は台付で、立ち上がってまもなく、円形刺突文と爪形状刺突文が施される。図化したほかにも破片が出土しており、それらの多くは爪形状刺突文であることから、同文様が主体の土器であったと推察する。内外面ともにミガキが施され、炭化物が付着する。器壁は薄いが硬質である。36は三十稲場式の口縁部突起、37は同深鉢の橋状把手である。34は、多条沈線文系の南三十稲場式新段階の深鉢である。口縁部には円形突起に上から刺突を入れるもの（34－1）と、波頂部（扁平化した円形突起）に上から穿孔するもの（34－2）があり、いずれも直下は小さく穿孔される。16同様、口縁部に沿って突起と突起をつなぐ様な1条の横位沈線が配される。頸部は横位の多条沈線で区画され（34－4）、その上部には円形刺突文が付くが、これはアチヤ平遺跡上段［富樫ほか2002］出土の2029の南三十稲場式新段階の土器などに類例がある。頸部で区画された口縁部・及び胴部文様帯には5～8条の縦位多条沈線文が描かれ、空白部には縄文RLが充填される。内外面とも炭化物が付着する。35は、地文のRを縦位の結束縄文で区画する深鉢胴～底部片である。調査区東端付近の11A18より単独で出土した。後期前葉に比定できよう。38は図上復元した平行沈線文系の深鉢で、粗製の加曽利B1式土器（もしくは同型式併行期）に比定されようか。主に12B16・21を中心にまとまって出土した。器形は、底部からほぼ直線的に開いて口縁部にいたり、口唇部でやや内湾しておさまる。口縁部には4単位のごく小さなつまみ上げによる突起が不均等に配され、小波状口縁を呈する。さらに、口唇部内面には棒状具による押捺が不規則に施され、その下には2条の太い横位沈線が巡る。口縁～胴部上半にかけては、2条1単位の平行沈線が2単位巡り、空白部は櫛歯状沈線文で充填される。これより下位は無文帯となる。2単位の平行沈線には継ぎ目があるが、規則性はない。底部外面には網代圧痕が認められる。内外面ともにミガキが施され、上半には炭化物が付着し、補修孔が1対ある。他に胴部無文帯部分の破片が出土したが復元には至らず、上半部と下半部で図上復元をするにとどまった。

細別時期不明（39 ～ 54）

39 は、棒状具による不整形で細かい円形刺突文が施された土器である。口縁部は緩やかな波状を呈し(39 － 8)、頸部で屈曲して膨らんだ胴部へ至る。口縁部には口唇部に沿って２列の刺突列が配され、波頂部からは縦位の刺突列が垂下し、ちょうど胴部の膨らんだ辺りで横位の刺突列と合流、またはそのまま連続して横位に刺突を施す。横位の刺突列は、口縁部の形状（波状）に合わせて施文されているように見受けられる。この横位の刺突列直下から、さらに縦位の刺突列が垂下する。底部(39 － 1)付近にも刺突文が付くが、モチーフは判断しかねる。ほかにも同破片が出土しているが、いずれも小破片である。この 39 に関しては第Ⅳ章５で詳述するが、三十稲場式新段階～南三十稲場式に類する土器であろうと考える。40 は中期中葉の馬高式系の胴部小片であると考えた。7 B 15 と調査区南端から単発的に出土した。41 は地文に縄文 RL が施された同一個体の粗製深鉢底～胴部片で、器面はざらつき磨耗する。42 と同一個体の可能性がある。43 は小波状を呈する口縁部（43 － 1）を有し、細密な横位集合沈線が施された深鉢口縁～底部片であり、内外面ミガキが施される。底部には網代圧痕が付く。44 は内湾した口縁部片と底部片で、地文には縄文 LR が施されるが、全体的に磨耗しているため判然としない。45・46 は、自然流路の南側から出土した数少ない遺物の一部である。45 は 8B20 出土の深鉢胴～底部で、胴部には押圧縄文後、下端にナデが施される。46 は 8C14 出土の底部片である。同一個体と推測した胴部の破片が 100 点近く出土したが、いずれも無文で小破片であり、復元が困難であったため図化し得なかった。47 ～ 54 は底部片であり、52 ～ 54 の外底面には網代状圧痕が付く。特筆すべきは 49 であり、底面の形態が少々特殊である。底部に用いる粘土板を２つに折り曲げるようにして下方に反らし、その後両端をつまんで持ち上げている。その結果、底面は周縁部の一部だけが地面に接するような形態になる。類例を知らず、こうした造作を底部に加えた要因は不明である。設置した際の安定を図ったものか。12C15 から単独で出土した。

2）石　器・石 製 品（図版 9 ～ 11・38 ～ 40）

調査で得られた石器･搬入礫は遺物収納用コンテナ約６箱分である。これらのうち､石器は 134 点である。

記述の方法

資料の提示方法

資料の提示は実測図・写真・観察表で行い、本文で分析を加えた。土器同様、出土層位や出土位置による細別時期の特定が不可能であるため、器種毎に図化・掲載した。法量・重量・石材といった個々の基本的な諸属性は、巻末の遺物観察表に詳しいので、基本的に本文中では触れていない。

実測図の表現

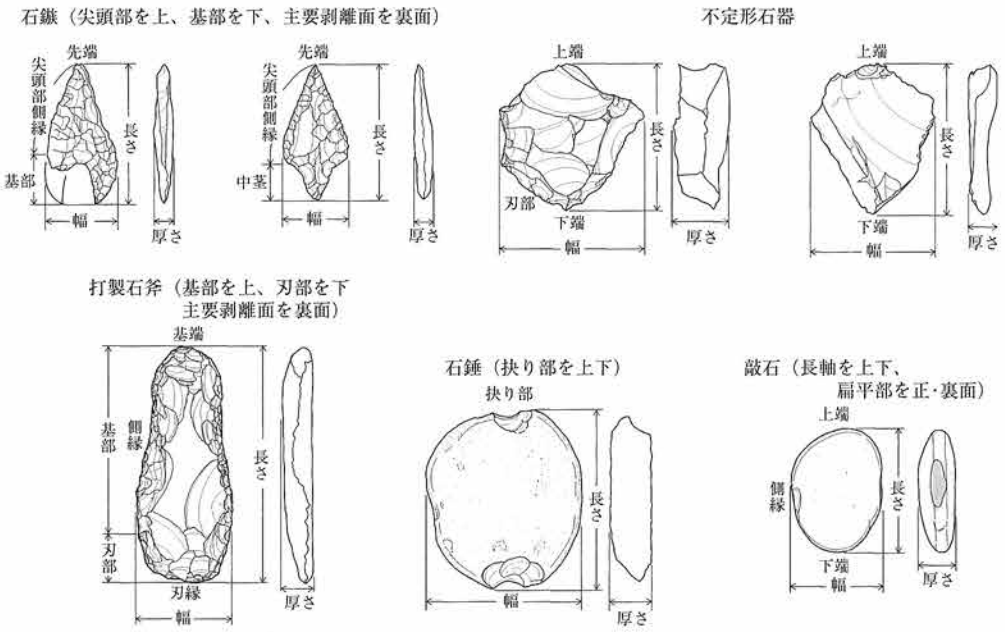
実測図における付着物や使用痕については以下の表現を用いた。石鏃は、アスファルトと考えた黒色付着物の範囲をドットで示した。不定形石器は、刃部の範囲や使用部位を←→で示した。敲石は、敲打範囲をスクリーントーンで示した。打製石斧は、使用痕をスクリーントーンで示した。

縮　尺　率

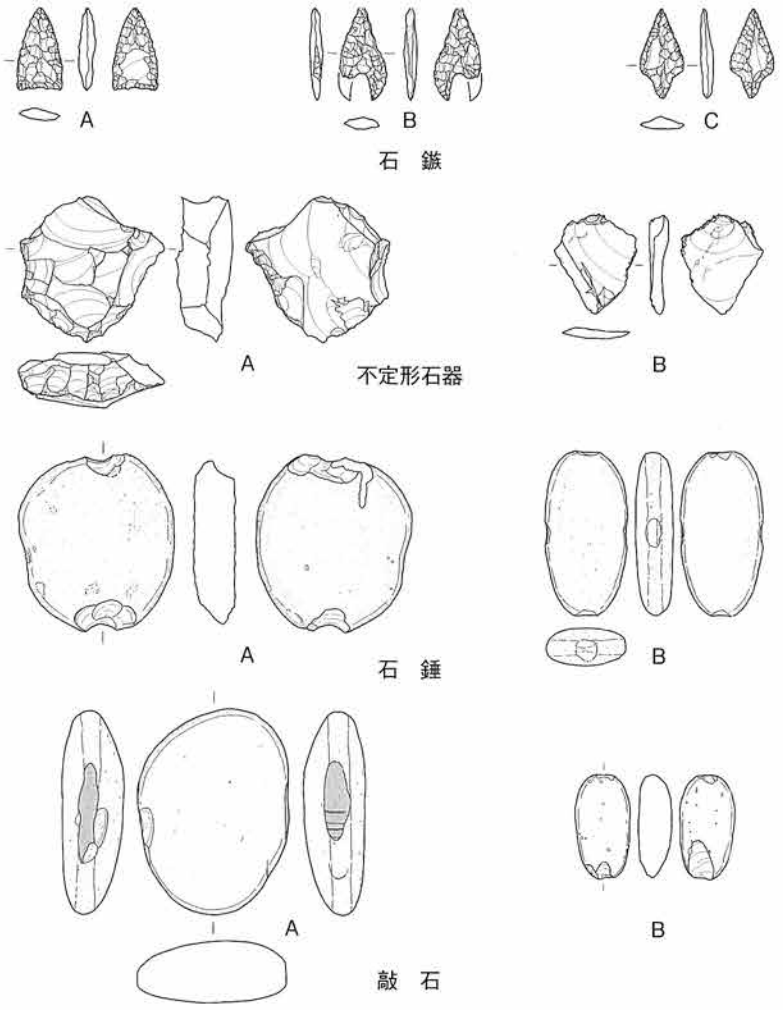
第１表のとおり、器種毎に統一した。また、図版にはスケールを付け、縮尺も記入した。

観察表の記載

石器・石製品の属性や諸特徴を記入した表である。観察表の記載項目は、掲載 No.、出土地点・遺構名、層位、分類、計測値、石材、遺存状態、備考などである。



第12図　主な器種の並べ方及び部位名称と計測基準



第13図　石器分類図

分布状況

石器の大半は土器同様、自然流路北側の10～12グリッドに集中して出土した。流路南側の7～9グリッドはわずか4点であり、そのうち2点が石鏃である。出土数の少ない流路南側からの石鏃の出土は、その性格を表しているといえよう。自然流路とその北側近傍からは石錘が出土しており、漁労との関わりを示唆している。

器種名	石鏃	不定形石器	石錘	敲石	打製石斧	その他の石器	剥片	接合資料	合計
点数	8	13	14	5	1	3	85	5	134
縮尺率	2/3	1/2	1/4	1/4	1/3	1/4	-	1/3	-

第1表　石器組成と縮尺率

剥片は11・12CDグリッドに集中して出土しており、接合資料もみられた。その分布状況から石材を運び込み、石器を製作していたことが推測される。第14図はこれらの出土位置を示すもので、接合資料は点数が多いため図を更に拡大した。

各　説

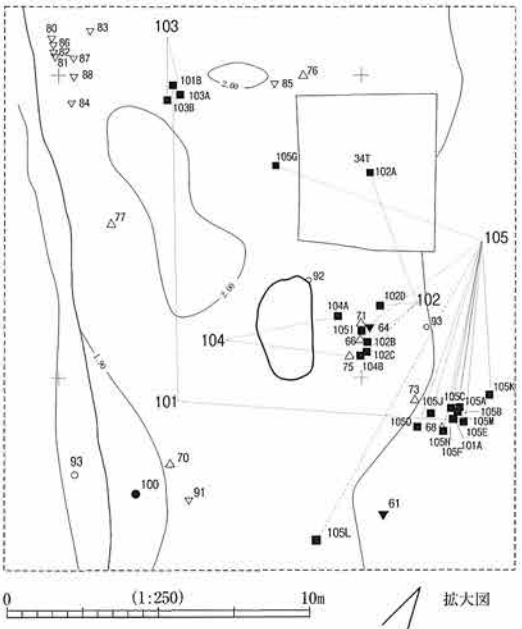
石器・石製品134点のうち、剥片以外はすべて図化し、剥片については接合資料を図化した。石器点数は多いとは言えず、あらかじめ項立てして分類基準の全容を示すことはせず、各説の冒頭に分類基準を示すこととする。

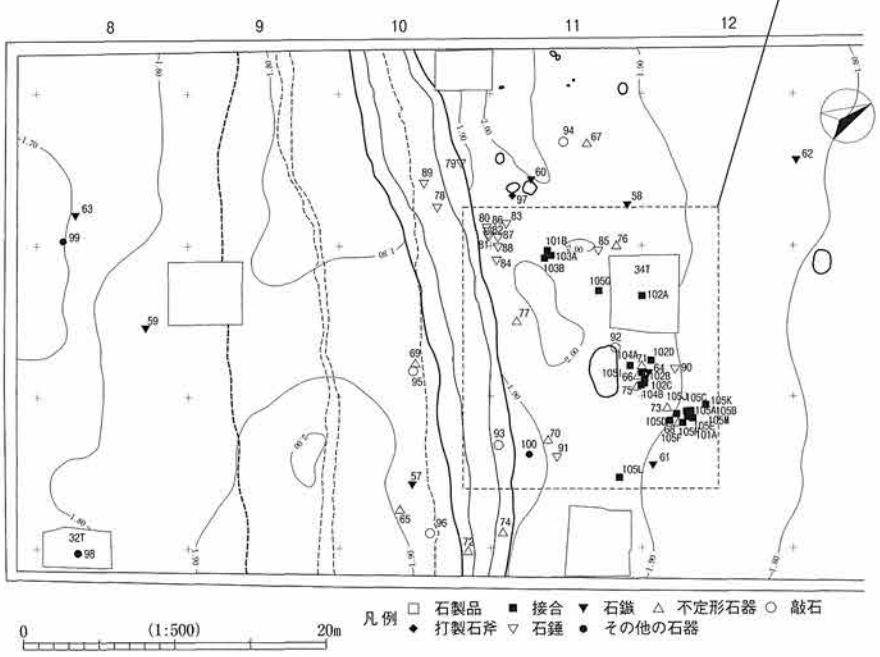
石　鏃（57～64）

尖頭状の狩猟具のひとつで、尖頭部・側縁部・基部（脚部）が作出され、左右がほぼ対称のものを石鏃とした。包含層および流路から8点出土しており、その内訳は、円基が1点、平基が2点、凹基が1点、有茎が4点である［鈴木1981］。

A類（57～59）：基部が平らで中茎の無い平基無茎鏃である。側縁が内湾気味に膨らむもの（57・58）と尖頭が半円状で側縁が直線的なもの（59）がある。基部はやや抉れるもの（58）とほぼ直線的なもの（57・59）がある。

B類（60）：基部に抉りがあり、中茎の無い凹基無茎鏃である。抉りが深く、側縁形状もやや膨らむ。





第14図　石器分布図

C類（61～64）：中茎のある有茎鏃である。側縁が直線的なもの（61・62）と、尖頭部が緩やかな半円状で側縁が直線的なもの（63）、側縁が平行し五角形となるもの（64）がある。

出土位置は、57が流路2、59・63が流路南側、58・60～62・64が流路北側の包含層中である。包含層出土のものは、Ⅵa～Ⅵc層から出土している。

法量・重量の平均は、A類が長さ22.2mm、幅13.3mm、厚さ15mm、重量1.13g、C類は特大の64を除き、長さ25.2mm、幅13.7mm、厚さ5mm、重量0.97gである。石材は、57が溶結凝灰岩、58が凝灰岩、59がチャートで、60～64は珪質頁岩である。

アスファルトと考える黒色ないし茶褐色の付着物は6点で確認した。58・60・62・64は、表・裏面とも二等辺三角形状に付着がみられる。

不定形石器（65～77）

剥片を素材とし、刃部と思われる部分に二次調整や使用痕をもつものである。13点出土した。刃部の形状で分類した。

A類（65～69）：厚手の剥片を素材とし、刃部に急角度の二次加工を施し、鋸歯縁状とするもの。

65は急角度の剥離を右側縁部の下位に施し、刃部を作出する。刃部は二次加工によりL字状を呈する。66は急角度の剥離を連続的に施し、刃部を作出する。右側縁部は正面に大きめの剥離を施した後、裏面に浅角度の細かな剥離を施している。右側縁部の下位から左側縁部にかけては比較的大きな剥離を片面（正面側）に施し、刃部ラインを外湾状にしている。67は急角度の剥離を連続的に施し、刃部を作出する。右側縁部の上位は比較的大きめの剥離により、弧状に刃部ラインを作成している。左側縁部には階段状の剥離が見られ、刃部ラインを鋸歯状にしている。68は下位に急角度の剥離を施し、鋸歯縁状の刃部を作出する。刃部ラインは外湾状を呈する。69は急角度の剥離を裏面右側縁部に施し、比較的なだらかな鋸歯縁を上半に、凹凸の明瞭な鋸歯縁を下半に作出する。刃部ラインはほぼ直線状を呈する。

B類（70～77）：比較的薄手の剥片を素材とし、刃部に小型ないし微細な剥離がみられるもの。

70は右側縁部に細かな二次加工が付く。上半は正面から裏面側へ、下半は裏面から剥離される。71は右側縁部の下位に、使用による微細剥離がみられる。左側縁部の上位裏面と右側縁部の中位には微細剥離がみられる。72は右側縁部に正・裏面ともに使用による微細剥離がみられる。左側縁部の上位には微細剥離がみられる。73は左側縁部に裏面から正面へ二次加工を施す。74は下端部に二次加工を施し、その部位が使用により光沢を帯びる。右側縁部の裏面には微細剥離がみられる。75の右側縁部の上位には急角度の剥離を施し、更に小さめの二次加工が付く。左側縁部の上位には微細剥離が付き刃部としている。76は、右側縁部の中位と左側縁部に微細な二次加工を施し、その部位の裏面は使用により光沢を帯びる。77の右側縁部には微細剥離が確認できる。石材はすべて珪質頁岩である。

出土位置は、70が流路1、65・69が流路2で、そのほかはすべて流路北側の包含層中からの出土である。出土層位は石鏃同様、Ⅵa'～Ⅵc層から出土している。

石　錘（78～91）

円形・楕円形の扁平礫に抉りを付けたものである。抉りの位置によって分類した。

A類（78～88）：扁平な円礫を素材とし、長軸上の両端部に正・裏面から打撃を加え、抉りを付けたもので11点出土している。

B類（89～91）：円形ないし長楕円形の扁平礫を素材とし、上下端と両側縁部に小さな抉りを付けたもので3点出土している。抉りは敲打により作出されている。敲打したか所は内湾状にくぼむものが多いこ

とから、敲石の 92 ～ 94 の敲打痕と区別した。敲打によりくぼみを作出し、この部分を縄掛けとする石錘と考えた。

出土位置は、78・89 が流路 1 の底から、79 が川岸から、91 が 11D8、80 ～ 84・86 ～ 88 は 10B25 付近と、大半は流路の近辺からであるが、85 は流路 1 から 8 m離れた 11C4 から、90 は流路 1 から 11 m離れた 12C22 から出土した。出土層位はやはりⅥa' ～Ⅵc 層にまたがる。

法量・重量の平均は、A 類が長さ 95.3mm、幅 85.1mm、厚さ 23.9mm、重量 282.6g、B 類が長さ 90.3mm、幅 60.6mm、厚さ 28mm、重量 259.2g である。

石材は、花崗岩・斑レイ岩・緑泥片岩・閃緑岩・凝灰岩など様々である。石材に拘らず、その目的にかなった手頃な素材を選んでいるといえよう。

敲　　石（92 ～ 96）

片手ないしは両手で把持できる大きさの礫の表面に、使用の結果付いたと推測する敲打痕をもつ石器である。5 点出土している。使用痕の位置をもとに分類した。

A 類（92 ～ 94）：長楕円形の扁平礫を素材とし、上下端部もしくは側縁部に広い範囲の敲打痕が付く。92 の両端部にある敲打痕は、端部だけに留まらず、側縁にまで達している。また、内湾状に小さな抉りが付く。93 は両側縁部に敲打痕が付き、左側縁部の敲打範囲外縁は敲打時の衝撃により、一部剥離している。右側縁部の敲打範囲下位には横位の線条痕が付く。94 は右側縁部に敲打痕が付く。敲打面は大きく 2 面存在する。

B 類（95・96）：長楕円形の扁平礫を素材とし、上下端部に敲打痕が付く。敲打の衝撃が大きく、大小の剥離も見られる。パンチとしての使用を推測する。

出土位置は 95・96 が流路 2 で出土したほかは、すべて流路北側の包含層中から出土している。出土層位はⅥa' ～Ⅵc 層にまたがる。

完形品を対象とした法量・重量の平均は、A 類が 100.5mm、幅 59.5mm、厚さ 34.5mm、重量 317.9g、B 類が長さ 72mm、幅 35.5mm、厚さ 21mm、重量 91.2g である。概して、A 類が B 類に対して大きく重い傾向にある。石材は、92 ～ 94 は安山岩、95 は花崗岩、96 は泥岩である。

打 製 石 斧（97）

流路北側の包含層中から 1 点のみ出土している。大きさに対して比較的薄手であり、刃部幅が広く、基部幅が狭い。刃部から基部への側縁ラインはゆるやかな内湾状を呈し、いわゆる「短冊形」となる。石材は頁岩である。正・裏面に一部自然面が残る。剥片を素材とせず、手頃な大きさの石を選んで加工したものである。二次加工は両面に施され、側縁部は大まかに形を整えた後、細かい剥離を加えている。正・裏面の二次加工は浅角度で、基部断面形はほぼ菱形を呈する。刃部は正・裏面からの剥離により両刃を成しており、両面は使用によって摩耗している。

その他の石器（98 ～ 100）

98 は試掘確認調査時に出土した細粒軟質凝灰岩である。上端に 1 か所大きな剥離が付くが、ほかは未加工である。正面中央に、長さ 2.5cm ほどの条痕が横位に付く。99 の石材は斑レイ岩である。楕円形の扁平礫を素材とする。正・裏面とも風化が激しく不明瞭であるが、下端部は正・裏面から剥離されている。100 の石材は斑レイ岩である。長楕円形の扁平礫を素材とする。99 同様、風化が著しく不明瞭であるが、左側縁部に正・裏面から剥離されている。

接合資料（101～105）

包含層出土石器群では５例の接合資料が得られた。接合した石器の総数は23点である。すべて図化した。各接合資料の枝番は図版11、105については展開面を図版11に、作業段階を図版40に提示した。

101は剥片２点で構成される接合資料である。図の上面が打面で同一方向に101-2、101-1の順に横長剥片を剥離している。102は剥片４点で構成される接合資料である。右側面から小型の剥片102-1・2・3を剥離した後、打面を90°転移し102-4を剥離している。なお、102-4の剥離前には打面に調整剥離が施される。103は石核１点と剥片１点で構成される接合資料である。節理面を持つ礫を素材とする。103-1は打面を転移して様々な方向から小型の剥片を剥離した石核で、103-2は右側縁部の下位の剥離作業を行う際に、打面作出のため剥ぎ取った剥片と考えられる。103-2の剥離後下面に数回の剥離を行った後、これ以上の剥離を止めている。104は剥片２点で構成される接合資料である。節理面を持つ礫を素材とする。左側縁部を打面として節理面に覆われた104-1の横長剥片を剥離する。その後上面に打面を転移し縦長剥片を剥離した後、104-2の縦長剥片を剥離している。105は節理面をもつ亜角礫を素材とする接合資料で、剥片12点が残核１点に接合した。①～④の段階は石核調整の段階と考える。105-1の正面には、E面方向からの先行する剥離痕が見られ、石核打面を作出する前の調整剥離と考える。105-1と105-2は直接の切り合い関係にない。105-1は、礫表皮を剥ぎ取った資料である。105-2は石核下端部からの剥離で、正面の一部に礫表皮が残り、先行する剥離痕が付いている。この先行する剥離痕は、105-1同様打面位置のE面とは90°の関係にある。105-4は２点が接合するが、剥離方向は90°方向で、先行する正面の剥離痕も90°方向である。105-5も同様に90°方向からの剥離で、以上、これらの剥離は目的とする剥片の剥ぎ取り部位を調整するため礫表皮を剥ぎ取った行為といえるであろう。次の⑤～⑧の段階は、いよいよ目的とする剥片の剥ぎ取りである。剥離の順番は、105-6と８に切り合いがなく、その後105-10と105-11が剥離される。105-6～11とも平坦な打面（E面）から縦長の剥片を剥ぎ取ろうとしているが、その多くは端部が大きく反り返り、打面から３cmほどで剥離が止まっている。唯一105-11のみうまく力が抜け、長い剥片を得ることができた。

このように目的とする剥片の多くが、当初目論んだ長さを得られなかったことから、大幅な打面の変更を次の段階で行っている。105-6・8・10の剥離端部付近に新たな打面を作成すべく、打面再生を試みた。その後、A面に対し、新打面から複数の剥片を剥離するものの縦位置２cmで階段剥離してしまい、この段階でも想定した剥片が得られなかったのであろう。これ以上の剥離を断念している。105-12は新断面に対する調整剥離であろう。いずれも石器を製作する上で必要な剥片を作出するために発生した、副次的な剥片である。石材はすべて珪質頁岩である。これらの接合した剥片は５例であり、遺跡から出土した剥片も少数であった。またその形状は小型で反り返るものも存在していることから、良好な剥片が得られなかったことが窺える。

B　古代の遺物（図版8・37）

Ⅲ層上面から土師器坏１点（56）と杭１点が出土した。杭については遺存状態が悪く取り上げる事ができなかった。試掘確認調査時にも若干の土器片が出土しているが、図示し得たのは30Tから出土した須恵器杯の小片１点（55）のみである。55は無台杯と考えた小片で、復元口径は15.0cmである。56は無台杯で、復元底径は5.6cmである。胎土は粉質で表面は摩耗しており、調整痕は確認できない。法量や体部側面観からみて、９世紀後半～10世紀代のものと考える。

4　自然科学分析

A　はじめに

本稿では、発掘調査成果から課題とされた、1）古環境及び土層の年代観、2）植物利用、の２点を検証するため自然科学分析調査を実施する。

B　試　　料

試料は、9B5・10D4・11D8グリッド、T1などから採取された土壌38点及び流路２覆土８層から採取された土壌１点、遺構（SK16・SC101）覆土の水洗選別（篩い目1mm・3mm・5mm）で抽出・分類された微細遺物からなる。なお、14Bグリッド（１地点）のⅧ～Ⅲ層及び11Dグリッド（２地点）のⅧ～Ⅸ層を対象に土層観察及び試料採取を行っており、後述する考察にはこれらの観察所見も併せて示す。

C　分析方法

放射性炭素年代測定、珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析、種実分析、樹種同定の分析方法等については、当社の定法に従い実施している。各分析の詳細は、既存の調査報告書（例えば、パリノ・サーヴェイ株式会社2004・2005a・2005bなど）を参照されたい。

D　結　　果

1）放射性炭素年代測定

同位体効果による補正を行った測定結果（第２表）は、Vc層植物遺体は2,740 ± 30BP、自然流路２覆土８層トチノキ（種皮）は3,980 ± 30BPを示す。これらの試料の暦年較正結果（第３表、測定誤差σ）は、

第2表　放射性炭素年代測定結果

地点名	層名	種類	補正年代 BP	δ13C (‰)	測定年代 BP	Code No.	測定機関番号
(1地点)	Vc層	植物遺体（不明）	2,740± 30	-25.57±0.63	2,750± 30	9392-4	IAAA-62094
流路2	8層	トチノキ　種皮	3,980± 30	-27.44±0.62	4,020± 30	9392-5	IAAA-62341

1)年代値の算出には、Libbyの半減期5,568年を使用。
2)BP年代値は、1,950年を基点として何年前であるかを示す。
3)付記した誤差は、測定誤差σ(測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

第3表　暦年較正結果

地点名	層名	補正年代 (BP)		暦年較正年代（cal）			相対比	Code No.
(1地点)	Vc層	2,738± 31	σ	cal BC 905 - cal BC 839	cal BP 2,855 - 2,789	1.000	9392-4
			2σ	cal BC 971 - cal BC 960	cal BP 2,921 - 2,910	0.027	
				cal BC 935 - cal BC 815	cal BP 2,885 - 2,765	0.973	
流路2	8層	3,976± 31	σ	cal BC 2,565 - cal BC 2,532	cal BP 4,515 - 4,482	0.507	9392-5
				cal BC 2,495 - cal BC 2,468	cal BP 4,445 - 4,418	0.493	
			2σ	cal BC 2,577 - cal BC 2,455	cal BP 4,527 - 4,405	0.971	
				cal BC 2,418 - cal BC 2,407	cal BP 4,368 - 4,357	0.012	
				cal BC 2,375 - cal BC 2,367	cal BP 4,325 - 4,317	0.006	
				cal BC 2,364 - cal BC 2,352	cal BP 4,314 - 4,302	0.011	

1)計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer) を使用
2)計算には表に示した丸める前の値を使用している。
3)1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
4)統計的に真の値が入る確率はσは68%、2σは95%である
5)相対比は、σ、2σのそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

第4表 珪藻分析結果

種類	生態性			環境指標種	東壁			
	塩分	pH	流水		V層	VIa層	VIIIa層	VIIIb層
Centric Diatoms (中心型珪藻類)								
Coscinodiscus spp.	Euh				1	-	1	1
Araphid Pennate Diatoms (無縦溝羽状珪藻類)								
Synedra spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	1	-
Biraphid Pennate Diatoms (双縦溝羽状珪藻類)								
Cymbella spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-	-	-
Pinnularia spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-	-	-
短縦溝類								
Eunotia praerupta var. *bidens* (Ehren.)Grunow	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB, O, T	1	-	-	-
海水生種					1	0	1	1
海水～汽水生種					0	0	0	0
汽水生種					0	0	0	0
淡水～汽水生種					0	0	0	0
淡水生種					3	0	1	0
珪藻総数					4	0	2	1

凡例
H.R.：塩分濃度に対する適応性　pH：水素イオン濃度に対する適応性　C.R.：流水に対する適応性
Euh　：海水生種　ac-il　：好酸性種　l-ph　：好止水性種
Ogh-hob　：貧塩嫌塩性種　unk　：pH不明種　unk　：流水不明種
Ogh-unk　：貧塩不明種

環境指標種群
O:沼沢湿地付着生種(安藤,1990)
S:好汚濁性種, U:広域適応性種, T:好清水性種(Asai and Watanabe,1995)
R:陸生珪藻(RA:A群, RB:B群, RI:未区分、伊藤・堀内,1991)

Vc層 植物遺体はcalBC 905-839、自然流路2覆土8層 トチノキはcalBC 2,565-2,468を示す。暦年較正とは、大気中の14C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の14C濃度の変動、及び半減期の違い（14Cの半減期5,730 ± 40年）を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表している。暦年較正については、北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いる。暦年較正結果は、測定誤差σ、2σ双方の値を示す。σは統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、2σは真の値が95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、σ、2σの範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

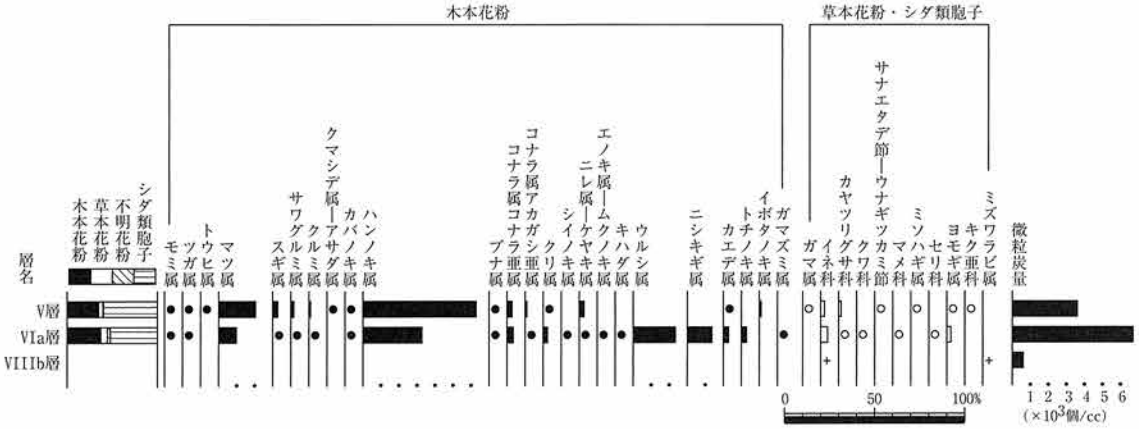
2) 珪藻分析

結果を第4表に示す。珪藻の産出頻度はい

第5表 花粉分析結果

種類 / 試料番号	V層	VIa層	VIIIb層
木本花粉			
モミ属	1	1	-
ツガ属	1	1	-
トウヒ属	1	-	-
マツ属複維管束亜属	13	5	-
マツ属（不明）	48	15	-
スギ属	8	2	-
ベカン属	-	1	-
サワグルミ属	5	1	-
クルミ属	3	1	-
クマシデ属－アサダ属	2	-	-
カバノキ属	1	1	-
ハンノキ属	187	67	-
ブナ属	2	2	-
コナラ属コナラ亜属	8	7	-
コナラ属アカガシ亜属	3	2	-
クリ属	1	5	-
シイノキ属	-	1	-
ニレ属－ケヤキ属	8	2	-
エノキ属－ムクノキ属	-	1	-
フウ属	1	-	-
キハダ属	-	1	-
ウルシ属	-	48	-
ニシキギ属	-	28	-
カエデ属	2	6	-
トチノキ属	-	6	-
イボタノキ属	3	-	-
ガマズミ属	-	1	-
草本花粉			
ガマ属	1	-	-
イネ科	18	20	1
カヤツリグサ科	12	2	-
クワ科	-	2	-
サナエタデ節－ウナギツカミ節	4	-	-
マメ科	-	1	-
ミソハギ属	1	-	-
セリ科	-	3	-
ヨモギ属	5	12	-
キク亜科	1	-	-
不明花粉	5	19	-
シダ類胞子			
ミズワラビ属	-	-	1
他のシダ類胞子	513	286	8
合計			
木本花粉	298	205	0
草本花粉	42	40	1
不明花粉	5	19	0
シダ類胞子	513	286	9
総計（不明を除く）	853	531	10
1ccあたりの微粒炭量[個]	3600	6700	600

1)微粒炭量については、10の位を四捨五入して100単位に丸めている



第15図　花粉群集の層位分布
出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満、＋は木本花粉100個体未満の試料について検出した種類を示す。
また、微粒炭量は、堆積物1ccあたりに含まれる個数で示す。

ずれの試料も非常に少なく１～４個体産出するのみで、VIa 層からは１個体も検出されない。

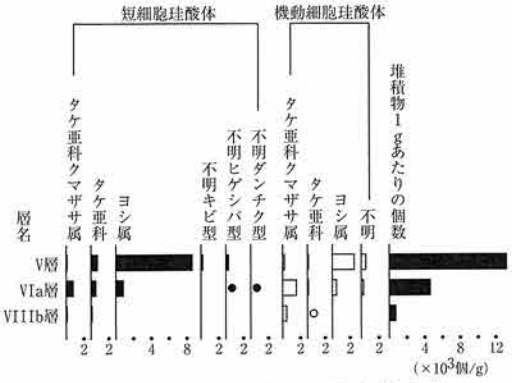
3）花粉分析

結果を第５表、第 15 図に示す。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。なお、木本花粉総数が 100 個体未満のものは、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあることから、出現した種類を＋で表示するに留めている。VIIIb 層は、花粉の産出状況が悪く、わずかにイネ科が１個体検出されたのみである。VIa 層は VIIIa 層と比較すると花粉の保存状態は良好で、木本花粉とシダ類胞子が多産する。木本花粉ではハンノキ属が最も多く産出し、ウルシ属・ニシキギ属・マツ属なども多く認められる。そのほかではコナラ属コナラ亜属・クリ属・カエデ属・トチノキ属などが検出される。草本花粉では、少ないながらもイネ科・ヨモギ属などが産出する。V 層の花粉の保存状態は VIa 層と同程度であり、群集も同様に木本花粉とシダ類胞子が多産する。木本花粉ではハンノキ属が優占し、マツ属などが次いで多く認められる。このほかに、スギ属・サワグルミ属・クルミ属・コナラ亜属・ニレ属－ケヤキ属などを伴い、VIa 層で多産したウルシ属・ニシキギ属は１個体も認められない。一方、草本花粉も同様に少なく、イネ科・カヤツリグサ科・サナエタデ節－ウナギツカミ節・ヨモギ属などが検出されるのみである。微粒炭量は、VIIIb 層は約 600 個 /cc、VIa 層は約 6,700 個 /cc、V 層は約 3,600 個 /cc である。

第6表　植物珪酸体含量　(個/g)

種類 / 試料番号	V層	VIa層	VIIIb層
		東壁	
イネ科葉部短細胞珪酸体			
タケ亜科クマザサ属	100	800	100
タケ亜科	700	500	100
ヨシ属	8,600	800	-
不明キビ型	200	-	-
不明ヒゲシバ型	300	<100	-
不明ダンチク型	-	<100	-
イネ科葉身機動細胞珪酸体			
タケ亜科クマザサ属	200	1,500	500
タケ亜科	100	100	<100
ヨシ属	2,500	500	-
不明	500	200	-
合　計			
イネ科葉部短細胞珪酸体	9,900	2,200	200
イネ科葉身機動細胞珪酸体	3,300	2,300	500
総　計	13,200	4,500	700

1）含量は、10の位で丸めている（100単位にする）
2）<100：100個体未満
3）合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている



第16図　植物珪酸体含量の層位的変化
堆積物１ｇあたりに換算した個数を示す。●○は100個/g 未満を示す。

4）植物珪酸体分析

結果を第６表、第 16 図に示す。各試料から植物珪酸体が検出されるが、表面に多数の小孔（溶食痕）が認

められるなど保存状態は不良である。植物珪酸体含量は、VIIIb 層は約 700 個 /g、VIa 層は約 4,500 個 /g、V 層は約 13,200 個 /g であり、上位に向かい増加し、検出される分類群の産状も層位的に変化する。VIIIb 層は、クマザサ属を含むタケ亜科などが僅かに認められるのみである。VIa 層は、クマザサ属を含むタケ亜科の産出が目立ち、ヨシ属も認められる。V 層ではヨシ属の多産し、クマザサ属を含むタケ亜科なども認められる。

第7表　種実分析結果

遺構名	層名	分類群	木本					草本
			アカメガシワ	ブドウ科	タラノキ	エゴノキ属		カナムグラ
		部位	種子	種子	核	種子		種子
		状態	完形	破片	破片		破片	破片
SC101		1mm	-	20	1	-	-	-
		3mm	1	4	-	-	-	3
	VIa層	3mm	1	2	-	-	1	-
SK16	Vb層	1mm	-	4	-	1	-	-

5) 種実分析

結果を第７表に示す。木本５分類群（アカメガシワ・ブドウ科・タラノキ・エゴノキ属）35 個、草本１分類群（カナムグラ）３個の種実が検出された。

第8表　樹種同定結果

遺構名	層名	篩い目	点数	状態	樹種
SC101		3mm	10	炭化材	サクラ属(10)
		5mm	10	炭化材	サクラ属(10)
	VIa層	5mm	1	炭化材	クスノキ科(1)

6) 樹種同定

結果を第８表に示す。炭化材は落葉広葉樹２種類（クスノキ科・サクラ属）に同定された。

E　考　　察

1) 古環境変遷

放射性炭素年代測定の結果、流路２覆土８層（トチノキ 種皮）は calBC 2,565 ～ calBC 2,468、Vc 層（不明植物遺体）は calBC 905 ～ calBC 839 を示した。これらの分析結果を参考とすると、VI 層は約 4,500 ～ 3,000 年前頃の堆積層と考えられる。

放射性炭素年代測定結果から約 4,500 年前以前の堆積物と考えられる VIII 層は、調査所見によれば灰色のシルト～砂質シルトとされており、２地点の土層観察では、シルト～極細粒へと上方粗粒化する状況が観察された。VIIIb 層では、珪藻・花粉・植物珪酸体の検出状況が悪かった。このことから、堆積環境や古植生の検証は困難である。なお、珪藻殻と類似した化学組成を持つ植物珪酸体は、土壌の風化によって溶解する可能性が指摘されている［近藤 1988］。同試料において検出された植物珪酸体は保存状態が悪く、溶食痕が認められる状況であったことから、堆積後の土壌化作用などにより珪藻が溶解したことが考えられる。また、遺跡が荒川左岸の沖積低地に立地し、河川の氾濫などによって堆積したことが予想されることから、堆積速度が速く堆積物中に含まれる珪藻が希釈された可能性もある。花粉についても、土層中に取り込まれにくかった、あるいは堆積後の経年変化により消失したことが想定される。

約 4,500 ～ 3,000 年前に形成されたと考えられる VI 層は縄文時代の包含層であり、灰色のシルト～粘土からなる。１地点の土層観察では、VId ～ a 層は塊状をなす灰色粘土であり、上部はやや土壌化する状況が認められた。VI 層最上部に相当する VIa 層では、木本類ではハンノキ属・ウルシ属・ニシキギ属・マツ属などの花粉が多く検出され、このほかに、コナラ属コナラ亜属・クリ属・カエデ属・トチノキ属などが認められた。また、同層上面から検出された遺構からは、針葉樹のヒノキ科の木片や落葉広葉樹のサク

ラ属とクスノキ科の炭化材・アカメガシワやエゴノキ属・タラノキ・ニワトコ・ブドウ科などの種実が検出された。このうち、ハンノキ属・トチノキ属は、河畔や低湿地に林分を形成する種類を含む分類群である。アカメガシワ属・ウルシ属・ニシキギ属は、伐採跡地や崩壊地、林縁などの明るいところに生育する分類群であり、炭化材に認められたサクラ属・クスノキ科も林内や林縁に生育する分類群である。また、検出されたマツ属のうち亜属まで同定されたものは、いずれも複維管束亜属であった。マツ属複維管束亜属（いわゆるニヨウマツ類）は生育の適応範囲が広く、尾根筋や湿地周辺、海岸沿いなどほかの広葉樹の生育に不適な立地にも生育が可能な種類であり、伐採された土地などに最初に進入する二次林の代表的な種類でもある。以上のことから、VIa 層形成時や遺構機能時の遺跡周辺には、ハンノキ属などからなる河畔・湿地林が存在し、周辺の森林林縁部などにはサクラ属・アカメガシワ属・ウルシ属・ニシキギ属などが生育していたと推測される。また、低地部にはコナラ属アカガシ亜属・シイノキ属・クスノキ科などの常緑広葉樹、海岸砂丘上や低地部・林縁部などには海岸植生・二次林としてのマツ属の生育が窺われる。なお、花粉を広域に散布しないウルシ属やニシキギ属が顕著に認められたことから、これらは局地的な要素を反映していると考えられ、遺跡の極近傍に生育していた樹木に由来する可能性もある。

草本類では、クマザサ属を含むタケ亜科などのイネ科の植物珪酸体や、カナムグラ・ヨモギ属などの花粉・種実が検出された。いずれも開けた場所に生育する分類群であることから、遺跡周辺の草地や林縁などの開けた場所に生育していたものに由来すると考えられる。なお、タケ亜科の植物珪酸体はほかのイネ科と比較して風化に強く、また生産量の多い点がこれまでの研究から指摘されており［近藤 1982；杉山・藤原 1986］、ほかの種類よりも残留しやすい。日本海側の多雪地域は、自然状態ではブナを中心とした森林植生となり、ブナの林床にチシマザサ（クマザサ属の一種）が発達する［宮脇 1985］。このことから、今回検出されたクマザサ属の中には、砕削物とともに運ばれてきたものも含まれている可能性がある。

約 3000 年前頃の堆積層と考えられる V 層は、1 地点における観察所見では、最下部は植物遺体が混じる黒灰～暗灰色を呈する粘土（Vd ～ Vc 層）、下～中部は植物遺体や炭化物の薄層が挟在する褐～灰白を呈するシルトの互層（Vb 層）、上部は塊状で植物遺体や炭化物が混じる暗灰色を呈する粘土（Va 層）からなり、上部はやや土壌化する状況が認められた。Vc 層の花粉群集は、木本類ではハンノキ属の優占が認められた。次いでマツ属が産出し、このほかに、スギ属・サワグルミ属・クルミ属・コナラ亜属・ニレ属－ケヤキ属などが検出された。ハンノキ属が優占し、河畔林・湿地林の構成要素であるサワグルミ属・ニレ属－ケヤキ属などが検出されたことから、この頃になると、周辺にはハンノキ属を主体とする河畔林・湿地林が拡大した可能性がある。草本類においても、ガマ属やヨシ属など水湿地に生育する種類が検出され、特にヨシ属の植物珪酸体の産出が顕著となることから、VIa ～ V 層にかけて調査区内が湿潤な環境へ変化したことが推測される。

微粒炭量は、VIIIb 層では約 600 個 /cc であるのに対し、VIa 層は約 6,700 個 /cc と多産し、上位の V 層は約 3,600 個 /cc と変化する。微粒炭は人間活動と密接に関係しているとされ、その微粒炭量の増加から火入れなどの人為活動が推測されている［安田 1987；松井・近藤 1992 など］。VIa 層が縄文時代の遺構検出面及び遺物包含層とされていることを考慮すると、VIa 層における微粒炭の多産は、人為的活動を反映している可能性がある。

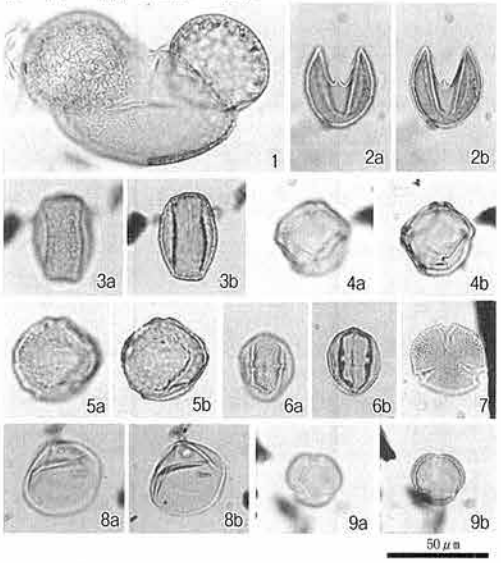
2）植物資源利用

SC101 から出土した炭化材には、落葉広葉樹のサクラ属とクスノキ科の 2 種類が認められ、サクラ属が

主体となる傾向が認められた。なお、対象とした炭化材は細片であったことから、同一の樹種に由来する個体が砕片化した状態を反映している可能性もある。

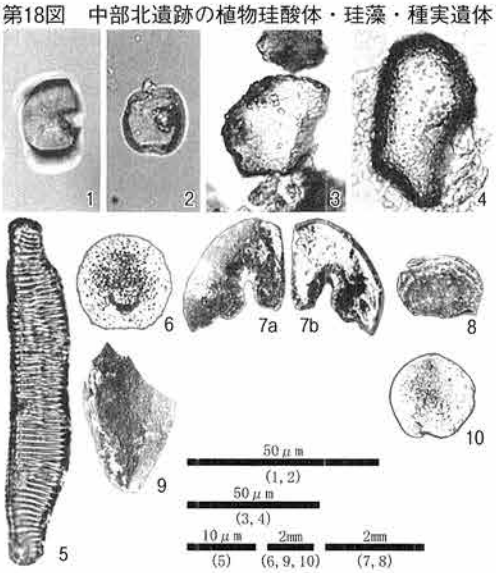
サクラ属とクスノキ科は、縄文時代後期の江添遺跡（胎内市）や晩期の青田遺跡（新発田市）の柱根や炭化材、自然木などに認められており［鈴木ほか2004；パリノ・サーヴェイ株式会社 2005c］、遺跡の立地などを考慮すると、周辺に生育していた種類を利用していたことが推測される。

第17図　中部北遺跡の花粉



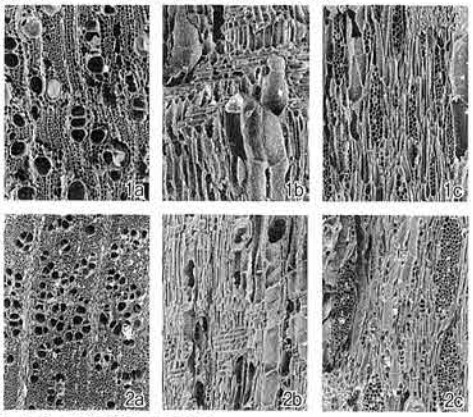
1.マツ属(束壁：V層)
2.スギ属(束壁：V層)
3.コナラ属コナラ亜属(束壁：V層)
4.ハンノキ属(束壁：V層)
5.ニレ属－ケヤキ属(束壁：V層)
6.ウルシ属(束壁：VIa層)
7.ニシキギ属(束壁：VIa層)
8.イネ科(束壁：VIa層)
9.ヨモギ属(束壁：V層)

第18図　中部北遺跡の植物珪酸体・珪藻・種実遺体



1.クマザサ属短細胞珪酸体(束壁：VIa層)
2.ヨシ属短細胞珪酸体(束壁：V層)
3.クマザサ属機動細胞珪酸体(束壁：VIIb層)
4.ヨシ属機動細胞珪酸体(束壁：V層)
5.Eunoria praerupta var.bidens Grunow(束壁：V層)
6.アカメガシワ 種子(SC101)
7.ブドウ科 種子(SC101)
8.タラノキ 核(SK16：Vb層)
9.エゴノキ属 種子(SC101：VIa層)
10.カナムグラ 種子(SC101)

第19図　中部北遺跡の木材・炭化材



1.クスノキ科(SC101：VIa層)
2.サクラ属(SC101)
　a：木口，b：柾目，c：板目

100μm:1-2a
200μm:1-2b,c

5　まとめ－縄文時代を中心として－

中部北遺跡の主体は縄文時代中期前葉～後期中葉にあり、狩猟・漁労による食糧獲得場として機能していたことが石器からわかる。ここでは、縄文時代の土器・石器について若干の考察を行い、まとめとしたい。

A　土　　器

1）概　　観（第９表）

本遺跡からは、縄文時代中期前葉～後期中葉の土器が出土した。確認できた土器型式は中期前葉の大木７b式（23）、同 後葉～末葉の大木９～10式（1～6、8～14、24～32）、後期前葉～中葉の三十稲場式新段階（7、33、36、37）、南三十稲場式新段階（34）・南三十稲場式最新段階（16）、加曽利B1式（38）などがある。中期のものとしては、大木７b式に比定される土器は１個体のみであり、大木９～10式で占められる後葉の土器群が主体をなす。中期後葉の土器群が東北系の大木９～10式のみで占められるといった様相は、神林村城田遺跡［田辺ほか2001］や朝日村下クボ遺跡［富樫1991］でもみられる。事実、阿賀北地方は、荒川や阿賀野川水系を介し、山形県・福島県など、東北地方との関係が強い地域である。本遺跡においてもその事象が追認でき、さらに突き詰めるならば、本遺跡の大木９～10式土器は前述の２遺跡やアチヤ平遺跡上段１期［富樫ほか2002］同様、山形県の影響が強いものと考えたい。

後期のものとしては、前葉の三十稲場式、南三十稲場式が主体をなす。三十稲場式土器は、「信濃川・阿賀野川水系に分布の中心を持つため、新潟県と福島県会津地方を主たる分布圏（内圏）」［田中1991］とし、南三十稲場遺跡と共に、長岡市三十稲場遺跡を標識遺跡とする土器である。つまり、本遺跡は後期段階に入ると、それまでの東北地方の土器で占められていた状況から一変して、中越地方から北上してきた土器の分布圏に組み込まれるのである。

2）大木９～10式土器について

ここでは、本遺跡で出土した大木９～10式土器の細分比定を試みる。大木９～10式土器を細分する際には、全体的な文様構成を把握することが望ましいが、本遺跡においては、そのように全体的な文様構成を把握できる個体資料は出土しなかった。しかしながら、全体的な文様構成を推測する事が可能な破片も出土しており、これらをもとに、少しでも大木９～10式間における細別時期変遷が辿れればと考える。

まず論を進めるにあたり、大木９～10式の細分について簡略に述べる。大木式土器は、1927・1928年

遺　跡	大木7b	大木8 a・b	大木9 新	大木10 古	大木10 中	大木10 新	三十稲場 古	三十稲場新 南三十稲場古	南三十稲場 新	南三十稲場 最新	加曽利B1 併行
中部北	■	—	■	■	—	—	—	■	■	■	■
下クボ	—	—	A類	B類	B類	C類	—	—	—	—	—
アチヤ平	—	—	—	—	—	1期	2期	3期	4期	5期	—
元屋敷	—	—	—	—	—	—	—	1期	2期	3期	4期
江添	—	—	—	—	—	—	1期	1期 2期	—	3期	4期
城田	—	—	—	■	—	—	■	■	■	—	—
樋渡	■	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

第９表　中部北遺跡の土器型式と周辺遺跡編年対応表

に層位的な発掘調査が行われた宮城県大木囲貝塚の出土資料をもとに、〈陸前〉地方における前・中期の土器型式として山内清男によって提唱され、その際、中期の土器型式として大木7～10式土器が設定された。その後、1936･1937年にa･b式の細別が同氏によって明確に示されている［丹羽1991］。近年では、資料の増加にともない、調査報告や論文などで、より整理された細分案が提示されている。大木9～10式が層位的に出土した宮城県大梁川遺跡［相原ほか1988］では、それぞれの型式を前半と後半の2段階に分けており、それらは良好な資料として注目されている。本遺跡が所在する阿賀北地域では、下クボ遺跡で大木9式を古・新の2段階、大木10式を古・中・新の3段階に分け、アチヤ平遺跡では大梁川遺跡の事例とも照合させながら、下クボ遺跡の大木10式中・新段階において若干の修正が加えられている。本項では、これら下クボ・アチヤ平両遺跡の細分案に準じ、先学も考慮しながら比定を試みる。

24（以下、文中の番号は報告番号を指す）は口縁部周辺のみが残存しており、現状では二重楕円形区画の上半部のみが確認できる程度である。そこに続くモチーフは、「U」字状か「C」字状の区画文が考えられようか。そうすると、上半部の二重楕円形区画は、「U」字状か「C」字状のモチーフの先端を、渦巻状に巻き込んだ部分であると考えられる。これは、大木9式新段階に比定されている下クボ遺跡A類に相当する。大木9式新段階はこのようなモチーフのほか、「J」字状文、「∩」字状文、楕円文、人面状文や、「部分的に隆帯を貼り付けて浮き彫り状にしたりする」［菅原1999］手法などを用いて、縦方向の文様を展開させる。本遺跡では8・9・14・25・26がこれに相当すると思われ、特に25・26は24に類似した文様構成を有すると考える。10は太い2本の沈線で縦長に区画された中に縄文が施文されているのが確認できる程度であるが、よく観察すると沈線の下端がすぼまっていく様子が確認でき、「∩」か「U」字状文、あるいはこの両者を交互に配置するような文様構成が推測できる。これは大木10式古段階に比定されている下クボ遺跡B1類の「胴上部から下部を貫いて文様の描かれるもの」に相当する[1)]。本遺跡では10以外、この類型に相当するものはないと思われる。このほか、大木9～10式と考えた土器には、1～6・12・13や27～30がある（粗製の大木式は含んでいない）が、いずれもさらなる細分を行えるほどの情報は持ち合わせておらず、これらは大木9～10式という大枠にとどめることとする。

以上、本遺跡には大木9式新段階と大木10式古段階に比定できるであろう土器が存在することが分かった。観察した限りでは、大木9式古段階にみられる隆帯による渦巻文や、大木10式中・新段階などにみられる隆線や無文帯の切り合いによる施文、撚糸文といったものは見受けられないようである。このことから、本遺跡における大木9～10式の土器は、9式新～10式古段階に限定されるものと考える。

3）円形刺突文を有する土器について

10C24・11C17で出土した円形刺突文を有する土器（39）は、文様モチーフを円形連続刺突文のみで描くこと、胴部の膨らみ方が小さいながらも極端であることを大きな特徴としている（器形や文様概要は第Ⅲ章3に詳述）。筆者はこのような特徴を備えた土器の類例を知らず、調査当初から注目していたところではあったが、残念ながら現段階においても、同類の資料に行き当たることができなかった。しかしながら、部位ごとの特徴的な要素を抽出し、他型式と比較することによって、おおよその系統は把握し得るのではと考えた。ここでは39の性格を少しでも明らかにすることを目的とし、比較検討を行う。

1）大木10式の成立には「体部の中位による沈線による波状の区画線文が描かれる」［菅原1999］ことや（下クボ遺跡B2類に相当）、「大木9c式（大木9式新）では開放されたままであった胴下半部の帯縄文が、これを外画していた沈線の連繋によって閉じられ、上にあげたようなモチーフを描く」［池谷1988］ことなどを指標とするものがある。

	部位	39	三十稲場古	39	三十稲場新	39	南三十稲場古	39	南三十稲場新	39	南三十稲場最新	39	加曽利B1（粗製）	39
器形	口縁	緩やかな波状	蓋受状	×	緩く大きな4単位の波状	△	円形突起 波状・平	○	(山状)突起 波状	○	扁平化した 緩やかな波状	○	3単位波状 平	△
	頸	強く括れる	橋状把手 「く」の字状 にくびれる	×	S字・8字状貼付文 (橋状把手小型化) 緩く括れる	△	緩く括れる	○	強く括れる	○	やや緩く括れる	△	直線が主	×
	胴	極端に膨らむ	球状 直線など	×	球状	△	緩やかに膨らむ	△	緩やかに膨らむ	△	緩やかに膨らむ	△	直線 やや膨らむ	×
	底	内→外→内と開く	自然に開く	×	自然に開く	×	自然に開く	×	自然に開く	×	自然に開く	×	内→外→内か 自然に開く	○
施文形態		棒状工具による不整円形連続刺突文	ヘラ状工具によるいわゆる形状刺突文	×	棒状工具による細密な爪形状刺突文・円形刺突	△	縄文地に太い沈線文 磨消縄文	×	細い集合沈線 磨消・充填縄文 円形刺突文充填	×	細密な集合沈線	×	多条沈線文 (櫛歯状) 磨消縄文	×
文様構成	口縁	波状に沿った2列の刺突文 簾状垂下文	無文帯	×	無文帯	×	口唇太い刻み目 縁帯文	×	口唇刻目 簾状垂下文 口縁に沿う沈線	○	口唇部刻目 口縁に沿う沈線	×	口唇裏に沈線	△
	頸	区画文有	区画文有	△	区画文有	△	区画文有	○	区画文有	○	区画文有	○	区画文無	×
	胴	簾状垂下文	全面刺突 縄文・無文	×	下半部無文化傾向 区画文・全面刺突	×	縦横に展開 U字状文など	△	簾状垂下文	○	簾状垂下文 (集束傾向)	○	平行沈線文 磨消縄文	×

第10表　39と各土器型式の要素対照表

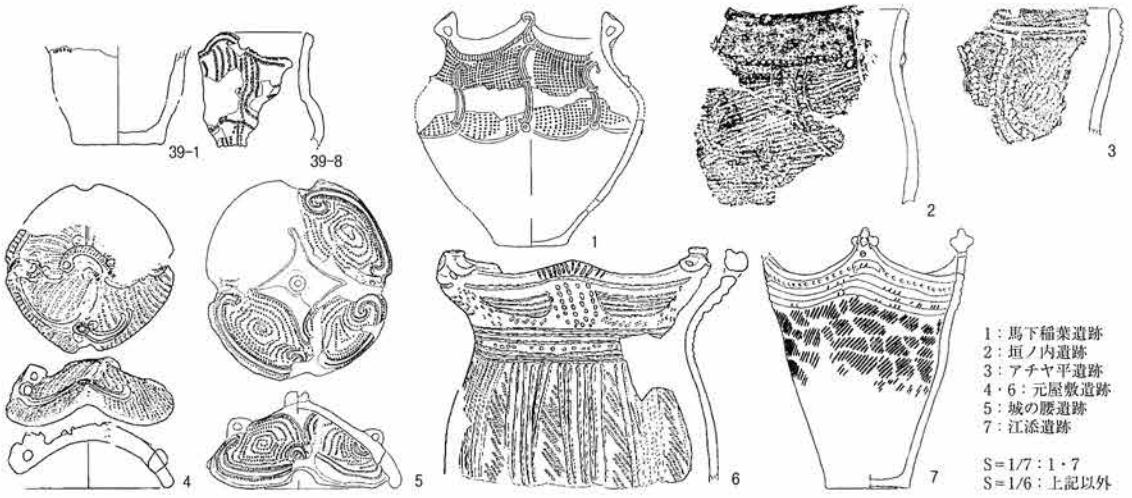
比較する土器型式については、39が胎土やつくりなどから後期前葉～中葉の土器である可能性が高いというご教示をいただいたことから[1]、当該期における本遺跡出土型式を中心に6型式を対象とした。第10表は、その6型式における特徴的な要素を部位ごとに抽出し、39と比較したもの、第20図は、類似した要素を持つと判断した県内資料を集成した中から、より近いものを具体的に掲げた図である。各型式の要素の抽出に際しては、主に『新潟県の考古学』［新潟県考古学会 1991］の記述に準拠した。まず、第10表をもとに器形・施文形態・文様構成の3項目において比較検討を行い、その後、第17図の集成を用いながら論を進める。なお、本項の執筆にあたっては、当初、東北地方、特に山形県や福島県の影響も考慮に入れ、後期前葉に東北南部に分布圏を持つ南鏡式との比較も試みたが、類似項はほとんど見出せず、この型式からの影響は極めて低いと判断して対象から除外した[2]。

はじめに、器形について検討する。39と同等とはいかないまでも、緩やかな波状を呈する口縁部は南三十稲場式の全段階にわたって類似し、さらに新段階では頸部の括れが比較的強いことも類似している。三十稲場式も波状口縁を呈するといえるが、頸部に付される橋状把手や添付文が口唇部に至って波状をなしているのであり、39の波状口縁とは意味が異なる。加曽利Ｂ１式の波状口縁は、39と比較すると少々大きすぎるか。胴部については、39の大きな特徴のひとつでもある「小さいが極端な膨らみ」を呈する器形は、残念ながら該当するものがなかった。あえてあげるならば、三十稲場式にみられる球形の胴部があげられようか。一方、底部から波打つように立ち上がる胴部下半形態から考えると、加曽利Ｂ１式の深鉢に近い器形ともいえる（第20図7）。

次に、施文形態について検討する。39は全文様を、棒状工具による細かい連続（重複）した円形刺突文で描いている。刺突文を多用するのは三十稲場式で、特に新段階は、古段階のヘラ状工具によるいわゆる爪形状刺突文に代わり、棒状工具による円形刺突文で施文する例が多くみられる。

最後に、文様構成について検討する。39は簾状垂下文をモチーフとする施文がなされるが、これは南三十稲場新段階～最新段階に多用されるものである。特に南三十稲場式新段階は、口縁部の形状に沿った

1）新発田市教育委員会　田中耕作氏よりご教示を受けた。
2）南鏡式と併行関係にある綱取Ｉ式・門前式であるが、南鏡式を含めたこれら三者は「同じ大木10b式から成立していること（中略）文様要素を共有する点」［池谷前掲］より南鏡式と同様の結果が予測されるため、比較検討を行っていない。



第20図　39と県内出土土器

沈線文、波頂部から垂下する簾状垂下文、横位の頸部区画文、胴部の簾状垂下文という文様構成が39と酷似している点が注目される。

以上、39と任意の6型式における比較を試みた。施文形態においては三十稲場式新段階が、器形と文様構成においては南三十稲場新段階が、39と類似する要素を持つ事がわかった。前者の具体例として、第20図1・2・4・5をあげる。1は鉢で、棒状工具による縦位の円形刺突列で胴部を施文した例である。縦方向を意識した施文は、39により近いといえようか。2は、隆起線上に円形刺突文を施した例である。4・5は蓋であり、4は細かい円形刺突文、5は連続（重複）した円形刺突文を施す点が類似するといえる。このように、三十稲場式新段階の蓋には、（細かい）円形刺突文が多用されている。後者の例としては、同図6をあげる。本来ならば沈線で描かれるべき波頂部からの簾状垂下文が、円形刺突文に置き換えられている点が注目される。また突起のない部分の口縁部の形状も、39により近い要素といえる。これら二型式以外で細分型式不明な土器ではあるが、同図3についても触れておきたい。3は「文様モチーフが三十稲場式とは異なる、あるいは判別が困難なもの」［富樫ほか2002］とされ、アチヤ平2・3期（三十稲場式古、三十稲場式新・南三十稲場式古段階併行）に比定されている土器である。口縁部から円形刺突列が垂下し、頸部と思われる括れ付近で横方向に施文を変えるというような文様構成を、39も呈している。こうした点から、39は三十稲場式新段階・南三十稲場式新段階いずれとも関係が強い土器といえそうである。三十稲場式新段階と南三十稲場式古段階の共伴事例があることは、近年の調査成果において明らかとなりつつある。「型式の境目の土器は、土器を構成する要素の一部欠落や置換が往々にしてみられる」［田中前掲］とあるように、三十稲場式新段階と南三十稲場式新段階の要素を併せ持つ漸移的な土器の存在を想定してもよいだろう。そういった土器のひとつとして、39が位置づけられるのではと考える。しかしこの結論は文様構成・施文形態の類似性に拠ったものであり、器形の上から見ると、このような膨らみをもつ胴部上半から加曽利B1式との類似性を窺わせる胴部下半へのつながりが解明できず、この点において、現段階では他型式との類似性は不明とせざるを得ない。今後は県内にとどまらず、より広い地域における資料にも目を向け、より妥当性のある結論が見出せればと思う。

B　石　　器

1）石器組成

本遺跡で出土した石器の時期や出土層位との関連について、結論を先に述べれば、土器と同じく縄文時代中～後期のものが出土し、また、堆積土層との関連においても、やはりⅥa'層とⅥb・c層出土の剥片が接合したケースがあり、堆積層位と無関係という点でも土器の状況と一致する。出土した石器について、形態的特徴から所属時期が追えるものを具体的に挙げると、まず、Ⅵa・b層から出土した後期中葉に比定される有茎鏃（61～64）［鈴木 1983］が挙げられる。次に、Ⅵc層から出土した平基鏃（59）は小型で剥離面を残しており、調整は若干粗雑という、中・後期の特徴とも言える属性を有する［前掲］。これ以外に、個体の特徴から細別時期を追えるものは存在しないが、上に掲げた石器の時期と、土器の時期からみて、ほかの石器や石製品もおおよそ当該期のものとみて差し支えなかろう。

2）石器組成からみた遺跡の性格

ここでは本遺跡の所属時期である縄文時代中～後期における県内遺跡の石器組成を整理することで、遺跡の位置づけを試みたい。石器の器種分類は以下の様に清水上Ⅱ遺跡［鈴木 1996］に拠った。

A　狩猟・漁労具

　　石鏃・尖頭器・石錘

B　採取・加工具

　　石錐・打製石斧・磨製石斧・箆状石器・三脚石器・板状石器

C　調理具

　　磨石類・石皿・石匙

本遺跡では、石鏃・不定形石器・石錘・敲石・打製石斧が出土しているが、上記の器種に分類した場合、A石鏃・石錘、B打製石斧、C敲石が該当する。なお、不定形石器については比較検討するだけの資料数が少ないため、除外した。

遺跡名	パターン	用途別（点数）			用途別（%）			市町村名	主要時期
		狩猟・漁労具	採取・加工具	調理具	狩猟・漁労具	採取・加工具	調理具		
中部北遺跡	1	22	1	5	78	4	18	神林村	中期前葉～後期中葉
上ン原遺跡	1	83	18	30	63	14	23	新潟市（旧巻町）	後期前葉～中葉
芹沢遺跡	1	116	16	81	54	8	38	三条市（旧下田村）	後期前葉
小丸山遺跡	1	108	6	8	89	5	6	柏崎市	後期中葉
刈羽大平遺跡	1	114	30	40	62	16	22	柏崎市	後期後葉
下ゾリ遺跡（B地点）	2	2	9	20	6	29	65	朝日村	後期中葉
下クボ遺跡	2	12	17	170	6	9	85	朝日村	中期末葉
アチヤ平遺跡上段	2	847	2486	4868	10	30	60	朝日村	中期末葉～後期前半
沖ノ原遺跡	2	27	212	222	6	46	48	津南町	中期中葉～後葉
万蓮寺林遺跡	2	41	275	722	4	26	70	南魚沼市（旧塩沢町）	中期中葉～後期前葉
羽黒遺跡	2	14	22	74	13	20	67	見附市	中期中葉～後期中葉
宮下原遺跡	2	16	122	793	2	13	85	南魚沼市（旧六日町）	中期後葉
水上遺跡（第3ブロック）	2	23	37	191	9	15	76	南魚沼市（旧大和町）	中期後葉～後期初頭
大貝遺跡	2	4	42	104	3	28	69	妙高市（旧新井市）	中期後葉
柳古新田下原A遺跡	2	21	99	382	4	20	76	南魚沼市（旧大和町）	後期前葉
江添遺跡	3	15	5	50	21	7	72	胎内市（旧中条町）	後期前葉～中葉
大沢遺跡（B地区）	3	15	7	56	19	9	72	新潟市（旧巻町）	後期前葉
豊原遺跡（Ⅰ～Ⅱc層）	3	33	7	55	35	7	58	新潟市（旧巻町）	中期後葉
城之腰遺跡	3	891	817	3016	19	17	64	小千谷市	中期末葉～後期前葉
元屋敷遺跡Ⅱ（上段）	4	6360	20248	12324	16	52	32	朝日村	後期前葉～晩期末葉
城田遺跡	4	5	21	18	11	48	41	神林村	中期後葉～後期前葉
南原遺跡	4	23	281	125	5	66	29	長岡市	中期初頭～後葉
八反田遺跡（中期）	4	21	150	39	10	71	19	津南町	中期中葉～後葉
笹山遺跡	4	108	1266	888	5	56	39	十日町市	中期前葉～後期前葉
森上遺跡	4	31	434	254	4	61	35	十日町市（旧中里村）	中期後葉
反里口遺跡	4	63	105	88	25	41	34	津南町	中期末葉
兼俣遺跡	4	16	37	31	19	44	37	妙高市（旧妙高高原町）	中期後葉～後期前葉
八反田遺跡（後期）	4	44	91	46	24	50	26	津南町	後期前葉

第11表　縄文時代中～後期の県内遺跡石器組成表

次に、この器種分類をもとにした出土比率からみた石器組成を遺跡毎に見てみたい（第10表）。遺跡毎にそれぞれ特徴があるが、おおよそ、以下の4パターンに分かれる。

1　狩猟・漁労具＞調理具＞採取・加工具

本遺跡や上ン原遺跡［前山1994］、芹沢遺跡［中村・中島1975］、小丸山遺跡・刈羽大平遺跡［伊藤1985］がこれに該当する。内陸部の芹沢遺跡を除けば全てが海岸に近い遺跡である。

2　調理具＞採取・加工具＞狩猟・漁労具

下ゾリ遺跡（B地点）［富樫1990］、下クボ遺跡［富樫1991］、アチヤ平遺跡上段［阿部・高橋2002］、柳古新田下原A遺跡［池田1987］、沖ノ原遺跡［小沢・長谷川1977］、万條寺林遺跡［池田1988］、羽黒遺跡［齋藤1982］、宮下原遺跡［池田1981］、水上遺跡（第3ブロック）［池田・細矢1990］、大貝遺跡［岡本1997］などが該当する。いずれも山間部に立地する遺跡である。

3　調理具＞狩猟・漁労具＞採取・加工具

江添遺跡［小林2005］、大沢遺跡（B地区）［前山1990］、豊原遺跡（Ⅰ～Ⅱc層）［前山1988］、城之腰遺跡［田中1991］などが該当する。

4　採取・加工具＞調理具＞狩猟・漁労具

元屋敷遺跡Ⅱ（上段）［高橋2002］、城田遺跡［田辺・大賀・長谷川2001］、八反田遺跡（中・後期）［齊藤1984］、南原遺跡［駒形1994］、笹山遺跡［菅沼1998］、森上遺跡［齋藤・高橋1974］、反里田遺跡［齋藤1977］、兼俣遺跡［本間1976］などが該当する。

本遺跡は1のパターンに該当し、海岸に近い場所に位置する遺跡とほぼ同じ、狩猟・漁労具が卓越する傾向をもつ事がわかる。この傾向は中期における佐渡・越後平野および縁辺丘陵部とほぼ同じ［鈴木1999］であり、後期においても同じ傾向が維持されているといえる。一方、山間部の遺跡でも、狩猟・漁労具の占める割合が少ないという中期の傾向を継承・発展し、「調理具＞採取・加工具＞狩猟・漁労具」という石器組成の傾向にさほどの変化を来していない［鈴木1999］。このように、山間部では（植物の）採取、海岸に近い場所では（動物・鳥類・魚類の）狩猟・漁労が主たる食糧獲得手段であり、それは中～後期にわたって維持されている事が石器の組成からわかる。また、本間信昭は、「平野部の遺跡が山地や丘陵に比べ極端に少な」く、「遺跡の規模も小さく、本格的な集落跡はほとんどない」とし、「石鏃が数点とか、土器片が数十点発見されただけの遺跡」であり、「狩猟を主とするキャンプ地のような場所と考えられる」と指摘しており［本間1995］、これは本遺跡の調査成果とも一致する。また、接合資料から、原石の大きさがおおよそ10～15cmほどと推定する。これは携行し得るサイズであり、原石を搬入して石器製作を行っており、定住ではないことが推測される。

以上の事柄を総合的にみると、少なくとも中～後期の段階では、集落の主体は山地や丘陵部（＝山間部）にあり、平野（や低地）はもっぱら食糧獲得の場であった可能性がある。本遺跡で出土した石器はこうした縄文人の生活や行動の一端を具象化する、大変貴重な資料と考える。

中期まで山間部・丘陵部に生活の基盤を置いていた縄文人が、後期の縄文海退以降に平野部や沖積地へと進出した背景には、河川・潟湖・湿地に豊富な食料を見いだした状況が想起される。その対象は、鳥類や小動物、中・大型の渡り鳥の群や魚類であり、鈴木俊成は「調理具もある程度の出土を見ることから、植物食の基盤は維持していた」［鈴木1996］として、これらが石器組成に表出したと考えられる。このように、本遺跡は、本拠地とする集落と密接な関わりをもちつつ、狩猟・漁労をメインとした遺跡であったと推測される。

第Ⅳ章　桜林遺跡

1　調査の概要

A　グリッドの設定

グリッドの設定については、平成17年度の調査で設定されたものを踏襲した。すなわち、日沿道道路法線センター杭STA388（X = 237193.216m・Y = 80644.082m）とSTA389（X = 237283.440m・Y = 80687.194mを結んだラインを南北方向の基線（真北から25°32′26″東偏）として、10m四方を一単位とする大グリッドを設定し、その中を更に2m方眼で25分割させて小グリッドを設定した。ちなみに12Dグリッド起点の座標値はX=236902.524m・Y=80943.785m（以上、座標値はすべて世界測地系）となる。

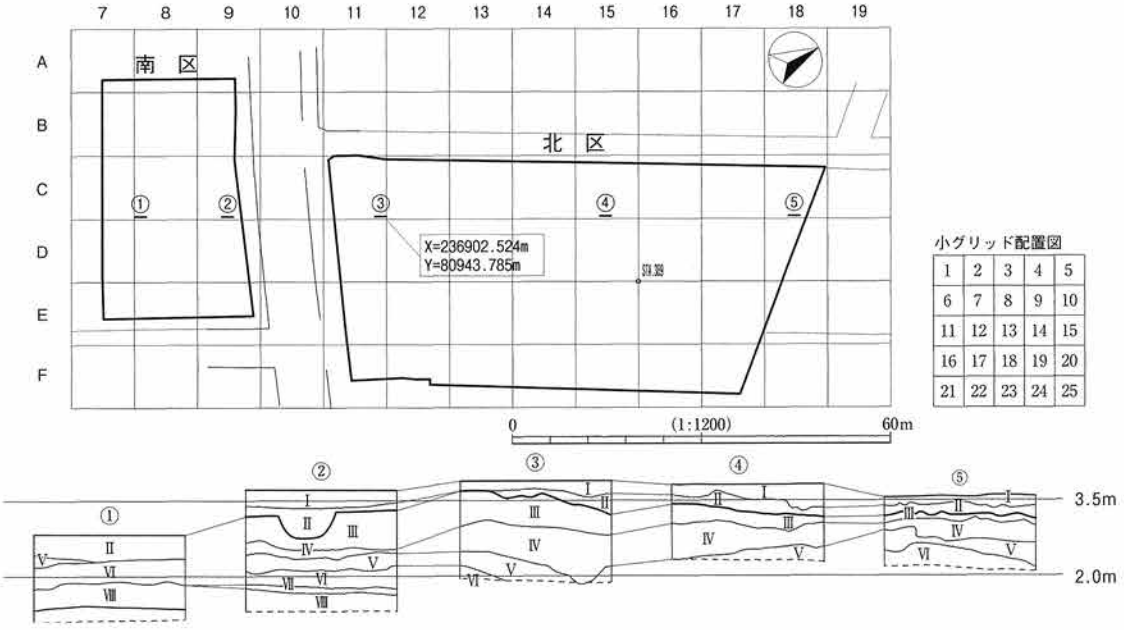
グリッドの名称については、南北ラインには算用数字、東西ラインにはアルファベットを用い、両者の組み合わせで「7D」というように表した。また、小グリッドの名称ついては1～25の番号を用いた（第14図）。なお、グリッドの名称についても平成17年度調査と一致させている。

B　基本層序

遺跡内の土層堆積状況はほぼ水平で、土質は基本的に砂質シルトである。北区はやや砂質が強く、そのためか北区の堆積土はいずれも水はけがよく乾燥し、土色も酸化して黄色がかる。一方、南区ではやや粘土質が強く、水はけも悪い。土色についても北区ほど黄色味は強くない。Ⅳ層はⅢ層に近似する土層でやや砂質に富む。両層の境界は不明瞭であり、14グリッド付近では分層できなかった。以下、基本層序を記す。

Ⅰ層：現代の耕作土。

Ⅱ層：褐灰色砂質シルト（10YR5/1）　しまりやや強、粘性弱。灰色砂、直径1cm以下のⅢ層ブロックを含む。鉄分に富む。近世以降の耕作土。



第21図　グリッドの設定と基本土層堆積図

Ⅲ層：浅黄色弱砂質シルト（2.5Y7/3）　しまり、粘性共やや強。直径1～2mm大のマンガン粒子や酸化鉄斑が多くみられる。古代～近世の遺構確認面

Ⅳ層：黄褐色砂質シルト（2.5Y6/4）　しまり、粘性共やや弱。Ⅲ層に近似し、砂を少量含む。Ⅲ層に比べ、マンガン粒子・酸化鉄斑は減少する。

Ⅴ層：黄褐色弱シルト質砂（2.5Y6/4）　しまり、粘性共やや弱。直径1～2mm大のマンガン粒子や酸化鉄斑が少量みられる。直径5mm大の浅黄色砂質シルトブロックを少量含む。

Ⅵ層：黄褐色粘土質シルト（2.5Y6/4）　しまりやや弱。粘性やや強。直径1mm大のマンガン粒子や酸化鉄斑が少量みられる。直径5mm大の浅黄色砂質シルトブロックを少量含む。所により砂が混入する。

Ⅶ層：黄褐色シルト質粘土（2.5Y6/4）　しまり、粘性共やや強。直径1～2mm大のマンガン粒子や酸化鉄斑がわずかにみられる。砂を少量含む。Ⅵ層に近似するが、本層は粘土質が強い。

Ⅷ層：灰黄色シルト質砂（2.5Y7/3）　しまり、粘性共やや弱。直径1～2mm大のマンガン粒子や酸化鉄斑がわずかにみられる。直径5mm大の浅黄色砂質シルトブロックを少量含む。

2　遺　　構

A　概　　要

検出し、調査した遺構は掘立柱建物6棟、井戸20基、土坑10基、溝10条、ピット142基、性格不明遺構2基、近世墓1基である。本遺跡では、遺構確認面直上まで近～現代の耕作土が堆積しており、掘り込みの浅い遺構が失われている可能性がある。南区でそれは顕著であり、また、北区に於いても12グリッドでは旧町道が走っていた影響で東西方向に帯状の攪乱が深くまで及んでいる。

B　記述の方法

検出した遺構は、現地調査で付した遺構番号をそのまま踏襲した。そのため、整理作業段階で検討を加えた結果、遺構と認められず除外したものがあるため、この遺構番号は欠番にした。遺構種別の表記についてはアルファベットの略号、すなわち、掘立柱建物：SB、井戸：SE、土坑：SK、溝：SD、ピット：P、性格不明遺構：SX、炭化物集中：SCというように、一般的に用いられている遺構略号を用いて表記した。また、本文及び遺構一覧表の記載に際しては、和泉A遺跡［荒川ほか1999］の分類に準拠して平面・断面形態の表記を行った（以下、参照）。

平面形態

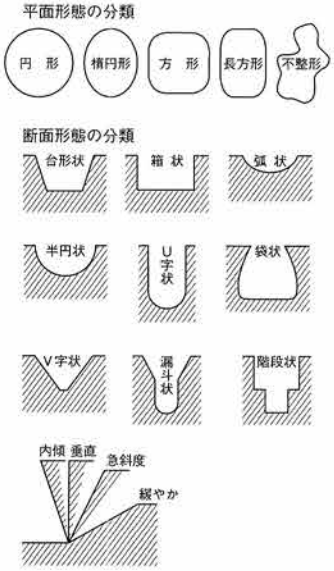
円　形：長径が短径の1.2倍未満のもの

楕円形：長径が短径の1.2倍以上のもの

方　形：長軸が短軸の1.2倍未満のもの

長方形：長軸が短軸の1.2倍以上のもの

不整形：凸凹で一定の平面形を持たないもの



第22図　遺構分類図
［荒川ほか1999を一部改訂］

断面形態

台形状：底部に平坦面を持ち、穏やか～急角度に立ち上がるもの

箱　状：底部に平坦面を持ち、ほぼ垂直に立ち上がるもの

弧　状：底部に平坦面を持たない、皿状で穏やかに立ち上がるもの

半円状：底部に平坦面を持たない、椀状で急角度に立ち上がるもの

U字状：確認面の長径よりも深さの値が大きく、ほぼ垂直に立ち上がるもの

V字状：点的な底部を持ち、急角度に立ち上がるもの

漏斗状：下部がU字状、上部がV字状の二段構造からなるもの

階段状：階段状の立ち上がりを持つもの

C　各　　説

1）掘立柱建物

合計6棟を検出した。すべて南北方向に桁行を取るが、建物の方向はまちまちである。建物構造としては、3.5 m～6 m以上の桁行に対して基本的に間柱が存在せず、ピットの間隔が非常に広いという特徴を共有する。ＳＢ１～ＳＢ３は周辺にあまり遺構がなく、立て替えの痕跡が窺えないのに対し、ＳＢ４～ＳＢ６はほぼ同じ場所に重複し、建て替えの可能性がある。また、後者は周辺に井戸が多数設けられており、ほかの建物とは異なった性格のものと推測する。このほかにも11Ｅ・Ｆ区でピットを多数検出しており、建物が存在する可能性は非常に高いが、規模や覆土が近似するピットがあまりに多い事と、ピット群が調査区外に延伸する事などから、抽出には至らなかった。

ＳＢ１（図版15・16・42・43）

17E・Ｆ区に位置する桁行１間×梁間１間の側柱建物である。方位はＮ－39°－Ｅ、床面積は12.2㎡を測る。柱間寸法は桁行が西4.8m・東5.4m、梁間が北2.4m・南2.45mである。桁行は西側が60㎝ほど短く、平面形は台形を呈する。柱は残存せず、遺物も出土していない。

ＳＢ２（図版14・16・42・43）

11D・Ｅ区に位置する桁行１間×梁間１間の側柱建物である。方位はＮ－14°－Ｅ、床面積は11.2㎡を測る。柱間寸法は桁行が西5.04m・東4.9m、梁間が北2.22m・南2.28mである。桁行は東側がわずか（14㎝）に短く、平面形は台形を呈する。柱は残存せず、遺物も出土していない。

ＳＢ３（図版15・17・42・43）

16・17D区に位置する桁行２間×梁間１間の側柱建物である。方位はＮ－29°－Ｅ、床面積は18.6㎡を測る。柱間寸法は桁行が西2.44/3.68m・東6.12 m、梁間が北2.96m・南3.12mと、桁行・梁間共ばらつきがある。また、桁・梁は直交せず、平面形は平行四辺形を呈する。北側の桁行には間柱が１本設けられており、ほかの建物にはみられない特徴となっている。柱は残存せず、遺物は出土していない。

ＳＢ４（図版15・17・42・44）

14C・Ｄ区に位置する桁行１間×梁間１間の側柱建物である。方位はＮ－38°－Ｅ、床面積は10.1㎡を測る。柱間寸法は桁行が西3.76m・東3.70m、梁間が北2.70m・南2.71mを測り、平面形は長方形を呈する。柱は残存していないが、P123・P181では柱痕を確認した。遺物は出土していない。

ＳＢ５（図版15・18・42・44）

14C･D区に位置する桁行１間×梁間１間の側柱建物である。方位はＮ－49°－Ｅ､床面積は11.2㎡を測る。柱間寸法は桁行が西4.56m・東4.80m、梁間が北2.43m・南2.35mを測り、平面形は長方形を呈する。柱は残存していないが、P17・P140では柱痕を確認した。遺物は出土していない。

ＳＢ６（図版15・18・42・44）

13C・14C・Ｄ区に位置する１間×１間の側柱建物である。方位はＮ－15°－Ｅ、床面積は12.1㎡を測る。柱間寸法は桁行が西3.70m・東3.88m、梁間は南北共3.20mを測る。平面形は正方形に近い。柱は残存していないが、P125では断面に柱痕を確認した。遺物は出土していない。

2）井　　戸

20基検出したうち、14基が14グリッドラインに位置し、さらに６基はＳＢ４～ＳＢ６の西側に集中する。本遺跡の場合、基盤層がシルトや砂といった崩れやすい地盤であり、実際、調査中に小規模の崩落をおこした井戸が数基存在した。このような地質条件や、井戸から出土した遺物にほとんど時期差がない状況を考え合わせると、６基の集中は崩落をおこして頻繁に掘り直しが行われた結果なのかもしれない。井戸の構造については井戸側や裏込めの存在は確認できず、前述の事柄も含めると、素掘りであった可能性が高いものと考える。

覆土の堆積状況は、表面近くに薄層が何枚か堆積し、それ以下では層厚の厚い土層が数枚、水平堆積を示すものが大半を占める（SE26・41・66・102・162に顕著）。総じて基盤のⅢ～Ⅵ層がブロックや粒状に混入しており、下層には有機質に富んだ土色の黒ずんだ覆土が堆積する例が多い。こうした状況からみて、検出された井戸は廃絶に際し、人為的に埋め戻された可能性が高いと考える。また、下層の有機質に富む土層の堆積は、使用中に落ち葉やゴミといったものが掻き出される事なく溜まっていった様子を示すものと推察する。

覆土中には炭層を挟在する例（SE3・SE4・SE66・SE103・SE142・SE145・SE167・SE168・SE189）、10cm大のきれいな円礫を井戸底や覆土中に敷く例（SE191）、覆土中に焼礫を伴う例（SE102・SE103・SE168・SE189）などもみられる。覆土中に礫を多量に伴う例は井戸の廃絶に伴う儀礼行為のひとつとして捉える見解もあり［加藤ほか2006］注目される事例である。埋納儀礼という点ではSE149から木製臼と礎石のような大型の礫の出土があげられる。両者とも被熱の痕跡があり、火事などで焼け出されたものが廃棄された可能性は否定できないが、礫を多量に伴うSE191とSE149は井戸の造作が丁寧であり、井戸自体の性格がほかと異なる可能性も考慮する必要があろう。以下、個別に概略を述べる。

ＳＥ３（図版14・19・45）

13F区に位置し、平面形は楕円形、断面形は底部の平坦なＵ字状を呈する。規模は長径1.36m、短径1.21m、深さ1.86m（底面標高約1.6ｍ）で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は19層に分けた。覆土には数枚の炭化物層が挟在する（5・8・10・12層）。遺物は１層から白磁碗（11）、２層から珠洲焼の擂鉢（20）、16層から青磁端反碗（15）が出土した。このほかにも、須恵器杯・木製品などの小片や種子が覆土下層を中心に少量出土している。

ＳＥ４（図版14・19・45）

13D区に位置し、平面形は楕円形、断面形はＵ字状を呈するが下半部は横に張り出す。規模は長径1.31m、短径1.14m、深さ2.6m（底面標高約0.9ｍ）で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は17層に分けた。

下半部の張り出しについては湧水を得るための造作とも考えられるが、この部分は壁がシルト質砂であり、脆弱地盤により壁が崩落した可能性が高いものと考える。また、覆土中位には腐植物・炭・黒褐色土などが挟在する（7・9～11層）。遺物は3層から珠洲焼甕（29）、覆土下層から曲物材（34・35）・不明部材、底面上からザルの一部と思われる木製品（58）が出土した。このほかには漆器椀の小片が1点出土している。

ＳＥ２６（図版15・19・45）

14C区に位置し、平面形は楕円形、断面形はU字状を呈する。規模は長径は1.35m、短径は1.2m、深さ1.61m（底面標高約1.9m）で、壁は急角度に立ち上がる。覆土は15層に分けた。上位の壁際は垂直方向の堆積である。遺物は出土していない。

ＳＥ４１（図版14・19・45）

11F区に位置し、U字溝敷設のため北半は失われている。規模は長径0.94m以上、深さ1.58m（底面標高約1.9m）で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は6層に分けた。遺物は6層から須恵器甕片が1点出土したのみである。周囲の遺構の所属時期からみて古代の遺構である可能性は低く、混入遺物であろう。

ＳＥ６６（図版14・19・45）

11F区に位置し、平面形は楕円形、断面形はU字状を呈する。規模は長径1.16m、短径0.9㎝、深さ1.86m（底面標高約1.7m）で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は8層に分けた。6層以下は炭化物や黒色土を多量に含む。特に6層は米をはじめとする栽培植物の炭化種子、魚類やカエルの焼骨など動植物遺体を豊富に含む（第Ⅳ章4参照）。このほかは、4層から青磁端反碗が1点（16）出土したのみである。

ＳＥ１０２（図版15・20・46）

13・14F区に位置し、平面形は楕円形、断面形はU字またはV字状を呈する。長径1.09m、短径0.74m、深さ1.35m（底面標高約2.1m）を測り、急角度に立ち上がる。覆土は7層に分けた。5層は被熱した小礫を少量含む。出土遺物は5層から出土した珠洲焼甕（26・27）と、2層から出土した須恵器杯片の合計3点である。

ＳＥ１０３（図版15・20・46）

14E区に位置し、平面形は楕円形、断面形は台形状を呈する。規模は長径1.22m、短径1.02m、深さ1.26m（底面標高約2.2m）で、壁は急角度に立ち上がる。覆土は13層に分けた。2層は炭化物を多く含む。11層以下は破砕礫を多く含み、そのほとんどは被熱している。遺物は覆土上層から須恵器杯（1）・甕（6）・漆器椀・刀子と思われる鉄製品が出土した。

ＳＥ１２７（図版15・20・46）

14C区に位置し、平面形は円形、断面形は漏斗状を呈する。規模は長径1.87m、短径1.7m、深さ1.63m（底面標高約1.9m）で、壁は底面から中位までほぼ垂直に立ち上がり、上位は緩やかに立ち上がる。覆土は10層に分けた。1～6層は大きく乱れる。遺物は6～8層を中心に須恵器杯・甕・珠洲焼甕（28）・漆器などの破片が出土した。

ＳＥ１３０（図版15・20・46）

13・14C区に位置し、平面形は楕円形、断面形は台形状を呈する。規模は長径1.72m、短径1.44m、深さ1.24m（底面標高約2.2m）で、壁は急角度に立ち上がる。覆土は8層に分けた。遺物は出土していない。

ＳＥ１４１（図版15・20・46）

14C区に位置し、P30に切られる。平面形は楕円形、断面形は漏斗状を呈する。規模は長径1.65m、短径1.45m、深さ2.12m（底面標高約1.3m）である。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、中位で外側に屈曲

して再びほぼ垂直に立ち上がる。覆土は19層に分けた。壁沿いには酸化鉄の薄層が形成される。遺物は16層から厚板状の切材（47）が1点、3層から瀬戸製品の小片が1点と少ない。

ＳＥ１４２（図版14・21・46）

12D区に位置し、攪乱のため北半は失われている。断面形はU字状を呈する。規模は長径0.9m以上、深さ1.39m（底面標高約2.0m）で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は12層に分けた。8・10層は炭化物・木質腐植物を多く含む。遺物は8層から中世の土師質土器（10）が1点出土したのみである。

ＳＥ１４５（図版15・22・47）

14C区に位置し、SE167に切られる。平面形は楕円形、断面形はU字状を呈する。規模は長径1.85m、短径1.65m、深さ1.95m（底面標高約1.5m）である。壁は基本的にほぼ垂直に立ち上がるが、SE167と切り合う部分は壁が崩落し、緩やかな立ち上がりとなっていた。覆土は23層に分けた。19層に関しては炭、腐植物、砂、灰などが多量に混じり、薄い板材が散在する。遺物は本遺跡としては多く、曲物材（37・38）・曲物側板の可能性がある薄板状木製品（44・45）・厚板状転用材（46）・棒状木製品（43）・鉄滓などが19層から、土師器杯・須恵器杯の小片が数点、覆土上層から出土した。

ＳＥ１４９（図版14・22・47）

11D区に位置し、南半は上位がU字溝敷設によって失われる。断面形はU字状を呈する。規模は直径0.68m、深さ1.52m（底面標高約1.75m）で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は16層に分けた。13層上からは木製の搗臼（50）が、6層上からは礎石のような直径約30cmの礫が出土した。臼は部分的に、礫は片面に被熱によるコゲやススが付着する。出土した遺物のすべてにコゲやススの付着が確認できる。臼の年代は放射性炭素年代測定では、710 ± 30、暦年較正結果AD1,268-1,294という年代が算出されている（第Ⅳ章4参照）。このほかにも、12層から陽物状木製品（51）・棒状木製品が1点ずつ出土している。

ＳＥ１６１（図版15・21・47）

17C・D区に位置し、平面形は円形、断面形は北側に中端を伴う袋状を呈するが、この部分は崩落によるものであろう。長径1.66m、短径1.6m、深さ1.41m（底面標高約2.0m）を測り、ほぼ垂直に立ち上がる。覆土は11層に分けた。中位の9層が有機質に富む事と、10層以下がシルト化したⅢ～Ⅴ層である事から、北壁の一部が崩落した後、掘り直す事なく使われ続けた可能性が窺える。出土遺物は須恵器杯片5点・甕片1点と、少ないながらも古代遺物である。

ＳＥ１６２（図版15・21・47）

14D区に位置し、平面形は円形、断面形は底面の平坦なU字状を呈する。長径1.3m、短径1.25m、深さ1.5m（底面標高約2.0m）を測り、ほぼ垂直に立ち上がる。覆土は8層に分けた。出土遺物は青磁端反碗1点（14）のみである。

ＳＥ１６７（図版15・22・47・48）

14Cに位置し、SE145を切る。平面形は楕円形、断面形はU字状を呈する。規模は長径1.74m、短径1.45m、深さ1.49m（底面標高約2.0m）である。壁は基本的にほぼ垂直に立ち上がるが、SE145と切り合う部分は緩やかに立ち上がる。覆土は16層に分けた。中位には炭化物の薄層が挟在する（11層）。遺物は刀子の破片が1点、4層から出土した。

ＳＥ１６８（図版15・21・48）

14Dに位置し、P196・P197に切られる。平面形は楕円形、断面形は底部の平坦なU字状を基本とする。下半部は外側に張り出すが、25層がⅥ層を基本とする堆積土で構成される事から崩落によるものと考え

た。本来は壁が底面からほぼ垂直に立ち上がっていたであろう。規模は長径1.72m、短径1.51m、深さ2.5m（底面標高約0.9m）で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は25層に分けた。中位の21層には炭の混入が顕著である。また、10～12層・20～23層からは拳大～人頭大ほどの自然礫や焼礫が数点出土しており、その中に敲磨石が1点ある(61)。遺物はこのほかにも覆土上層から珠洲焼鉢(22)・須恵器甕が、下層から曲物・板状木製品・不明木材などが出土しており、本遺跡としては出土量が多い。

ＳＥ１６９（図版15・21・48）

14Ｄに位置し、平面形は円形、断面形は崩れたＵ字状を呈する。規模は長径1.2m、短径1.1m、深さは1.0m（底面標高約2.4m）と浅い。壁は崩落したのか、凸凹しながら立ち上がる。覆土は10層に分けた。遺物は7層から出土した珠洲焼鉢（21）と、10層から青磁碗（17）の2点と少ない。

ＳＥ１８９（図版15・22・48）

14E区に位置し、平面形は楕円形、断面形はＵ字状を呈する。規模は長径1.05m、短径0.83m、深さ1.4m（底面標高約1.8m）で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は12層に分けた。下位の８・９層には多量の炭化物や被熱礫を伴う。遺物は4層から須恵器杯数点と、９・10層から甕片（９）が1点出土した。

ＳＥ１９１（図版14・22・48）

12E区に位置し、平面形は楕円形、断面形はＵ字状を呈する。規模は長径1.37m、短径0.8m、深さ2.25m以上（底面標高約0.9m以下）で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は7層に分けた。3層中には直径10cm前後の円礫が約30cmの厚さで礫層が存在する。また、最下層（7層）は直径10㎝前後の礫と砂が30cm以上堆積するが、湧水が激しく井戸底は検出できなかった。遺物は、3層中に存在する礫層の上から曲物や桶などの綴紐に用いられる樹皮（42）・自然木などが出土した。

3）土　　坑

合計9基検出し、おおよそ井戸と同じ分布状況を呈する。平面形はすべて円形を基本とするが、断面形は弧状または半円状を呈するもの（SK13・SK128・SK129・SK180）、箱状を呈するもの（SK132・SK133・SK134・SK210）、深いＵ字状を呈するもの（SK144）がある。覆土はSK129以外、井戸と同じく基盤層のⅢ層ブロックを含む均質な土層が堆積しており、人為的に埋め戻された可能性が高い。また、比較・検討し得る遺物が出土しなかったものの、箱状断面を持つもののうち、SK132～SK134は後述する近世前期の墓（SK131）に近い形態をもち、SK132・SK133は覆土の性質や堆積状況もSK131と近似する点を特徴として挙げておく。以下、個別に概略を述べる。

ＳＫ１３（図版14・23・48）

12D区に位置し、平面形は不定形、断面形は弧状を呈する。長軸方位はＮ－23°－Ｗを指す。規模は長径0.65m、短径0.33m、深さ7㎝で、壁は緩やかに立ち上がる。覆土は灰黄褐色シルトの単層である。遺物は出土していない。

ＳＫ１２８（図版15・23・48）

13C区に位置し、平面形は円形、断面形は弧状を呈する。規模は長径は1.21m、短径は1.15m、深さ0.38mで、壁は緩やかに立ち上がる。覆土は黄褐色シルトで6層に分けた。底面には南北に1基ずつピットが設けられている。北側のものは直径40cm、底面からの深さ30cm、南側のものは直径20cm、底面からの深さ15cmを測る。5層が覆土となっていたのでSK128の内部施設と考えた。遺物は出土していない。

ＳＫ１２９（図版 15・23・49）

17F に位置し、平面形は楕円形、断面形は半円状を呈する。長軸方位はＮ－14°－Ｅを指す。規模は長径 1.48m、短径 1m、深さ 0.45m で、壁は南側は急斜度に、そのほかは緩やかに立ち上がる。覆土は砂を多く含む黄橙色シルトで３層に分け、２層はラミナ状の堆積を示す。遺物は須恵器杯の小片が数点と、砥石と思われる石製品が１点（60）、２層から出土した。

ＳＫ１３２（図版 15・23・49）

14F に位置し、平面形は楕円形、断面形は箱状を呈する。規模は長径 0.85m、短径 0.76m、深さ 0.39m で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は６層に分けた。遺物は出土していない。

ＳＫ１３３（図版 15・23・49）

15D 区に位置し、平面形は円形、断面形は箱状を呈する。規模は直径 81cm、深さ 54cm で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は 12 層に分けた。上半部ではまず東半を埋め、次に西半を埋めた様子がよく看取できる。遺物は覆土上層から須恵器杯（２）・甕（７）の小片がわずかに出土した。

ＳＫ１３４（図版 15・23・49）

14D・Ｅ区に位置し、平面形は楕円形、断面形は箱状を呈する。規模は長径 1.05m、短径 0.92m、深さ 0.43m で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は７層に分層けた。７層は木炭を多量に含む。遺物は青磁碗の小片が２点、２層から出土した。

ＳＫ１４４（図版 15・23・50）

14C・Ｄ区に位置し、北東を P139 に切られる。平面形は楕円形、断面形はＵ字状を呈する。規模は長径 0.8m、短径 0.71m、深さ 0.74m（底面標高 2.67m）で、壁は基本的にほぼ垂直に立ち上がるが、北壁の一部は崩落によるものか、えぐれたように外側に広がる。覆土は８層に分けた。１～３層は黄橙色砂質シルトを、４～８層は灰黄褐色砂質シルトを基調とし、いずれの層にもⅢ層土ブロックが混入する。遺物は出土していない。

ＳＫ１８０（図版 15・23・50）

13D 区に位置し、SE ４に切られる。平面形は円形、断面形は弧状を呈する。規模は長径 0.8m、短径 0.7m、深さは３㎝と浅い。覆土は褐灰色シルト質粘土の単層である。遺物は出土していない。

ＳＫ２１０（図版 15・23・50）

13・14E 区に位置し、平面形は楕円形、断面形は箱状を呈する。規模は長径 0.73m、短径 0.61m、深さ 0.46m で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は４層に分けた。遺物は出土していない。

4）溝

北区で５条、南区で５条検出した。遺構方位をみると、西北西あるいは東北東方向を指向するものが６条（SD1・SD2・SD31・SD178・SD205）あり、これは金屋と海老江の集落を結ぶ線とおおよそ一致する。SD212 はこれらに直交する。断面形では弧状または半円状を呈するものが６条（SD1・SD2・SD31・SD148・SD208・SD209）、箱状を呈するもの２条（SD178・SD205）、台形状を呈するものが１条（SD204）ある。溝の機能については、SD1・SD31・SD204 は壁面や覆土の様子から排水や用水、SD148・SD178・SD205 は溝底が平坦で凹凸もほとんどみられないことから区画のための溝と考えた。以下、個別に概略を述べる。

ＳＤ１・ＳＤ３１（図版 14・23・50）

12C～Ｆ区に位置し、遺構方位はＮ－69°－Ｗを指す。攪乱により断裂するが、ややうねりながらも

東西方向に直線的に延びる溝である。SD31とほぼ同位置で重複し、SD1はSD31の作り替えと考えた。SD31は12Dグリッドで完全にSD 1と重複し消滅する。SD 1の規模は最大幅1.5m、深さ23㎝を測る。SD31は深さ14cmとやや浅い。断面形は両者とも半円状を呈し、壁は緩やかに立ち上がる。溝底標高は調査区東端で3.35 m、西端で3.05 mと西に向かって下降する。覆土は両者とも灰黄褐色シルトでSD1は2層に分けた。SD 1からは須恵器杯小片が2点（4）出土したほか、覆土中位に小礫が列をなして出土している。SD31からは遺物は出土していない。

ＳＤ２（図版14・18・50）

13E・F区に位置し、遺構方位はN－65°－Wを指す。断面形は凹凸状を呈する。全長1.57m、最大幅0.38m、深さ9㎝と、溝というよりは土坑的な性格のものであろう。覆土は灰色シルトの単層である。遺物は出土していない。

ＳＤ１４８（図版14・18・51）

11D区に位置し、遺構方位はN－76°－Wを指す。断面形は弧状を呈する。規模は全長5.8 m、最大幅0.42m、深さは4㎝と浅く、壁は緩やかに立ち上がる。溝底標高は調査区東端で3.48 m、西端で3.39 mと西に向かって下降する。覆土は褐灰色シルト質粘土の単層である。遺物は出土していない。

ＳＤ１７８（図版15・18・51）

17D・F区に位置し、遺構方位はN－69°－Wを指す。断面形は箱状を呈する。規模は全長19.74m、最大幅0.61m、深さ0.34mで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。溝底標高は調査区東端で3.11 m、西端で3.33 mと、東に向かって下降する。覆土は7層と、薄層が交互に堆積する。遺物は1層から青磁碗が1点（18）出土した。

ＳＤ２０４（図版13・18・51）

８Ａ区から９Ｂ区の方向（N－50°－E）へやや弧を描きながら延びる溝である。８Ｂ10で近～現代の溝に切られる。断面形は台形状を呈し、壁面には水流で抉られたような細かな凹凸が多い。幅は0.42～1.3 mと一定しない。深さは約50cm、底面標高は北東端で3.08 m、南西端で2.85 mと南西に向かって下降する。覆土は7層に分けた。遺物は出土していない。

ＳＤ２０５（図版13・18・51）

９Ｃ～９Ｅ区に位置し、遺構方位はN－66°－Wを指す。西側は近～現代の溝に切られて消滅する。断面形は箱状を呈する。規模は全長15 m以上、幅0.34～0.54 m、深さ約0.3 mである。底面標高は東端で3.27 m、西端で3.21 mと西に向かってわずかに下降する。覆土は灰黄色粘土の単層で、SD208・SD209と同質である。遺物は溝底付近から古墳時代中期の高杯（31）、珠洲擂鉢（23）、青磁碗、白磁小碗などが出土した。

ＳＤ２０８・ＳＤ２０９（図版13・18・51）

８Ｂ区に位置する。約3.2 mの間隔で平行し、両者は一対のものであろう。全長は5 m以上である。削平により遺構の大部分は失われており、溝底の一部がかろうじて残存するのみである。遺構方位はN－35°－Wを指す。溝底の標高は3.4 m弱と、ほかの溝と比べて浅い。覆土はSD205と同質である。遺物は出土していない。

ＳＤ２１２（図版13・51）

７Ｃ～８Ｃ１区に位置する。平成17年度調査［小村ほか2006］で検出されたSD002の延長とみられるが、本遺跡では確認面上に土質の粘土化というかたちでその痕跡を残すのみで、遺構自体は削平により消滅し

ている。遺構方位はN－25°－E、全長はSD002を含め23 m以上、幅は約40～50cmである。

5）ピ　ッ　ト（図版14・15・24・52・53）

検出したピットのうち、建物の抽出に至らなかったものは142基を数える。ピットの直径は10～60cmと規模に開きがあるが、20～30cmのものが大半を占める。これらは11 E・F区に濃密な分布を示し、次いで掘立柱建物と井戸を多数検出した11・13・14 C区にやや集中する。11 E・F区には深さが20cmを超えるものも多い。平面分布も考え合わせると、東西方向に軸線をもつ建物の存在が窺えるが、抽出には至らなかった。遺物はP45に柱根が残存するほかは、P101から木質が失われ漆の塗膜だけが残った漆器が出土したのみである。各ピットの詳細については遺構一覧表を参照されたい。

6）性格不明遺構

ＳＸ２０３（図版13・16・53）

７Ｅ区に位置し、SX207に切られる。開渠掘削中にまず木材が出土し、調査区外に延伸する部分は調査範囲を拡張して調査した。遺構の平面形は主軸方向に長い楕円形を呈し、主軸方位はN－19°－E、規模は全長7.28 m、幅0.96～1.3 mである。断面形は弧状を呈し、底面標高は2.87～2.9 mとほぼ水平である。覆土はⅥ層を基本とするもので基盤層とはほとんど見分けがつかない。底面からは大型の木材（59）が出土した。樹種はケヤキである。放射性炭素年代測定では、2,250 ± 30BP、暦年較正結果BC385-231という年代が算出されており（第Ⅳ章４参照）、弥生時代前期頃の遺物であることが判明した。遺物の性格については、木製品に使う材を採取した残り（端材）と思われる[1]。

ＳＸ２０７（図版13・17・53）

７Ｅ区に位置する。SX203と直交方向に重複し、これを切る。平面形は不整形を呈し、主軸方位はN－79°－Wを指す。規模は全長2.6 m、幅0.72～1.0 mである。断面形は弧状を呈し、全体に緩く凹凸がみられる。底面標高は2.94～3.12 mである。遺構底面は被熱により硬化しており、特に西側の円形に窪んだ部分は赤化する。底面からは多量の木炭が出土した。直径20cm程度の自然木か丸太材を燃やしたもので、樹皮が原形を留めるかたちで検出している。覆土はⅥ層に炭化物や焼土粒子・灰などを含んだもので、特に３層は被熱により硬化する。こうした点から、本跡は焚火的な用途に使用された遺構と考えた。遺物は出土していない。

7）近　世　墓

ＳＫ１３１（図版14・24・53・54）

11 E区に位置する木棺墓である。攪乱により北側が破壊されている。掘り方の平面形は隅丸方形と推定する。主軸方位はN－19°－E、規模は全長1.2 m以上、幅1.23 mである。断面形は台形状を呈し、深さ60cm（底面標高2.94 m）である。覆土は13層に分けた。11～14層は裏込めと考えるが、しまりはやや弱い。４・５層は東側から底面近くまで流入しており、埋葬時の埋土とは考えがたい。改葬が行われた際の埋め戻しか、墓内の空洞化によって落ち込んだか、いずれかに起因する土壌であろう。後者の場合、蓋の存在が前提となるが、蓋の痕跡は確認できなかった。

1）首都大学東京教授　山田昌久氏からご教示を受けた。

木棺は、以下に述べる構造的特徴をもつ。すなわち、底面に直径3cm前後の横木（ヌルデ属）を2本、遺構主軸に対し直交方向に30cmの間隔で置く事と、樹皮（樹種不明）を敷く事で遺体と地面を隔て、その後、全長1.2m以上、幅約60cmの規模で方形あるいは長方形に側板（マツ属）を巡らす構造となっている。樹皮と横木は本来重複していた可能性があるが、重複部分は樹皮が腐って失われていたため、上下関係は確認できなかった。このような底面構造から、遺体を収容して運ぶ事は不可能であり、埋葬時にはじめて供せられたものである事がわかる。東側の側板は放射性炭素年代測定を行い、340 ± 40BP、暦年較正結果AD1,488-1,633という年代が算出されている（第Ⅳ章4参照）が、後述する副葬銭の年代から遺構の構築年代は17世紀後半以降である。出土遺物としては、北側の横木上から漆器椀が1点、正位の状態で出土し、副葬銭の寛永通寶5枚・永楽通寶1枚がその下から出土している。このほか、臼歯が1本、遺構底面上から出土している。

3　遺　　物

A　概　　要

出土した遺物は土器・陶磁器類がコンテナ1/2箱分、木製品がコンテナ1箱分、石製品2点、金属製品2点、銭貨6枚と少量で、その大半は小片である。遺物の約6割は遺構から、残る4割は近世～現代の耕作土（Ⅰ・Ⅱ層）から出土している。土器・陶磁器類は古代の須恵器（杯・甕）・土師器（杯）、中世の舶載陶磁器（青磁・白磁）・国産陶器（瀬戸・珠洲・備前製品）を中心に、近世～現代の国産陶磁器が少量、古墳時代中期と考えた土師器高杯の小片1点などが出土しており、古代は8世紀代、中世は舶載陶磁器に鎌倉時代のものがみられるものの、国産陶器は15～16世紀代のものである。木製品には漆器椀・曲物・曲物や桶などに使われる紐材と考えた樹皮・用途不明の板状・棒状木製品・建築部材などのほかに、近世墓に伴う木棺がある。

B　各　　説

1）土 器・陶磁器類（図版25・55）

出土点数が少ないため、出土地点別ではなく遺物種毎に古代・中世の順で掲載した。同様の理由で遺構外から出土したものも掲載した。各遺物の器種名・時期の記述については、須恵器は春日氏による編年［春日1999］、珠洲焼は吉岡氏による編年［吉岡1994］、中世土師器（かわらけ）は品田氏による論考［品田1997］、舶載陶磁器は森田氏による編年［横田・森田1978；森田1982］に準拠している。なお、出土地点・法量などについては、巻末の出土遺物観察表を参照されたい。以下、説明を記す。

1～5は須恵器杯、6～9は須恵器甕である。胎土は黒色・灰白色微粒子をわずかに含むもので、9には海綿状骨針が確認できる。1は無台杯、2は有台杯と推測する小片で、いずれも口径12cmを測る。法量や側面観から判断して8世紀代（Ⅳ期か）のものと考える。須恵器にはほかに杯蓋や横瓶と推測する破片をⅠ層や攪乱から採取したが、小片のため図化できなかった。

10～30は中世の遺物である。10は京都系の手づくね成形土師器である。皿状の側面観を有することから越後国に再度、京都系土師器が姿を現す16世紀代のものであろう。11～19は舶載陶磁器で、11は白磁、12～19は青磁である。11は碗か皿で、幅広の高台上部まで白濁色の釉がかかる。15世紀代と考える。

12は高台付の皿であろうか。非常に薄く丁寧な造作で、底部外面は露胎である。素地や釉薬の具合は中世前期の青磁と変化ないが、攪乱から出土しており、新しいものかも知れない。13は皿、14～19は碗である。16は内面底部に型押しによる草花文が施される。19は内面底部外周に沈線が巡る。20～29は珠洲製品で、20～25は鉢（片口鉢）、26～29は甕である。胎土はいずれも灰白色微粒子をわずかに含み、20・22～28には海綿状骨針が確認できる。小礫がやや目立つ砂っぽい胎土である。20～24は卸し目が入る。20・21は面取りされた口縁部がやや内傾するもので、珠洲Ⅴ期の製品であろう。口縁部の波状文は9条（あるいはそれ以上）一単位の櫛歯状具が用いられる。22は口縁部の面取り部分が内部に肥厚せず、稜をもって体部に至る形状で、珠洲Ⅴ～Ⅵ期の製品であろう。卸し目は6条一単位の櫛歯状具を用い、右から左方向へ施している。内面口縁部には8条（あるいはそれ以上）一単位の櫛歯状具で波状文が施される。25は捏鉢として使用されたもので、内面は摩耗してつるつるする。甕はいずれも胴部小片で全体形は窺えない。内面の調整はいずれも板状具によりナデが施されており、胴部下半の破片であろう。30は備前焼と推測する擂鉢である。口縁部の形態から中世末～近世初頭の製品であろう。胎土は砂礫をわずかに含むものの、比較的精製されており、硬く焼き締まって造作はシャープである。

土器類には上に述べたもののほかに古墳時代中期と考えた高杯脚部片（31）と、時期不明の円形土製品が2点（32･33）出土している。円形土製品は型による成形と推測され、表面は滑らかな割に調整痕がなく、端部の屈曲は鋭角である。非常に硬く焼き締まっており、近世以降のものである可能性も考えられる。

2）木 製 品（図版26～28・56～58）

小片も含めた出土点数は43点で、図示したものは24点である。出土地点は大半が井戸で、特にSE 4・SE145・SE168に集中する。土器・陶磁器類同様、出土点数が少ないため、器種別に掲載した。

34～41は曲物の部材である。34・35は側板、36～41は底板である。34は片面に4～10mmと不等間隔でケビキが施され、上下端には矢印状のケビキも付く。底板はいずれも厚手である。37は楕円形曲物の底板で、釘穴が3孔穿たれる。38は側面に木釘穴が2孔穿たれる。40は周縁に側板との結合釘穴が1孔穿たれるほか、平面にも1孔存在する。41の周縁には綴紐の残欠が2か所みられる（図の▼）。断面には結合用の木釘穴が4孔穿たれ、そのうちの一つには木釘が残る。42は曲物の綴紐に用いた桜と推測される樹皮で、3重巻きの状態で出土した。

43は棒状、44・45は薄板状の製品である。43は枝の付け根に斜位の切削痕があるほか、表面には刃痕がいくつも確認できる。44・45は曲物側板の可能性があり、45には両側縁に合計4孔の釘穴が穿たれる。

46は舟を舳先から縦に裂いたような形状を呈する厚板状の製品である。住吉遺跡［高橋保ほか2006］SE2022では井戸側に丸木舟の転用材が用いられているが、46はこれを1/2～1/3に小型化したような形状を呈する。外面先端は炭化する。47は厚板の転用と考えられる切材である。表面には手斧やノミの痕跡が確認できる。図の下端が切断面であるが、切断具の痕跡は摩耗により不明である。

48・49は杭で、48は割材、49は芯持丸太材が用いられる。49は火災に遭った材を転用したものか、全面が焼け焦げた材の先端を尖らせて杭としている。

50、51はSE149から出土している。50は臼で、材にはマツ属が用いられる（第Ⅳ章4参照）。「日本民俗大辞典」［吉川弘文館1999］によれば、餅搗きに使われる胴臼に対しくびれ臼と呼ばれるもので、弥生時代以降、伝統的に用いられてきたものである。中央部は段をもって狭まり、上端からは30cm弱の深さをもつ。このような形態は製粉用とされるが［前掲］、穀類の脱穀・精白・製粉など［奈良国立文化財研究

所 1993］広義に解釈した方が良いだろう。51 は陽物であろうか。粗製と表現できるような造作で、先端部のみ炭化する。臼の近くから出土している。

52 は SK131 から出土した漆器椀である。高台以外は黒漆の上から朱漆が重ね塗りされている。漆器はほかに SE 4・SE127・P101 でも出土したが、漆の塗膜が残存するのみであり、図示し得なかった。53 ～ 57 は木棺の部材である。板材はマツ属、横木材はヌルデ近似種が用いられている（第Ⅳ章 4 参照）。58 はザルの一部であろう。縦方向に間隔をおいて幅広の材を用い、横方向には細い材を交互にくぐらせて密着させて編んでおり（ゴザ目編み）、現代ではザルに最も広く用いられる編み方とされる［柳 1985］。59 は SX203 から出土した自然木（端材）である。首都大学の山田氏に伺ったところ、板目でミカン割りした材を年輪界にそってクサビ入れしたもので、製品そのものではなく、製品に使う材を取った残り（端材）の可能性が考えられるとのご教示を受けた。もっともよく残る痕跡から、クサビの有効幅は約 7 cm と推定できる。側面には木と平行にクサビ痕がみられるが、摩耗により痕跡は不明瞭である。また、表裏面には木が縦方向に断裂した痕跡がみられ、クサビが当たった痕跡も数か所みられる。年輪の観察から、やはり木取りは板目でミカン割りしたものであることがわかった。年輪はほとんど弧を描いておらず、原木は大木であったのだろう。

3）石 製 品（図版 27・58）

砥石と考えた製品 1 点（60）、敲磨石 1 点（61）が出土している。60 は花崗岩を用いた製品で、平坦面 1 面のみが使用される。この部分は全体に摩滅して滑らかな上に、幅 0.5 ～ 1.5cm の条痕が数条付いている。61 は安山岩を用いた製品で、49 同様、被熱により全体が焼け焦げた後に、礫の両側縁に敲打痕が付いている。

4）金 属 製 品

刀子と思われる破片が SE103・SE167 から、鉄滓が SE145 から出土した。いずれも腐蝕が進んでおり、図示し得なかった。

5）銭　　貨（図版 27・58）

近世墓（SK131）から寛永通寶 5 枚、永楽通寶 1 枚が出土している。漆器椀の下から 6 枚がズレて重なった状態で出土した。いわゆる六道銭（六文銭）である。永楽通寶（初鋳年 1411 年）は、室町時代に大量に輸入された明銭である。寛永通寶には寛永十三（1636）年～万治二（1659）年鋳造の「古寛永」と、寛文八（1668）年以降に鋳造された「新寛永」があるが、新寛永はさらに背面上部に「文」の字を鋳出す、いわゆる「文銭」（寛文八（1668）年～天和三（1683）年鋳造）がある。文銭は、新寛永としては最初に鋳造されたもので、その後のものは背面無文となる。古寛永と新寛永は「寛」と「寶」の字体の違いで分別が可能だという［永井 1998］。以上の点を元に本遺跡出土のものを分別すると、古寛永 2 枚、新寛永 3 枚（いずれも文銭）となる。

4 自然科学分析

A はじめに

本稿では、発掘調査成果から課題とされた、1）動・植物利用、2）木製品の年代観と木材利用、の２点を検証するため自然科学分析調査を行う。

B 試　　料

試料は、木製品９点（近世墓木棺部材（53 ～ 57）5 点・臼（50）・板状木製品（46）・SX203 加工木材（59）・P45 柱根（48））及び井戸覆土（SE4・SE66・SE142・SE149・SE162・SE189）の水洗選別（篩い目 1mm・3mm・5mm）で抽出・分類された種実遺体・炭化物・動物遺存体・昆虫遺体など計 36 試料である。本分析では、木製品すべてについて樹種同定を実施し、このうち木棺横板（55）・臼（50）・加工木材（59）３点を対象に放射性炭素年代測定を実施する。微細遺物は、各試料の観察結果による試料の産状や保存状態、分析目的を考慮し、種実遺体分析・動物遺存体分析を実施する。試料の詳細は、結果とともに表に示す。

C 分析方法

放射性炭素年代測定、樹種同定、種実分析、動物遺存体分析の分析方法などについては、当社の定法に従い実施している。各分析の詳細は、既存の調査報告書（例えば、パリノ・サーヴェイ株式会社 2004・2005a・2005b など）を参照されたい。

D 結　　果

1）放射性炭素年代測定

同位体効果による補正を行った測定結果（第 12 表）は、木棺横板（55）は 340 ± 40BP、臼（50）は 710 ± 30BP、加工木材（59）は 2,250 ± 30BP を示す。暦年較正結果（第 13 表、測定誤差 σ）は、木棺側板は

第12表　放射性炭素年代測定結果

遺構名	器種・試料名	試料の質	種類	補正年代 BP	δ13C (‰)	測定年代 BP	Code No.	測定機関番号
SK131	木棺横板(55)	木材	マツ属複維管束亜属	340± 40	-30.47±0.75	430± 40	9392-1	IAAA-61150
SE149	木製臼(50)	木材	マツ属複維管束亜属	710± 30	-26.98±0.58	740± 30	9392-2	IAAA-62092
SX203	加工木材(59)	木材	ケヤキ	2,250± 30	-27.78±0.74	2,290± 30	9392-3	IAAA-62093

1)年代値の算出には、Libbyの半減期5,568年を使用。
2)BP年代値は、1,950年を基点として何年前であるかを示す。
3)付記した誤差は、測定誤差σ(測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

第13表　暦年較正結果

遺構名	器種・試料名	補正年代 (BP)	暦年較正年代（cal）				相対比	Code No.
SK131	木棺横板(55)	339± 40	σ	cal AD 1,488 - cal AD 1,527	cal BP 462 - 423	0.338	9392-1
				cal AD 1,553 - cal AD 1,604	cal BP 397 - 346	0.441	
				cal AD 1,607 - cal AD 1,633	cal BP 343 - 317	0.221	
			2σ	cal AD 1,462 - cal AD 1,642	cal BP 488 - 308	1.000	
SE149	木製臼(50)	709± 31	σ	cal AD 1,268 - cal AD 1,294	cal BP 682 - 656	1.000	9392-2
			2σ	cal AD 1,256 - cal AD 1,309	cal BP 694 - 641	0.865	
				cal AD 1,361 - cal AD 1,386	cal BP 589 - 564	0.135	
SX203	加工木材(59)	2,247± 31	σ	cal BC 385 - cal BC 354	cal BP 2,335 - 2,304	0.354	9392-3
				cal BC 290 - cal BC 231	cal BP 2,240 - 2,181	0.646	
			2σ	cal BC 392 - cal BC 347	cal BP 2,342 - 2,297	0.317	
				cal BC 320 - cal BC 206	cal BP 2,270 - 2,156	0.683	

1)計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer) を使用
2)計算には表に示した丸める前の値を使用している。
3)1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
4)統計的に真の値が入る確率はσは68%、2σは95%である
5)相対比は、σ、2σのそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

calAD 1,488-1,633、臼は calAD 1,268-1,294、加工木材は calBC 385-231 である。なお、暦年較正については第Ⅲ章4で詳述している。

第14表　樹種同定結果

遺構名	器種・試料名	木取	樹種
SK131	木棺横板(53)	柾目	マツ属複維管束亜属
	木棺横板(54)	柾目	マツ属複維管束亜属
	木棺横板(55)	柾目	マツ属複維管束亜属
	木棺底板	不明	樹皮
	木棺横木(56・57)	芯持丸木	ヌルデ近似種
SE149	木製臼(50)	芯持丸木	マツ属複維管束亜属
SX203	加工木材(59)	板目	ケヤキ
SE145	板状木製品(46)	柾目	カツラ
P45	柱根（48）	芯持材	ケヤキ

2）樹種同定

結果を第14表に示す。木製品は、針葉樹1種類（マツ属複維管束亜属）と広葉樹3種類（ケヤキ・カツラ・ヌルデ近似種）に同定された。

3）種実分析

遺構別種実検出状況

結果を第15表に示す。井戸覆土から抽出された種実遺体試料からは、裸子植物1分類群8個、被子植物55分類群6716個、不明種実51個、計6775個の種実が検出された。なお、栽培植物では、モモ4個・イネの胚乳1015個・穎309個・アワ近似種11個・アワ－ヒエ81個・ヒエ近似種24個・オオムギ76個・コムギ3278個・アサ140個・ソバ19個・マメ類51個・エゴマ529個・メロン類30個・ヒョウタン類9個の計5576個が確認され、全検出個数の約85%を占める。以下に、遺構別種実検出状況を記す。

ＳＥ４（17層）

栽培植物は、イネの穎1個・アワ近似種2個・アワ－ヒエ6個・ヒエ近似種8個・オオムギ2個・コムギ47個・アサ17個・ソバ1個・マメ類1個・エゴマ350個・メロン類1個・ヒョウタン類2個の計438個が検出され、このうち、イネ・アワ近似種・アワ－ヒエ・ヒエ近似種・オオムギ・コムギ・マメ類の計67個は炭化が認められた。本試料は、エゴマ主体の種類構成を示す。このほかに、広葉樹5分類群（アオツヅラフジ、ウルシ属、ブドウ属、ブドウ科、ニワトコ）119個、草本9分類群（エノコログサ属・ホタルイ属・タデ属・アカザ科・ヒユ科・ナデシコ科・セリ科・ナス科・オナモミ属）66個、不明種実9個の計194個が検出され、ウルシ属（70個）・ブドウ属（46個）が多い。

ＳＥ６６（6層）

栽培植物は、イネ胚乳893個・穎20個・アワ近似種1個・アワ－ヒエ26個・ヒエ近似種5個・オオムギ62個・コムギ3129個・マメ類30個の計4166個が検出され、全て炭化している。コムギ主体でイネ胚乳が次ぐ種類構成を示す。このほかに、広葉樹3分類群（アオツヅラフジ・ブドウ属・ニワトコ）9個、草本2分類群（タデ属・アメリカセンダングサ）2個、不明種実42個の計53個が検出され、このうちアオツヅラフジ・ニワトコ2個・不明種実41個の計44個に炭化が認められた。

ＳＥ１４２（8層）

栽培植物は、モモ3個・イネ胚乳19個・穎2個・アワ－ヒエ1個・コムギ72個・アサ2個・マメ類3個・メロン類1個の計103個が検出され、イネ胚乳・穎1個・アワ－ヒエ・コムギ・マメ類・メロン類の計97個に炭化が認められた。このほかに、広葉樹6分類群（ウルシ属・ブドウ属・ノブドウ・ブドウ科・タラノキ・ニワトコ）224個、草本7分類群（イネ科・ホタルイ属・ウキヤガラ近似種・カヤツリグサ科・アカザ科・エノキグサ・イヌコウジュ属）58個の計282個が検出された。栽培植物ではコムギが主体となるが、全体ではニワトコ（211個）が主体となる種類構成を示す。

SE149（9層）

栽培植物は、イネ胚乳８個・アワ－ヒエ１個・コムギ３個・アサ１個・マメ類５個の計18個が検出され、アサ以外の分類群（17個）に炭化が認められた。このほかに、草本のウキヤガラ近似種１個が検出された。

SE162

栽培植物は、モモ１個・イネ胚乳30個・穎250個・アワ近似種６個・アワ－ヒエ25個・ヒエ近似種３個・オオムギ９個・コムギ17個・アサ56個・ソバ18個・マメ類12個・エゴマ170個・メロン類27個・ヒョウタン類７個の計631個が検出され、イネ胚乳・アワ近似種・アワ－ヒエ・ヒエ近似種・オオムギ・コムギ・ソバ16個・マメ類の計118個に炭化が認められた。このほかに、針葉樹のマツ属８個、広葉樹11分類群（マタタビ属・アオツヅラフジ・アカメガシワ・イヌザンショウ属・サンショウ属・ブドウ属・ノブドウ・ブドウ科・ミズキ・タラノキ・ニワトコ）188個、草本25分類群（ミクリ属・ヘラオモダカ・エノコログサ属・イネ科・ホタルイ属・カヤツリグサ科・ツユクサ・イボクサ・カナムグラ・サナエタデ近似種・タデ属・アカザ科・ヒユ科・ナデシコ科・キケマン属・マメ科・カタバミ属・エノキグサ・アリノトウグサ・スミレ属・ヒルガオ属・イヌコウジュ属・

第15表　種実分析結果

		種名	学名	遺構名 / 層名	SE04 最下層	SE66 6層	SE142 8層	SE149 9層	SE162	SE189 8層
栽培植物	炭化	イネ	Oryza sativa L.	胚乳	-	893	19	8	30	65
				穎	1	20	1	-	-	6
		アワ近似種	Setaria cf. itarica (L.) P.Beauv.	果実	2	1	-	-	6	2
		アワ－ヒエ	Setaria itarica (L.) P.Beauv. - Echinochloa utilis Ohwi et Yabuno	胚乳	6	26	1	1	25	22
		ヒエ近似種	Echinochloa cf. utilis Ohwi et Yabuno	果実	8	5	-	-	3	8
		オオムギ	Hordeum vaigale L.	胚乳	2	62	-	-	9	3
		コムギ	Triticum aestivum L.	胚乳	47	3129	72	3	17	10
		ソバ	Fagopyrum esculentum Moench	果実	-	-	-	-	16	-
		マメ類	Leguminosae	種子	1	30	3	5	12	-
		エゴマ	Perilla frutescens (L.) Britt. var. japonica Hara	果実	-	-	-	-	-	4
		メロン類	Cucumis melo L.	種子	-	-	1	-	-	
	未炭化	モモ	Prunus persica Batsch	核	-	-	3	-	1	-
		イネ	Oryza sativa L.	穎	-	-	1	-	250	30
		アサ	Cannabis sativa L.	種子	17	-	2	1	56	64
		ソバ	Fagopyrum esculentum Moench	果実	1	-	-	-	2	-
		エゴマ	Perilla frutescens (L.) Britt. var. japonica Hara	果実	350	-	-	-	170	5
		メロン類	Cucumis melo L.	種子	1	-	-	-	27	1
		ヒョウタン類	Lagenaria siceraria Standl.	種子	2	-	-	-	7	-
その他の木本類	炭化	アオツヅラフジ	Cocculus orbiculatus (L.) DC.	核	-	1	-	-	-	-
		ニワトコ	Sambucus racemosa L. subsp. sieboldiana (Miq.) Hara	核	-	2	-	-	-	-
	未炭化	マツ属	Pinus	種子	-	-	-	-	8	-
		マタタビ属	Actinidia	種子	-	-	-	-	1	-
		アオツヅラフジ	Cocculus orbiculatus (L.) DC.	核	1	-	-	-	4	-
		アカメガシワ	Mallotus japonicus (Thumb.) Mueller- Arg.	種子	-	-	-	-	5	1
		イヌザンショウ属	Fagara	核	-	-	-	-	1	-
		サンショウ属	Zanthoxylum	核	-	-	-	-	1	-
		ウルシ属	Rhus	核	70	-	1	-	-	-
		ブドウ属	Vitis	種子	46	2	1	-	6	-
		ノブドウ	Ampelopsis brevipedunculata (Maxim.) Trautv.	種子	-	-	2	-	1	-
		ブドウ科	Vitaceae	種子	1	-	6	-	3	-
		ミズキ	Cornus controversa Hemsley	核	-	-	-	-	1	-
		タラノキ	Aralia elata (Miq.) Seemann	核	-	-	3	-	1	-
		ニワトコ	Sambucus racemosa L. subsp. sieboldiana (Miq.) Hara	核	1	4	211	-	164	1
その他の草本類	未炭化	ミクリ属	Sparganium	果実	-	-	-	-	1	-
		ヘラオモダカ	Alisma canaliculatum A. Br. et Bouche	果実	-	-	-	-	2	-
		エノコログサ属	Setaria	果実	6	-	-	-	30	-
		イネ科	Gramineae	果実	-	-	1	-	52	-
		ホタルイ属	Scirpus	果実	2	-	2	-	18	-
		ウキヤガラ近似種	Bolboschoenus cf. fluviatilis (Torr.) T.Koyama subsp. yagara (Ohwi) T.Koyama	果実	-	-	14	1	-	-
		カヤツリグサ科	Cyperaceae	果実	-	-	2	-	19	-
		ツユクサ	Commelina communis L.	種子	-	-	-	-	59	1
		イボクサ	Aneilema keisak Hassk.	種子	-	-	-	-	1	-
		カナムグラ	Humulus japonicus Sieb. et Zucc.	種子	-	-	-	-	5	-
		サナエタデ近似種	Polygonum cf. lapathifolium L.	果実	-	-	-	-	9	-
		タデ属	Polygonum	果実	25	1	-	-	103	3
		アカザ科	Chenopodiaceae	種子	12	-	3	-	26	2
		ヒユ科	Amaranthaceae	種子	14	-	-	-	1	2
		ナデシコ科	Caryophyllaceae	種子	1	-	-	-	7	-
		キケマン属	Corydaris	種子	-	-	-	-	7	-
		マメ科	Leguminosae	果実	-	-	-	-	6	-
		カタバミ属	Oxalis	種子	-	-	-	-	9	-
		エノキグサ	Acalypha australis L.	種子	-	-	4	-	44	1
		アリノトウグサ	Haloragis micrantha (Thunb.) R. Br.	核	-	-	-	-	1	-
		スミレ属	Viola	種子	-	-	-	-	1	-
		セリ科	Umbelliferae	果実	2	-	-	-	-	-
		ヒルガオ属	Calystegia	種子	-	-	-	-	1	-
		イヌコウジュ属	Mosla	果実	-	-	32	-	50	-
		トウバナ属	Clinopodium	果実	-	-	-	-	1	1
		キランソウ属	Ajuga	果実	-	-	-	-	-	1
		ナス科	Solanaceae	種子	1	-	-	-	3	1
		キカラスウリ	Trichosanthes kirilowii Maxim. var. japonica (Miq.) Kitam.	種子	-	-	-	-	2	-
		オナモミ属	Xanthium	総苞	3	-	-	-	-	-
		アメリカセンダングサ	Bidens frondosa L.	果実	-	1	-	-	-	1
不明	炭化	不明種実A	Unknown A		-	41	-	-	-	-
	未炭化	不明種実A	Unknown A		8	1	-	-	-	-
		不明種実B	Unknown B		1	-	-	-	-	-

トウバナ属・ナス科・キカラスウリ）458個の計654個が検出された。栽培植物では炭化種実より未炭化の種実が多く（513個）、イネの穎、エゴマ主体の種類構成を示す。全体では、草本主体（458個）であり、次いで木本のニワトコ（164個）が多いといった種類構成を示す。

SE189（8層）

栽培植物は、イネ胚乳65個・穎36個・アワ近似種2個・アワ－ヒエ22個・ヒエ近似種8個・オオムギ3個・コムギ10個・アサ64個・エゴマ9個・メロン類1個、計220個が検出され、イネ胚乳・穎6個・アワ近似種・アワ－ヒエ・ヒエ近似種・オオムギ・コムギ・エゴマ4個の計120個に炭化が認められた。当試料は、イネ胚乳とアサ主体の種類構成を示す。このほかに、広葉樹2分類群（アカメガシワ・ニワトコ）2個・草本9分類群（ツユクサ・タデ属・アカザ科・ヒユ科・エノキグサ・トウバナ属・キランソウ属・ナス科・アメリカセンダングサ）13個の計15個が検出された。

第16表　検出分類群一覧

脊椎動物門　Phylum　Vertebrata
硬骨魚綱　Class　Osteichthyse
条鰭亜綱　Subclass　Actinopterygii
ニシン目　Order　Clupeiformes
ニシン科　Family　Clupeidae
イワシ類　Gen. et. sp. indet.
ニシン亜科　Subfamily　Clupeinae
マイワシ　Sardinops melanostictus
サケ目　Order　Salmoniformes
サケ科　Family　Salmonidae
サケ・マス類　Gen. et. sp. indet.
タラ目　Order　Gadiformes
タラ科　Family　Gadidae
タラ類　Gen. et. sp. indet.
スズキ系　Series　Percomorpha
スズキ類　Ord. et. fam. endet.
両生綱　Class　Amphibia
カエル目(無尾目)　Order　Anura
カエル類　Fam. et. gen. indet.

第17表　骨同定結果

遺構名	層名	種類	部位	左右	部分	数量
SE66	6層	イワシ類	椎骨		椎体	11
		マイワシ	第1腹椎		椎体	1
		サケ・マス類	椎骨		椎体	3
		スズキ類	主上顎骨		破片	1
			椎骨		椎体	6
		ニシン類・スズキ類	鰭棘		破片	4
		魚類	椎骨		椎体	1
					椎体片	3
			鰓条骨		破片	6
			鰭棘		破片	38
			不明		破片	0.2g
		カエル類	尺骨	左	破片	1
			四肢骨		破片	1
SE142	8層	タラ類	主上顎骨		破片	1

種実の記載

検出された種実は、水洗後の乾燥処理のため表面組織が壊れたものが多く認められるなど保存状態は不良である。また、栽培植物のイネ胚乳・穎28個・アワ近似種・アワ－ヒエ・ヒエ近似種・オオムギ・コムギ・ソバ16個・マメ類・エゴマ4個・メロン類1個と、SE66（6層）から確認されたアオツヅラフジ・ニワトコ2個・不明種実41個の計4629個に炭化が認められた。

4）動物遺存体分析

SE66・SE142の2試料からは、魚類5種類（イワシ類・マイワシ・サケ・マス類・タラ類・スズキ類）、両生類1種類（カエル類）が検出された（第16・17表）。

E　考　　察

1）動・植物利用

井戸6基のうちSE 4（最下層）・SE66（6層）・SE142（8層）・SE149（9層）・SE189（8層）は、覆土最下部（SE 4）あるいは覆土中位（SE66・SE142・SE149・SE189）に認められた炭層の水洗選別で抽出された微細遺物である。これらの炭層は、調査所見によれば埋戻しの際に形成されたことが指摘されている。

各井戸の種実遺体の検出状況は、SE 4では栽培植物の割合が比較的高いが、未炭化の栽培植物のエゴマが多いため炭化種実の割合は低い。SE66やSE149では大部分が栽培植物の炭化種実から構成され、SE66ではアオツヅラフジなどの食用とは考えられない種実にも炭化が認められた。SE142では未炭化の落葉低木のニワトコが多く、炭化種実や栽培植物の割合は低いが、栽培植物における炭化種実の割合は高い。SE189では栽培植物の割合が高く、炭化種実と栽培植物における炭化種実の割合は5割程度である。

なお、炭層ではない土層を対象としたSE162では未炭化のイネの穎とエゴマが多く、栽培植物における炭化種実の割合は低い。また、栽培植物以外の分類群（木本・草本）が5割を占め、分類群・個数ともに多く、遺構周辺域の植生を反映している可能性がある。以上の検出状況から、井戸から抽出された種実遺体には栽培植物が多く確認される、遺構間では栽培植物と炭化種実の割合に差異が認められる、炭層以外の土層から検出された種実遺体には、栽培植物以外の種実が多く検出されるといった特徴が挙げられる。

井戸覆土中から検出された栽培植物に由来する種実のうち、モモは、観賞用のほか、果実が食用、薬用などに広く利用される種類である。イネ（胚乳・穎）やアワ（近似種）・アワ－ヒエ・ヒエ（近似種）・オオムギ・コムギは胚乳が食用とされ、ソバやマメ類は種子が食用とされる。アサは種子が食用や油料に、繊維が衣料や縄用などに利用され、エゴマは種子が食用や油料に利用される。メロン類は果実が食用とされ、マクワ・シロウリ型とモモルディカメロン型が確認されたことから、複数の品種が利用されていたことが窺われる。また、ヒョウタン類は果実が食用や容器などに利用される。これらの栽培植物に由来する種実は、井戸6基より計5576個が確認され、全体の約85%を占める。特に、炭層から検出された種実に限定すると全体の90%となり、炭層中には多量の栽培植物に由来する種実が混入している状況が指摘される。

新潟県内の中世の遺構を対象とした調査事例は、天王前遺跡（神林村）の井戸や溝状遺構（スモモ・モモ・イネ・オオムギ・ソバ・マメ類・ナス科・メロン類・ヒョウタン類）［パリノ・サーヴェイ株式会社2002c］、草田遺跡（神林村）の井戸や土坑（イネ・アサ・メロン類）［パリノ・サーヴェイ株式会社2003］、下前原遺跡（新潟市）の井戸（ウメ・スモモ・モモ・イネ・オオムギ・アサ・マメ類・メロン類・ヒョウタン類・ベニバナ）［パリノ・サーヴェイ株式会社2004］、海道遺跡（上越市）の井戸（モモ・イネ・トウガン）［パリノ・サーヴェイ株式会社2005d；高橋2005］、鴨深甲遺跡（阿賀野市）の井戸（モモ・イネ・オオムギ・コムギ・ムギ類・アサ・マメ類・エゴマ・シソ属・メロン類・ヒョウタン類）［パリノ・サーヴェイ株式会社2006c］、砂山中道下遺跡（新発田市）の井戸や土坑（イネ・アワ－ヒエ・オオムギ・コムギ・ムギ類・アサ・マメ類・エゴマ・メロン類）［パリノ・サーヴェイ株式会社2006d］などが挙げられる。本遺跡の井戸から検出された栽培植物の種実の種類構成は、上記した遺跡の調査結果と調和的であり、当該期にはこれらの栽培植物が普遍的に利用されていたと考えられる。また、これらの栽培植物の可食部である種実が、本遺跡の井戸から多量に検出されたこと、栽培植物の約8割に炭化が認められたことから、被熱や廃棄、埋納といった人為的行為が推測される。

SE66やSE142からは魚類5種類（イワシ類・マイワシ・サケ・マス類・タラ類・スズキ類）、両生類1種類（カエル類）が確認された。このことから、これらの魚類が食糧として利用されていたことが推測される。一方、カエル類は、試料の大きさから推定すると小型のカエル類と想定され、遺存状態から焼骨と判断されるが、食糧資源としての利用は考え難い。このほかに認められた魚類は、SE66から検出された試料は遺存状況から焼骨と判断され、利用時或いは利用後に火を受けたことが推測される。

周辺地域では、江添遺跡［パリノ・サーヴェイ株式会社2005c］、青田遺跡［西本・小林2004］、道端遺跡［黒澤2005］、西川内南遺跡［パリノ・サーヴェイ株式会社2005b］、反貫目遺跡［沖田2004］、金曲遺跡［パリノ・サーヴェイ株式会社2002b］、天王前遺跡［パリノ・サーヴェイ株式会社2002c］などにおける分析調査から、縄文時代～中世における動物利用が明らかとされつつある。これらの調査成果によれば、サケ・マス類・コイ科・トゲウオ科などの検出が多いことから、内水面漁労（内陸河川漁労）を主体とする傾向が見出される。本分析結果を考慮すると、当該期にはサケ・マス類のほか、内湾などの海域に棲息するマイワシなどのイワシ類・タラ・スズキなども漁獲対象となっていたことが推測される。また、上記した遺跡の調査事例との差違は、漁労活動や漁獲対象の変化、遺跡の立地状況などを反映している可能性があり、今後の検討課

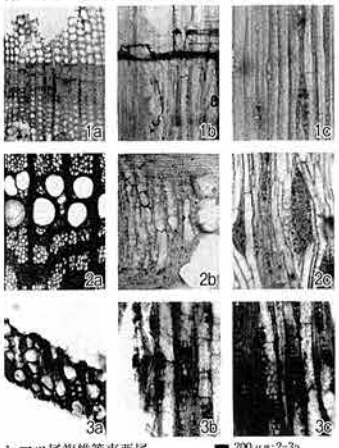
題である。

2) 木　製　品

木製品の年代観

放射性炭素年代測定を実施した近世墓（SK131 木棺横板）は 15 世紀後半～ 17 世紀（calAD1,488 ～ calAD1,633）、臼（SE149）は 13 世紀後半（calAD1,268 ～ calAD1,294）、加工木材（SX203）は約 2,400 ～ 2,200 年前（calBC385 ～ calBC231）の年代値を示した。このうち、近世墓や臼は、調査所見から想定される年代観と概ね調和する結果と言える。一方、加工木材は、本遺跡の遺構確認面（III 層）より下位の VI 層上部より出土している。近隣の中曽根遺跡や道端遺跡の発掘調査成果によれば、縄文時代後期～弥生時代後期頃の遺構・遺物が確認されるなど、本遺跡周辺で人為的活動のあったことが明らかとされており［パリノ・サーヴェイ株式会社 2006a；株式会社パレオ・ラボ 2006］、本遺跡でも当時の試料の可能性もある。現段階では、用途や由来などは不明であることから、調査所見とともに出土層位の堆積環境や形成された年代などと合せて評価することが望まれる。

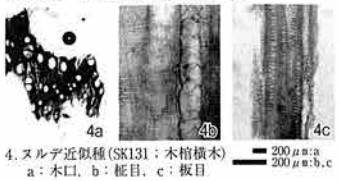
第23図　桜林遺跡の木材（1）



1. マツ属複維管束亜属（SK131：木棺側板53）
2. ケヤキ（SX203；加工木材）
3. カツラ（SE145；板状木製品）
　a：木口，b：柾目，c：板目

200μm:2-3a
200μm:1a-2-3b,c
100μm:1b,c

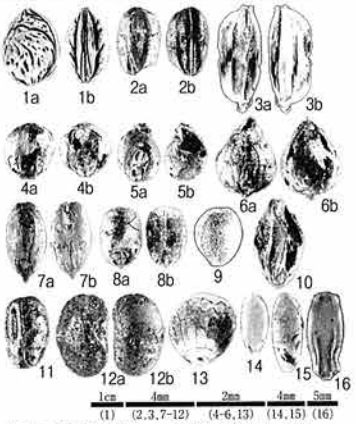
第24図　桜林遺跡の木材（2）



4. ヌルデ近似種（SK131：木棺横木）
　a：木口，b：柾目，c：板目

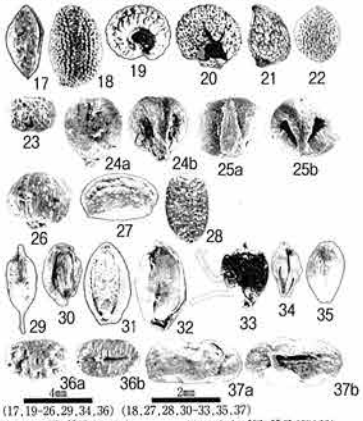
200μm:a
200μm:b,c

第25図　桜林遺跡の種実（栽培植物）



1. モモ　核（SE142：8層）
2. イネ　胚乳（SE66：6層）
3. イネ　籾（SE162）
4. アワ近似種　果実（SE162）
5. アワ・ヒエ　胚乳（SE162）
6. ヒエ近似種　果実（SE189：8層）
7. オオムギ　胚乳（SE66：6層）
8. コムギ　胚乳（SE66：6層）
9. アサ　種子（SE189：8層）
10. ソバ　果実（SE162）
11. マメ類　種子（SE162）
12. マメ類　種子（SE162）
13. エゴマ　果実（SE4：17層）
14. メロン類（マクワ・シロウリ型）種子（SE162）
15. メロン類（モモルディカメロン型）種子（SE162）
16. ヒョウタン類　種子（SE162）

第26図　桜林遺跡の種実（木本・草本）



17. マツ属　種子（SE162）
18. マタタビ属　種子（SE162）
19. アオツヅラフジ　核（SE162）
20. アカメガシワ　種子（SE162）
21. イヌザンショウ属　核（SE162）
22. サンショウ属　核（SE162）
23. ウルシ属　核（SE4：17層）
24. ブドウ属　種子（SE4：17層）
25. ノブドウ　種子（SE142：8層）
26. ミズキ　核（SE162）
27. タラノキ　核（SE142：8層）
28. ニワトコ　核（SE142：8層）
29. ミタリ属　果実（SE162）
30. ヘラオモダカ　果実（SE162）
31. エノコログサ属　果実（SE162）
32. イネ科　果実（SE162）
33. ホタルイ属　果実（SE162）
34. ウキヤガラ近似種　果実（SE142:8層）
35. カヤツリグサ科　果実（SE162）
36. ツユクサ　種子（SE162）
37. イボクサ　種子（SE162）

第27図　桜林遺跡の種実（草本）

38. カナムグラ　種子（SE162）
39. サナエタデ近似種　果実（SE162）
40. タデ属　果実（SE162）
41. タデ属　果実（SE162）
42. アカザ科　種子（SE162）
43. ヒユ科　種子（SE4：17層）
44. ナデシコ科　種子（SE162）
45. キケマン属　種子（SE162）
46. マメ科　果実（SE162）
47. カタバミ属　種子（SE162）
48. エノキグサ　種子（SE162）
49. アリノトウグサ　核（SE162）
50. スミレ属　種子（SE162）
51. セリ科　果実（SE4：17層）
52. ヒルガオ属　種子（SE162）
53. イヌコウジュ属　果実（SE162）
54. トウバナ属　果実（SE162）
55. キランソウ属　果実（SE189：8層）
56. ナス科　種子（SE162）
57. キカラスウリ　種子（SE162）
58. オナモミ属　総苞（SE4：17層）
59. アメリカセンダングサ　果実（SE189：8層）

第28図　桜林遺跡の出土骨

1. マイワシ第1腹椎（SE66：6層）
2. イワシ類椎骨（SE66：6層）
3. サケ・マス類椎骨（SE66：6層）
4. タラ類主上顎骨（SE142:8層）
5. スズキ類主上顎骨（SE66：6層）
6. スズキ類椎骨（SE66：6層）
7. ニシン・スズキ類鰭棘（SE66：6層）
8. 魚類鰓条骨（SE66：6層）
9. 魚類鱗棘（SE66：6層）
10. 魚類椎骨（SE66：6層）
11. カエル類左肩甲骨（SE66：6層）
12. カエル類四肢骨（SE66：6層）

木材利用

近世墓の木棺は、横板を長方形に組んで、底に樹皮と横木を置いた状態で検出されている。このうち、横板は全てマツ属複維管束亜属、横木はヌルデ近似種であった。試料採取時の観察では、横板は枝の痕跡などが良く似た部材であったことから、同一個体より板材を作製している可能性もある。新潟県内における木棺の調査事例では、東原町遺跡（柏崎市）で戦国～江戸時代前半の棺桶タイプの棺材にスギの利用［パリノ・サーヴェイ株式会社 2005a］、田屋道遺跡（神林村）から検出された墓ではマツ属複維管束亜属、アスナロの利用が認められている［未公表資料］が、本地域では調査事例が少ないことから、木材利用の傾向については今後の課題である。

芯持丸木を加工し、製作されている臼（SE149）は、マツ属複維管束亜属であった。マツ属複維管束亜属の木材は、比較的強度が高い部類に入るが、松脂を多く含むことから、臼としてはあまり適材とはいえない。新潟県内ではほかに臼を対象とした調査事例はなく、木材利用状況は不明である。柱根（P45）はケヤキであった。ケヤキは、強度・耐朽性に優れていることから、柱材としては適材である。本地域におけるケヤキを柱材に利用した事例では、蔵ノ坪遺跡（胎内市）の古代の柱材［パリノ・サーヴェイ株式会社 2002a］や城田遺跡（神林村）の中～近世の鳥居の柱材［パリノ・サーヴェイ株式会社 2001］に1例ずつ認められているのみである。

加工木材（SX203）は、ケヤキに同定された。木材は長さ約 4.5 mの大型の部材で、全面に楔による加工痕が認められる。木製品に使う部材を採取した残りとされている。ケヤキは上述したように重硬で強度・耐朽性が高いことから建築部材などに有用であり、製品は何らかの部材として利用されたのであろう。一方、SE145 から出土した板状木製品はカツラであった。カツラは木理が通直で均質であり、加工も容易であることから、今回の製品のような加工にも適材といえる。遺跡周辺における槽や舟形木製品の調査事例では、青田遺跡（加治川村）の弥生早・前期～平安時代の槽（ケヤキ）や西川内南遺跡の舟形木製品（スギ）などが挙げられる［鈴木ほか 2004；パリノ・サーヴェイ株式会社 2005b］が、当該期の類例やカツラの利用例が認められないことから、木材利用については不明である。

5 まとめ

A 遺跡の時期

調査では、弥生時代前期頃・古代・中世後期～近世前期の遺構群と遺物を検出した。遺構群は一定範囲に集中する傾向が窺え、その間には空閑地が存在する。SD 1・SE41・SE103・SE145・SE161・SE189・SK129・SK133は出土した土器類が古代のもので占められるが、遺物は土器片が数点と非常に少なく、SK129とSD 1以外は覆土の性質が中・近世のものとほぼ同質である。こうした点から、古代に属する可能性があるのはSK129・SD 1、それにSD 1と覆土が同質であるSD31・SK13の合計4基と考えたい。また、SX203・SK131（近世墓）はそれぞれ弥生時代前期・近世前期のものである事が放射性炭素測定で判明している。このほかの遺構は、出土した国産陶磁器類や中世土師器の年代から中世後期(14世紀末～16世紀末)と考えたい。SE149で出土した木製臼については、13世紀後半という年代が放射性炭素測定で得られたが（第Ⅳ章)、得られた年代は材の伐採年代を示す事と、遺物が耐久消費財に属する事から、遺構の年代を正確に反映するとはいえない。中世前期に確実に遡る遺物がほかにみられない事から考えても、中世後期に廃棄あるいは埋納したものと考える。

B 中世における遺跡の性格

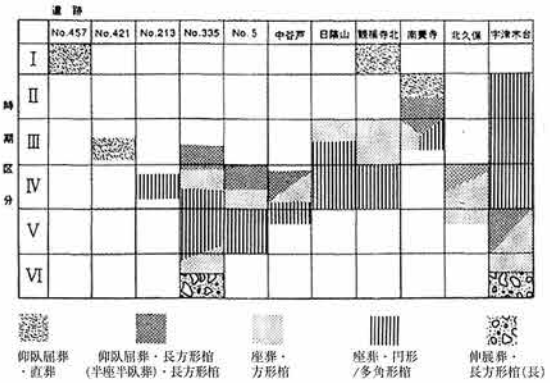
検出した建物は、ピットの間隔が3.5 m～6.1 mと非常に広い。中世の遺跡で検出された建物をみると、桁行5～7mに対して3間という柱間が多く、ピットの間隔を2m前後とする建物が普遍的と考える。この中で唯一、見附市坂井遺跡［小田2006］では本遺跡のものに類似する建物が検出されている。坂井遺跡は沖積平野の微高地に立地する遺跡で、中世（13世紀末～15世紀）の建物は15棟が検出されている。このうちのSB 1～SB 5は、桁行1～2間（3.0～6.6 m)、梁間1間（2.4～3.6 m）の建物で、本遺跡と同じく南北方向に桁行を取る。SB 5以外は本遺跡のSB 3と同じく西側に間柱を1本もつ。坂井遺跡では珠洲焼編年との対比から中世の遺構群を3期に分け、それぞれ珠洲焼Ⅳ～Ⅵ期に置いている。各期とも、同時期に存在する建物は1～2棟とわずかであり、溝に区画されたこの単位を、報告者は「一戸」と考えている。このように、遺構の時期・遺構配置・建物構造など、本遺跡と坂井遺跡では多くの類似点がある事がわかる。遺跡の性格について、坂井遺跡は畑作と水田経営を生業とする農村の一形態に位置付けており、本遺跡も同様の性格をもつものと考えたい。

C 近世墓について

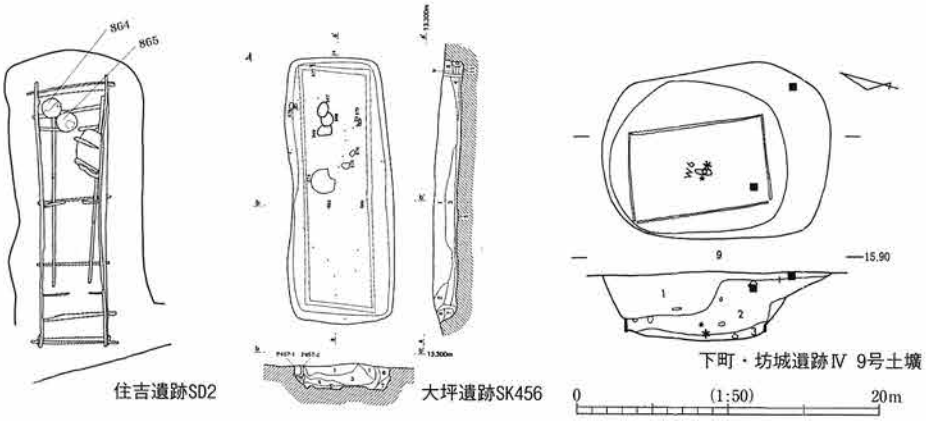
本遺跡で検出した近世墓（SK131）は、底板（本遺跡では樹皮）・横木・側板が釘により接合されない組み合わせ式の長方形木棺を用いた墓で、年代は17世紀後半以降である。

江戸市中の墓では、原則として伸展葬は認められず、遺体は広い意味での「屈葬」で、蹲葬（そんそう＝うずくまる姿勢）・座葬・仰臥屈葬・横臥屈葬に大別されるという［小泉2004]。このうち、仰臥屈葬・横臥屈葬は一定以上の棺の大きさが必要であり、江戸市中での埋葬例は多いとはいえないらしい。長佐古真也は多摩丘陵とその近接の村落地域を対象に、副葬銭の組み合わせから中世末以降の埋葬形態の変遷を追っている［長佐古1996]。これによると、本遺跡の墓は副葬銭が新寛永文銭までの銭貨で構成されるⅢ期に位置付けられる。多摩丘陵の事例では、副葬銭が渡来銭のみで構成されるⅠ期には側臥屈葬で直葬

であったものが、古寛永を伴うⅡ期になると長方形棺による仰臥屈葬という葬法が出現し、Ⅲ期にはさらに方形棺や円形／多角形棺による座葬がみられるようになるという。本遺跡のものは、墓坑や木棺側板の高さなどから仰臥あるいは側臥屈葬と考えられ、この時期の普遍的な埋葬形態と理解できる。ただし、本遺跡の墓は単独で存在するという点で多摩丘陵の事例とは大きく異なる。上に引用したように、村落部では17世紀後半の段階で直葬から木棺葬へと葬法が変化する可能性が指摘されているが、木棺墓そのものは中世にも存在しており、県内では胎内市下町坊城遺跡B地点［水澤2000］・新発田市二ツ割遺跡［宮内ほか2004］・新発田市住吉遺跡［高橋2006］・阿賀野市大坪遺跡［荒川ほか2006］・五泉市茨塚遺跡［小鍛冶1999］などで木棺墓が検出されている。下町坊城遺跡が15～16世紀の密教寺院、二ツ割遺跡が13世紀の加地家関連遺跡、住吉遺跡が13～14世紀前半の有力農民層以上の居住者が想定できる集落、大坪遺跡が11～12世紀の有力者の居館とされている。茨塚遺跡は古代（9～10世紀初頭）の遺跡とされているが、形態の類似性から中世の可能性を示唆する見解もある［荒川ほか2006］。このうち、大坪遺跡・住吉遺跡・二ツ割遺跡のものは建物との関連や居住者の性格などから「屋敷墓」と考えられている［荒川ほか2006；高橋2006］。これらは漆器椀が伴う点が共通するほか、二ツ割遺跡・住吉遺跡・茨塚遺跡では墓が単独で存在する。木棺の形態については、屋敷墓とされたものがいずれも伸展葬に合う形態を有し、中世前期あるいはさらに遡る時期のものであるのに対し、中世後期に属する下町坊城遺跡のものは屈葬が想定される形態をもつ。遺跡の性格が違うので断定し得ないが、中世のある段階で伸展葬から屈葬へ埋葬形態が変化するのかもしれない。また、下町坊城遺跡B地点第9号土壙では、木棺のほぼ中央で出土した漆器椀の下に銭が置かれ、さらに藁のようなものが敷かれていたという。こうした状況からみて、本遺跡の墓は中世墓の系譜を引くものとみて差し支えないと思う。粗末な木棺でありながらも単独で営まれるという状況は、より低い階層から、有力者たる人物が登場してきたとも想定できる。



第18表　多摩丘陵の遺跡における埋葬形態の変遷
（長佐古1996より引用）



第29図　新潟県における中世の木棺墓

要　約

中部北遺跡

1　中部北遺跡は、新潟県岩船郡神林村大字牛屋字中部1048ほかに所在する。

2　遺跡は荒川右岸の沖積地に立地する。古代の遺構確認面の標高は約2.5 m、縄文時代の遺構確認面の標高は1.7～2.2 mである。

3　発掘調査は日沿道の建設に伴い、平成18年4月3日～8月24日にかけて行った。調査面積は3,620㎡である。

4　検出した遺構は、古代の杭1本と縄文時代の土坑7基、炭化物集中1か所、ピット4基である。縄文時代の遺構はすべて自然流路北岸に形成された自然堤防上に設けられている。

5　自然流路は遺跡を南北に横断する形で検出した。縄文時代を通じて流れる河川で、新旧2つの流路が北岸を共有して重複する。

6　出土遺物は古代の土師器・須恵器各数点と、縄文時代中期前葉～後期中葉の土器及び石器である。遺物の主体は縄文時代の土器・石器であり、自然流路北岸の微高地から流路にかけて集中する。

7　縄文土器には、大木7b式・大木9～10式・三十稲場式・南三十稲場式・加曽利B1式などがある。刺突文のみで施文する、類例をみないものが1個体ある。出自は不明ながら三十稲場式・南三十稲場式との関係が窺える。

8　石器には、石鏃・不定形石器・石錘・敲磨石・打製石斧・その他の石器などがあり、石鏃や石錘といった狩猟・漁労具が主体をなしている。不定形石器は剥片の接合状況から、本遺跡で製作されたものと考える。

9　本遺跡は縄文時代の狩猟・漁労などを行う食糧採集の場であったと考える。

桜林遺跡

1　桜林遺跡は、新潟県岩船郡荒川町大字金屋字桜林1372ほかに所在する。

2　遺跡は荒川左岸の沖積地に立地する。遺構確認面の標高は約3.5 mである。

3　発掘調査は日沿道の建設に伴い、平成18年8月25日～11月16日にかけて行った。調査面積は3,263㎡である。

4　検出した遺構は、掘立柱建物6棟・井戸20基・土坑10基・溝10条・ピット142基・性格不明遺構2基、近世墓1基である。遺構の大半は中世後期（14世紀末～16世紀末）のものである。

5　出土遺物は古代の土師器・須恵器、中世の舶載陶磁器・国産陶磁器・土師質土器・木製品・銭貨・鉄製品・石製品などである。重要遺物としては、中世前期の木製搗臼、弥生時代前期頃の大型加工木材がある。臼は粗製の陽物形木製品と共に井戸から出土した。弥生時代の大型木材は製品に使う材を取った残りとされる全長約4.5 mのケヤキ材で、表面にはクサビの痕跡が確認できる。この時期の木材加工技術を知る上で貴重な遺物である。

6　近世墓は単独での検出である。長方形の木棺墓で、漆器椀・六道銭（寛永通寶5枚・永楽通寶1枚）などの副葬品を伴う。他地域の例から、農民層が木棺による埋葬を行い始めた時期にあたり、単独で墓が存在する事から、被葬者は有力者であった可能性がある。

7　本遺跡の主体となる性格は中世後期の農村である。

参考・引用文献

相原淳一ほか　1988『大梁川遺跡・小梁川遺跡』七ヶ宿ダム関連遺跡調査報告書Ⅳ　宮城県教育委員会

青山宏夫　2004「第2編第5章 荘園の境界と紛争」『中条町史』通史編　中条町史編纂委員会

阿部友晴・高橋優　2002「石器」『アチヤ平遺跡上段』朝日村文化財報告書第21集

阿部洋輔　1987「序章第1節 越佐中世の舞台」『新潟県史』通史編2 中世

荒川隆史ほか　2006『大坪遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第153集　新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団

安藤一男　1990「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『東北地理』42

池田　亨　1987『柳古新田下原A遺跡』大和町文化財調査報告第2号　大和町教育委員会

池田　亨　1988「石器」『万條寺林遺跡』塩沢町文化財調査報告書第7輯　塩沢町教育委員会

池田　亨・細矢菊治　1990『水上遺跡』大和町文化財発掘調査報告第4号　大和町教育委員会

池谷信之　1988「東北地方における縄文時代中期末葉土器の変遷と後期土器の成立」『沼津市博物館紀要』12 沼津市歴史民俗博物館

石川茂雄　1994『原色日本植物種子写真図鑑』石川茂雄図鑑刊行委員会

石川智紀ほか　2002『道端遺跡Ⅰ』新潟県埋蔵文化財調査報告書第112集　新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団

伊東隆夫　1995「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ」『木材研究・資料31』京都大学木質科学研究所

伊東隆夫　1996「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ」『木材研究・資料32』京都大学木質科学研究所

伊東隆夫　1997「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ」『木材研究・資料33』京都大学木質科学研究所

伊東隆夫　1998「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ」『木材研究・資料34』京都大学木質科学研究所

伊東隆夫　1999「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ」『木材研究・資料35』京都大学木質科学研究所

伊藤恒彦　1985「石器」『刈羽大平・小丸山』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第5　柏崎市教育委員会

伊藤良永・堀内誠示　1991「陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用」『珪藻学会誌』6

岡本郁栄　1986「序説 自然環境」『新潟県史』通史編1 原始・古代　新潟県

岡本　勇　1967「大貝遺跡の調査」『新潟県新井市における考古学的調査』立教大学博物館学研究室調査報告6　立教大学考古学研究会

岡安光彦　2005「第2章 遺跡の位置と環境」『六斗薪遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第168集　新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団

沖田絵麻　2004「動物遺存体」『反貫目遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第135集　新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団

荻野正博　1986「第6章第2節 荘園と国衙領」『新潟県史』通史編1 原始・古代　新潟県

小沢一弘・長谷川豊　1977「石器」『沖ノ原遺跡発掘調査報告書』津南町文化財調査報告書No.12　津南町教育委員会

小田由美子　2006『坂井遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第169集　新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団

折井　敦ほか　2005『昼塚遺跡Ⅰ・江添遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第147集　新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団

春日真実　1999「土器偏年と地域性」『新潟県の考古学』新潟県考古学会編　高志書院

加藤学ほか　2006『用言寺遺跡Ⅰ』新潟県埋蔵文化財調査報告書第159集　新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団

株式会社古環境研究所　2005「自然科学分析」『沢田遺跡・一杯田遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第144集新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団

株式会社パレオ・ラボ　2006「自然科学分析」『中曽根遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第168集　新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団

川上貞雄　1984『馬下稲葉遺跡発掘調査報告書』五泉市教育委員会
黒澤一男　2005「道端遺跡出土骨片の同定」『道端遺跡Ⅳ』新潟県埋蔵文化財調査報告書第145集　新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
小泉　弘　2004「近世墓研究の課題と展望」『墓と埋葬と江戸時代』江戸遺跡研究会編　吉川弘文館
小鍛冶快弘　1999『茨塚遺跡』村松町埋蔵文化財調査報告書第6集　村松町教育委員会
小林晴生　2005「石器」『昼塚遺跡Ⅰ・江添遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第147集　新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
駒形敏朗　1994『南原遺跡』長岡市教育委員会
小村正之ほか　2006『沢田遺跡Ⅱ・桜林遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第161集　新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
近藤錬三　1982「Plant opal分析による黒色腐植層の成因究明に関する研究」『昭和56年度科学研究費（一般研究Ｃ）研究成果報告書』
近藤練三　1988「植物珪酸体(Opal Phytolith)からみた土壌と年代」『ペトロジスト』32
近藤錬三　2004「植物ケイ酸体研究」『ペドロジスト』48
齋藤基生・高橋恭子　1974「石器」『森上遺跡調査概報』中里村教育委員会
齋藤基生　1982「石器」『羽黒遺跡』見附市教育委員会
齋藤基生　1984「石器」『八反田遺跡発掘調査報告書』津南町文化財調査報告書No.14　津南町教育委員会
品田高志　1997「第5章第2節 越後国における土師器の変遷と諸相」『中・近世の北陸』北陸中世土器研究会編　桂書房
島地謙・伊東隆夫　1982『図説木材組織』　地球社
島田靖久　1977「石器」『反里口遺跡発掘調査報告書』津南町文化財調査報告書No.13　津南町教育委員会
菅沼　亘　1998「石器」『笹山遺跡発掘調査報告書』十日町市埋蔵文化財発掘調査報告書第14集　十日町市教育委員会
菅原哲文　1999「山形県における縄文時代中期の土器様相－中期後半の編年を中心として－」『山形考古』第6巻第3号　山形考古学会
杉山真二・藤原宏志　1986「機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定－古環境推定の基礎資料として－」『考古学と自然科学』19
鈴木郁夫　2004「序説 中条町の自然」『中条町史』通史編　中条町史編纂委員会
鈴木三男・小川とみ・能城修一　2004「青田遺跡出土木材の樹種」『青田遺跡』関連諸科学・写真図版編　新潟県埋蔵文化財調査報告書第133集　新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
鈴木俊成　1996『清水上Ⅱ遺跡（本文編）』新潟県埋蔵文化財調査報告書第72集　新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
鈴木俊成　1999「第2章第5節第2項 早期から晩期の石器組成」『新潟県の考古学』新潟県考古学会
鈴木道之助　1981『図録石器の基礎知識Ⅲ』柏書房
鈴木道之助　1983「石鏃」『縄文文化の研究 第7巻 道具と技術』雄山閣出版
高橋　保　2005「井戸に廃棄された種実について」『海道遺跡・大塚遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第150集　新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
高橋　保ほか　2006『住吉遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第157集　新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
高橋保雄　1992「石器類」『五丁歩遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第57集　新潟県教育委員会
高橋保雄　2002「石器」『元屋敷遺跡Ⅱ（上段）』朝日村文化財報告書第22集
高橋保雄ほか　2005『北野遺跡Ⅱ（上層）』新潟県埋蔵文化財調査報告書第141集　新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
滝沢規朗ほか　2002『元屋敷遺跡Ⅱ（上段）』朝日村文化財報告書第22集　新潟県朝日村教育委員会
田中耕作ほか　1999「第2章第2節第5項 後期」『新潟県の考古学』新潟県考古学会
田中　靖　1991「石器」『城之腰遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告第29集　新潟県教育委員会
田辺早苗　1994『八幡山遺跡』神林村埋蔵文化財報告第5　神林村教育委員会

田辺早苗・近江屋成陽　1998『飯岡山崎遺跡・石川Ⅱ遺跡』神林村埋蔵文化財報告第7　神林村教育委員会・山武考古学研究所
田辺早苗・大賀健・長谷川一郎　2001『城田遺跡』神林村埋蔵文化財報告第10　神林村教育委員会・山武考古学研究所
田辺早苗・大賀健　2002『山屋遺跡群』神林村埋蔵文化財報告第15　神林村教育委員会・山武考古学研究所
田辺早苗・大賀健　2003『樋渡遺跡・堀下遺跡』神林村埋蔵文化財報告第18　神林村教育委員会・山武考古学研究所
田村　裕　1987「序章第2節 古代の中の中世」『新潟県史』通史編2 中世　新潟県
富樫秀之ほか　1991『下クボ遺跡』朝日村文化財報告書第6集　新潟県朝日村教育委員会
富樫秀之ほか　2002『アチヤ平遺跡上段』朝日村文化財報告書第21集　新潟県朝日村教育委員会
戸根与三郎　1999「第5章第1節1 中世」『新潟県の考古学』新潟県考古学会
永井久美男　1998『近世の出土銭Ⅱ－分類図版編－』兵庫埋蔵銭調査会
長佐古真也　1996「発掘事例にみる多摩丘陵の墓制」『江戸時代の墓と墓制』江戸遺跡研究会第9回大会発表要旨　江戸遺跡研究会
中村孝三郎・中島栄一　1975『芹沢・八幡平遺跡緊急調査報告書』下田村教育委員会
中山至大・井之口希秀・南谷忠志　2000『日本植物種子図鑑』東北大学出版会
奈良国立文化財研究所　1993『木器集成図録 近畿原始篇（解説）』奈良国立文化財研究所 史料第36冊
南木睦彦　1991「栽培植物」『古墳時代の研究4 生産と流通Ⅰ』雄山閣
南木睦彦・中川治美　2000「大型植物遺体」『粟津湖底遺跡 自然流路(粟津湖底遺跡Ⅲ)』琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書3-2　滋賀県教育委員会・(財) 滋賀県文化財保護協会
新潟古砂丘グループ　1974「新潟砂丘と人類遺跡－新潟砂丘の形成史Ⅰ－」『第四紀研究』第13巻第2号
西本豊弘・小林園子　2004「青田遺跡出土の動物遺体」『青田遺跡　』関連諸科学・写真図版編　新潟県埋蔵文化財調査報告書第133集　新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
丹羽　茂　1989「中期大木土器様式」『縄文土器大観1 草創期・早期・前期』小学館
林　昭三　1991『日本産木材 顕微鏡写真集』京都大学木質科学研究所
原口和夫・三友清史・小林弘　1998『埼玉の藻類 珪藻類』埼玉県植物誌・埼玉県教育委員会
パリノ・サーヴェイ株式会社　2001「城田遺跡の自然科学分析」『城田遺跡(本文編)』神林村埋蔵文化財報告第10　神林村教育委員会・山武考古学研究所
パリノ・サーヴェイ株式会社　2002a「蔵ノ坪遺跡から出土した木材の樹種」『蔵ノ坪遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第115集　新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
パリノ・サーヴェイ株式会社　2002b「金曲遺跡の自然化学分析」『金曲遺跡』神林村埋蔵文化財報告第14　神林村教育委員会・山武考古学研究所
パリノ・サーヴェイ株式会社　2002c「山屋遺跡群の自然化学分析」『山屋遺跡群　前坪遺跡・銅鉄遺跡・フケ田遺跡・天王前遺跡・水口沢遺跡』神林村埋蔵文化財報告第15　神林村教育委員会・山武考古学研究所
パリノ・サーヴェイ株式会社　2003「桃川遺跡群の自然科学分析」『桃川遺跡群　石川遺跡・草田遺跡・桃川板碑・堤下瓦窯跡』神林村埋蔵文化財報告第19　神林村教育委員会・山武考古学研究所
パリノ・サーヴェイ株式会社　2004「井戸出土種実遺体の自然科学分析」『下前川原遺跡』豊栄市教育委員会・豊栄市博物館
パリノ・サーヴェイ株式会社　2005a「木製品の樹種同定及び鉄滓成分分析」『東原町遺跡・下沖北遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第140集　新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
パリノ・サーヴェイ株式会社　2005b「自然科学分析」『西川内北遺跡・西川内南遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第146集　新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
パリノ・サーヴェイ株式会社　2005c「自然科学分析」『昼塚遺跡Ⅰ・江添遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第147集　新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
パリノ・サーヴェイ株式会社　2005d「自然科学分析」『海道遺跡・大塚遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第150集　新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
パリノ・サーヴェイ株式会社　2006a「自然科学分析」『道端遺跡Ⅴ』新潟県埋蔵文化財調査報告書第162集　新潟県教

育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
パリノ・サーヴェイ株式会社　2006b「自然科学分析」『昼塚遺跡Ⅱ』新潟県埋蔵文化財調査報告書第167集　新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
パリノ・サーヴェイ株式会社　2006c「自然科学の分析」『鴨深甲遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第172集　新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
パリノ・サーヴェイ株式会社　2006d「自然科学分析」『野中土手付遺跡・砂山中道下遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第164集　新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
藤下典之　1984「出土遺体よりみたウリ科植物の種類と変遷とその利用法」『古文化財の自然科学的研究』古文化財編集委員会編　同朋舎
藤巻正信ほか　1991『城之腰遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第29集　新潟県教育委員会
本間信昭　1976「石器」『兼俣遺跡』妙高高原町文化財調査報告書第1集　妙高高原町教育委員会
本間信昭　1995「縄文時代」『新潟市史』通史編1 原始古代・中世・近世（上）　新潟市
本間嘉晴・羽生令吉ほか　1981『垣ノ内遺跡発掘調査報告』新潟県新穂村教育委員会
前山精明　1987『考古資料図録 上ン原遺跡』巻町郷土資料館目録9　巻町郷土資料館
前山精明　1988「巻町豊原遺跡の調査」『巻町史研究』Ⅳ　巻町
前山精明　1990『大沢遺跡』巻町教育委員会
松井健・近藤鳴雄　1992『土の地理学－世界の土・日本の土－』朝倉書店
松谷暁子　1980「十勝太若月遺跡出土炭化物の識別について」『浦幌町郷土博物館報告』16
松谷暁子　2000「植物遺残の識別と保存について」『Ouroboros, 東京大学総合研究博物館ニュース』5.
水澤幸一　2000『下町・坊城遺跡Ⅳ』中条町埋蔵文化財調査報告第20集　中条町教育委員会
宮内信雄ほか　2004『二ツ割遺跡・中住吉遺跡』紫雲寺町埋蔵文化財報告第3集　紫雲寺町教育委員会
宮脇　昭（編著）　1985『日本植生誌』中部　至文堂
村上市史編纂委員会　2000『村上市史』別編 絵図・地図・年表　村上市
森田　勉　1982「14～16世紀の白磁の分類と偏年」『貿易陶磁研究』No.2　日本貿易陶磁研究会
安田喜憲　1987『文明は緑を食べる』読売新聞社
柳　宗理ほか　1985『木竹工芸の事典』朝倉書店
矢野　梓　2002「遺跡から出土した小型豆のＤＮＡ分析」『DNA考古学Newsletter』3
山本恒文　1974「上編 往古より織豊時代まで」『荒川町郷土史』新潟県荒川町
横田賢二郎・森田勉　1978「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館 研究論集』4　九州歴史資料館
吉井雅勇　1994『古谷地遺跡Ｂ・寺田遺跡・赤井遺跡』荒川町埋蔵文化財調査報告第2集　新潟県荒川町教育委員会
吉井雅勇　1998『馬場館跡・屋敷添遺跡』荒川町埋蔵文化財調査報告第4集　荒川町教育委員会
吉井雅勇　2003『馬場館跡Ⅰ』荒川町埋蔵文化財調査報告第9集　荒川町教育委員会
吉井雅勇　2004『馬場館跡Ⅱ』荒川町埋蔵文化財調査報告第11集　荒川町教育委員会
吉井雅勇　2006『坂町宮ノ腰Ｄ遺跡Ⅱ』荒川町埋蔵文化財調査報告第13集　荒川町教育委員会
吉岡康暢　1994「第二部 珠洲および珠洲系陶器の研究」『中世須恵器の研究』吉川弘文館
吉川弘文館　1999『日本民俗大辞典』
吉崎昌一　1992「古代雑穀の検出」『考古学ジャーナル』355　ニューサイエンス社
寄藤昂・大矢雅彦　1988「荒川と胎内川における扇状地発達の相違について」『東北地理』Vol.40　東北地理学会
渡辺仁治　2005『淡水珪藻生態図鑑　群集解析に基づく汚濁指数DAIpo,pH耐性能』内田老鶴圃
Asai, K. & Watanabe, T.　1995「Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution(2)Saprophilous and saproxenous taxa」『Diatom』10
Witkowski, A., Lange-Bertalot, H. & Metzeltin, D.　2000『Iconographia Diatomologica 7. Diatom flora of Marine coast I. A.R.G.Gantner Verlag K.G.』
Krammer, K.　1992『PINNULARIA.eine Monographie der europaischen Taxa.BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND26』J.CRAMER

Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. 1986『Bacillariophyceae.1.Teil: Naviculaceae. In: SuesswasserfloravonMitteleuropa.Band2/1』 Gustav Fischer Verlag

Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. 1988『Bacillariophyceae.2.Teil: Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/2』 Gustav Fischer Verlag

Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. 1991a『Bacillariophyceae.3.Teil: Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/3』 Gustav Fischer Verlag

Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. 1991b『Bacillariophyceae.4.Teil: Achnanthaceae, Kritsche Ergaenzungen zu Navicula(Lineolatae) und Gomphonema. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/4』 Gustav Fischer Verlag

Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(編) 1998『広葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト』海青社

Round, F. E., Crawford, R. M. & Mann, D. G. 1990『The diatoms. Biology & morphology of the genera』 Cambridge University Press, Cambridge

Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(編) 2006『針葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト』海青社

Lowe, R.L. 1974『Environmental Requirements and pollution Tolerance of Fresh-water Diatoms』 In Environmental Monitoring Ser.EPA Report 670/4-74-005. Nat. Environmental Res. Center Office of Res. Develop., U.S. Environ. Protect. Agency, Cincinati.

遺構計測表（土坑）

遺構No.	位置	方位	平面形	平面規模（m）	断面形	深さ（m）	底面標高（m）
SK1	11B11·16	N-23°-E	楕円形	0.87×0.3	弧状	0.09	1.89
SK2	11A25·11B5	N-62°-W	楕円形	0.74×0.56	弧状	0.09	1.86
SK3	10A18	N-58°-E	隅丸方形	0.4×0.3	凹凸状	0.06	1.85
SK4	10A18	N-48°-W	隅丸方形	0.32×0.24	弧状	0.04	1.86
SK9	11B12-17	N-84°-E	円形	0.84×0.82	弧状	0.08	1.84
SK10	11B6·11	N-45°-W	楕円形	0.64×0.54	弧状	0.11	1.86
SK16	11C19·20·24·25	N-55°-W	楕円形	3.45×1.86	弧状（長軸）	0.45	1.61

遺構計測表（炭化物集中）

遺構No.	位置	方位	平面形	平面規模（m）	断面形	深さ（m）	底面標高（m）
SC101	13C1·2	N-59°-W	楕円形	1.58+×1.14	弧状	0.13	1.79

遺構計測表（ピット）

遺構No.	位置	柱	平面形	平面規模（m）	断面形	深さ（m）	底面標高（m）
P5	10A23	無	円形	0.1×0.1	弧状	0.03	1.92
P6	10A23	無	楕円形	0.16×0.08	弧状	0.03	1.94
P7	10A21	無	楕円形	0.31×0.13	弧状	0.03	1.97
P8	11B18	無	楕円形	0.18×0.08	弧状	0.04	1.914

遺構計測表（杭）

遺構No.	位置	平面形	平面規模（m）	断面形	深さ（m）	底面標高（m）
杭1	7D14	円形	0.12	U字状	0.55	1.93

遺構計測表（流路）

遺構No.	位置	方位	全長（m）	幅（m）	断面形	深さ（m）	底面標高（m）	流下方向
流路1	10A16-11E1	N-68°-W	35.5+	2.9-5.8	弧状	0.8-1.2	0.8-1.1	東→西
流路2	9A22 10E3	N-63°-W	33+	12.0-12.4	弧状	0.9-1.2	0.4-0.7	東→西

凡例

色調　『新版　標準土色帳』［小山・竹原１９９４］による

鉱物　石:石英，長:長石類，雲:雲母類，針:海綿骨針，砂:その他の砂粒

報告No	出土位置			器種	残存部位	法量（cm）			色調		胎土	炭化物		調整・施文		残存	備考
	グリッド	遺構	層位			口径	底径	器高	内面	外面		内面	外面	内面	外面		
1	11D11	流路1	7	深鉢	口縁部				にぶい黄褐	にぶい黄橙	石・雲・砂	○	○	ミガキ	沈線・磨消縄文LR ミガキ		大木9～10。内外面とも口縁端部のみ炭化物付着
2	11D11	流路1	7	不明	体部				黒褐	灰褐	石・雲	○	○	縄文	充填縄文		大木9～10
3	11D6	流路1	7	不明	体部				黒褐	灰黄褐	石・雲	○			充填縄文		大木9～10
4	10D14	流路2	10	不明	体:部				黒褐	褐灰	石・雲	○	○		充填縄文		大木9～10
5	11D11	流路1	7	（深鉢）	口縁部				にぶい黄橙	にぶい黄橙	石・雲・砂やや多				沈線文		大木9～10
6	11D11	流路1	7	不明	体部				黒褐	灰黄褐	石・長・雲・砂やや多				沈線文・縄文RL		大木9～10
7	10B13	流路1	7	深鉢	底部				明褐灰	黒褐	石・雲 黒色粒子やや多		○		爪形状刺突文・ナデ		三十稲場か
8	10D14	流路2	10	深鉢	体部				灰黄褐	灰黄褐	石・雲・細かい砂やや多			ナデ	充填縄文RL		大木9新・9と同一個体か
9	10D8・13	流路2	10	深鉢	体部				灰黄褐	灰黄褐	石・雲・砂・やや精錬			ナデ	充填縄文RL・ミガキ		大木9新
10	10D4・8・9 13・14・18	流路2	10	深鉢	体部				灰黄褐・黒	灰黄褐・褐	細かい白色粒子少		○		磨消縄文LR・ミガキ		大木9～10
11	10D13	流路2	10	深鉢	口縁部				にぶい黄橙	にぶい黄橙	石・雲				磨消縄文RL・ミガキ？		大木9～10
12	10D4	流路2	10	深鉢	口縁部				灰黄褐	灰黄褐	石・雲・細かい砂			ナデかミガキ			大木9～10・内外面磨耗顕著
13	10D9	流路2	10	（深鉢）	体部				にぶい黄橙	にぶい黄橙	雲・砂・黒色粒子やや多				充填縄文か		大木9～10
14	10D18	流路2	10	（深鉢）	口縁部付近				灰黄褐・黒褐	灰黄褐	雲・細かい砂少	○	○		充填縄文RL		大木9新
15	10C23	流路2	10	深鉢	口縁～体部	12.4		(19.4)	黒	黒・にぶい黄橙	石・雲・中粒砂多	○	○	ミガキ？	斜行沈線文（格子目文）	4/5	三十稲場新（綱取Ⅱ式並行）
16	10D9・20・24	流路2	10	深鉢	口縁部				黒	灰黄褐	石・雲・砂少	○			口唇・口縁：キザミ 胴：：集合沈線・円形刺突文		南三十稲場最新
17	10D4	流路2	10	（深鉢）	口縁部				灰黄褐	灰黄褐	石・雲 細かい砂多	○	○		縄文RLかR		波状口縁・磨耗が顕著なため、施文判然としない
18	10D4	流路2	10	不明	体部				褐灰	灰黄褐	細かい白色粒子やや多				RL		器面ザラつく
19	10C23 10D3・4	流路2	10	深鉢	体部				褐灰	にぶい黄橙	石・雲・砂多	○	○		縄文RかRL		外面磨耗のため、施文判然としない
20	10C23	流路2	10	不明	底部		(5.4)		褐灰	褐灰	石・雲・砂	○	○				
21	10D23	流路2	10	不明	底部		(8.8)		黒褐	黒褐	石・雲・砂	○	○				粗雑なつくり・器面ザラつく
22	10C23・24	流路2	10	不明	底部		(6.9)		にぶい黄橙	にぶい黄橙	石・雲・砂多						
23	11C4・14		Ⅵb・Ⅵc	深鉢	口縁～体部				灰黄褐・黒褐	灰黄褐	石・長・雲 細かい砂	○	○	ナデ	口：ナデ・側面圧痕文L 胴：縄文RL	1/4	大木7b 4単位波状口縁
24	11C4・11 13・20		Ⅵa′・Ⅵb Ⅵc	浅鉢か	口縁～体部				灰黄褐	にぶい黄橙 褐灰	比較的精錬	○	○	ミガキ	充填縄文RL・ミガキ		大木9新 1破片のみ9B21・Ⅵc層より出土
25	11B17 11C4・5		Ⅵc	（深鉢）	口縁～体部				灰黄褐	褐灰	雲・針 細かい白色粒子			ミガキ	沈線文・充填縄文RL ミガキ		大木9新
26	11B25 11C4・5		Ⅵc	（深鉢）	口縁部				黒褐	褐灰	比較的精錬	○		ミガキ	磨消縄文RL・ミガキ		大木9新・波状口縁
27	11B12・17		Ⅵb・Ⅵc	深鉢	体部				灰黄褐	灰黄褐	石・雲少・やや精錬			ミガキ	磨消縄文RL・ミガキ		大木9～10
28	11C20		Ⅵb	深鉢	体部				にぶい黄橙	灰黄褐	石・雲 細かい白色粒子多				充填縄文 ミガキ		大木9～10
29	11B4		Ⅵb	深鉢	体部				にぶい黄橙	にぶい黄橙	石・雲・やや精錬			ミガキ	充填縄文・ミガキ		大木9～10

凡例

色調　『新版　標準土色帳』［小山·竹原１９９４］による

鉱物　石:石英，長:長石類，雲:雲母類，針:海綿骨針，砂:その他の砂粒

報告No	出土位置			器種	残存部位	法量（cm）			色調		胎土	炭化物		調整・施文		残存	備考
	グリッド	遺構	層位			口径	底径	器高	内面	外面		内面	外面	内面	外面		
30	12C16		Ⅵc	深鉢	体部				灰黄褐	灰黄褐	石・雲多・白色粒子				充填縄文		大木9～10
31	9D5		不明	深鉢	体部				褐灰	灰黄褐	石・長・雲・砂少				単位縄文LR		粗製の大木
32	11C9		Ⅵb	深鉢	口縁～体部				灰黄褐	灰黄褐	雲微 細かい白色粒子多			ミガキ	口唇：ナデ 縄文RL		粗製の大木 波状口縁
33	12A16・21		Ⅵb・Ⅵc	深鉢	口～底部		(7.6)		黒褐	灰黄褐	石・砂少			ミガキ	口唇：刻目 口縁：爪形状刺突文 胴：縦位沈線 円形刺突文・爪形状刺突文		三十稲場新 底部は台付で2破片より図上復元
34	11C6・11・12		Ⅵa'～Ⅵc	深鉢	口縁部				黒褐	黒褐	石・雲・針・砂	○	○		多条沈線文・縄文RL		南三十稲場新
35	11A18		Ⅵb	深鉢	体・底部		(8.4)		褐灰 にぶい黄橙	灰黄褐	石・砂・やや精錬	○	○	ミガキ	無節縄文R 縦位結束縄文		三十稲場並行
36	11B21		Ⅵb	深鉢	口縁部				灰黄褐	灰黄褐	砂やや多						三十稲場　口縁部突起
37	11B21		Ⅵb	深鉢	把手				灰黄褐	灰黄褐	石・長・砂			ミガキ	ミガキ・円形貼付文		三十稲場　橋状把手
38	12B16・17 21・22		Ⅵa'・Ⅵb	深鉢	口縁～底部	24.0	8.4	(27.3)	黒褐	灰黄褐	石・雲・砂	○	○	口唇：押捺 口縁：平行沈線文 胴：ミガキ	胴：横位沈線文 櫛歯状沈線文	4/5	加曽利B1並行 補修孔あり・図上復元
39	10C24・11C17	川2	5・Ⅵb	鉢か	口縁～底部		7.0		褐灰	灰黄褐	石多・砂				不整形で細かい円形状刺突文		波状口縁
40	7B15		Ⅵc	不明	体部				にぶい黄橙	にぶい黄橙	石・砂・橙色礫（土器？）						中期中葉馬高系か
41	11C3・4		Ⅵb・Ⅵc	深鉢	体～底部		10.0		にぶい黄橙 褐灰・黒	にぶい黄橙	石・雲・砂多				縄文RL		磨耗顕著のため、施文判然としない
42	11B21・11C4		Ⅵb・Ⅵc	深鉢	体部				灰黄褐	にぶい黄橙	石・雲・砂多				縄文RL		器面ザラつく・41と同一個体か
43	12D3		Ⅵb	深鉢	口縁～底部		(8.2)		灰黄褐	暗灰黄	石・雲		○	ナデ	胴：横位多条沈線文（櫛歯？） 底：網代圧痕		波状口縁
44	11B12		Ⅵa'・Ⅵb	深鉢	口縁・底部		6.2		褐灰	灰黄褐	石・雲 橙色小礫・砂多	○	○		縄文LR		底部のみ炭化物付着・磨耗顕著
45	8B20		Ⅵb	深鉢	体～底部		10.0		にぶい黄橙	にぶい黄褐	石・雲・針少 細かい白色粒子		○		押圧縄文→ナデ		内面のみザラつく
46	8C14		Ⅵb	不明	底部		(8.0)		灰黄褐	灰黄褐	石・雲						
47	11C9		Ⅵb	不明	底部		4.9		にぶい黄橙	褐灰	石・針少				ミガキ？		
48	11B18		Ⅵb	不明	底部		(9.0)		灰黄褐	灰黄褐	石・雲 細かい白色粒子				ミガキ		
49	12C15		Ⅵb	深鉢	底部		9.0		褐灰	褐灰	石・雲・砂多						
50	11B23		Ⅵc	深鉢	底部		(8.6)		褐灰	黒褐	細かい白色粒子多		○	ミガキ？	ミガキ？		器面ザラつく
51	11B19		Ⅵb	不明	底部		(7.0)		灰黄褐	灰黄褐・黒褐	石・雲少		○				
52	11D20		Ⅵc	不明	底部		(10.0)		褐灰	にぶい黄橙	石 細かい白色粒子多	○			網代圧痕		器面ザラつく
53	11E3		Ⅵb	不明	底部		7.2		にぶい黄橙・褐	にぶい黄橙・褐	石・長・砂少				網代圧痕		
54	11B4		Ⅵb	深鉢	底部		12.6		にぶい黄褐・黒	にぶい黄橙	石・砂多	○			網代圧痕		
55	30T		Ⅲか	須恵器杯	口縁～体部	15.0			灰	灰	砂少			ロクロナデ	ロクロナデ		
56	7C		Ⅲ	土師器杯	体部～底部		5.6		にぶい黄橙	にぶい黄橙	雲少			底：磨耗	底：ロクロ糸きり		

石　鏃

No.	グリッド・遺構名	層位	分類	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	石　材	遺存状態	備　考
57	流路2	8	A	26	16	6	2	溶結凝灰岩	基部欠	
58	11B20	Ⅵa'	A	25	13.5	5	0.9	凝灰岩	完形	黒色付着物あり。
59	8C14	Ⅵc	A	15.5	10.5	4	0.5	チャート	完形	
60	11B12	Ⅵb	B	27.5	14	4	0.8	珪質頁岩	片脚欠	茶褐色付着物あり。尖頭部から右側縁部に樋状剥離あり。
61	12D11	Ⅵa	C	26.5	15	6	1.1	珪質頁岩	完形	正面中茎先端に2点、黒色付着物あり。
62	13B11	Ⅵb	C	27	13	4	0.7	珪質頁岩	完形	黒色付着物あり。
63	8B17	Ⅵb	C	22	13	5	1.1	珪質頁岩	中茎欠	背面中茎左側に黒色付着物あり。
64	12C21	Ⅵa'	C	45	14	6	2.8	珪質頁岩	完形	黒色付着物あり。

不定形石器

No.	グリッド・遺構名	層位	分類	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	石　材	使用痕	備　考
65	流路2	10	A	50.5	52	26	47.4	珪質頁岩		10D18
66	12C21	Ⅵb	A	58	57	24	66.9	珪質頁岩		
67	11B9	Ⅵc	A	55	52	20	56.3	珪質頁岩		
68	12D2	Ⅵc	A	42	50	21	38.1	珪質頁岩		
69	流路2	8	A	59	32	21	30.3	珪質頁岩		10C23
70	流路1	4	B	39	33	7.5	6.1	珪質頁岩		11D21
71	12C21	Ⅵc	B	49.5	38	13	18	珪質頁岩	右側縁部下位	
72	10E4	Ⅵ	B	36	22	7	4.3	珪質頁岩	右側縁部	
73	12D1	Ⅵb	B	37	34	14	13.2	珪質頁岩		
74	11D7	Ⅵb	B	30	41	10	9.5	珪質頁岩	下端部	
75	11C25	Ⅵc	B	54	55	19	41.9	珪質頁岩		
76	11C5	Ⅵc	B	69	46	19	53.8	珪質頁岩	両側縁部	
77	11C11	Ⅵa'	B	32	36	9	11.6	珪質頁岩		

石　錘

No.	グリッド・遺構名	層位	分類	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	石　材	遺存状態	備　考
78	流路1	9	A	94	83	22	266.7	花崗岩	完形品	10B19
79	10B15	Ⅵc	A	83	73	27	240.8	花崗岩	完形品	片端縄かけ部にツブシ
80	10B25	Ⅵc	A	96	82	27	324.7	斑レイ岩	完形品	
81	10B25	Ⅵa'	A	100	86	30	367.4	緑泥片岩	完形品	
82	10B25	Ⅵb	A	118	90	22	275.4	凝灰岩	完形品	
83	11B21	Ⅵc	A	90	79	27	237.9	レキ岩	完形品	
84	11C1	Ⅵc	A	96	87	22	298.4	花崗岩	完形品	
85	11C4	Ⅵc	A	101	85	23	295	安山岩	完形品	
86	10B25	Ⅵc	A	91	87	22	272.5	閃緑岩	完形品	
87	11B21	Ⅵc	A	91	95	17	257.2	斑レイ岩	完形品	
88	11C1	Ⅵa'	A	88	89	24	272.5	変成岩	完形品	花崗岩類
89	流路1	12	B	131	66	29	419.2	閃緑岩	完形品	10B13
90	12C22	Ⅵc	B	78	72	34	272.4	変成岩	完形品	花崗岩類
91	11D8	Ⅵc	B	62	44	21	86.2	凝灰岩	完形品	

敲　石

No.	グリッド・遺構名	層位	分類	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	石　材	遺存状態	備　考
92	11C20	Ⅵb	A	92	39	36	206.3	安山岩		
93	11D6	Ⅵb	A	109	80	33	429.5	安山岩		
94	11B8	Ⅵc	A	90+	55	33	282	安山岩	折れ	
95	流路2	7	B	82	44	26	145.2	花崗岩		10C24
96	流路2	10	B	62	27	16	37.2	泥岩		10D24

打製石斧

No.	グリッド・遺構名	層位	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	石　材	遺存状態	備　考
97	11B16	Ⅵc	156	64	20	208.3	頁岩	完形品	刃部両面磨耗

その他の石器

No.	グリッド・遺構名	層位	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	石　材	備　考
98	32T	Ⅵ	130+	120	26	358.5	細粒軟質凝灰岩	破損、試掘確認調査
99	8B21	Ⅵc	118.5	102.5	29	515.2	斑レイ岩	風化激しい
100	11D7	Ⅵb	165	66	30	517.8	斑レイ岩	風化あり

接合資料

No.	グリッド・遺構名	層位	器種	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	石　材	備　考
101	11C2・12D2	Ⅵc	接合資料1	46	62	14.5	25.5	珪質頁岩	
102	12C16・21	Ⅵa'～Ⅵc	接合資料2	58	92.5	13	41.2	珪質頁岩	試掘34T出土剥片有り
103	11C20・12C21	Ⅵb	接合資料4	72	79	31.5	108.4	珪質頁岩	
104	11C2・3	Ⅵc	接合資料3	62	30	17	9.6	珪質頁岩	
105	11C9・15・12C21・12D1-3	Ⅵb～Ⅵc	接合資料5	78	64	76	189.2	珪質頁岩	

桜林遺跡遺構一覧表（掘立柱建物）

遺構No.	方　位(桁行)		構　造		床面積	桁行		梁間	
SB1	N-39°-E		1間×1間　側柱式		12.2㎡	北 4.80m　南 5.40m		東 2.40m 西 2.45m	
構成ピット	位置	柱	平面形	平面規模（m）	断面形	深さ（m）	底面標高（m）	ピット間隔（m）	
P173	17E22	無	楕円形	0.33×0.26	U字状	0.22	3.19	P173-P114	2.45
P114	17F1	無	円形	0.24×0.22	U字状	0.15	3.13	P114-P173	5.40
P113	17F4	無	円形	0.25×0.24	U字状	0.22	3.26	P113-P170	2.40
P170	17E24	無	楕円形	0.6×0.45	U字状	0.29	3.24	P170-P173	4.80

遺構No.	方　位(桁行)		構　造		床面積	桁行		梁間	
SB2	N-14°-E		1間×1間　側柱式		11.2㎡	北 5.04m　南 4.90m		東 2.22m 西 2.28m	
構成ピット	位置	柱	平面形	平面規模（m）	断面形	深さ（m）	底面標高（m）	ピット間隔（m）	
P184	11D23	無	円形	0.17×0.17	U字状	0.14	3.25	P184-P92	2.28
P92	11E3	無	楕円形	0.31×0.28	凹凸状	0.25	3.33	P92-P146	4.90
P146	11E5	無	楕円形	0.31×0.22	U字状	0.23	3.29	P146-P147	2.22
P147	11D25	無	円形	0.2×0.19	U字状	0.08	3.38	P147-P184	5.04

遺構No.	方　位(桁行)		構　造		床面積	桁行		梁間	
SB3	N-29°-E		2間×1間　側柱式		18.6㎡	北 6.12m　南 6.12m		東 2.96m 西 3.12m	
構成ピット	位置	柱	平面形	平面規模（m）	断面形	深さ（m）	底面標高（m）	ピット間隔（m）	
P110	17D11	無	楕円形	0.12×0.1	弧状	0.05	3.27	P110-P195	3.68
P195	16D14	無	円形	0.22×0.22	弧状	0.07	3.27	P195-P111	2.44
P111	16D13	無	楕円形	0.16×0.13	弧状	0.04	3.10	P111-P112	3.12
P112	16D18	無	楕円形	0.41×0.3	凹凸状	0.16	3.18	P112-P188	6.12
P188	17D16	無	不定形	0.38×0.13	漏斗状	0.35	3.08	P188-P110	2.96

遺構No.	方　位(桁行)		構　造		床面積	桁行		梁間	
SB4	N-38°-E		1間×1間　側柱式		10.1㎡	北 3.76m　南 3.70m		東 2.70m 西 2.71m	
構成ピット	位置	柱	平面形	平面規模（m）	断面形	深さ（m）	底面標高（m）	ピット間隔（m）	
P123	14D1	無	円形	0.19×0.18	U字状	0.38	3.02	P123-P181	3.70
P181	14D3	無	円形	0.17×0.17	漏斗状	0.2	3.23	P181-P027	2.70
P027	14C23	無	楕円形	0.18×0.16	U字状	0.22	3.24	P027-P202	3.76
P202	14C21	無	円形	0.18×0.18	U字状	0.16	3.26	P202-P123	2.71

遺構No.	方　位(桁行)		構　造		床面積	桁行		梁間	
SB5	N-49°-E		1間×1間　側柱式		11.2㎡	北 4.56m　南 4.80m		東 2.43m 西 2.35m	
構成ピット	位置	柱	平面形	平面規模（m）	断面形	深さ（m）	底面標高（m）	ピット間隔（m）	
P187	14D1	無	円形	0.35×0.35	袋状	0.3	3.05	P187-P140	4.80
P140	14D8	無	楕円形	0.31×0.28	U字状	0.3	3.10	P140-P121	2.43
P121	14D3	無	楕円形	0.21×0.19	U字状	0.25	3.20	P121-P017	4.56
P017	14C21	無	楕円形	0.4×0.33	U字状	0.43	3.02	P017-P187	2.35

遺構No.	方　位(桁行)		構　造		床面積	桁行		梁間	
SB6	N-15°-E		1間×1間　側柱式		12.1㎡	北 3.70m　南 3.88m		東 3.20m 西 3.20m	
構成ピット	位置	柱	平面形	平面規模（m）	断面形	深さ（m）	底面標高（m）	ピット間隔（m）	
P125	14D6	無	隅丸方形	0.22×0.2	U字状	0.36	3.07	P125-P126	3.88
P126	14D2·3·7·8	無	楕円形	0.23×0.2	V字状	0.38	3.04	P126-P019	3.20
P019	14C22	無	円形	0.27×0.26	凹凸状	0.25	3.28	P019-P166	3.70
P166	13C25	無	楕円形	0.21×0.19	U字状	0.39	3.04	P166-P125	3.20

遺構計測表（井戸）

遺構No.	位置	方位	平面形	平面規模（m）	断面形	深さ（m）	底面標高（m）
SE003	13F8・9	N-8°-W	楕円形	1.36×1.21	U字状	1.86	1.61
SE004	13D18・19・23・24	N-6°-E	楕円形	1.31×1.14	U字状	2.60	0.86
SE026	14C24	N-46°-E	楕円形	1.35×1.2	U字状	1.61	1.86
SE041	11F10・15	不明	不明	0.94×	U字状	1.58	1.92
SE066	11F4	N-87°-E	楕円形	1.16×0.9	U字状	1.86	1.70
SE102	13F15・20・14F11・16	N-17°-E	楕円形	1.09×0.7+	U字状	1.35	2.09
SE103	14E14・15	N-61°-W	楕円形	1.22×1.02	台形状	1.26	1.65
SE127	14C18	N-33°-E	円形	1.85×1.7	漏斗状	1.63	1.80
SE130	13C15・20・14C11・16	N-13°-W	楕円形	1.72×1.44	台形状	1.24	2.18
SE141	14C11・16	N-61°-E	楕円形	1.65×1.45	漏斗状	2.12	1.32
SE142	12D6	不明	楕円形	0.9×0.45+	U字状	1.39	1.96
SE145	14C16・17	N-19°-E	楕円形	1.85×1.65	U字状	1.95	1.51
SE149	11D9・14	N-54°-W	円形	0.68×0.51+	U字状	1.52	1.95
SE161	17C23・24・17D3・4	N-17°-W	円形	1.66×1.6	袋状	1.41	2.05
SE162	14D21・22	N-20°-W	円形	1.37×1.31	箱状	1.52	1.94
SE167	14C11・12・16・17	N-33°-E	楕円形	1.74×1.45	U字状	1.49	1.97
SE168	14D18・19	N-5°-E	楕円形	1.72×1.51	U字状	2.5	0.92
SE169	14D25	N-74°-E	円形	1.3×1.19	U字状	1.02	2.44
SE189	14E9・10	N-25°-E	楕円形	1.05×0.83	U字状	1.4	1.8
SE191	12E11・12	N-11°-W	楕円形	1.37×0.8	U字状	2.25	0.91

遺構計測表（溝）

遺構No.	位置	方位	全長（m）	幅（m）	断面形	深さ（m）	底面標高（m）	流下方向
SD001	12C-F	N-69°-W	34.32+	0.45-1.5	半円状	0.23	3.05-3.35	南東→北西
SD002	13E21・13F1	N-65°-W	1.57	0.38	凹凸状	0.09	3.36-3.41	南東→北西
SD031	12C-D	N-69°-W	18.9+	0.38+	半円状	0.14	3.02-3.17	南東→北西
SD148	11D15・20・25	N-76°-W	5.80	0.21-0.42	弧状	0.04	3.39-3.48	南東→北西
SD178	17D-F	N-69°-W	19.74	0.35-0.61	U字状	0.34	3.11-3.33	北西→南東
SD204	8A22-9B13	N-62°-E	13.52+	0.42-1.3	台形状	0.48	2.85-3.08	北東→南西
SD205	9C23-9E13	N-66°-W	14.88+	0.34-0.54	台形状	0.32	3.21-3.27	南東→北西
SD208	8B9・13・14	N-35°-W	2.06+	0.25-0.5	弧状	0.08	3.34-3.41	南東→北西
SD209	8B7・11・12・16	N-35°-W	3.3+	0.22-0.7	凹凸状	0.06-0.13	3.38-3.34	南東→北西
SD212	7C3-8C1	N-25°-E	6.36+	0.21-0.55	--	--	--	--

遺構計測表（土坑）

遺構No.	位置	方位	平面形	平面規模（m）	断面形	深さ（m）	底面標高（m）
SK013	12D25	N-23°-W	不定形	0.65×0.33	弧状	0.07	3.35
SK128	13C20・25	N-8°-W	円形	1.21×1.15	弧状	0.38	3.04
SK129	17F8・12・13	N-14°-E	楕円形	1.48×1.0	半円状	0.45	2.98
SK132	14F6	N-68°-E	楕円形	0.85×0.76	台形状	0.39	3.08
SK133	15D21	N-65°-E	円形	0.81×0.77	U字状	0.54	2.94
SK134	14D21・22・14E1・2	N-69°-W	楕円形	1.05×0.92	箱状	0.43	3.03
SK144	14C22・14D2	N-S	楕円形	0.8×0.71	U字状	0.74	2.67
SK180	13D23	N-48°-W	楕円形	0.8×0.7	弧状	0.03	3.37
SK210	13E5・14E1	N-12°-W	楕円形	0.73×0.61	箱状	0.46	3.00

遺構計測表（性格不明遺構）

遺構No.	位置	方位	平面形	平面規模（m）	断面形	深さ（m）	底面標高（m）
SX203	7E1～4・6～9	N-19°-E	不整楕円形	7.28×0.96-1.3	弧状	0.25-0.53	2.87-2.9
SX207	7E3・4・8・9	N-79°-W	不整楕円形	2.6×0.72-1.0	弧状	0.16-0.23	2.94-3.12

遺構計測表（墓坑）

遺構No.	位置	方位	平面形	平面規模（m）	断面形	深さ（m）	底面標高（m）
SK131	11E20	N-19°-E	不明	1.23×1.2+	台形状	0.60	2.94

遺構計測表（ピット）

PitNo	位置	柱	平面形	平面規模（m）	断面形	深さ（m）	底面標高（m）
P005	13D17	無	円形	0.17×0.16	U字状	0.11	3.26
P006	13D17	無	円形	0.2×0.19	台形状	0.06	3.32
P007	13D19	無	円形	0.21×0.2	弧状	0.04	3.30
P008	13D9	無	楕円形	0.21×0.16	弧状	0.04	3.27
P009	13C23	無	円形	0.12×0.11	半円状	0.05	3.25
P010	13C23	無	楕円形	0.18×0.16	半円状	0.12	3.21
P011	13C19	無	円形	0.21×0.2	U字状	0.28	3.14
P012	13C19	無	楕円形	0.14×0.1	U字状	0.12	3.28
P014	13C25	無	円形	0.23×0.22	弧状	0.05	3.39
P015	13C20	無	円形	0.22×0.2	台形状	0.17	3.28
P016	14C21	無	楕円形	0.2×0.18	U字状	0.18	3.26
P018	14C16	無	円形	0.11×0.1	U字状	0.10	3.36
P020	14C17	無	楕円形	0.32×0.27	弧状	0.14	3.30
P021	14C13	無	円形	0.2×0.2	U字状	0.18	3.26
P022	14C14	無	楕円形	0.31×0.25	U字状	0.15	3.29
P023	14C23	無	円形	0.23×0.21	U字状	0.20	3.25
P024	14C23	無	楕円形	0.2+×0.18	U字状	0.17	3.28
P025	14C24	無	円形	0.17×0.17	半円状	0.09	3.36
P028	13C8	無	楕円形	0.2×0.16	U字状	0.19	3.20
P029	13C8	無	円形	0.25×0.23	半円状	0.14	3.23
P030	14C6	無	楕円形	0.19×0.15	U字状	0.14	3.32
P032	13C14	無	楕円形	0.2×0.15	半円状	0.09	3.29
P033	11F14	無	楕円形	0.4×0.22	U字状	0.20	3.33
P034	11F14	無	円形	0.13×0.12	半円状	0.08	3.43
P035	11F14	無	楕円形	0.16×0.11	U字状	0.11	3.41
P036	11F14	無	楕円形	0.27×0.23	U字状	0.18	3.32
P037	11F14	無	楕円形	0.27×0.23	U字状	0.19	3.21
P038	11F15	無	不定形	0.55×0.22	弧状	0.18	3.3
P039	11F15	無	楕円形	0.33×0.18	半円状	0.26	3.20
P040	11F15	無	楕円形	0.21×0.15	U字状	0.14	3.33
P042	11F10	無	楕円形	0.33×0.23	U字状	0.41	3.09
P043	11F9	無	楕円形	0.23×0.18	弧状	0.09	3.42
P044	11F9	無	楕円形	0.12×0.1	弧状	0.05	3.45
P045	11F9	有	楕円形	0.5×0.34	半円状	0.51	2.94
P046	11F10	無	楕円形	0.31×0.28	弧状	0.12	3.4
P047	11F10	無	楕円形	0.32×0.26	半円状	0.21	3.32
P048	11F10	無	楕円形	0.25×0.18	弧状	0.09	3.32
P049	11F9	無	円形	0.17×0.16	箱状	0.17	3.36
P050	11F4	無	楕円形	0.22×0.15	U字状	0.18	3.29
P051	11F14	無	円形	0.5×0.46	U字状	0.54	2.94
P052	11F9	無	楕円形	0.41×0.36	半円状	0.24	3.25
P053	11F8	無	楕円形	0.48×0.35	台形状	0.50	3.10
P054	11F9	無	楕円形	0.15×0.13	弧状	0.03	3.45
P055	11F9	無	楕円形	0.3×0.26	半円状	0.17	3.33
P056	11F9	無	楕円形	0.19×0.15	U字状	0.16	3.37
P057	11F10	無	楕円形	0.35×0.26	弧状	0.07	3.27
P058	11F3	無	楕円形	0.28×0.21	U字状	0.30	3.25
P059	11F8	無	楕円形	0.15×0.11	弧状	0.03	3.50
P060	11F8	無	楕円形	0.17×0.12	弧状	0.04	3.50
P061	11F8	無	楕円形	0.17×0.15	箱状	0.10	3.43
P062	11E24	無	楕円形	0.29×0.21	弧状	0.09	3.41
P063	11F4	無	楕円形	0.1×0.08	弧状	0.02	3.52
P064	11F9	無	楕円形	0.27×0.14	弧状	0.09	3.42
P065	11F4	無	楕円形	0.42×0.36	半円状	0.17	3.31
P067	11F3	無	楕円形	0.3+×0.21	弧状	0.17	3.40

PitNo	位置	柱	平面形	平面規模（m）	断面形	深さ（m）	底面標高（m）
P068	11F4	無	円形	0.15×0.15	弧状	0.02	3.35
P069	11F4	無	円形	1.5+×1.5	U字状	0.18	3.30
P070	11F4	無	楕円形	0.18×0.16	U字状	0.27	3.22
P071	11F4	無	楕円形	0.16×0.14+	U字状	0.32	3.18
P072	11F4	無	楕円形	0.33×0.22	弧状	0.11	3.41
P073	11F4	無	楕円形	0.23×0.2	半円状	0.14	3.34
P074	11F4	無	円形	0.16×0.16	弧状	0.05	3.44
P075	11F4	無	楕円形	0.25×0.13	弧状	0.05	3.43
P076	11F4	無	楕円形	0.41×0.34	漏斗状	0.38	3.13
P077	11F4	無	楕円形	0.42×0.35	漏斗状	0.44	3.08
P078	11E24	無	楕円形	0.2 ×0.18	U字状	0.27	3.23
P079	11E23	無	楕円形	0.17×0.09	半円状	0.16	3.37
P080	11E24	無	楕円形	0.33×0.25	半円状	0.15	3.35
P081	11E24	無	楕円形	0.28×0.24	U字状	0.25	3.25
P082	11E23	無	円形	0.39×0.35	弧状	0.15	3.35
P083	11E24	無	楕円形	0.16×0.14	弧状	0.06	3.46
P084	11E18	無	円形	0.4 ×0.38	U字状	0.48	3.07
P085	11E24	無	楕円形	0.31×0.25	U字状	0.50	2.96
P086	11E19	無	楕円形	0.25×0.18	U字状	0.15	3.39
P087	11E14	無	円形	0.29×0.28	U字状	0.50	3.04
P088	11E18	無	楕円形	0.19×0.17	半円状	0.16	3.4
P089	11E13	無	円形	0.19×0.18	弧状	0.06	3.49
P090	11E13	無	楕円形	0.3×0.25	階段状	0.39	3.17
P091	11E13	無	円形	0.29×0.28	台形状	0.25	3.30
P093	11D8	無	楕円形	0.24×0.12+	U字状	0.30	3.28
P094	11F9	無	円形	0.29×0.27	U字状	0.33	3.04
P095	11F4	無	円形	0.23×0.22	弧状	0.06	3.29
P096	11F3	無	楕円形	0.24×0.14	半円状	0.11	3.43
P097	11F9	無	楕円形	0.11×0.09	U字状	0.17	3.33
P098	11F10	無	楕円形	0.13×0.09	半円状	0.08	3.40
P099	11F14	無	楕円形	0.16×0.13	U字状	0.07	3.43
P100	11E18	無	楕円形	0.32×0.25	台形状	0.13	3.4
P101	13C2	無	楕円形	0.25×0.22	U字状	0.25	3.18
P104	18C13	無	円形	0.22×0.21	U字状	0.24	3.16
P105	18C7	無	楕円形	0.27×0.1	U字状	0.17	3.27
P106	18C16	無	楕円形	0.2 ×0.16	U字状	0.21	3.22
P107	17C25	無	楕円形	0.17×0.17	台形状	0.09	3.32
P108	17C24	無	楕円形	0.13×0.11	半円状	0.07	3.37
P109	18D16	無	楕円形	0.37×0.26	弧状	0.08	3.32
P116	14F1	無	円形	0.24×0.22	弧状	0.08	3.35
P117	14F1	無	楕円形	0.16×0.1	U字状	0.20	3.2
P118	13F5	無	円形	0.2 ×0.2	U字状	0.10	3.32
P119	14F11	無	円形	0.15×0.15	弧状	0.05	3.36
P120	14E16	無	楕円形	0.25×0.21	U字状	0.12	3.3
P122	14D16	無	楕円形	0.38×0.28	U字状	0.15	3.30
P124	13D5	無	円形	0.18×0.17	U字状	0.10	3.23
P135	11F10	無	楕円形	0.20×0.17	U字状	0.10	3.30
P136	14D16	無	円形	0.22×0.2	U字状	0.19	3.24
P137	14D17	無	楕円形	0.2×0.15	U字状	0.12	3.32
P139	14D2	無	円形	0.2×0.19	U字状	0.23	3.18
P143	14D16	無	楕円形	0.2×0.16	弧状	0.04	3.37
P150	11D10	無	楕円形	0.12×0.1	U字状	0.10	3.30
P151	11D10	無	楕円形	0.17×0.15	U字状	0.18	3.21
P152	11D9	無	楕円形	0.21×0.14	弧状	0.04	3.36
P153	11D5	無	楕円形	0.15×0.11	U字状	0.09	3.29

遺構計測表（ピット）

PitNo.	位置	柱	平面形	平面規模（m）	断面形	深さ（m）	底面標高（m）
P154	11C19	無	楕円形	0.26×0.21	U字状	0.22	3.2
P155	11C19	無	楕円形	0.23×0.19	U字状	0.23	3.22
P156	11C19	無	円形	0.18×0.17	U字状	0.09	3.36
P157	11C19	無	楕円形	0.22×0.16	U字状	0.20	3.26
P158	11C19	無	楕円形	0.34×0.21	U字状	0.42	3.14
P159	11D15	無	楕円形	0.23×0.18	弧状	0.06	3.41
P160	11C6	無	楕円形	0.21×0.16	弧状	0.08	3.43
P163	14C22	無	楕円形	0.21×0.16	U字状	0.14	3.29
P164	14D3	無	円形	0.15×0.14	U字状	0.19	3.27
P165	12C8	無	楕円形	0.24×0.21	弧状	0.08	3.20
P171	16F10	無	楕円形	0.23×0.14	弧状	0.04	3.25
P172	16F15	無	楕円形	0.31×0.28	半円状	0.18	3.22
P174	11D4	無	円形	0.28×0.28	U字状	0.39	3.14
P175	11D4	無	楕円形	0.38×0.34	U字状	0.40	3.14
P176	11C25	無	楕円形	0.24×0.14	U字状	0.20	3.2
P177	11C25	無	楕円形	0.16×0.11	U字状	0.10	3.31

PitNo.	位置	柱	平面形	平面規模（m）	断面形	深さ（m）	底面標高（m）
P179	18C18	無	楕円形	0.19×0.16	半円状	0.09	3.33
P182	14D8	無	円形	0.15×0.15	U字状	0.10	3.32
P183	11E19	無	楕円形	0.19×0.16	弧状	0.03	3.50
P185	11D17	無	楕円形	0.15×0.13	弧状	0.03	3.45
P186	11C20	無	楕円形	0.27×0.14	半円状	0.10	3.26
P190	14C10	無	円形	0.28×0.27	U字状	0.25	3.16
P192	11E18	無	楕円形	0.15×0.12	弧状	0.03	3.50
P193	13C13	無	円形	0.16×0.12	弧状	0.05	3.31
P194	13C23	無	楕円形	0.24×0.21	台形状	0.18	3.23
P196	14D18	無	楕円形	0.29×0.24	漏斗状	0.24	3.18
P197	14D18	無	楕円形	0.37×0.27	階段状	0.43	2.96
P198	11F15	無	楕円形	0.22×0.16	半円状	0.09	3.35
P199	11F15	無	円形	0.13×0.12	弧状	0.07	3.36
P200	11F19	無	楕円形	0.22×0.1+	台形状	0.15	3.29
P201	14D6	無	円形	0.21×0.21	U字状	0.20	3.2
P211	11D18	無	円形	0.18×0.18	弧状	0.04	3.48

木製品観察表

報告	出土位置		層位	残存部法量(cm)			器種	遺存状況	木取り	樹種	備考
No.	グリッド	遺構No.		長	幅	厚					
34	13D24	SK4	不明	18.5	2.4	0.5	曲物側板	破片	柾目		矢印状のケビキ線
35	13D24	SK4	不明	11.3	5.8	0.4	曲物・桶等タガか	破片	板目		5孔の木釘穴あり・表面炭化
36	14D18	SE168	25	6.9	4.0	0.3	板状木製品	破片	柾目		
37	14C16・17	SE145	19	12.9	5.1	0.4	曲物・桶等底板	破片	柾目		側板との結合釘穴3孔あり
38	14C16・17	SE145	19	21.1	5.7	0.8	曲物・桶等底板	破片	柾目		断面に2孔の木釘穴あり
39	14D18	SE168	25	9.0	3.7	0.6	曲物・桶等底板か	1/2欠	柾目		
40	14D18	SE168	25	11.9	2.6	1.1	曲物・桶等底板か	破片	柾目		断面に2孔の木釘穴あり
41	14D18	SE168	25	12.8	20.3	1.0	曲物・桶等底板か	1/2欠	板目		断面に4孔の木釘穴あり
42	12E11・12	SE191	3	10.1	5.1	3.9	樺皮状材	完形		サクラ樹皮	三重巻き
43	14C16・17	SE145	19	34.7	2.1	2.4	棒状木製品	上端部欠	丸材		
44	14C16・17	SE145	19	27.0	5.7	0.3	板状木製品	破片	柾目		曲物底板か
45	14C16・17	SE145	19	32.9	5.5	0.4	曲物側板か	破片	板目		4孔の木釘穴あり
46	14C16・17	SE145	19	59.5	12.6	2.2	舟転用材	破片	柾目	カツラ	上端部炭化・舟材転用か
47	14C11	SE141	16	21.0	29.5	4.3	厚板状木製品	破片	割材		
48	11F9	P45	1	25.7	6.6	6.4	杭	上端部欠	芯持材	ケヤキ	
49	14D18	SE168	20	31.8	3.9	3.4	杭	上端部欠	芯持丸太材		全面炭化
50	11D14	SE149	9～12	94.2	86.2		臼	ほぼ完形	芯持丸太材	マツ属	搗き臼
51	11D14	SK149	9	11.2	2.5	1.5	陽物状木製品	ほぼ完形	丸材		粗製
52	11E20	SK131	底板上		5.0	(2.7)	漆器　椀	1/3欠			高台以外黒漆後赤漆塗布
53	11E20	SK131		52.3	29.8	0.9	木棺南側板	下部欠	柾目	マツ属	近世墓木棺部材
54	11E20	SK131		68.0	17.2	1.2	木棺西側板	破片	柾目	マツ属	近世墓木棺部材
55	11E20	SK131		76.2	26.4	1.7	木棺東側板	破片	柾目	マツ属	近世墓木棺部材
56	11E20	SK131	底面	29.1	3.6	3.2	木棺部材	破片	芯持丸太材	ヌルデ近似種	近世墓木棺部材
57	11E20	SK131	底面	45.3	3.0	1.8	木棺部材	破片	芯持丸太材	ヌルデ近似種	近世墓木棺部材
58	13D24	SE4		23.5	29.4		ザル	一部残			ゴザ目編み
59	7E1～4	SX203	底面上	44.6	40.5	14.2	蓆材	完形	板目	ケヤキ	表面に加工痕あり（クサビ）

銭貨観察表

報告	出土位置			銭名	初鋳年	王朝名	法量			備考
No.	グリッド	遺構	層位				長(cm)	厚(cm)	重量(g)	
62	11E20	SK131	底板上	永楽通寶	1411	明	2.4	0.15	2.2	
63	11E20	SK131	底板上	寛永通寶	1636		2.4	0.12	3.0	古寛永
64	11E20	SK131	底板上	寛永通寶	1636		2.5	0.13	4.0	古寛永
65	11E20	SK131	底板上	寛永通寶	1668		2.5	0.12	3.5	新寛永（文銭）
66	11E20	SK131	底板上	寛永通寶	1668		2.5	0.12	3.2	新寛永（文銭）
67	11E20	SK131	底板上	寛永通寶	1668		2.5	0 20	4.0	新寛永（文銭）

石製品観察表

報告	出土位置			種別	石材	法量				備考
No.	グリッド	遺構No.	層位			長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
60	17F13	SK129	2	砥石	花崗岩	7.0+	6.0	5.2	351.8	
61	14D18	SE168	不明	敲磨石	安山岩	12.1	8.1	4.7	541.8	スス付着後、使用痕が形成される

土器観察表

凡例

残存率　口縁部及び底部の残存率をX/36で表した

報告No	出土位置			種別	器種	残存部位	法量(cm)			色調		焼成	胎土	調整		時期	備考
	グリッド	遺構	層位				口径	底径	器高	外面	内面			外面	内面		
1	14E20	SE103	5	須恵器	杯身	体部		(11.8)		灰	灰	良好	砂礫少量 灰白色微粒子わずか	ナデ	ナデ	新潟Ⅴ期か	
2	15D21	SK133	5	須恵器	杯身	体部 (1/8)	(11.8)			灰白	灰白	良好	弱砂質 灰白色・黒色微粒子若干	ナデ	ナデ		
3	17D4	SK161	6	須恵器	杯身	底部		(7.0)	(1.2)	灰白	灰白	良好	灰白色粒子少量	ナデ	ナデ		
4	12D24	SD1	1	須恵器	杯身	底部		(9.6)		灰	灰	良好	灰白色微粒子わずか	回転ヘラケズリか	ナデ		
5	14C16	SE145	1	須恵器	杯身	高台		(11.0)		灰	灰	良好	砂礫多量	ナデ	ナデ		
6	14E20	SE103	6	須恵器	甕	胴部				暗灰	暗灰	良好	灰白色微粒子わずか	タタキ	ナデ		
7	15D21	SK133	2	須恵器	甕	胴部				灰白	灰白	良好	灰白色微粒子わずか	タタキ	ナデ		
8	15D21	SK133	2	須恵器	甕	胴部				灰白	灰白	良好	灰白色微粒子わずか	タタキ	当て具痕		
9	14E10	SE189	9・10	須恵器	甕	胴部 下位				灰	灰	良好	砂礫・白針わずか 白色微粒子	タタキ	ナデ・ヘラナデ		
10	12D6	SE142	8	土師器	皿	体部	(12.8)			黄橙	黄橙	良好	精良・紛質	ナデ	ナデ		
11	13F9	SE3	1	白磁	碗	底部		(4.6)	(2.0)	灰白	灰白	良好	黒色微砂若干	ナデ 高台削り出し	ナデ		
12	9B		攪乱	青磁	台付皿か	底部				淡緑	淡緑	良好	緻密・精良	高台削り出し			内底面施釉
13	12C25		攪乱	青磁	皿	体部				緑	緑	良好	異色微粒子わずか	ナデ	ナデ		
14	14D21	SE162	7	青磁	端反碗	口～体部	(13.8)			灰緑	灰緑	良好	精良	ナデ	ナデ		漆継ぎ跡有
15	13F9	SE3	16	青磁	端反碗	体～底部				緑色	緑色	良好	精良	ナデ	ナデ		外面：横位鎬文 内面：線刻
16	11F4	SK66	4	青磁	端反碗	体部				緑色	緑色	良好	緻密・精良	ナデ	ナデ		内底面にスタンプ文(草花)
17	14D25	SE169	10	青磁	碗	体部				灰緑	灰緑	良好	緻密・精良	ナデ	ナデ		
18	17F2	SD178	1	青磁	碗	体部				灰緑	灰緑	良好	精良	ナデ	ナデ		乾入多し
19	7B		Ⅱ	青磁	碗	体～底部		(6.2)	(3.2)	緑	緑	良好	弱粘土質 灰白色微粒子少量	ナデ	ナデ		内外面乾入多し
20	13F9	SE3	2	珠洲焼	擂鉢	口縁部	不明			灰	灰	良好	やや粗 灰白色微粒子・白針わずか	ナデ	ナデ	珠洲Ⅴ期	
21	14D25	SE169	7	珠洲焼	擂鉢	口縁部	(37.0)		(4.5)	灰	灰	良好	砂礫わずか 灰白色微粒子若干	ナデ	口縁部内面波状文 卸目	珠洲Ⅴ期	
22	14D18	SE168	1・8b・ 10・12	珠洲焼	擂鉢	口～体部		(36.2)		灰	灰	良好	砂礫少量 白色微粒子・白針	ナデ	口縁部内面波状文 卸目(6条一単位) ナデ	珠洲Ⅵ期	体部内面中位以下、使用による器面摩耗
23	9D13	SD205	1	珠洲焼	擂鉢	体部				灰	灰	良好	やや粗 砂質・白針・灰白色粒子	ナデ	卸目 ナデ		
24	11F4		Ⅱ	珠洲焼	擂鉢	体部				暗灰	暗灰	良好	やや粗 灰白色微粒子・白針	ナデ	卸目(6条一単位)		
25	11E	攪乱		珠洲焼	鉢	体～底部		(14.0)		灰白	灰白	良好	やや粗・弱砂質 砂礫・黒色微砂少量	ナデ 底部ヘラナデ	ヘラナデ		

土器観察表

凡例

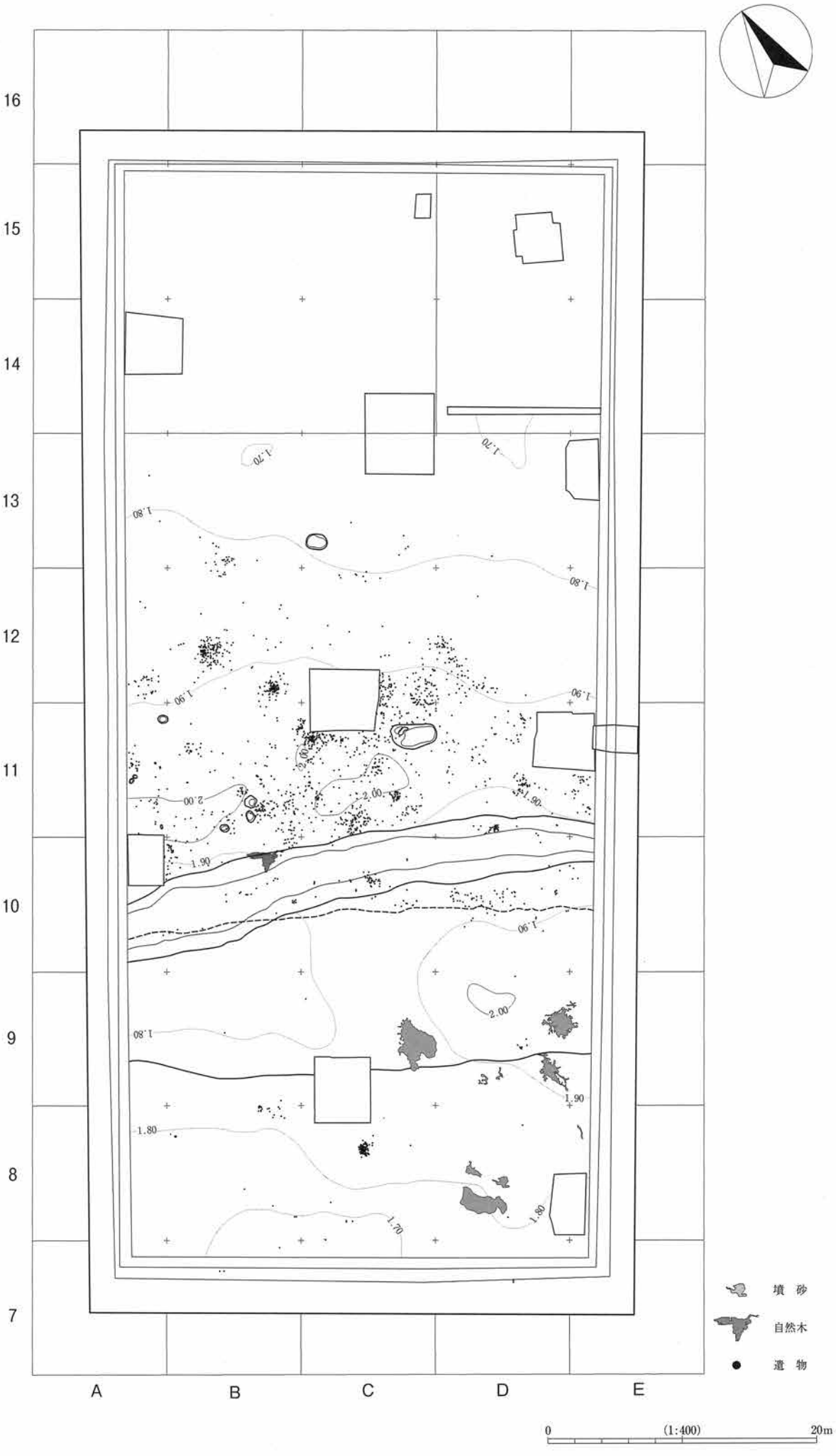
残存率　口縁部及び底部の残存率をX/36で表した

報告No.	出土位置			種別	器種	残存部位	法量(cm)			色調		焼成	胎土	調整		時期	備考
	グリッド	遺構	層位				口径	底径	器高	外面	内面			外面	内面		
26	13F20	SE102	5	珠洲焼	甕	胴部				灰	灰	良好	やや粗・灰白色微粒子少量 白針少量	タタキ	ヘラナデ		
27	13F20	SE102	5	珠洲焼	甕	胴部				灰	灰	良好	やや粗・灰白色微粒子少量 白針少量	タタキ	ヘラナデ		
28	13D24	SE4	3	珠洲焼	甕	胴部				灰	灰	良好	白色微粒子わずか 白針	タタキ	ナデかヘラナデ		
29	14C18	SE127	6～8	珠洲焼	甕	胴部				灰	灰	良好	灰白色微粒子わずか	タタキ	ナデ・ヘラナデ		
30	17D		I	備前焼	擂鉢	口縁部				橙	橙	良好	弱紛質土 微砂・砂礫少量			備前Ⅴ期か	外面縁帯に自然降灰
31	9D13	SD205	1	土師器	高杯	脚部				灰白	灰白	普通	やや軟質 紛質・石英・微砂など少量	ヘラケズリ		古墳中期	
32	11E		攪乱	円形土製品		完形	4.0	4.4	1.1	暗褐灰	暗褐灰	良好	黒色微砂わずか・白針	底面を除きミガキ			
33	11E		攪乱	円形土製品		完形	4.1	4.6	1.1	暗褐	暗褐	良好	黒色微砂わずか・白針	底面はヘラナデ又はヘラケズリ			

図　　版

中部北遺跡遺構全体図

図 版 1



中部北遺跡遺構分割図（1）

SK10

33T

11A | 11B
10A | 10B

11C | 11D
10C | 10D

11D | 11E
10D | 10E

2.00

1.90

流 路 1

1.80

1.90

10A | 10B
9A | 9B

10B | 10C
9B | 9C

10C | 10D
9C | 9D

10D | 10E
9D | 9E

流 路 2

2.00

1.80

31T

1.90

9A | 9B
8A | 8B

9B | 9C
8B | 8C

9C | 9D
8C | 8D

9D | 9E
8D | 8E

1.80

32T

1.80

1.70

8A | 8B
7A | 7B

8B | 8C
7B | 7C

杭1

8C | 8D
7C | 7D

8D | 8E
7D | 7E

分割概念図

2

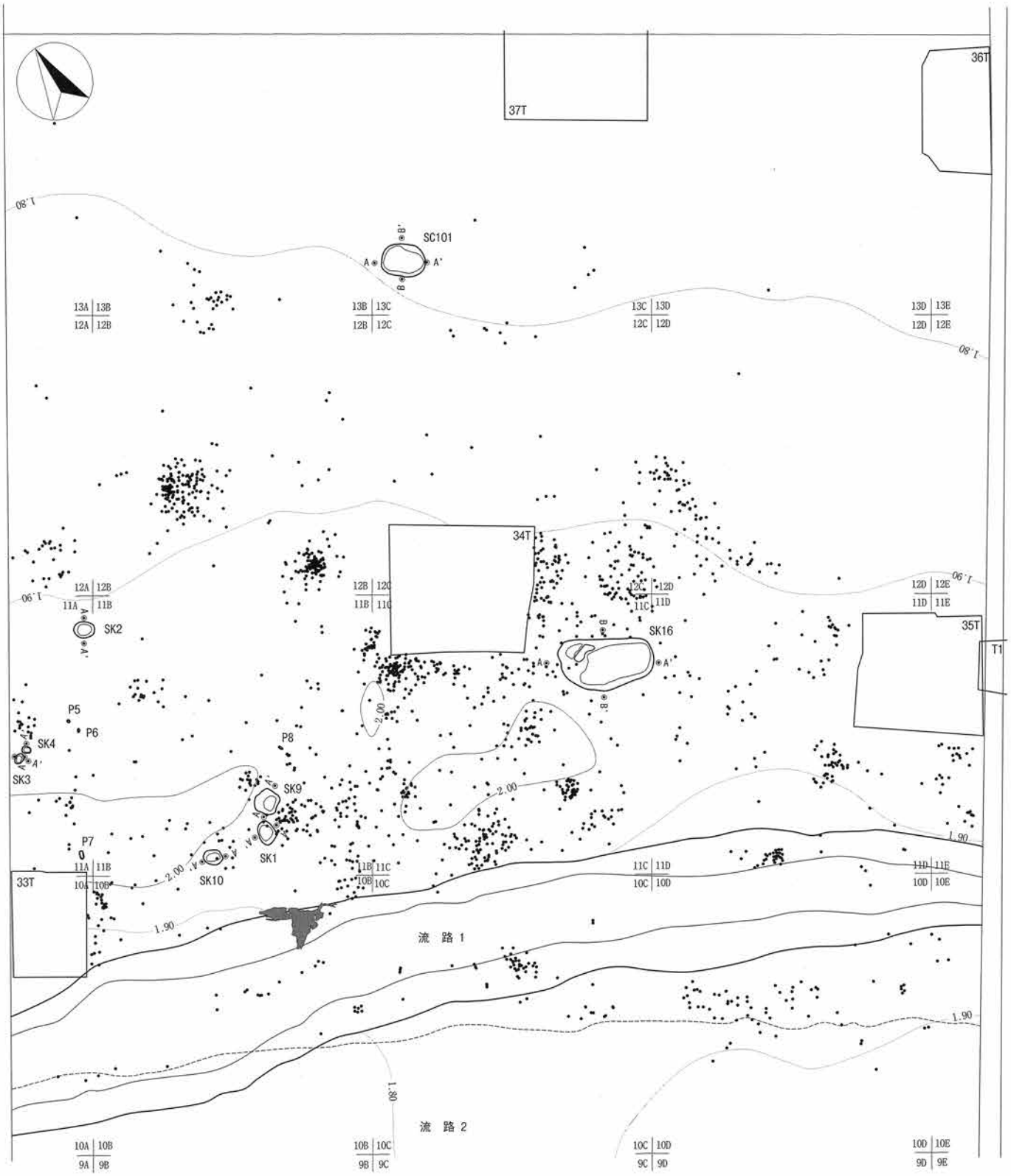
1

墳 砂

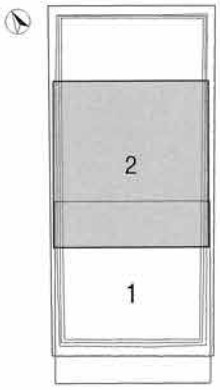
自然木

遺 物

0 (1:200) 10m



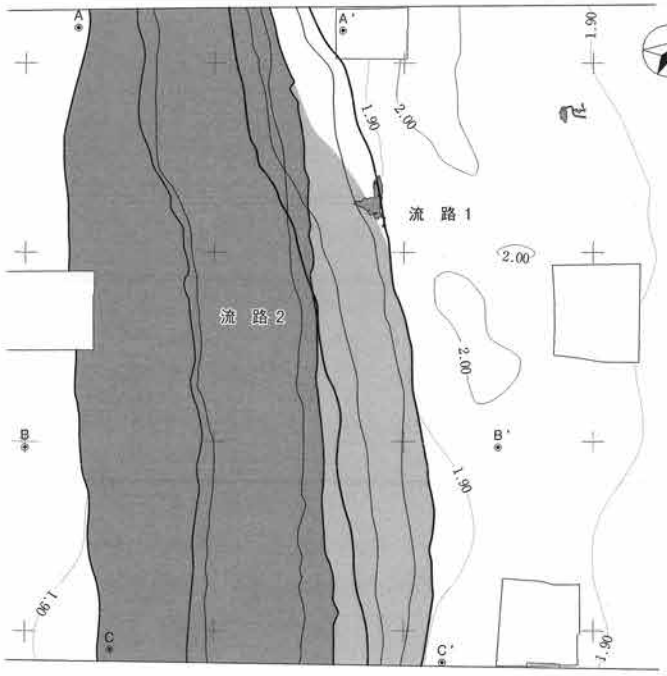
分割概念図

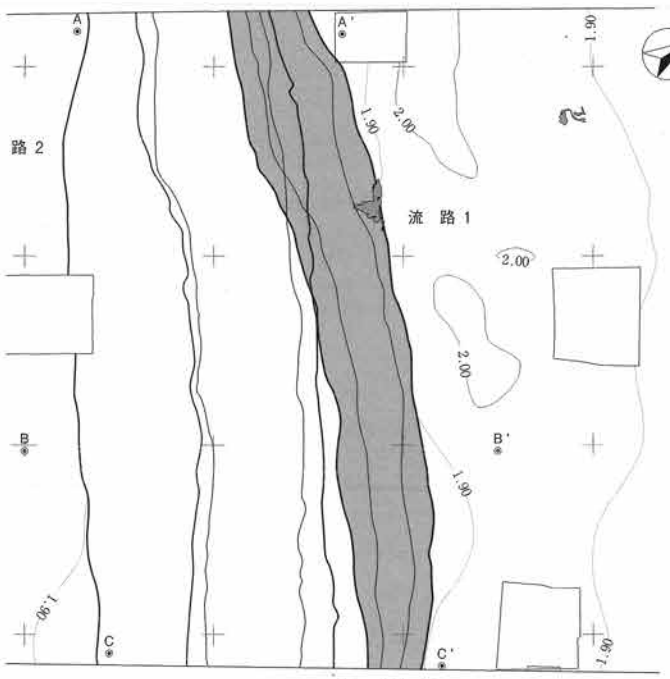


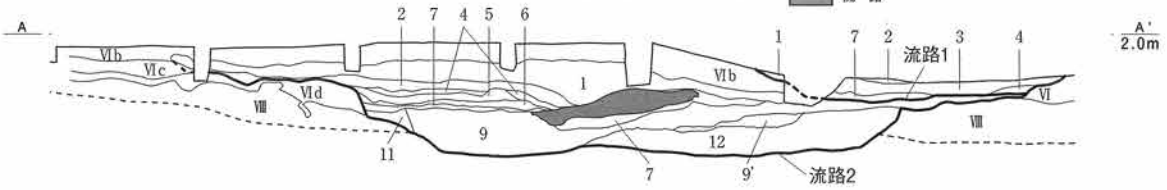
0　(1:200)　10m

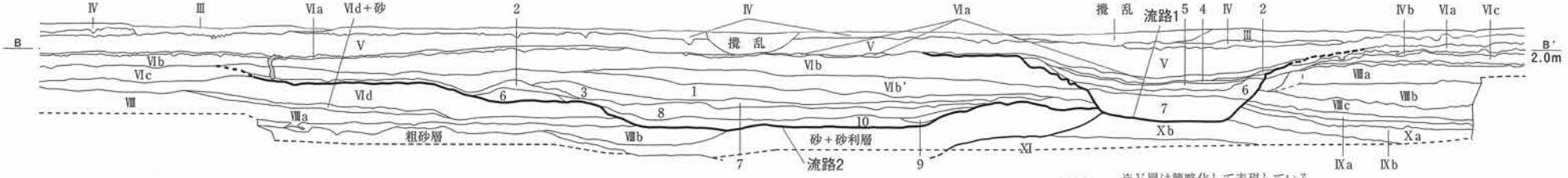
流路1
1　Ⅵa層に腐植物が少量混入する。しまり。粘性共強。
2　1層と同質であるが、炭化物をやや多く含む。しまり。粘性共強。
3　1層と同質。3'は砂の混入がやや多い。
4　Ⅵb層の有機質に富むもの。土色はやや黒ずむ。炭化物・腐植物がわずかに混入する。しまり弱。粘性強。
5　Ⅵb層に木片・腐植物・Ⅵb層ブロックが多量混入する。しまり・粘性共やや強。
6　Ⅵbと細砂がラミナを形成する。腐植物・鉄分をやや多く混入する。しまり・粘性共弱。
7　4層と同質であるが、腐植物・木片・砂が多量混入する。しまり・粘性共弱。
8　Ⅵb層に腐植物・木片・砂が多量混入する。しまり・粘性共やや強。
9　8層と同質であるが、混入物は減少する。
10　Ⅷ層に腐植物・木片・砂などがやや多く混入する。しまり強。粘性やや強。
11　粒化したⅧ層に木片・細砂が少量混入する。しまり・粘性共弱。
12　Ⅷ層に灰白色粘土ブロック・細砂が混入する。しまりやや強。粘性強。

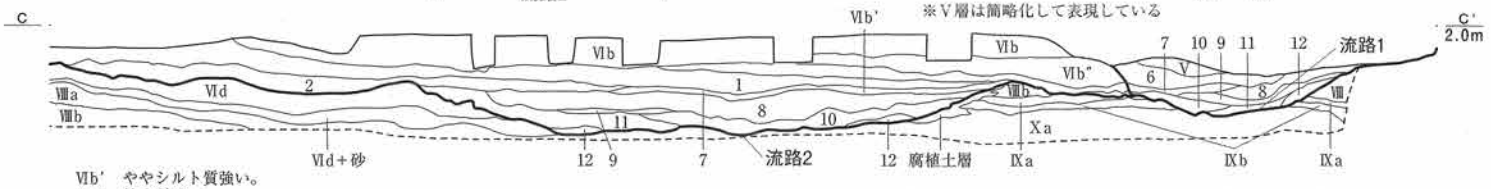
流路2
1　Ⅵc層にシルトがわずかに混入する。土色はわずかに黒ずむ。しまりやや強。粘性強。
2　Ⅵc層よりきめ細かく均質なクリーム状の粘土。土色は白色に近い。しまり弱。粘性強。
3　Ⅵc層より粒子の細かい粘土層。しまり・粘性共やや強。
4　2層と灰色粘土の混成土。しまりやや弱。粘性強。
5　Ⅵc層と同質であるが、有機質に富み土色はやや黒ずむ。しまり・粘性共やや強。
6　2層に近似するが、有機質か鉄分の影響で土色はピンクがかる。部分的にシルトが混入する。
7　灰色シルトと腐植物の混成土。有機質に富み、土色はⅥaに近似する。しまりやや強。粘性強。
8　Ⅵb層に近似するが、有機質に富み、土色は黒みがかる。しまり弱。粘性やや弱。腐植物が多量混入する。
9　灰色シルトと黒褐色土の混成土。しまり・粘性共やや強。腐植物が多量混入する。
10　砂＋腐植物。8層（腐植物多量）に灰色粘土がやや多く混入する。しまり弱。粘性強。
11　ブロック/粒状のⅥc層と暗灰色粘土の混成土。しまり・粘性共やや強。
12　Ⅷ層と腐植物の混成土。しまり・粘性共やや強。





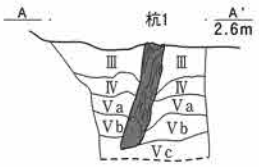


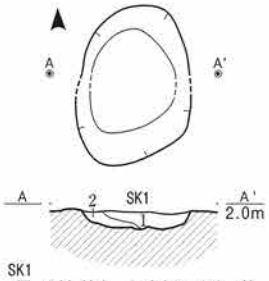




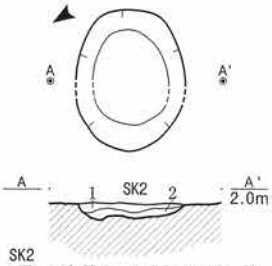
Ⅵb'　ややシルト質強い。
Ⅵb"　粘土質強い。

0　平面図（1:400）　20m　0　断面図（1:100）　5m

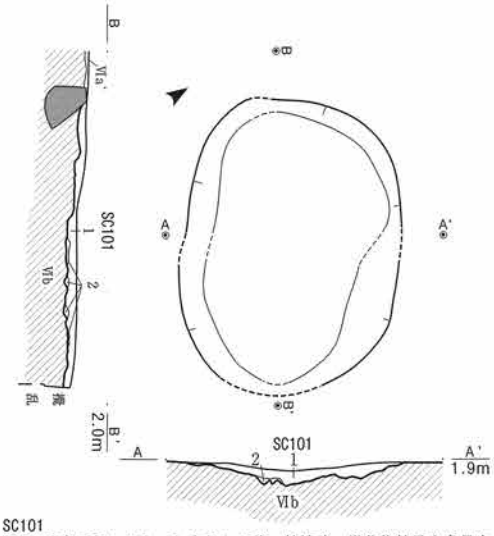




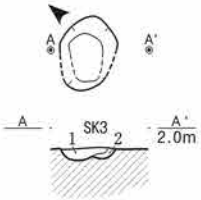
SK1
1層　灰色粘土　しまりやや強。粘性強。炭化物粒子を少量含む。灰色粘土ブロックが混入する。
2層　1層と同質であるが、粘土ブロックの混入はわずかである。



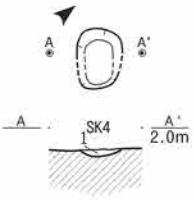
SK2
1層　灰色粘土　しまりやや強。粘性強。炭化物粒子を少量含む。灰色粘土ブロックが混入する。
2層　1層と同質であるが、粘土ブロックの混入はわずかである。



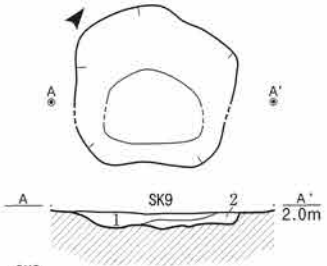
SC101
1層　暗赤灰色シルト　しまりやや強。粘性強。炭化物粒子を多量含む。
2層　褐灰色シルト　しまりやや強。粘性強。炭化物粒子を少量含む。



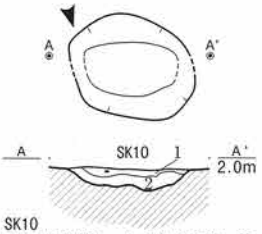
SK3
1層　灰白色粘土　しまり強。粘性やや強。炭化物粒子を少量含む。灰色粘土ブロックが混入する。
2層　1層に比べ、炭化物粒子が細かくなる。



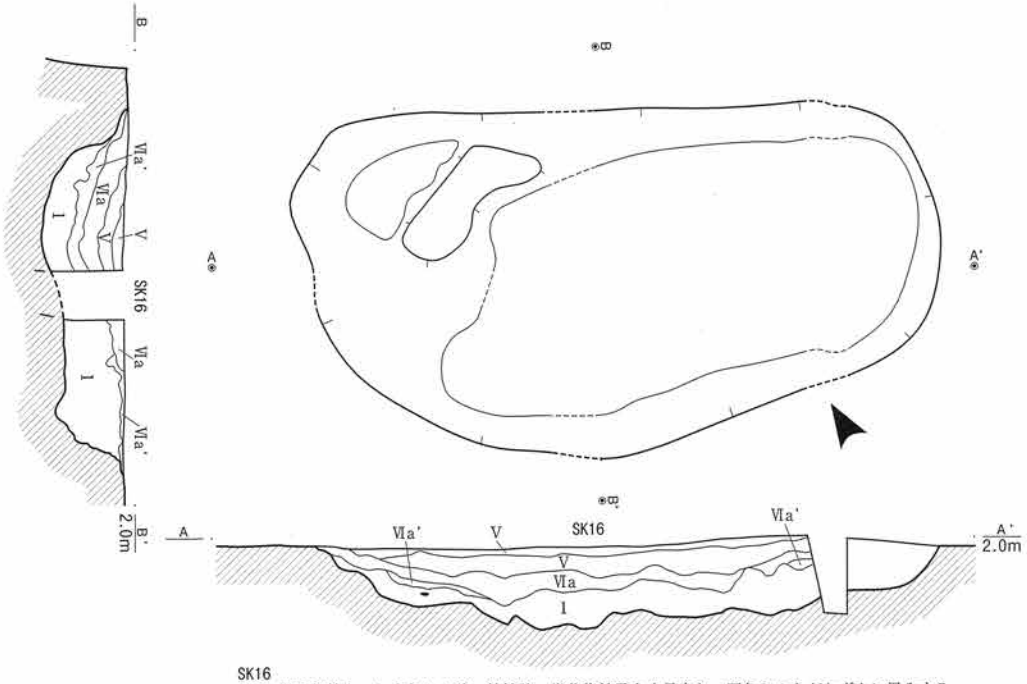
SK4
1層　灰色粘土　しまりやや強。粘性強。炭化物粒子を少量含む。灰色粘土ブロックがやや多く混入する。



SK9
1層　灰色粘土　しまりやや強。粘性強。炭化物粒子を少量含む。灰色粘土ブロックがわずかに混入する。
2層　1層と同質であるが、粘土ブロックの混入はみられない。



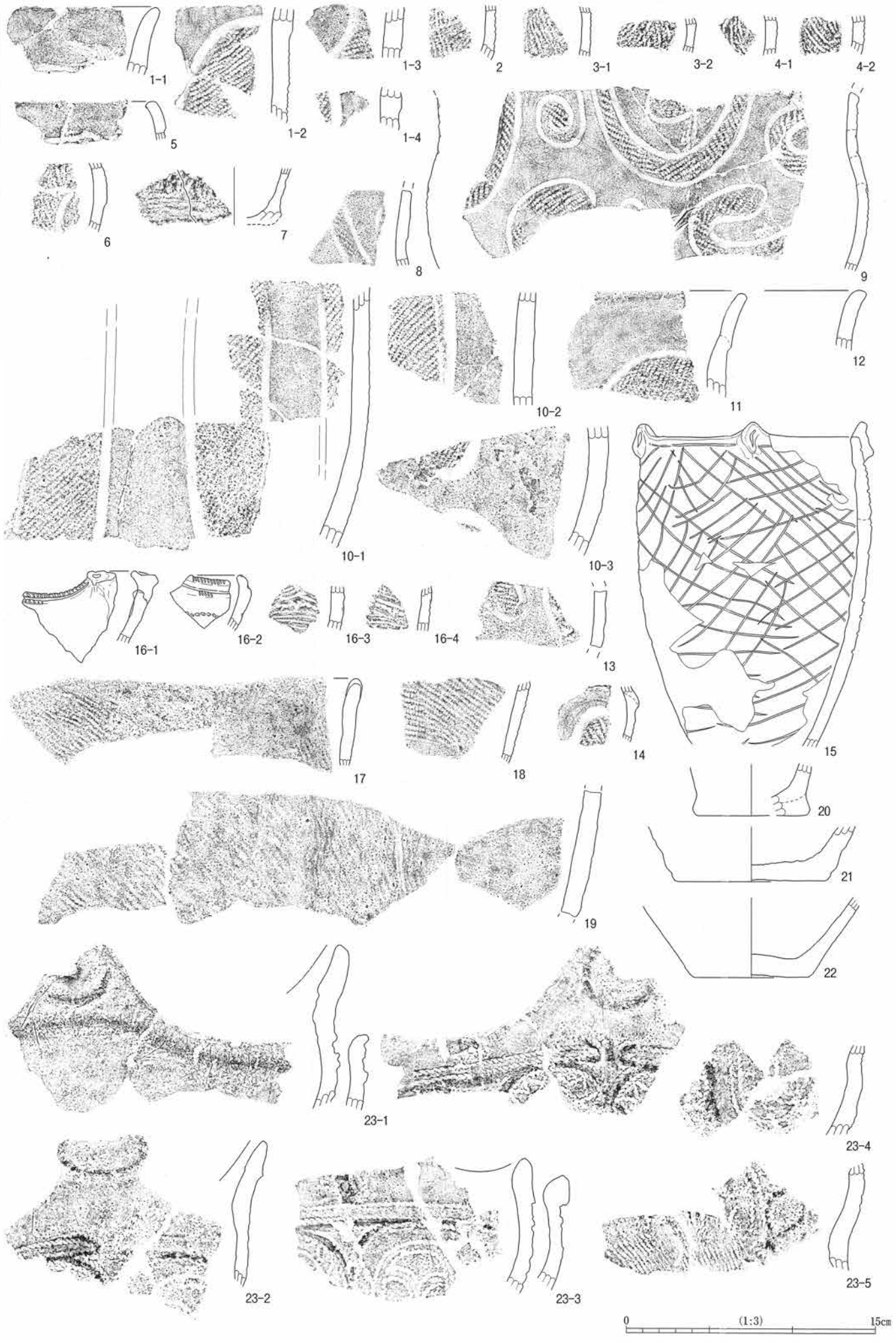
SK10
1層　灰色粘土　しまりやや強。粘性強。炭化物粒子を少量含む。灰色粘土ブロックが混入する。
2層　1層と同質であるが、粘土ブロックの混入はわずかである。

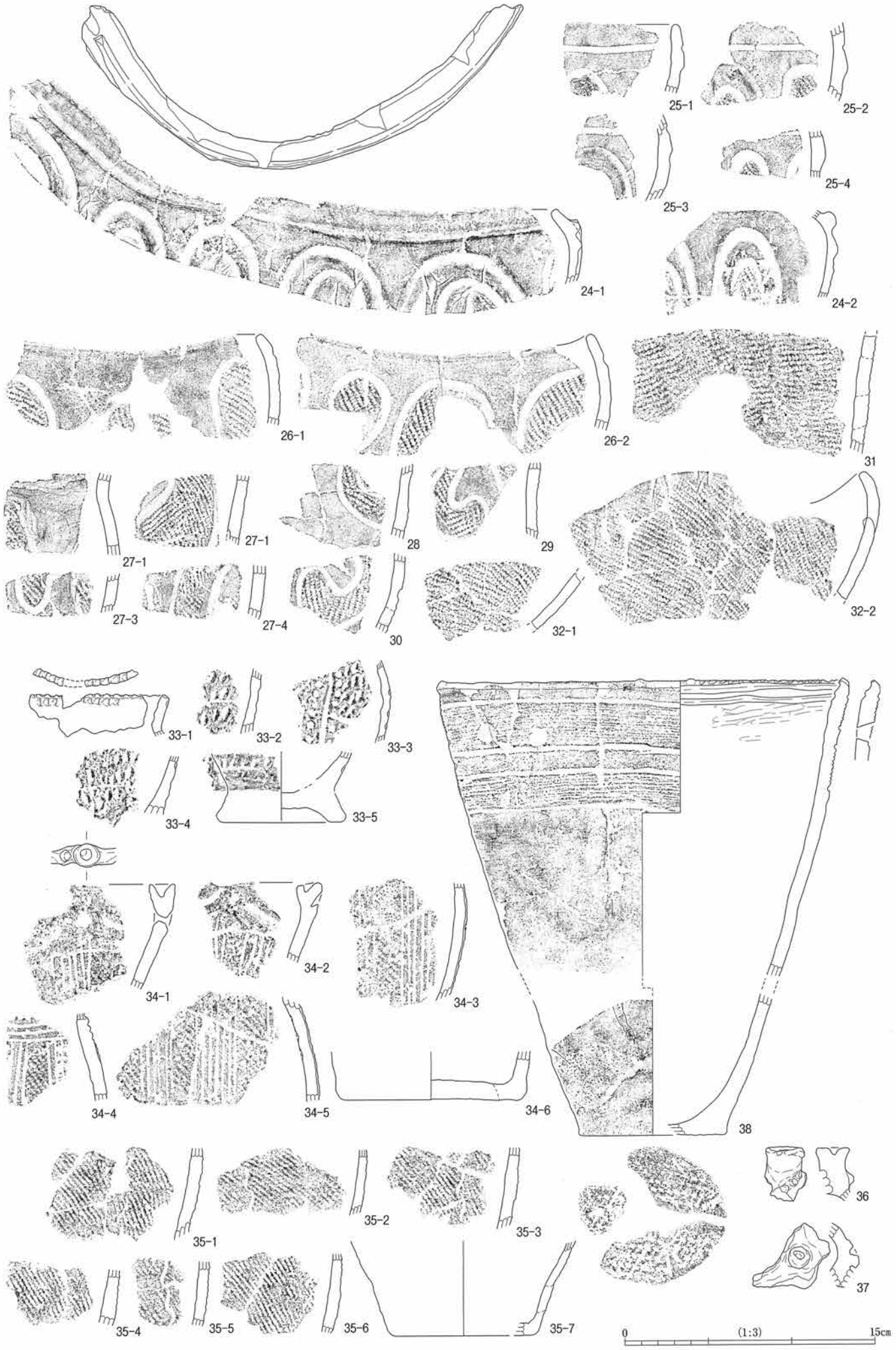


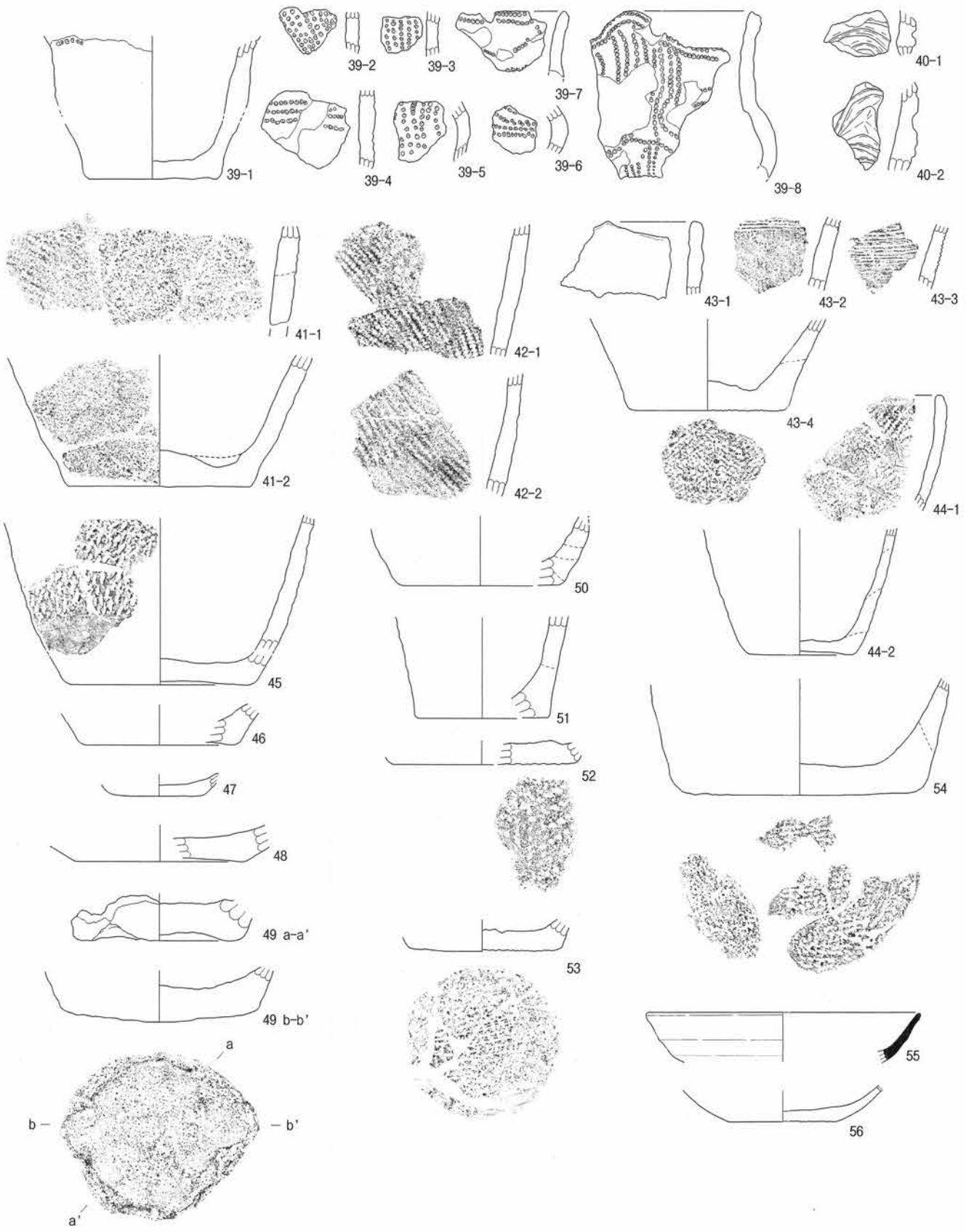
SK16
1層　褐灰色粘土　しまりやや強。粘性強。炭化物粒子を少量含む。灰色シルトがわずかに混入する。

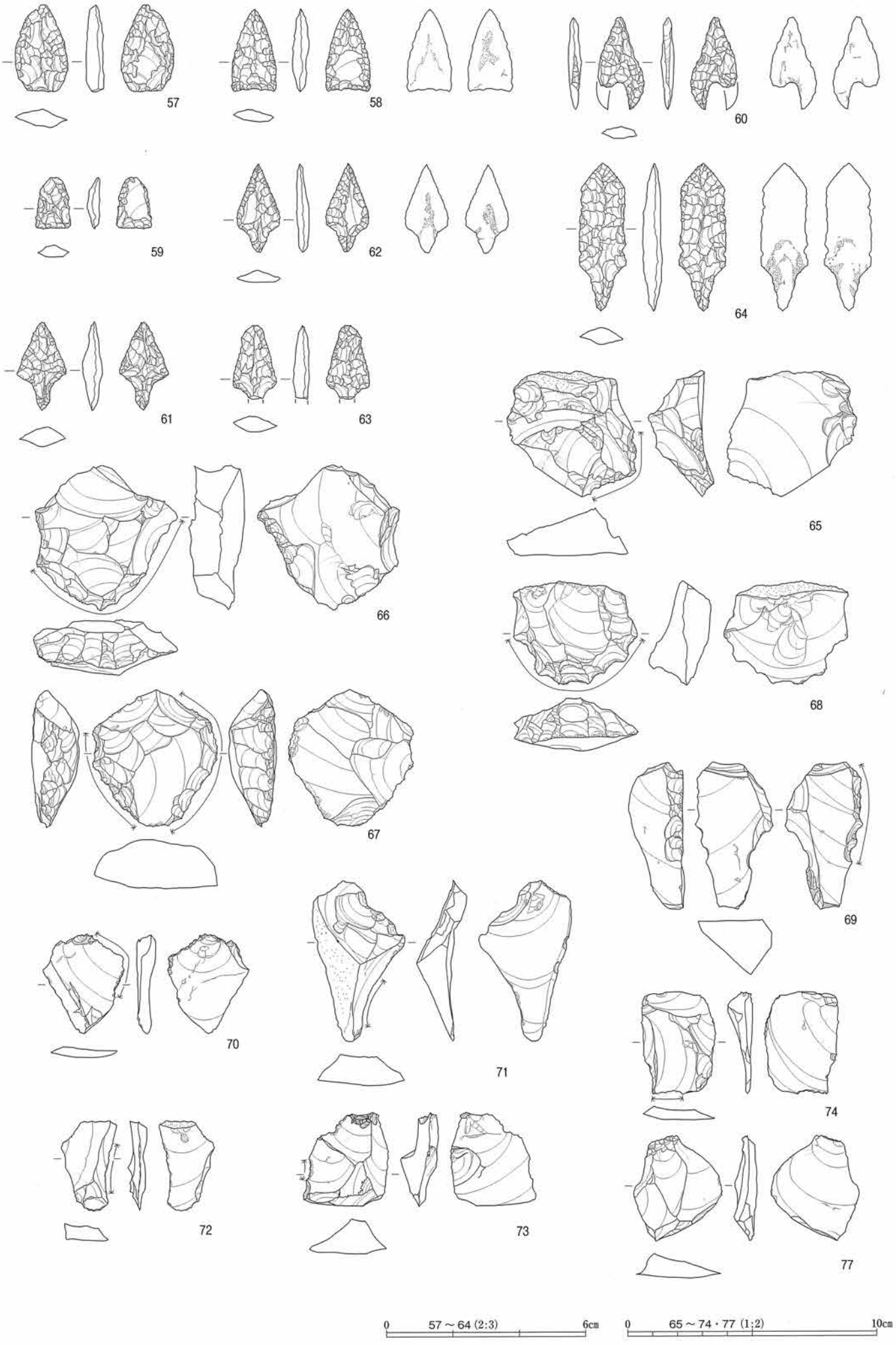
0　(1:40)　2m

中部北遺跡遺物実測図（1） 縄文時代の土器（1）

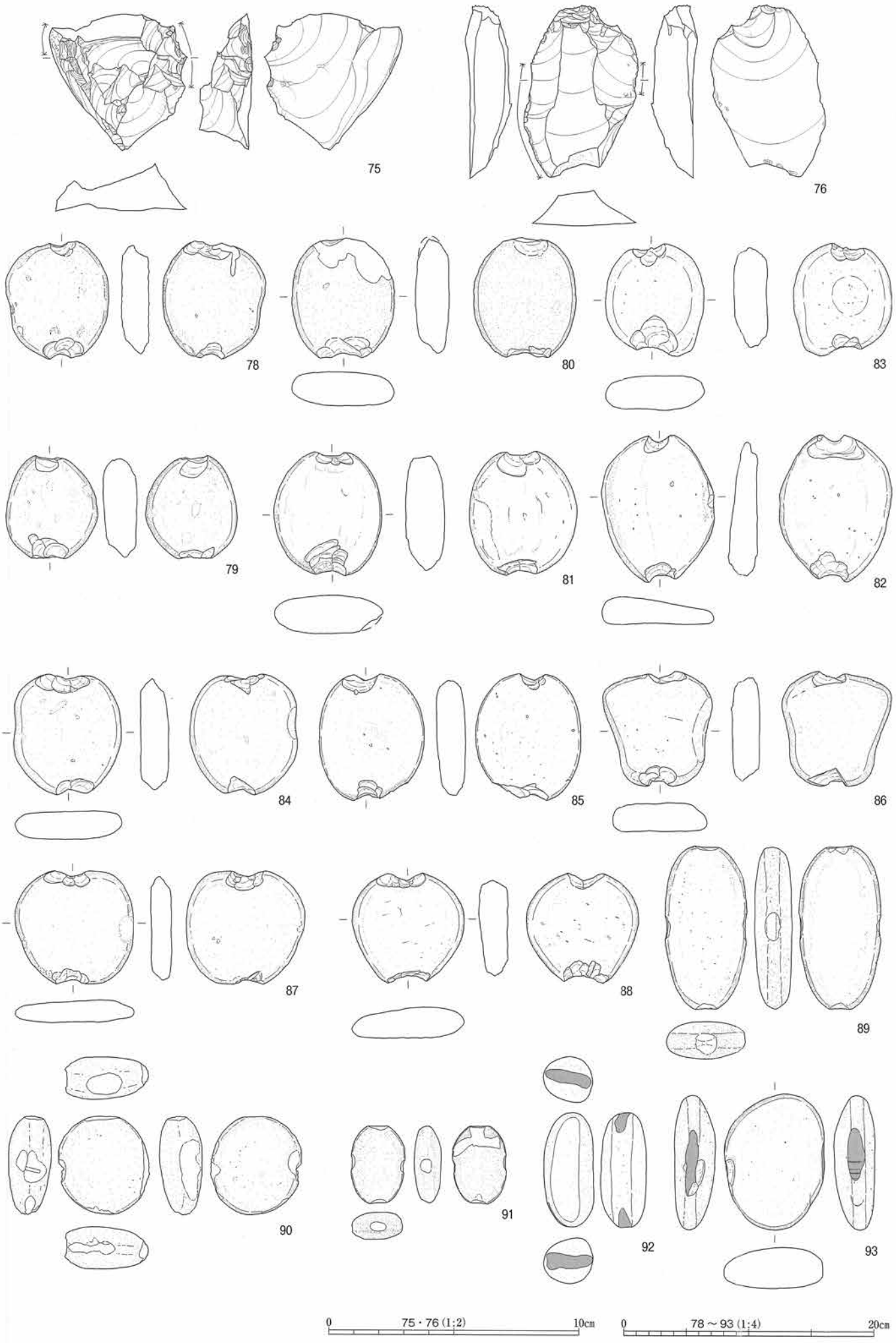


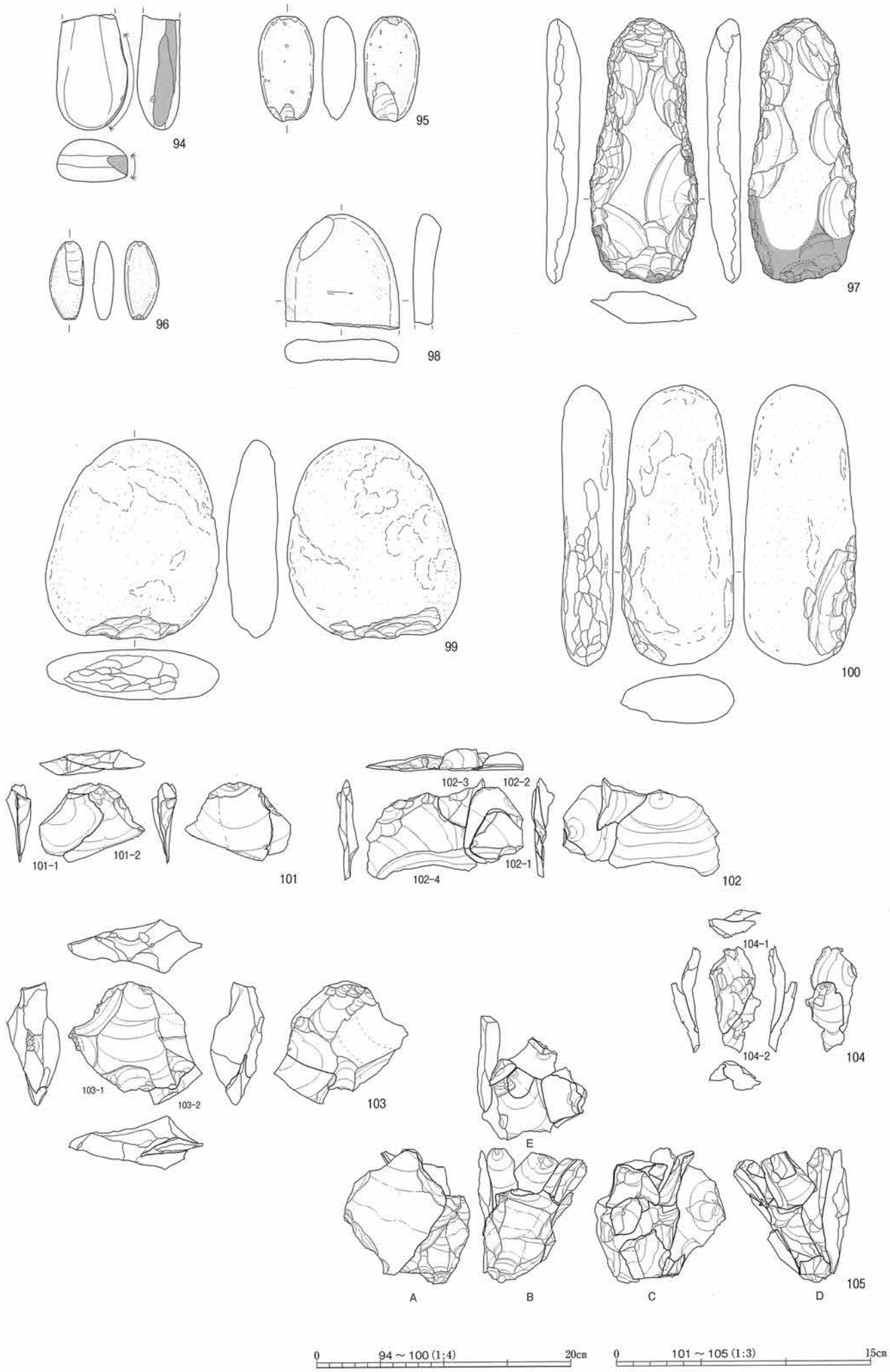

24-1
24-2
25-1
25-2
25-3
25-4
26-1
26-2
27-1
27-1
27-3
27-4
28
29
30
31
32-1
32-2
33-1
33-2
33-3
33-4
33-5
34-1
34-2
34-3
34-4
34-5
34-6
35-1
35-2
35-3
35-4
35-5
35-6
35-7
36
37
38
0
(1:3)
15cm


39-1
39-2
39-3
39-4
39-5
39-6
39-7
39-8
40-1
40-2
41-1
41-2
42-1
42-2
43-1
43-2
43-3
43-4
44-1
44-2
45
46
47
48
49 a-a'
49 b-b'
a
a'
b
b'
50
51
52
53
54
55
56
0
(1:3)
15cm


57
58
60
59
62
64
61
63
65
66
68
67
69
70
71
74
72
73
77
0　57～64 (2:3)　6cm
0　65～74・77 (1:2)　10cm

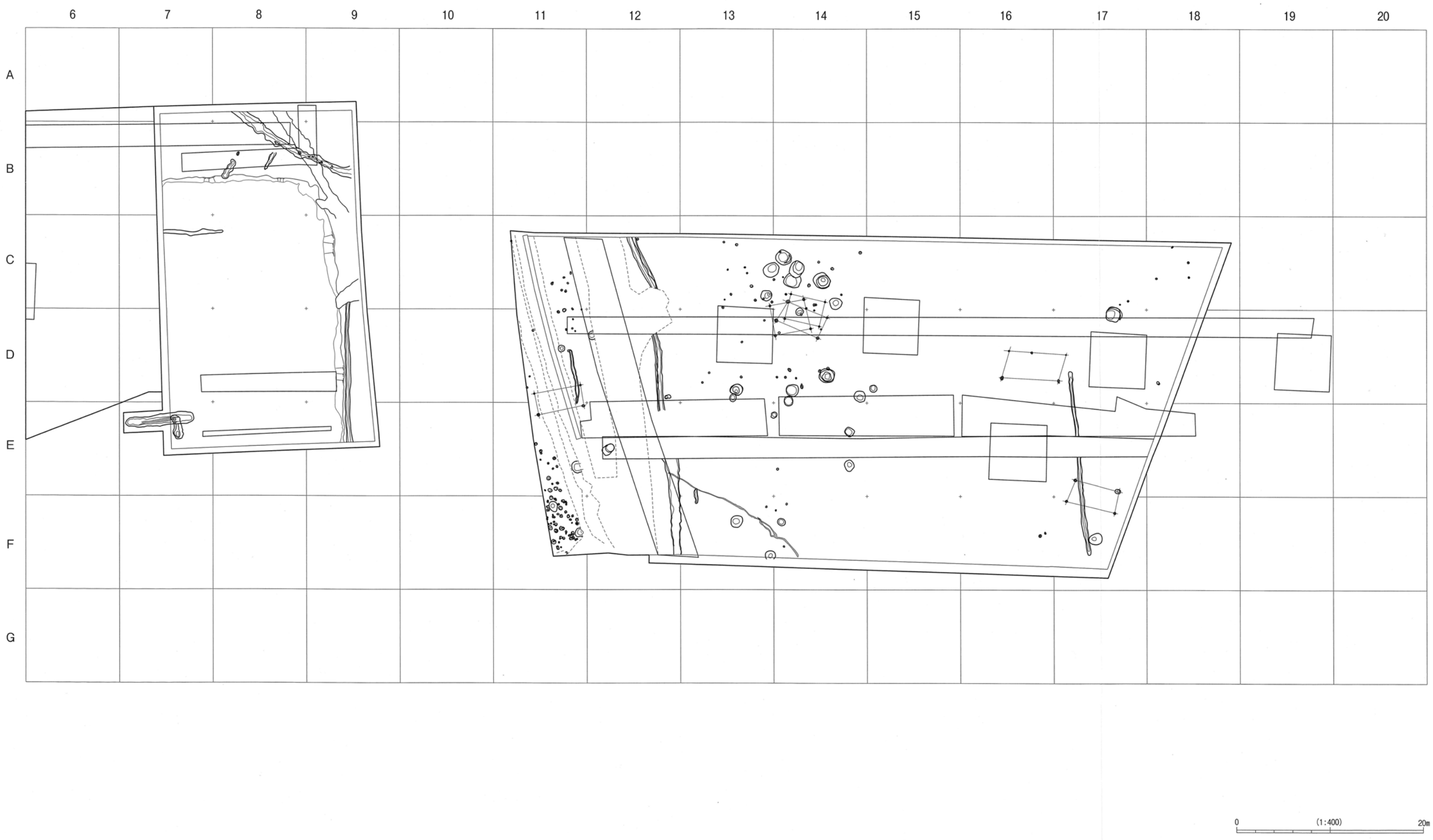
中部北遺跡遺物実測図（5） 縄文時代の石器（2）

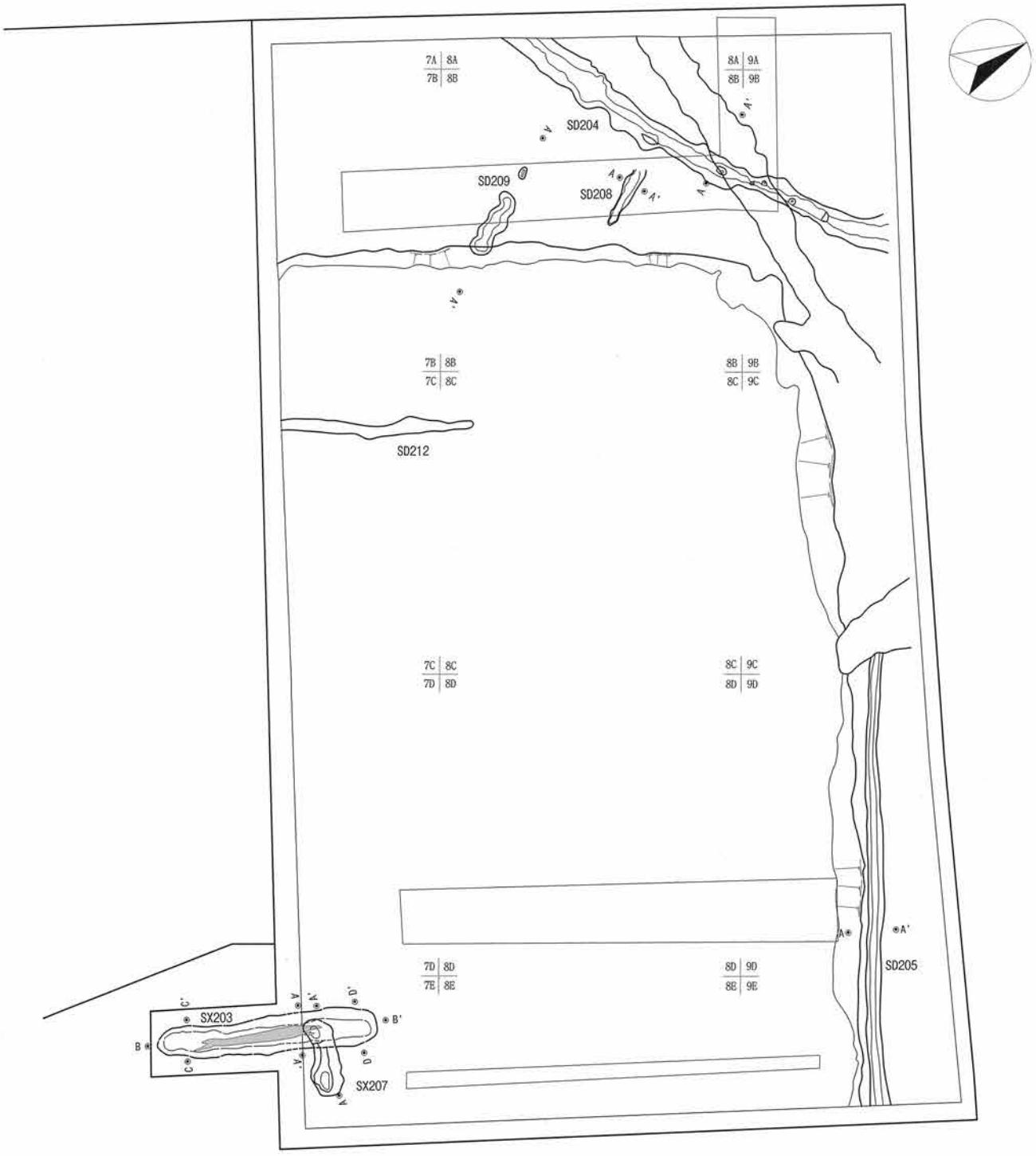


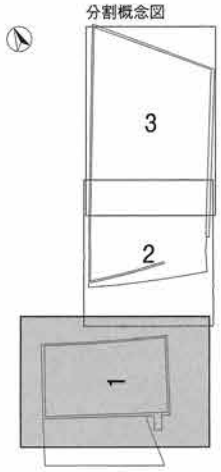

94
95
96
97
98
99
100
101-1
101-2
101
102-3
102-2
102-4
102-1
102
103-1
103-2
103
104-1
104-2
104
E
A
B
C
D
105
0
94 ～ 100 (1:4)
20cm
0
101 ～ 105 (1:3)
15cm

桜林遺跡遺構全体図

図　版 12

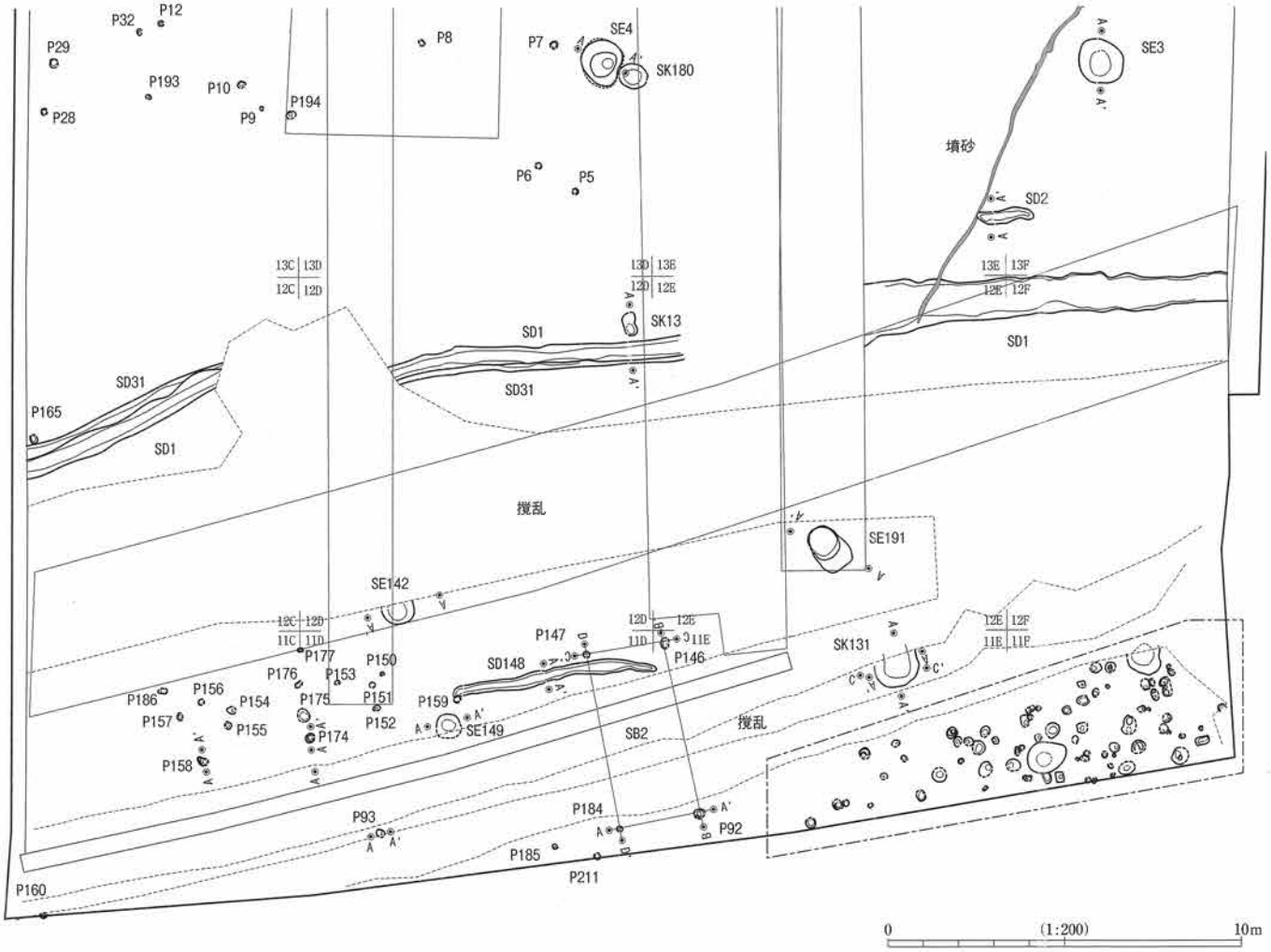


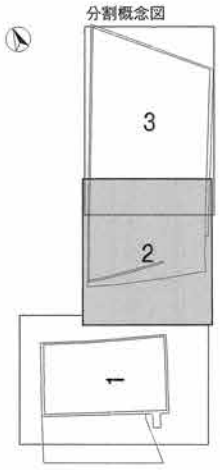

7A 8A
7B 8B
8A 9A
8B 9B
SD204
SD209
SD208
7B 8B
7C 8C
8B 9B
8C 9C
SD212
7C 8C
7D 8D
8C 9C
8D 9D
7D 8D
7E 8E
8D 9D
8E 9E
SD205
SX203
SX207

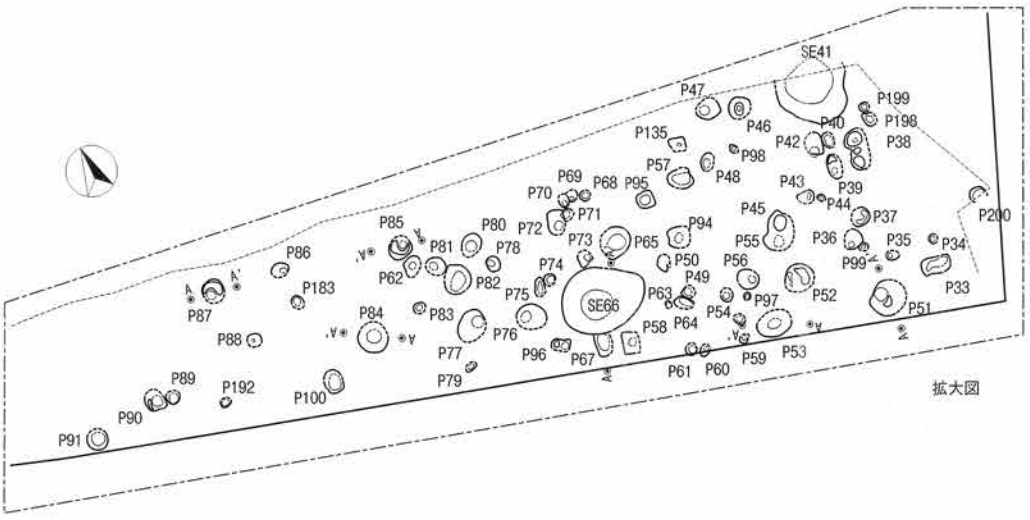

分割概念図
3
2
1

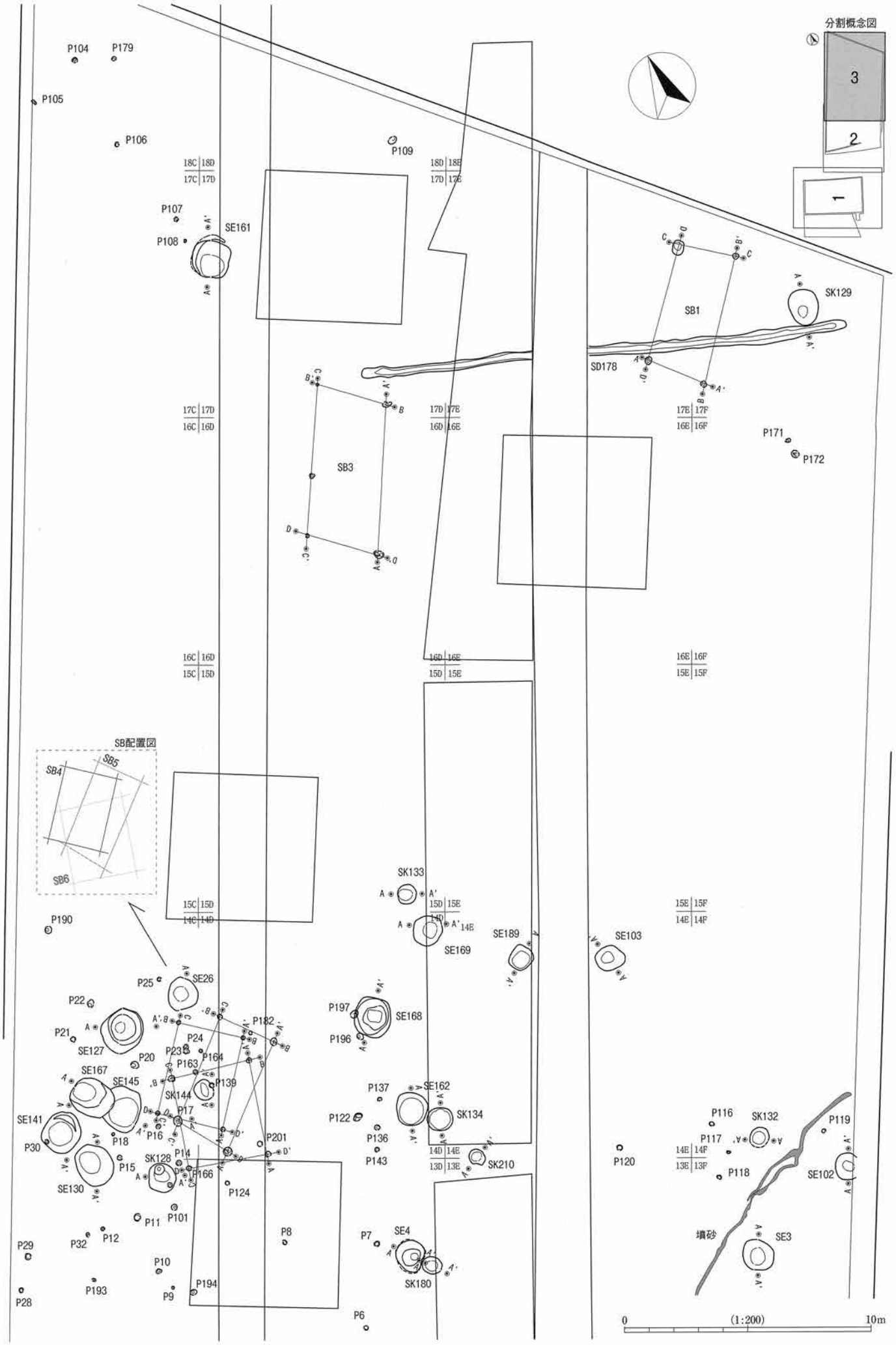
0 (1:200) 10m

桜林遺跡遺構分割図（2）

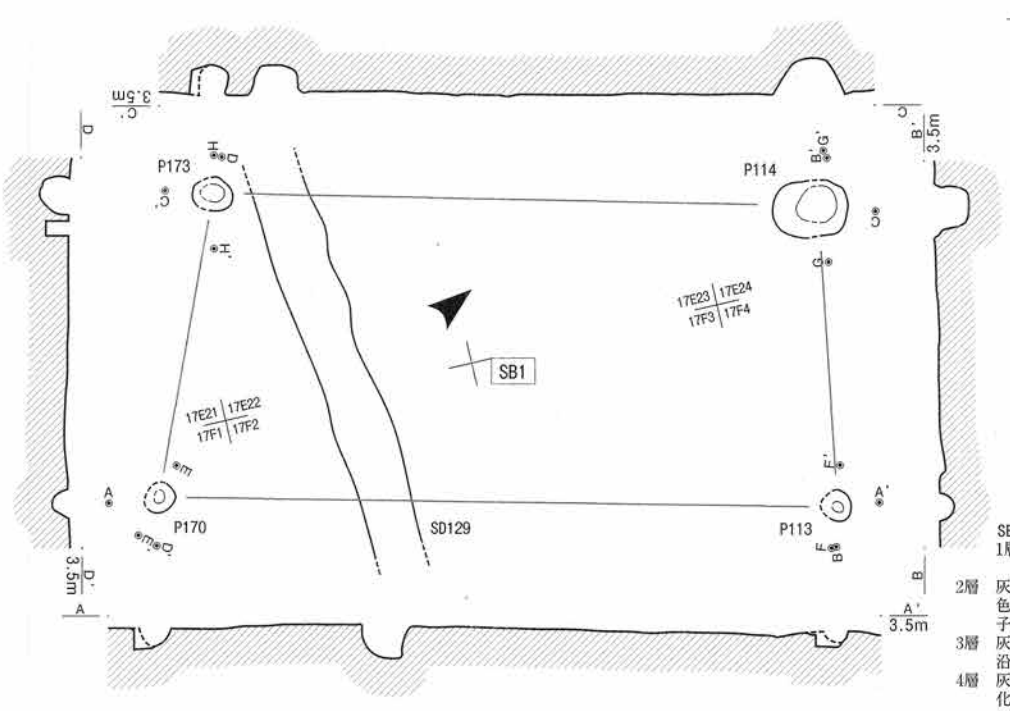

P12
P32
P29
P193
P10
P28
P9
P194
P8
P7
SE4
SK180
SE3
P6
P5
墳砂
SD2
13C 13D
12C 12D
13D 13E
12D 12E
13E 13F
12E 12F
SD1
SK13
SD31
P165
SD1
撹乱
SE191
SE142
12C 12D
11C 11D
P177
P176
P153
P150
P147
SD148
12D 12E
11D 11E
P146
SK131
12E 12F
11E 11F
P186
P156
P154
P175
P151
P159
P157
P155
P174
P152
SE149
SB2
撹乱
P158
P93
P184
P92
P185
P211
P160
0
(1:200)
10m

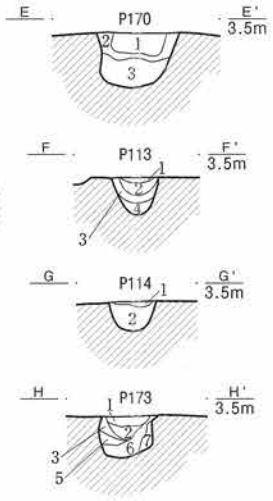

分割概念図
3
2
1


SE41
P47
P199
P46
P40
P198
P135
P42
P38
P98
P57
P48
P43
P39
P69
P68
P95
P44
P70
P71
P45
P37
P200
P94
P85
P80
P72
P73
P65
P55
P36
P35
P34
P86
P81
P78
P50
P56
P99
P74
P49
P62
P82
P183
P75
SE66
P63
P97
P52
P33
P87
P84
P83
P54
P51
P88
P76
P58
P64
P77
P96
P67
P59
P53
P61
P60
P89
P192
P100
P79
P90
P91
拡大図
0
(1:100)
5m


分割概念図
3
2
1
SB配置図
SB4
SB5
SB6
SB1
SB3
SD178
SK129
SE161
P104
P179
P105
P106
P107
P108
P109
P171
P172
SK133
SE169
SE189
SE103
SE168
P197
P196
SE162
SK134
SK210
P137
P122
P136
P143
P120
P116
SK132
P117
P118
P119
SE102
SE3
SE4
SK180
P7
P6
P8
P194
P9
P10
P193
P28
P29
P32
P12
P11
P101
P124
P166
SK128
P14
P15
SE130
P30
SE141
P18
P16
P17
SE145
SE167
SK144
P139
P163
P164
P23
P24
P20
SE127
P21
P22
P25
SE26
P182
P201
P190
SE169
SE189
SE103
SE168
SE162
SK134
SK210
SE102
SE3
SE4
SK180
SK129
SD178
SB1
SB3
P171
P172
P116
P117
P118
P119
P120
P137
P122
P136
P143
P197
P196
P190
P25
SE26
P22
P21
SE127
P20
P23
P24
P163
P164
P182
P139
SK144
P17
P16
P18
P201
SE167
SE145
SE141
P30
P15
SE130
SK128
P14
P166
P124
P11
P101
P12
P32
P29
P28
P193
P9
P10
P194
P8
P7
P6
SK133
SE169
SE189
SE103
SE168
SE162
SK134
SK210
SE102
SE3
SE4
SK180
P171
P172
P116
SK132
P117
P118
P119
P120
P137
P122
P136
P143
P197
P196
P190
P25
SE26
P22
P21
SE127
P20
P23
P24
P163
P164
P182
P139
SK144
P17
P16
P18
P201
SE167
SE145
SE141
P30
P15
SE130
SK128
P14
P166
P124
P11
P101
P12
P32
P29
P28
P193
P9
P10
P194
P8
P7
P6
SK133
SE169
SE189
SE103
SE168
SE162
SK134
SK210
SE102
SE3
SE4
SK180
SK129
SD178
SB1
SB3

桜林遺跡遺構個別図（1） SB1・SB2・SX203





SB1-P113・P114・P170・173

1層　灰黄色シルト しまり・粘性共やや強。マンガン粒子を多量、鉄分をやや多く含む。

2層　灰白色弱砂質シルト しまり・粘性共やや強。褐灰色シルトブロックがわずかに混入する。マンガン粒子を微量含む。

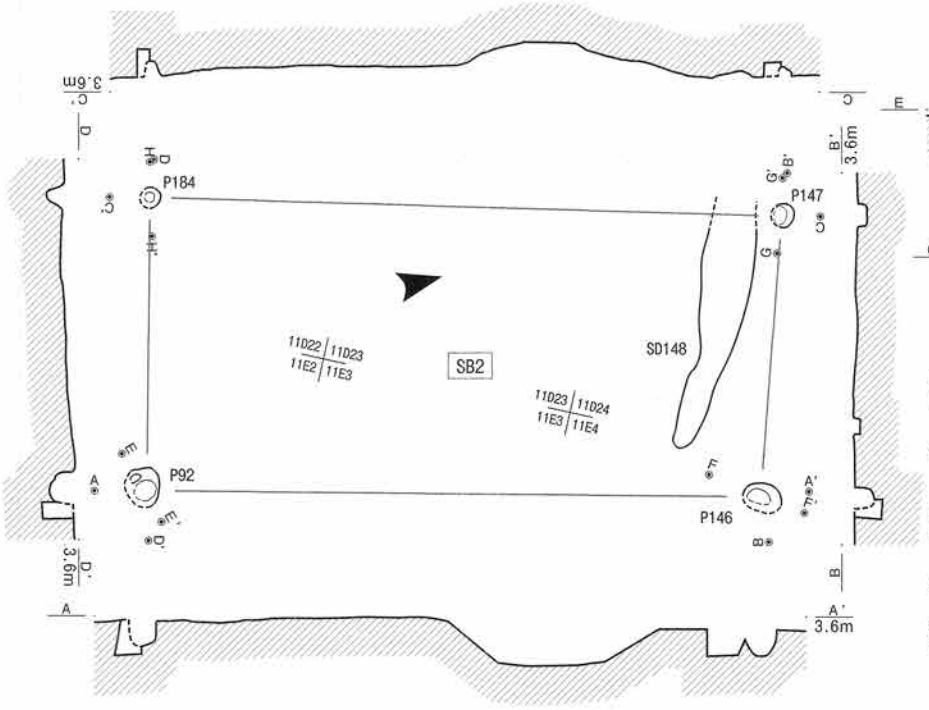
3層　灰白色弱砂質シルト しまり・粘性共やや強。壁に沿って酸化鉄の薄層が形成される。

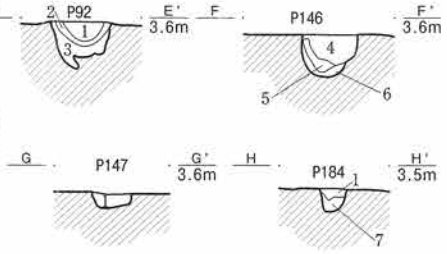
4層　灰白色砂質シルト しまり・粘性共やや弱。グライ化したV層を基本に、マンガン粒子を多量含む。壁に沿って酸化鉄の薄層が形成される。

5層　3層に近似するが、酸化鉄斑・マンガン粒子をやや多く含む。

6層　3層と同質。

7層　4層と同質。





SB2-P92・P146・P147・P184

1層　灰色シルト質粘質土 しまり・粘性共やや強。炭化物粒子を少量含む。Ⅲ層ブロックが混入する。酸化鉄斑・マンガン粒子を含む。

2層　黄褐色シルト質粘質土 しまり強。粘性やや強。Ⅲ層に褐灰色シルト質粘質土ブロックが混入する。炭化物粒子を微量含む。

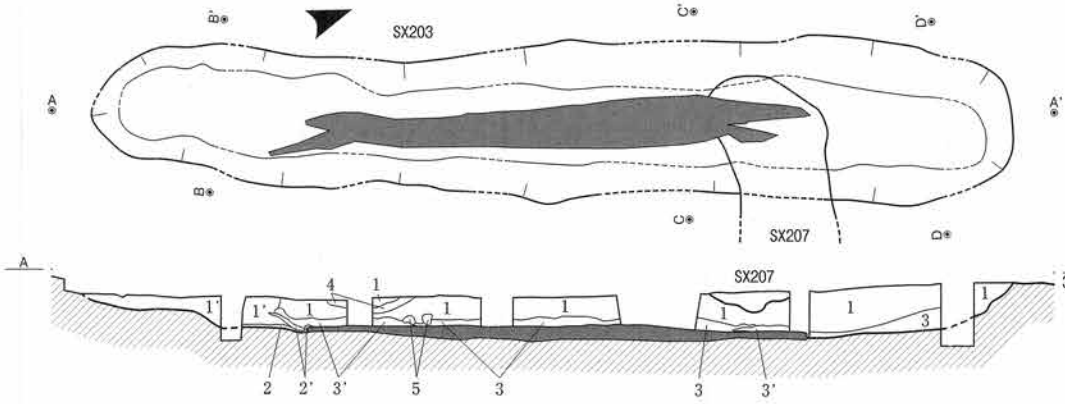
3層　2層に近似するが、粘土質強い。

4層　褐灰色シルト質粘質土 しまり・粘性共強。炭化物を微量含む。Ⅲ層小ブロック・シルトブロックが混入する。酸化鉄斑・マンガン粒子を含む。

5層　1層と近似するが、灰褐色粘土ブロック・灰黄褐色粘ブロックが混入する。炭化物をやや多く含む。

6層　1層と近似するが、粘土質強い。

7層　灰白色シルト質粘土 しまり・粘性共やや強。シルト質強い。炭化物粒子を微量含む。



SX203

1層　黄色粘土質シルト しまり・粘性共強。Ⅵ層と土色が近似する。

1'層　1層に砂が南側から流入した土層。

2層　灰黄色弱粘土質シルト しまり・粘性共やや強。弱い腐植層。

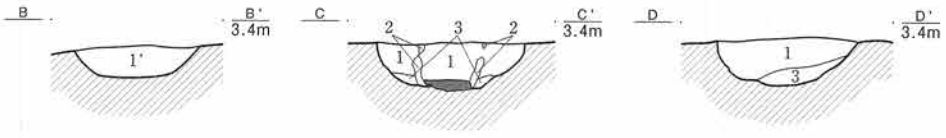
2'層　2層より強い腐植層。

3層　灰黄色弱粘土質シルト しまり・粘性共やや強。1層よりわずかに色調が暗い。

3'層　3層より砂質増加する。灰白色粘土小ブロックをわずかに含む。

4層　褐灰色粘質土 しまり・粘性共やや強。腐植層か。

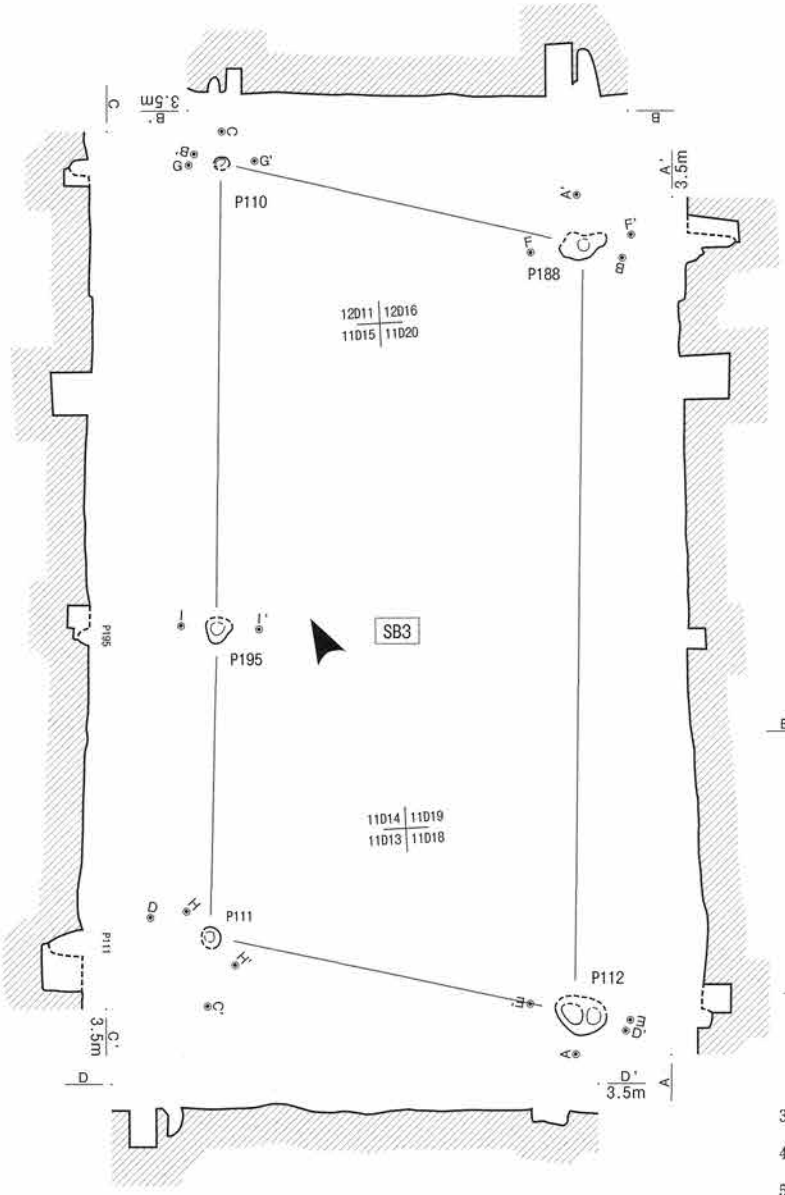
5層　灰白色粘土ブロック。

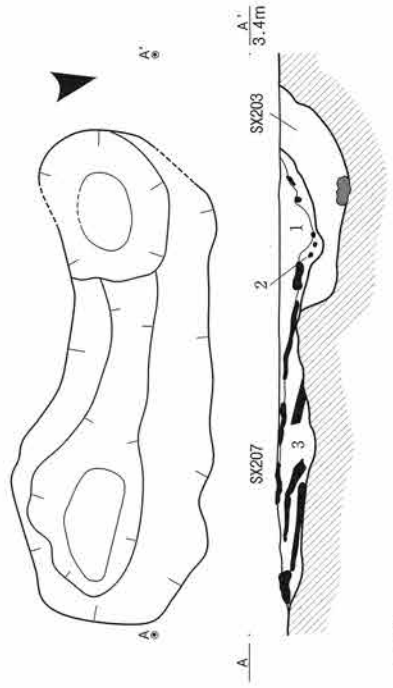


SB1・SB2 ピット断面図は S=1/40

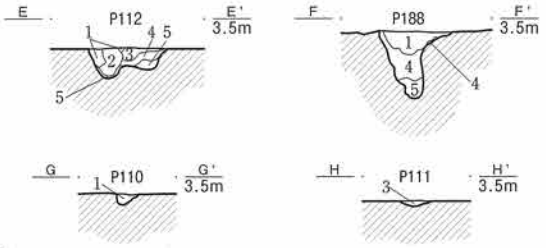
0 (1:60) 3m

0 (1:40) 2m

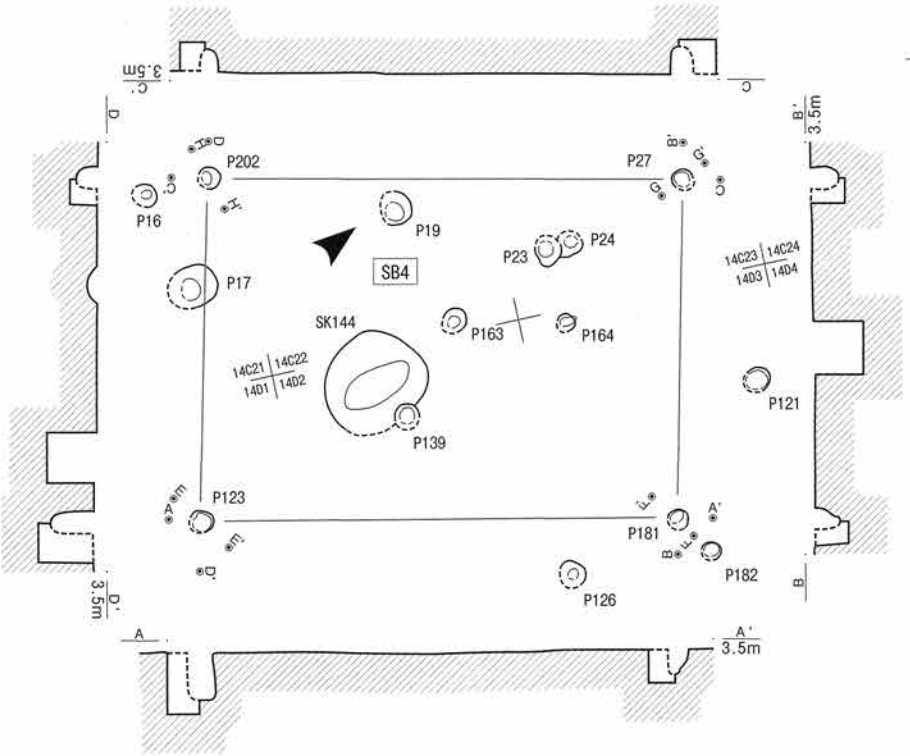


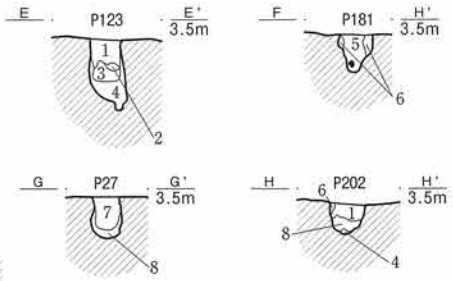


SX207
1層　灰黄色粘土質シルト　しまり・粘性共強。Ⅵ層を基本とし、Ⅱ層ブロックが混入する。
2層　1層に木炭、粒子状炭化物等が多量混入する。焼土・灰などが直径1～2cm大のブロック状に多量混入する。
3層　灰黄色粘土質シルト　1層と同質であるが、被熱によりほろほろ。木炭や炭化物粒子を少量含む。



SB3-P110・P195・P111・P112・P188
1層　灰黄褐色シルト質粘土　しまり・粘性共やや弱。炭化物粒子を微量含む。Ⅲ層ブロックが混入する。マンガン粒子を多量含む。壁に沿って酸化鉄の薄層が形成される。
2層　褐灰色粘土シルト　しまり・粘性共やや弱。Ⅲ層が混入する。マンガン粒子を多量含む。
3層　灰白色シルト　しまり・粘性共やや弱。炭化物粒子を微量含む。Ⅳ層が斑に混入する。酸化鉄斑・マンガン粒子を多量含む。
4層　灰白色シルト　しまりやや強。粘性やや弱。部分的に粘質土が混入する。酸化鉄斑・マンガン粒子を少量含む。
5層　灰黄褐色シルト質粘土　しまり・粘性共やや強。灰白色シルトブロックが混入する。酸化鉄斑・マンガン粒子を少量含む。





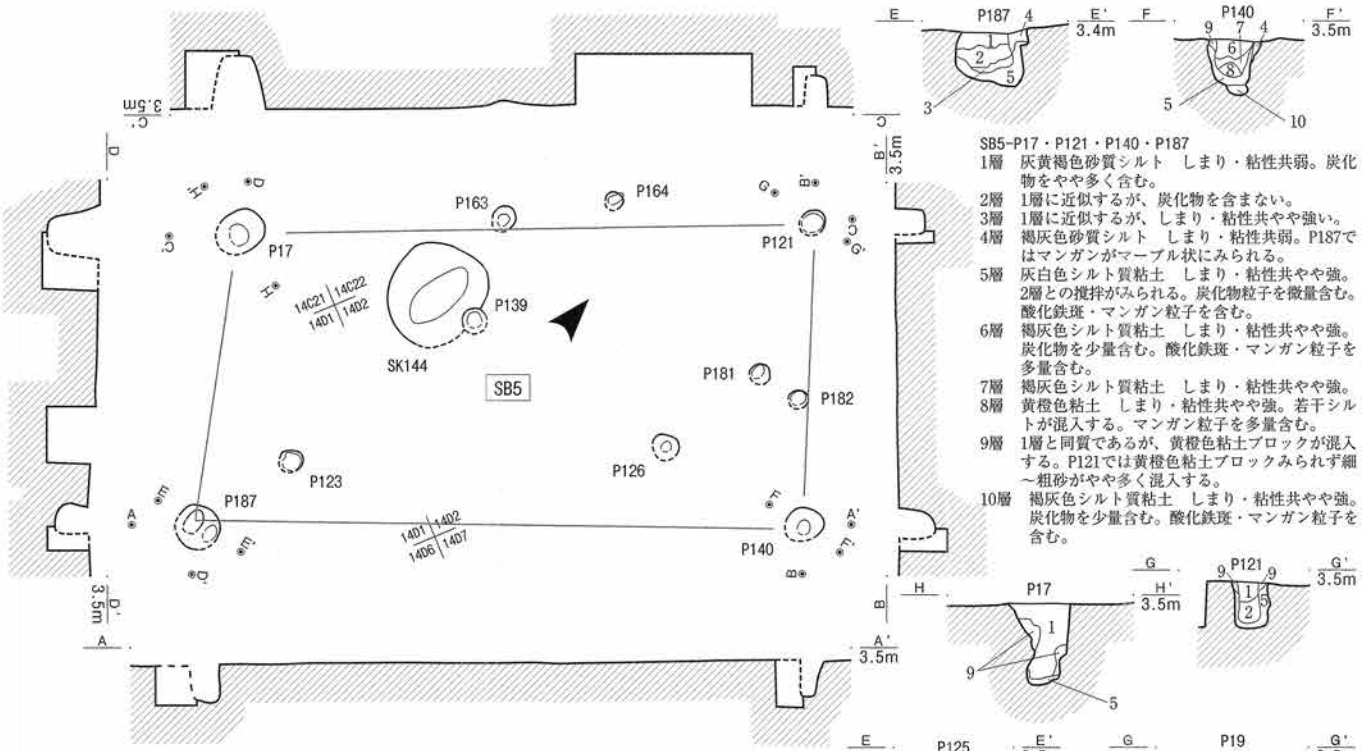
SB4-P27・P123・P181・P202
1層　褐灰色シルト質粘土　しまり・粘性共やや強。炭化物粒子を少量含む。酸化鉄斑・マンガン粒子を多量含む。
2層　黄橙色粘土　しまり・粘性共やや強。灰白色シルト質粘土小ブロックが混入する。
3層　褐灰色シルト質粘土　しまり・粘性共やや強。
4層　灰白色シルト質粘土　しまり・粘性共やや強。炭化物粒子を微量含む。酸化鉄斑・マンガン粒子を含む。
5層　灰黄褐色砂質シルト　しまり・粘性共弱。炭化物をやや多く含む。マンガン粒子が顕著にみられる。
6層　1層とⅢ層ブロックの混成土　しまり・粘性共弱。
7層　灰黄褐色シルト質粘土　しまり・粘性共やや弱。炭化物粒子を微量含む。Ⅲ層ブロックが混入する。マンガン粒子を多量含む。壁に沿って酸化鉄の薄層が形成される。
8層　灰白色シルト質粘土　しまり・粘性共やや強。炭化物粒子を微量含む。酸化鉄斑・マンガン粒子を含む。

SB3・SB4 ピット断面図及び SX207 は S=1/40

0 (1:60) 3m

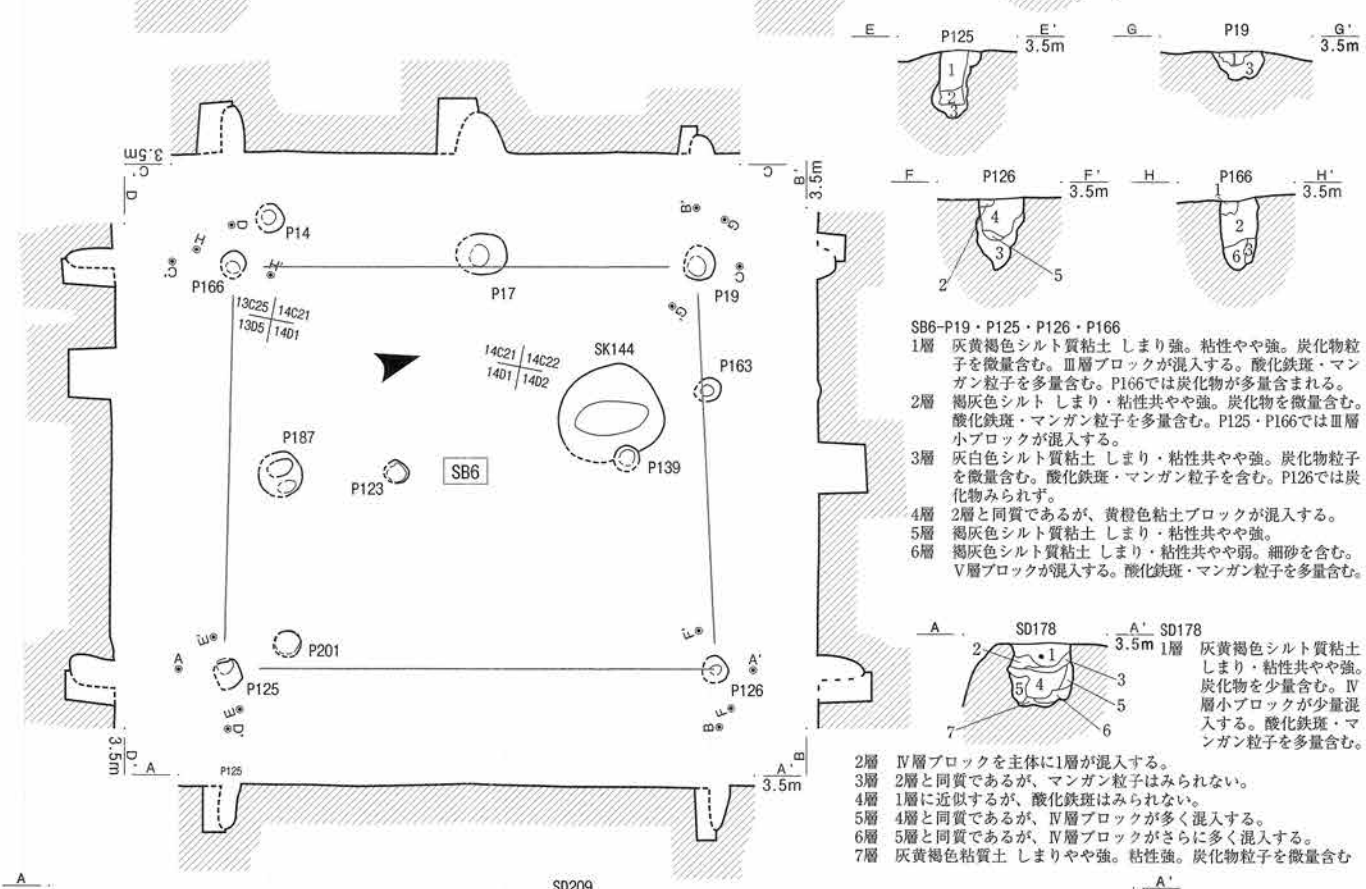
0 (1:40) 2m

桜林遺跡遺構個別図（3） SB5・SB6・SD2・SD148・SD178・SD204・SD205・SD208・SD209



SB5-P17・P121・P140・P187

1層　灰黄褐色砂質シルト　しまり・粘性共弱。炭化物をやや多く含む。
2層　1層に近似するが、炭化物を含まない。
3層　1層に近似するが、しまり・粘性共やや強い。
4層　褐灰色砂質シルト　しまり・粘性共弱。P187ではマンガンがマーブル状にみられる。
5層　灰白色シルト質粘土　しまり・粘性共やや強。2層との攪拌がみられる。炭化物粒子を微量含む。酸化鉄斑・マンガン粒子を含む。
6層　褐灰色シルト質粘土　しまり・粘性共やや強。炭化物を少量含む。酸化鉄斑・マンガン粒子を多量含む。
7層　褐灰色シルト質粘土　しまり・粘性共やや強。
8層　黄橙色粘土　しまり・粘性共やや強。若干シルトが混入する。マンガン粒子を多量含む。
9層　1層と同質であるが、黄橙色粘土ブロックが混入する。P121では黄橙色粘土ブロックみられず細～粗砂がやや多く混入する。
10層　褐灰色シルト質粘土　しまり・粘性共やや強。炭化物を少量含む。酸化鉄斑・マンガン粒子を含む。

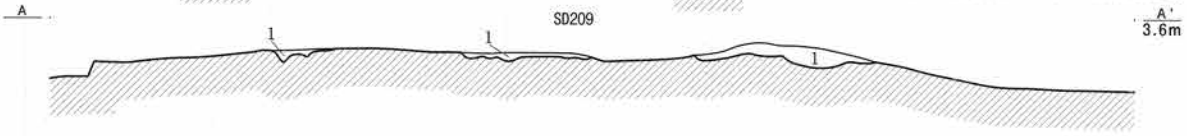


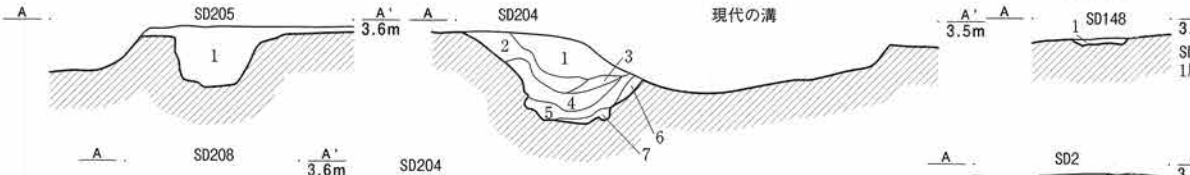
SB6-P19・P125・P126・P166

1層　灰黄褐色シルト質粘土　しまり強。粘性やや強。炭化物粒子を微量含む。Ⅲ層ブロックが混入する。酸化鉄斑・マンガン粒子を多量含む。P166では炭化物が多量含まれる。
2層　褐灰色シルト　しまり・粘性共やや強。炭化物を微量含む。酸化鉄斑・マンガン粒子を多量含む。P125・P166ではⅢ層小ブロックが混入する。
3層　灰白色シルト質粘土　しまり・粘性共やや強。炭化物粒子を微量含む。酸化鉄斑・マンガン粒子を含む。P126では炭化物みられず。
4層　2層と同質であるが、黄橙色粘土ブロックが混入する。
5層　褐灰色シルト質粘土　しまり・粘性共やや強。
6層　褐灰色シルト質粘土　しまり・粘性共やや弱。細砂を含む。Ⅴ層ブロックが混入する。酸化鉄斑・マンガン粒子を多量含む。

SD178

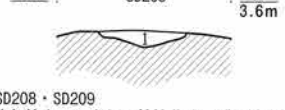
1層　灰黄褐色シルト質粘土　しまり・粘性共やや強。炭化物を少量含む。Ⅳ層小ブロックが少量混入する。酸化鉄斑・マンガン粒子を多量含む。
2層　Ⅳ層ブロックを主体に1層が混入する。
3層　2層と同質であるが、マンガン粒子はみられない。
4層　1層に近似するが、酸化鉄斑はみられない。
5層　4層と同質であるが、Ⅳ層ブロックが多く混入する。
6層　5層と同質であるが、Ⅳ層ブロックがさらに多く混入する。
7層　灰黄褐色粘質土　しまりやや強。粘性強。炭化物粒子を微量含む





SD148

1層　褐灰色シルト質粘土　しまり・粘性共やや強。炭化物を少量含む。酸化鉄斑・マンガン粒子を含む。



SD205・SD208・SD209

1層　灰黄色粘土　しまり・粘性共強。酸化鉄斑・直径1mmのマンガン粒子を多量含む。SD205では灰色砂やⅢ層小ブロックがみられる。

SD204

1層　灰黄色粘土　しまり・粘性共強。酸化鉄斑・マンガン粒子を多量含む。西側はグライ化する。
2層　1層と同質であるが酸化して土色が気味がかる。
3層　灰白色粘土質シルト　しまり・粘性共やや強。酸化鉄斑を多量含む。
4層　2層と同質であるが、土色は若干黒ずむ。酸化鉄斑を多量含む。
5層　Ⅵ層ブロックと炭化物の混成土。酸化鉄斑を多量含む。
6層　3層と同質。
7層　地山のⅥ層に炭化物が微量混入する。酸化鉄斑を多量含む。

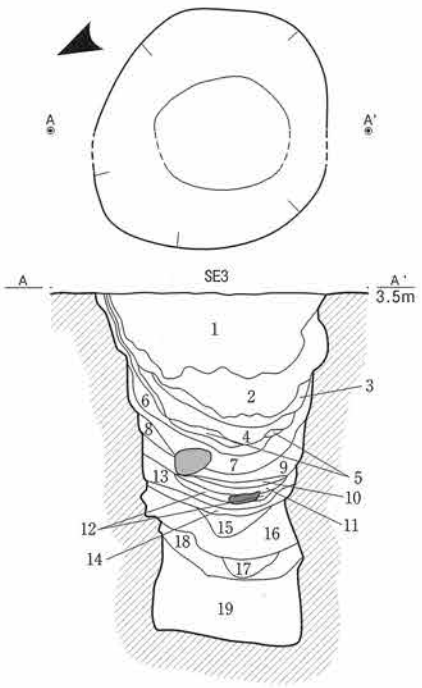
SD2

1層　灰色シルト　しまりやや強。粘性弱。

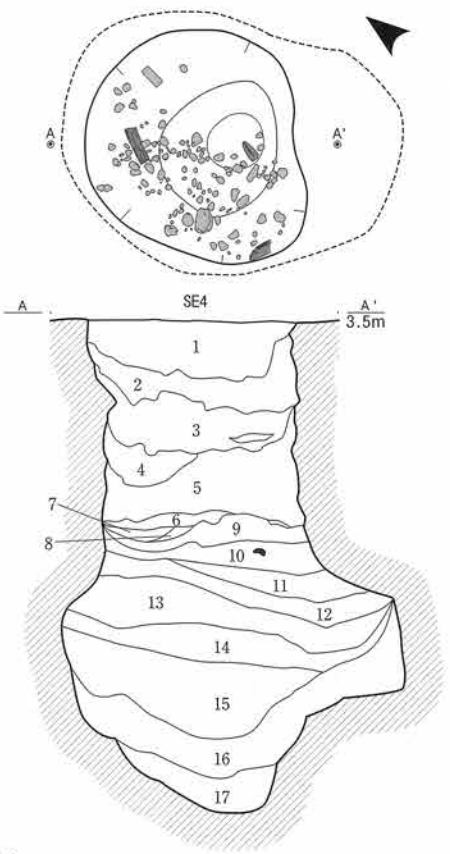
SB5・SB6 ピット・各 SD 断面図は S=1/40

0 (1:60) 3m

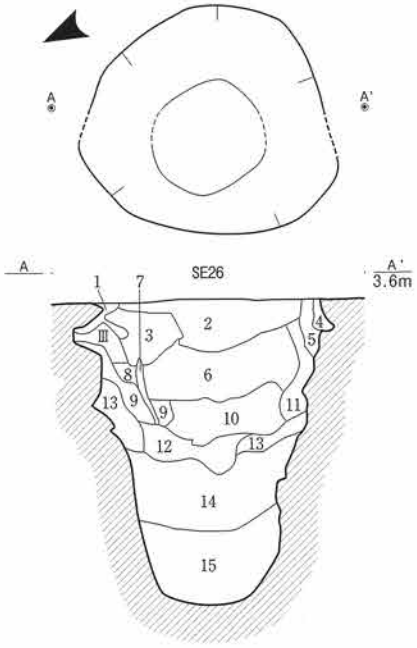
0 (1:40) 2m



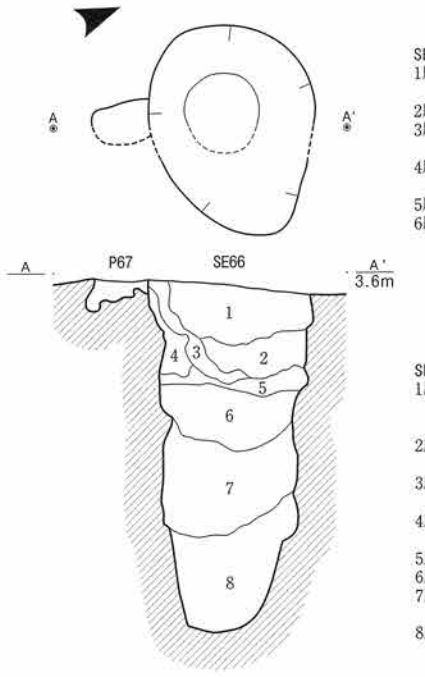
SE3
1層　褐灰色シルト　しまり強。粘性弱。Ⅲ層ブロックが少量混入する。酸化鉄斑・マンガン粒子をやや多く含む。
2層　1層と同質であるが、Ⅲ層大ブロックが多量混入する。
3層　褐灰色シルト　しまりやや弱。粘性強。1層と近似する土を基本に、炭化物・Ⅲ層粒子をやや多く含む。
4層　黄褐色シルト　しまりやや弱。粘性やや強。炭化物・Ⅲ層粒子を少量含む。酸化鉄斑・マンガン粒子をやや多く含む。
5層　黒色炭化物層　しまり弱。粘性やや強。
6層　褐灰色シルト　しまり・粘性共やや弱。Ⅲ層が全体に混入する。炭化物を少量、主に下位に含む。
7層　灰黄褐色シルト　しまり弱。粘性やや強。壁の崩落によるものとみられる弱粘土化したⅢ層で構成される。
8層　褐灰色弱粘土質シルト　しまり弱。粘性やや強。炭化物を多量含む。
9層　黄橙色粘土　しまり・粘性共やや強。崩落あるいは裏込と思われるⅥ層ブロックとの混成土。
10層　8層と同質。
11層　9層と同質。
12層　8層に近似するが、炭化物をやや多く含む。
13層　褐灰色粘土質シルト　しまり弱。粘性やや強。直径2cm大のブロックと粒子の混成土。外縁に酸化鉄斑・マンガン粒を含む。
14層　13層に近似し、外縁に酸化鉄斑・マンガン粒を多量含む。
15層　褐灰色粘土質シルト　しまり弱。粘性やや弱。均質粘土シルト層。
16層　13層と同質。
17層　灰白色シルト　しまり・粘性共やや強。
18層　14層と同質。
19層　褐灰色シルト質粘土　しまり・粘性共やや強。均質シルト層。外縁に酸化層が形成される。下位は酸化した細砂。



SE4
1層　黄褐色シルト　しまりやや強。粘性やや弱。炭化物粒子を少量含む。マンガン粒子を含む。
2層　1層と同質であるが、Ⅲ層ブロックが少量混入する。Ⅲ層ブロックは西端で多くみられ、崩落した壁土の可能性がある。
3層　黄褐色シルト　しまり・粘性共やや強。灰色砂をやや多く含む。炭化物粒子、Ⅲ層粒子を若干含む。
4層　3層に近似し、炭化物をやや多く含む。灰色砂の混入は3層より若干少ない。Ⅲ層ブロックがわずかに混入する。
5層　黄橙色粘土とⅤ層ブロックの混成土　しまり・粘性共強。
6層　褐灰色粘土　しまり弱。粘性強。
7層　黒褐色炭化物層　しまり・粘性共弱。
8層　灰色粘土シルト　しまりやや弱。粘性やや強。
9層　黒褐色弱粘質土　しまり弱。粘性中。大半が腐植土層。
10層　黒褐色土と灰色粘土質シルトの混成土　しまり弱。粘性やや弱。遺物出土。
11層　9層に近似する。
12層　褐灰色粘土シルト　しまりやや強。粘性強。褐灰色粘土質シルトとの混成土。
13層　褐灰色粘土　しまりやや弱。粘性強。褐灰色粘土質シルト小ブロックが少量混入する。
14層　12層と同質。
15層　13層と同質。木製品出土。
16層　12層に近似するが、外縁に酸化鉄層が形成される。
17層　褐灰色粘土シルト　しまりやや弱。粘性強。黒褐色粘土シルトを少量含む。

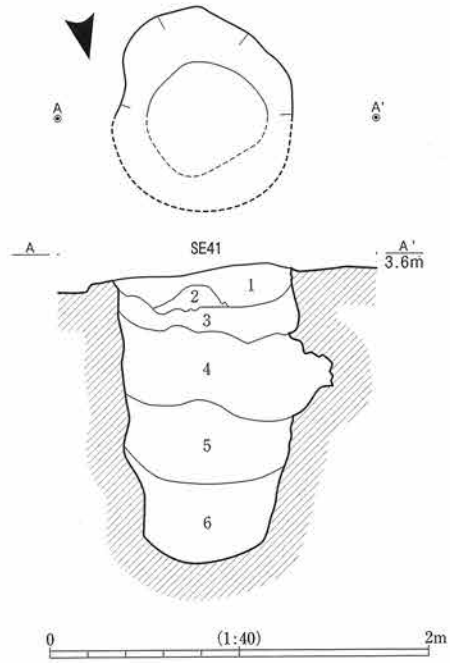


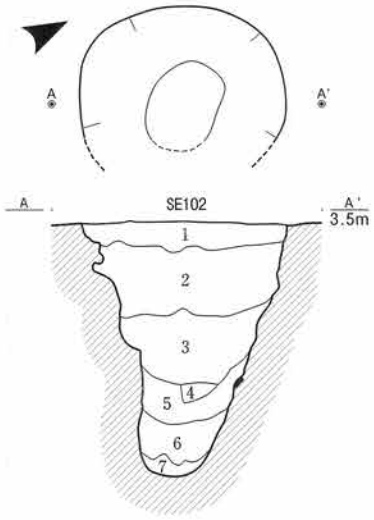
SE26
1層　Ⅰ層に近似する粗砂。根による攪乱か。
2層　灰黄褐色弱砂質シルト　しまり・粘性共やや強。炭化物粒子を少量含む。Ⅲ層ブロックがやや多く混入する。マンガン粒子を含む。
3層　灰黄褐色弱砂質シルト　しまり・粘性共やや強。Ⅲ～Ⅵ層を多量含む。
4層　灰黄褐色粘土質シルト　しまりやや弱。粘性やや強。Ⅲ層ブロックが少量混入する。
5層　灰黄色弱砂質シルト　しまり・粘性共やや強。崩落した壁土。
6層　灰黄褐色弱砂質シルト　しまり・粘性共やや強。Ⅲ層ブロックが多量混入する。酸化鉄斑・マンガン粒子を少量含む。
7層　灰黄褐色シルト　しまりやや弱。粘性やや強。Ⅲ層ブロックが少なく、粘土質が強い。
8層　灰黄褐色粘土質シルト　しまり・粘性共やや強。Ⅲ層ブロックが多量混入する。
9層　灰黄褐色シルト　しまり・粘性共やや強。Ⅲ層ブロックがやや多く混入する。
10層　灰黄褐色粘土質シルトとⅢ層ブロックの混成土　しまりやや弱。粘性やや強。
11層　10層と近似するが、灰黄褐色シルトを少量含む。
12層　褐灰色粘土質シルト　しまり・粘性共やや強。Ⅲ～Ⅵ層ブロックがやや多く混入する。有機質にやや富む。本層以下は土層がグライ化する。
13層　灰黄褐色砂質シルトとⅢ層大ブロックの混成土　しまり・粘性共やや強。
14層　褐灰色シルト質粘土　しまり・粘性共強。Ⅲ～Ⅵ層ブロックを少量含む。
15層　14層に近似するが、グライ化の度合いが増化する。



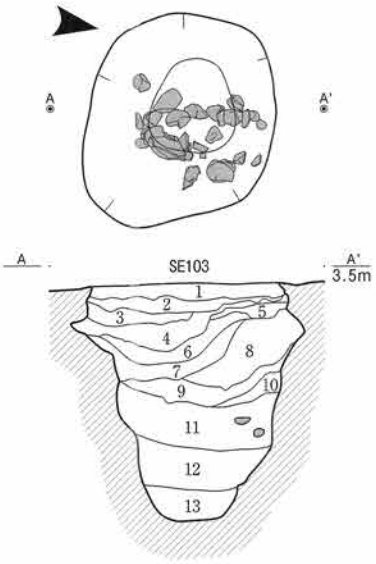
SE41
1層　褐灰色シルト質粘土　しまり・粘性共やや強。炭化物粒子を少量含む。Ⅲ層小ブロックが混入する。酸化鉄斑を多量含む。
2層　1層と近似するが、酸化鉄斑が少ない。
3層　褐灰色シルト質粘土　しまり・粘性共やや強。炭化物粒子を少量含む。Ⅲ層小ブロックが混入する。
4層　灰色シルト質粘土　しまり強。粘性やや強。炭化物粒子を少量含む。灰色粘質土ブロックが混入する。東側からの流入土か。
5層　4層に近似するが、炭化物粒子をやや多く含む。
6層　暗灰色シルト質粘土　しまりやや強。粘性強。炭化物粒子を少量含む。灰色粘質土ブロックが混入する。

SE66
1層　灰黄褐色シルト質粘土　しまり強。粘性やや強。炭化物粒子を少量含む。灰白色細砂小ブロックが混入する。酸化鉄斑・マンガン粒をやや多く含む。
2層　褐灰色シルト質粘土　しまり・粘性共やや強。炭化物粒子を少量含む。灰白色シルト質粘土ブロックが混入する。
3層　褐灰色シルト質粘土　しまりやや強。粘性強。炭化物粒子を少量含む。灰白色シルト粘土小ブロックが混入する。
4層　黒褐色シルト質粘土　しまり強。粘性やや強。炭化物粒子を少量含む。Ⅲ層小ブロックが混入する。
5層　2層と近似するが、黒褐色土ブロックを含む。
6層　4層と近似するが、炭化物・炭化腐植物を多量含む。
7層　灰黄褐色粘土質シルト　しまり強。粘性やや強。灰黄褐色土ブロックが混入する。黒褐色土が斑に混入する。
8層　7層と近似するが、黒褐色土小ブロックが混入する。外縁に酸化鉄層が形成される。

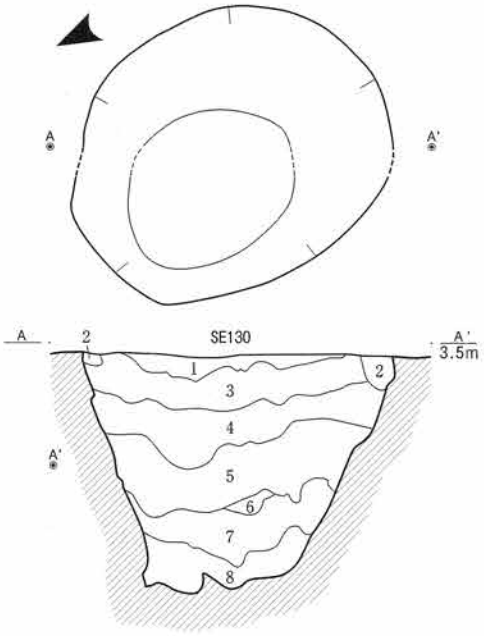




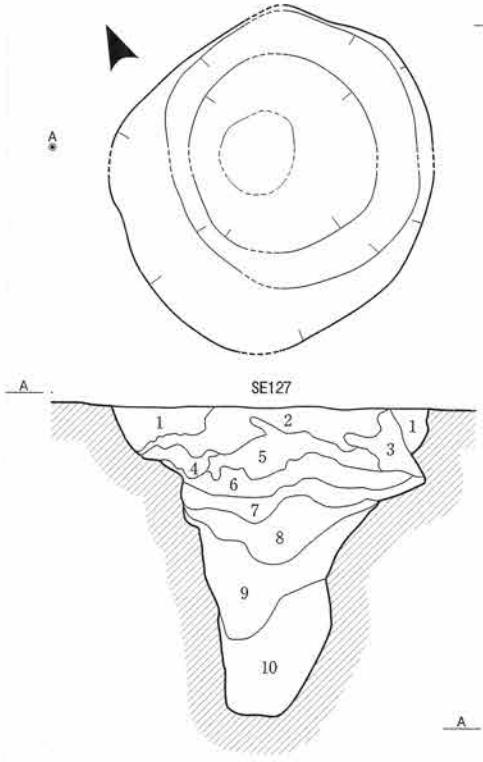
SE103
1層　灰黄褐色弱砂質シルト　しまり強。粘性やや弱。炭化物粒子をわずかに含む。Ⅲ層ブロックがやや多く混入する。マンガン粒子をやや多く含む。
2層　1層と同質であるが、炭が多量混入する。
3層　1層と同質。
4層　黄褐色シルト　しまり・粘性共やや弱。Ⅲ層ブロックが少量混入する。マンガン粒子をやや多く含む。
5層　黄褐色弱砂質シルト　しまり・粘性共やや弱。Ⅳ層が多量に混入する。
6層　黄褐色シルト　しまり・粘性共やや弱。Ⅲ・Ⅳ層粒子をわずかに含む。マンガン粒子をやや多く含む。
7層　褐色シルト　しまり・粘性共やや弱。Ⅲ・Ⅳ層ブロックがやや多く混入する。マンガン粒子をやや多く含む。
8層　黄褐色シルト　しまりやや弱。粘性やや強。Ⅲ層ブロックが多量混入する。
9層　灰黄褐色弱砂質シルト　しまり・粘性共やや弱。Ⅲ層小ブロックがわずかに混入する。マンガン粒子をやや多く含む。
10層　黄褐色粘土　しまり弱。粘性やや強。灰黄褐色シルトを少量含む。崩落した壁土か。
11層　灰黄褐色弱砂質シルト　しまりやや弱。粘性やや強。Ⅳ層ブロック・灰がやや多く混入する。被熱礫が多数出土。
12層　褐灰色弱砂質シルト　しまり・粘性共やや強。薄層状に炭化物の混入がみられる。被熱礫が多数出土。
13層　褐灰色弱砂質シルト　しまり弱。粘性やや強。下位に酸化鉄層が形成される。



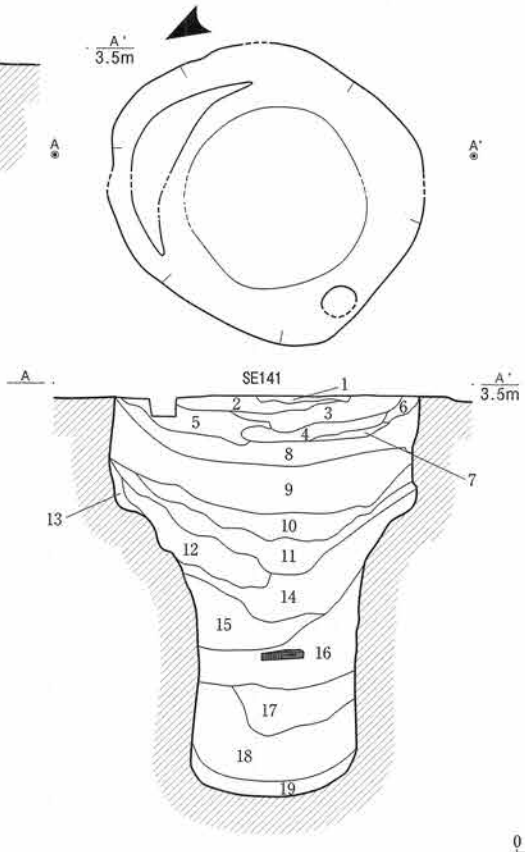
SE102
1層　灰黄褐色シルト　しまり強。粘性弱。Ⅵ層ブロックが混入する。
2層　褐灰色シルト　しまり強。粘性弱。Ⅲ層ブロックが少量混入する。鉄分・マンガン粒子などやや多く含む。
3層　褐灰色弱粘質シルト　しまり・粘性共やや強。灰色砂、Ⅴ層ブロックなどがやや多く混入する。
4層　褐灰色粘土　しまり弱。粘性やや強。有機質に富む。
5層　黄橙色粘土　しまり弱。粘性強。壁土が崩落したものか、Ⅵ層ブロックで構成される土層。
6層　褐灰色シルト粘土　しまり・粘性共やや強。Ⅴ層小ブロックが混入する。
7層　2層と同質。



SE130
1層　黄褐色弱砂質シルト　しまり強。粘性やや弱。炭化物粒子・灰を層下位に多量含む。Ⅲ層ブロックが混入する。マンガン粒子をやや多く含む。
2層　Ⅲ層。崩落した壁土か。
3層　黄褐色砂質シルト　しまりやや強。粘性やや弱。灰色砂をやや多く、炭化物粒子を若干含む。Ⅲ層ブロックが少量混入する。マンガン粒子を多量含む。
4層　黄褐色砂質シルト　しまりやや強。粘性弱。3層に近似するが、Ⅲ層ブロックを殆ど含まない。
5層　黄褐色砂質シルト　しまりやや強。粘性やや弱。褐色シルトと灰色砂の混成土。炭化物粒子をわずかに含む。Ⅵ層ブロックがわずかに混入する。
6層　褐灰色粘土　しまり弱。粘性強。Ⅵ層ブロックがわずかに混入する。
7層　褐灰色粘土　しまりやや弱。粘性強。6・8層に似た粘土がわずかに混入する。鉄分を多量含む。
8層　褐灰色粘土　しまりやや弱。粘性強。炭化物粒子をわずかに含む。Ⅵ層ブロックが少量混入する。

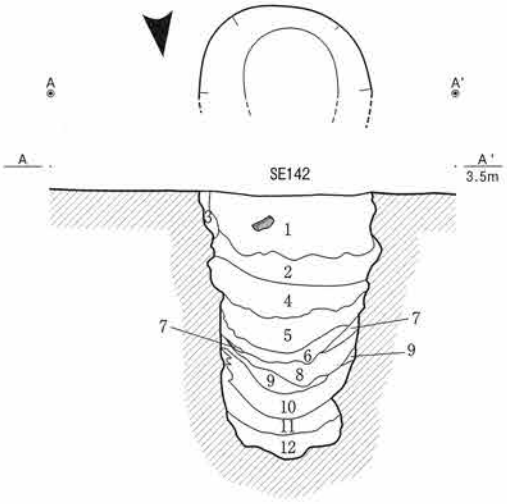


SE127
1層　黄橙色シルト　しまりやや強。粘性強。マンガン粒子をやや多く含む。
2層　黄褐色シルト　しまりやや強。粘性弱。炭化物をわずかに含む。Ⅲ層ブロックがわずかに混入する。マンガン粒子をやや多く含む。
3層　黄褐色シルト　しまり・粘性共やや強。2層に近似するが、Ⅲ層ブロックが多量混入する。
4層　1層に近似するが、2層が微量混入する。
5層　2層に近似するが、炭化物がやや多く含まれる。土色は2層よりやや暗い。
6層　しまりやや強。粘性弱。2層に近似するが、炭化物の量は少ない。Ⅲ層小ブロックが少量混入する。
7層　褐色シルト　しまり・粘性共やや強。2層に近似し、炭化物・灰色砂などを少量含む。
8層　褐色弱粘土質シルト　しまりやや弱。粘性やや強。7層に近似するが、灰色砂がやや多く含まれる。
9層　灰白色砂質シルト　しまり・粘性共強。
10層　黄橙色粘土　しまり・粘性共強。褐灰色粘土小ブロックがわずかに混入する。

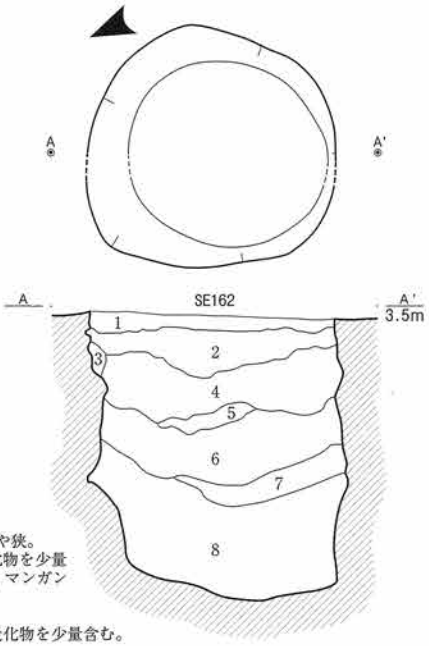


SE141
1層　Ⅲ層ブロック層　しまり弱。粘性やや強。
2層　黄褐色シルト　しまりやや強。粘性やや弱。炭化物粒子を少量含む。Ⅲ層ブロックが多量混入する。マンガン粒子を多量含む。
3層　黄褐色砂質シルト　しまり・粘性共やや弱。炭化物粒子・灰色砂を少量含む。Ⅲ層ブロックがやや多く混入する。マンガン粒子を含む。
4層　黄褐色砂質シルト　しまり強。粘性弱。3層に近似するが、灰色砂が多量混入する。
5層　Ⅲ層ブロック層。崩落した壁土か裏込の可能性がある。
6層　黄褐色砂質シルト　しまり強。粘性弱。4層に近似するが、Ⅲ層粒子を多量含む。
7層　黄褐色砂質シルト　しまり強。粘性弱。4層に近似するが、マンガン粒子を多量含む。
8層　黄褐色砂質シルト　しまり強。粘性やや弱。炭化物を少量、灰色砂多量含む。Ⅲ層小ブロックが少量混入する。マンガン粒子を多量含む。
9層　Ⅳ層ブロック層　しまりやや強。粘性やや弱。灰黄褐色砂質シルトブロックが少量混入する。
10層　灰黄褐色シルト　しまり強。粘性やや強。炭化物粒子を少量含む。11層との攪拌、北側はマンガン沈着が顕著。
11層　褐灰色砂質シルト　しまり強。粘性やや弱。炭化物粒子を少量含む。10層との攪拌がややみられる。
12層　黄褐色細砂質シルト　しまり弱。粘性やや弱。Ⅳ層に近似した土層がなだれ込む。11層の大ブロックが北側に混入する。
13層　褐色砂質シルト　しまり強。粘性やや強。Ⅲ層に近似するが、土色が若干、褐色味をおびる。
14層　黄褐色シルト　しまり強。粘性やや強。浅黄色シルトを帯状に狭在する。炭化物粒子を少量含む。
15層　暗灰黄色シルト質粘土　しまり強。粘性やや強。壁土と同質で区別がつきにくい。
16層　褐灰色シルト質粘土　しまり強。粘性やや強。11層に近似するが、粘性が若干強い。
17層　16層に準ずるが、黒褐色シルトブロックが少量混入する。
18層　灰色粘土　しまり・粘性共強。黒褐色シルトブロックが少量混入する。
19層　灰色粘土　しまり・粘性共強。ほぼ均質な土層。周辺の井戸底にみられる土質と近似する。

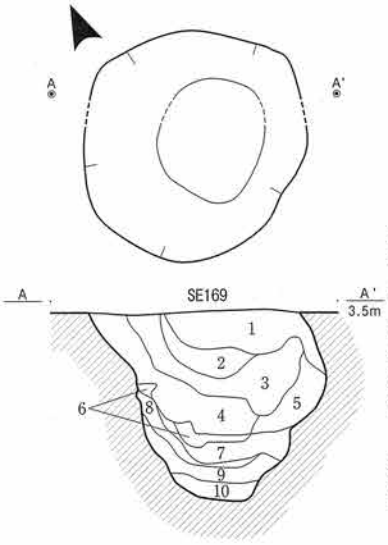
0　(1:40)　2m



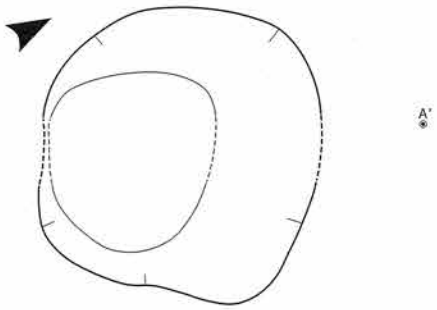
SE142
1層　褐灰色シルト質粘土 しまり・粘性共やや強。炭化物粒子をやや多く含む。Ⅲ層小ブロックが混入する。酸化鉄斑・マンガン粒子を含む。
2層　1層と同質であるが、しまり強い。
3層　1層に近似するが、Ⅳ層を多量含む。
4層　灰色シルト質粘土 しまり強。粘性やや強。炭化物をやや多く含む。Ⅵ層ブロックが混入する。上位に酸化鉄斑がみられる。
5層　4層と同質であるが、酸化鉄斑を含まない。
6層　灰色粘質土 しまりやや強。粘性強。炭化物粒子をわずかに含む。灰色シルト小ブロックが混入する。
7層　5層と同質であるが、シルトを若干含む。
8層　黒色粘質土 しまり弱。粘性強。炭化物を多量含む。Ⅵ層小ブロックが混入する。
9層　7層と同質。
10層　8層と同質であるが、腐植物を多量含む。
11層　灰白色シルト しまり・粘性共やや強。黒色粘質土が筋状に挟在する。
12層　灰色シルト しまりやや強。粘性強。灰白色粘質土ブロックが混入する。



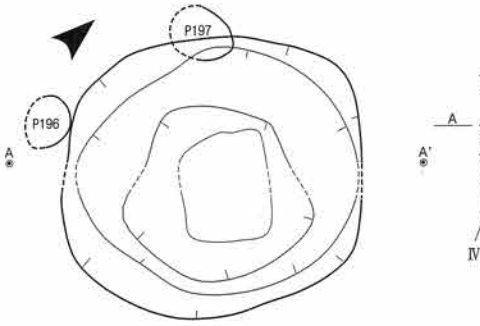
SE162
1層　褐灰色砂質シルト しまり強。粘性弱。Ⅲ層ブロックが混入する。マンガン粒子を少量含む。
2層　灰黄褐色砂質シルト しまり・粘性共やや強。炭化物粒子・マンガン粒子をやや多く含む。
3層　Ⅳ層と褐灰色シルトの混成土　しまり・粘性共やや狭。
4層　黄褐色弱砂質シルト しまり強。粘性やや強。炭化物を少量含む。Ⅲ層ブロック・灰色砂がやや多く混入する。マンガン粒子を少量含む。
5層　3層と同質であるが、炭化物が多量に含まれる。
6層　灰黄褐色粘土質シルト しまり弱。粘性やや強。炭化物を少量含む。Ⅵ層ブロックが少量、灰色砂が多量混入する。
7層　褐灰色粘土 しまり弱。粘性やや強。有機質に富む土層。灰黄褐色シルトブロックがやや多く混入する。
8層　褐灰色粘土 しまりやや弱。粘性強。灰色粘土・黒色粘質土などが挟在し、全体にⅥ層が混入する。非常に有機質に富み、部分的に杉やヒノキの葉のような植物遺体を多量含む。

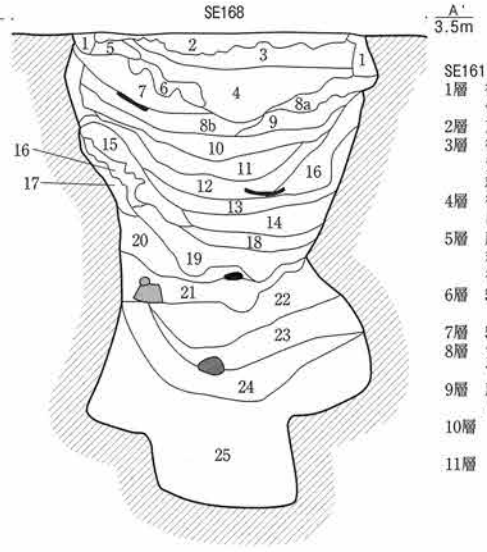


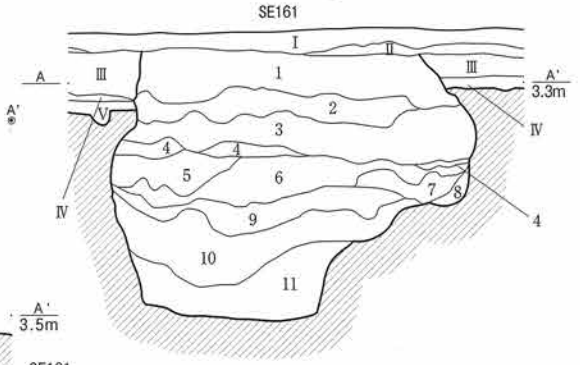
SE169
1層　灰黄褐色弱砂質シルト しまり強。粘性弱。Ⅲ層がやや多く混入する。マンガン粒子をやや多く含む。
2層　浅黄色粘土質シルト しまり・粘性共やや強。Ⅲ層に灰黄褐色シルトが若干混入する。マンガン粒子をわずかに含む。
3層　灰黄褐色シルト しまり・粘性共やや強。Ⅲ層が混入する。
4層　崩落したⅢ層に褐色シルトが若干混入する土層。
5層　4層と近似するが、Ⅲ層ブロックの混入やや少ない。
6層　褐灰色粘土 しまり弱。粘性強。
7層　灰黄色粘土質シルト しまりやや弱。粘性やや強。崩落した壁土。灰色粘土、マンガン粒子などを少量、酸化鉄分を多量含む。
8層　褐灰色弱粘土質シルト しまりやや弱。粘性やや強。
9層　灰白色シルト しまりやや強。粘性やや弱。鉄分を含む。
10層　褐灰色粘土質シルト しまり・粘性共やや強。灰白色シルトと褐灰色シルトの混成土。炭化物を微量含む。



SE168
1層　Ⅲ層ブロック層。
2層　灰黄褐色砂質シルト しまり・粘性共弱。炭化物粒子を少量含む。灰白色シルトブロックを少量含む。マンガン粒子を多量含む。
3層　黄褐色砂質シルト しまり・粘性共やや弱。炭化物粒子・Ⅲ層ブロック・マンガン粒子などを多量含む。
4層　Ⅲ層ブロック層。
5層　黄褐色砂質シルト しまり弱。粘性やや強。炭化物を少量含む。
6層　5層と同質であるが、土色は褐色味を帯びる。
7層　褐色シルト しまり弱。粘性やや強。炭化物粒子を多量含む。Ⅴ層ブロックを含む。
8a層　褐色シルト しまり・粘性共やや強。
8b層　8aに近似するが、若干砂質が強い。
9層　黄褐色砂質シルト しまり・粘性共やや強。灰白色シルトブロック・Ⅲ層ブロックが多量混入する。
10層　黄褐色砂質シルト しまり・粘性共やや強。
11層　10層と同質であるが、若干粘性が高い。
12層　褐灰色シルト質粘土 しまり・粘性共強。黄褐色粗砂ブロックをやや多く含む。炭化物を少量含む。
13層　褐灰色シルト質粘土 しまり・粘性共強。礫を少量含む。
14層　黒褐色シルト質粘土 しまり・粘性共強。
15層　暗灰黄色砂質シルト しまり・粘性共強。マンガンをマーブル状に含む。
16層　黄褐色シルト しまり・粘性共強。。
17層　黄褐色砂質シルト しまり・粘性共強。若干砂質強い。北側に炭化物帯が形成される。
18層　16層に近似するが、若干粘性が高い。
19層　黄褐色シルト質粘土 しまり・粘性共強。マンガンが所々みられる。
20層　黄色シルト質粘土 しまり・粘性共強。
21層　黒褐色シルト質粘土 しまり・粘性共強。暗灰黄色シルトが中央にブロック状に含まれる。
22層　黄褐色シルト質粘土 しまり・粘性共強。Ⅲ層ブロック層。マンガン粒沈着顕著。全体的に褐色味をおびる。
23層　黒褐色シルト しまり強。粘性やや強。腐植物層。25層がブロック状に混入する。
24層　灰色シルト しまり強。粘性やや強。腐植物層が帯状に形成される。
25層　灰色シルト質粘土 しまり・粘性共強。地山。腐植物及び中粒砂が混入する。

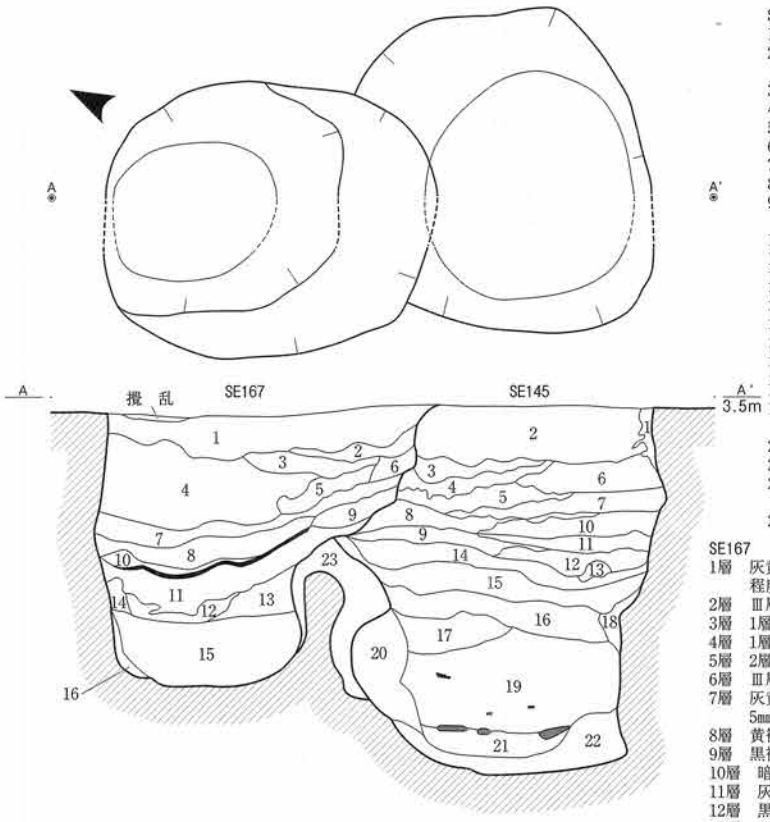






SE161
1層　褐灰色弱シルト質粘土 しまりやや強。粘性弱。炭化物を少量含む。灰色粘土ブロックが混入する。マンガン粒子を多量含む。
2層　1層と近似するが、明褐灰色粘質土が大小ブロック状に混入する。
3層　褐灰色シルト質粘土 しまり・粘性共やや強。炭化物を少量含む。灰色粘質土ブロック・明褐灰色シルト質粘質土ブロックが混入する。マンガン粒子を含む。
4層　褐灰色シルト質粘土・灰色粘質土・明褐灰色シルト粘土の混成土。大半はブロック状。明褐灰色シルト粘土中にマンガン粒子を多量含む。
5層　灰色粘質土 しまり・粘性共やや強。炭化物を少量含む。灰褐色シルト質粘土ブロック・明褐灰色シルト質粘土ブロックがやや多く混入する。灰褐色シルト質粘土中にマンガン粒子を多量含む。
6層　5層に近似するが、灰褐色シルト質粘土が筋状に挟在する。明褐灰色シルト質粘土ブロックが少量混入する。
7層　5層と同質。
8層　黄橙色粘質土 しまりやや弱。粘性強。灰色粘質土がわずかに混入する。マンガン粒子を少量含む。
9層　灰色シルト質粘土 しまりやや弱。粘性やや強。灰白色シルト質粘土小ブロックが混入する。酸化鉄斑・マンガン粒子を少量含む。
10層　灰白色弱シルト質粘土 しまり・粘性共やや強。灰色シルト質粘土小ブロックが少量混入する。酸化鉄斑を多量含む。
11層　灰白色弱シルト質粘土 しまり・粘性共やや弱。酸化鉄斑・マンガン粒子を含む。

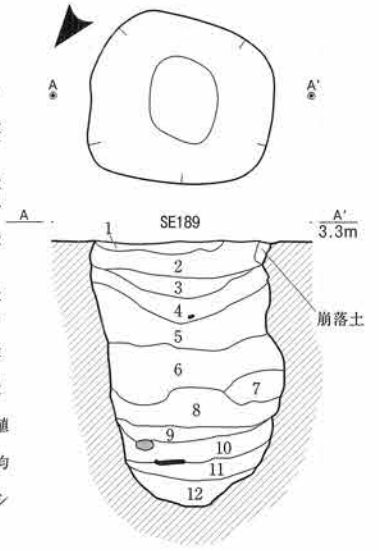
0　(1:40)　2m

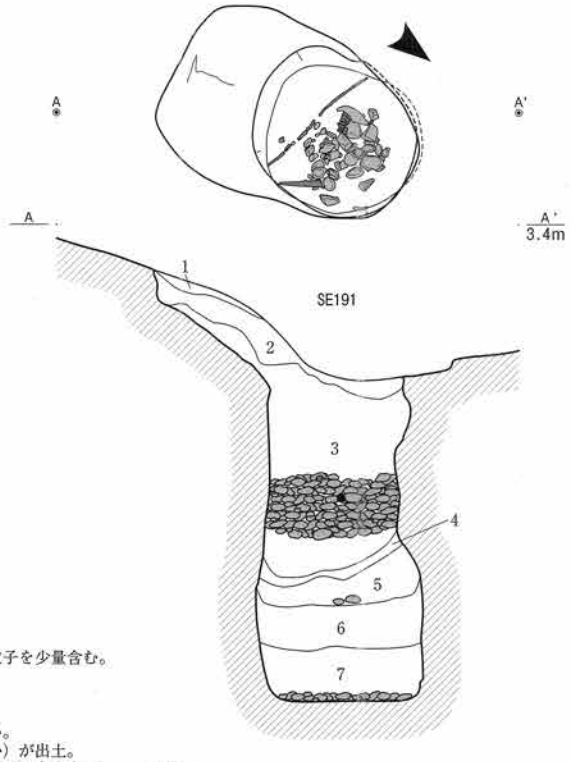


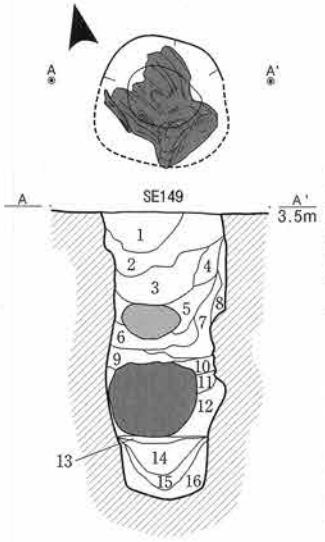
SE145
1層　Ⅲ層ブロック層。崩落した壁土である。
2層　灰黄褐色砂質シルト　しまり・粘性共弱。直径5mm程度の炭化物粒子をやや多く含む。マンガン粒子を含む。
3層　2層にSE167側からⅢ層ブロックが流入する土層。2層より若干粘性が高い。
4層　黄橙色砂質シルト　しまりやや強。粘性やや弱。2層がブロック状に含まれる。
5層　4層と同質。
6層　2層と同質。マンガン粒子が減少する。直径2mm大の炭化物粒子を少量含む。
7層　6層と同質。粘性やや弱。マンガン粒子はさらに減少する。
8層　黄橙色砂質シルト　しまり強。粘性やや強。SE167の16層に近似する。
9層　黄色シルト　しまり・粘性共強。SE167側は若干、砂質になる。マンガン粒子を少量含む。
10層　褐灰色砂質シルト　しまり・粘性共やや弱。直径5mm前後の炭化物を微量含む。
11層　10層と同質。しまり強く、粘性はやや弱い。
12層　11層と同質。粘性強。
13層　黒褐色シルト　しまり弱。粘性やや強。腐植物層。細かい木片が溜まる。
14層　11層と同質。黄色シルトを北側では小ブロックで、南側では大ブロックで含む。
15層　黒褐色砂質シルト　しまり強。粘性やや強。淘汰良い。
16層　褐灰色シルト　しまり強。粘性やや強。15層が小ブロック状で少量含まれる。
17層　褐灰色シルト　しまり強。粘性やや強。15層が小ブロック状で多量含まれる。
18層　黄褐色シルト　しまり強。粘性やや強。地山ブロック層。
19層　黒褐色シルト　しまり強。粘性やや強。淘汰良い。上位は若干、砂質が強い。アシ・ヨシなど水生植物遺体を多量含む。
20層　褐灰色粘土　しまり強。粘性やや強。淘汰良い。
21層　褐灰色粘土　しまり・粘性共強。19層がブロック状に含まれる。
22層　褐灰色砂質粘土　しまり強。粘性やや強。地山土に19層がブロック状に若干、混入する土層。
23層　浅黄色シルト質粘土　しまり・粘性共強。

SE167
1層　灰黄褐色砂質シルト　しまり弱。粘性やや強。細かいⅢ層ブロックを多量含む。直径5mm程度の炭化物を微量含む。
2層　Ⅲ層ブロックを主体に灰黄褐色砂質シルトが少量含まれる。
3層　1層と同質であるが、若干粘性が強い。
4層　1層と同質であるが、全体的に直径2mm程度の砂粒が多量含まれる。
5層　2層と同質。
6層　Ⅲ層ブロック層。
7層　灰黄褐色砂質シルト　しまり・粘性共強。浅黄色粘土ブロックを下位に多量含む。直径5mm前後の炭化物を少量含む。
8層　黄褐色シルト　しまり弱。粘性強。直径2mm前後の砂粒を多量含む。
9層　黒褐色砂質シルト　しまり強。粘性やや強。マンガン粒子を含む。
10層　暗灰黄色細砂質シルト　しまり・粘性共強。灰色シルトと攪拌されている。
11層　灰色シルト質粘土　しまり・粘性共強。浅黄色シルトブロックと攪拌されている。
12層　黒褐色シルト質粘土　しまり・粘性共強。
13層　11層と同質であるが、浅黄色シルトブロックは少ない。
14層　暗灰色シルト質粘土　崩落した壁土と思われる。
15層　青灰色粘土　上位には14層がブロック状に含まれる。
16層　浅黄色シルト質粘土　しまり・粘性共強。

SE189
1層　灰黄褐色シルト質粘土　しまり・粘性共やや強。炭化物粒子をやや多く含む。Ⅲ層小ブロックが混入する。酸化鉄斑・マンガン粒子を少量含む。
2層　褐灰色シルト質粘土　しまりやや強。粘性やや弱。炭化物粒子を少量含む。Ⅲ層大ブロックが少量混入する。マンガン粒子を多量含む。
3層　褐灰色シルト質粘土　しまり・粘性共やや強。炭化物を少量含む。Ⅲ層小ブロックが少量混入する。マンガン粒子を含む。
4層　褐灰色シルト質粘土　しまり・粘性共やや強。炭化物を少量含む。Ⅲ層ブロックがやや多く混入する。マンガン粒子を多量含む。
5層　褐灰色シルト質粘土　しまり・粘性共やや弱。炭化物をやや多く含む。Ⅲ層ブロックがやや多く混入する。マンガン粒子を多量含む。
6層　褐灰色シルト質粘土　しまり・粘性共やや強。炭化物をやや多く含む。Ⅲ層小ブロックがやや多く混入する。マンガン粒子を多量含む。
7層　褐灰色シルト質粘土　しまりやや強。粘性強。炭化物を少量含む。Ⅲ層ブロックが少量混入する。マンガン粒子を少量含む。
8層　褐灰色シルト質粘土　しまりやや強。粘性強。炭化物粒子をやや多く含む。
9層　褐灰色シルト質粘土　しまりやや弱。粘性強。炭化物・腐植物を多量含む。被熱礫出土。
10層　灰黄褐色シルト質粘土　しまり弱。粘性強。腐植物堆積層。
11層　褐灰色シルト質粘土　しまりやや強。粘性強。均質層だが、黒褐色土小ブロックが混入する。
12層　褐灰色シルト質粘土　しまりやや強。粘性強。シルト質やや強い。腐植物が少量含まれる。



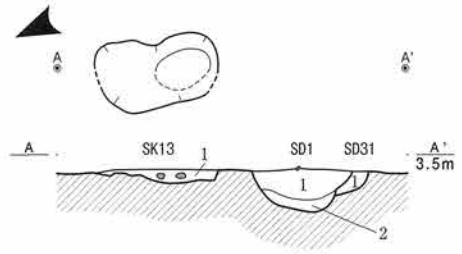




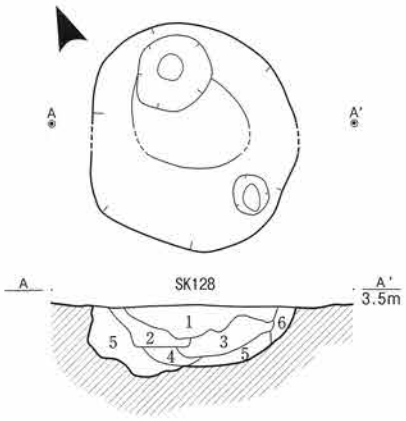
SE149
1層　灰色シルト質粘質土　しまり・粘性共やや強。炭化物粒子を少量含む。酸化鉄斑・マンガン粒子を含む。
2層　1層と同質であるが、炭化物をやや多く含む。
3層　1層と同質であるが、Ⅲ層ブロックが混入する。
4層　3層と同質であるが、Ⅲ層ブロックの混入はみられない。
5層　3層と同質。Ⅲ層がレンズ状に挟在する。円礫（礫石か）が出土。
6層　褐灰色粘土質シルト　しまりやや強。粘性強。炭化物をやや多く含む。
7層　6層と同質であるが、炭化物はわずかである。
8層　灰黄褐色シルト質粘土　しまり・粘性共やや強。炭化物粒子を少量含む。Ⅲ層ブロックが少量混入する。
9層　7層と炭化物の混成土　しまり・粘性共やや強。灰白色粘質土ブロックが混入する。
10層　褐灰色シルト質粘土　しまり・粘性共やや強。炭化物粒子を少量含む。Ⅲ層ブロックが混入する。酸化鉄斑・マンガン粒子を少量含む。
11層　10層と近似するが、炭化物を少量含む。Ⅲ層小ブロックが混入する。
12層　褐灰色シルト質粘土　しまり・粘性共やや強。外縁に酸化鉄層が形成される。
13層　9層と同質。
14層　褐灰色シルト質粘土　しまりやや狭。粘性強。褐灰色シルト質粘土ブロックが混入する。
15層　14層と同質であるが、粘土ブロックは混入しない。
16層　14層と同質。

SE191
1層　褐灰色砂質シルト　しまりやや強。粘性やや弱。炭化物・砂粒を少量含む。
2層　黒褐色砂質シルト　しまり強。粘性やや弱。炭化物粒子・灰白色砂粒・Ⅵ層土を少量含む。
3層　黒褐色砂質シルト　しまり・粘性共やや強。炭化物粒子・Ⅵ層土を少量含む。
4層　黒褐色粘土質シルト　しまり弱。粘性やや強。炭化物を微量含む。
5層　褐灰色砂質シルト　しまり弱。粘性やや弱。細砂を多量含む。4層小ブロックが混入する。下位に酸化鉄層が水平に形成される。
6層　褐灰色砂質シルト　しまり・粘性共やや弱。砂質分とシルト分が混在する。
7層　褐灰色砂質シルト　しまり・粘性共やや強。砂質含む。層下位から直径10cm前後の円礫を多量検出。

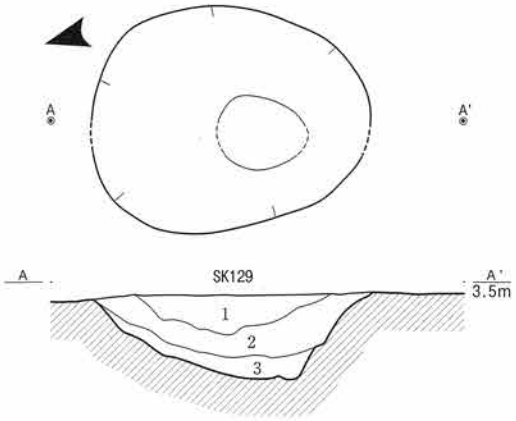
0　(1:40)　2m



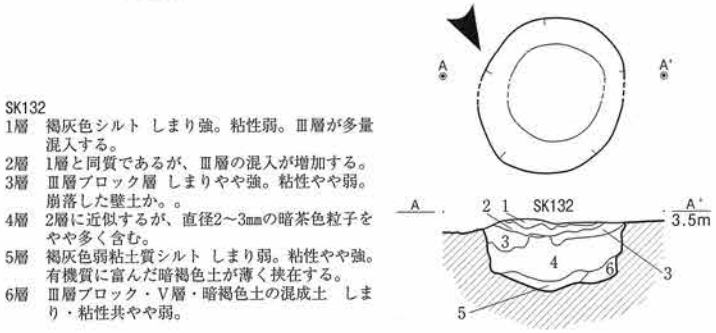
SK13・SD1・SD31
1層 灰黄褐色シルト しまり・粘性共やや弱。砂利、粗砂を含む。Ⅲ層ブロックが少量混入する。



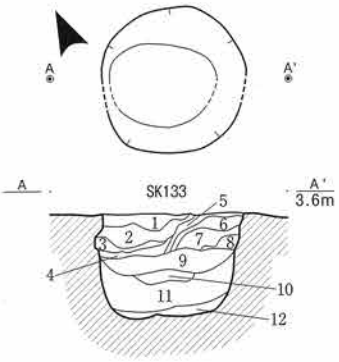
SK128
1層 黄褐色シルト しまり強。粘性弱。炭化物粒子を少量含む。灰色砂が多量混入する。
2層 Ⅲ層ブロックと黄褐色シルトの混成土。しまり・粘性共やや強。炭化物粒子を少量含む。
3層 黄褐色弱砂質シルト しまりやや強。粘性弱。炭化物をやや多く含む。Ⅲ層ブロックがやや多く混入する。
4層 3層と同質であるが、Ⅲ層が多量混入する。
5層 3層と同質であるが、炭化物の含有量増加し、Ⅲ層ブロックの混入は減少する。
6層 Ⅲ層ブロック層 しまり・粘性共やや強。炭化物粒子を微量含む。崩落した壁土か



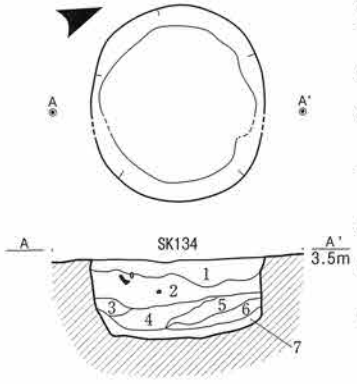
SK129
1層 黄褐色シルト しまりやや強。粘性やや弱。Ⅲ層ブロック・小石がわずかに混入する。マンガン粒子をやや多く含む。
2層 1層と同質であるが、Ⅲ層・灰色砂が多量混入する。
3層 Ⅴ層(地山)・灰色砂・灰色粘土の混成土。 しまりやや強。粘性強。



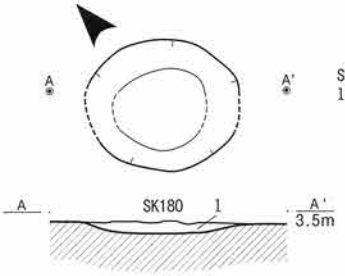
SK132
1層 褐灰色シルト しまり強。粘性弱。Ⅲ層が多量混入する。
2層 1層と同質であるが、Ⅲ層の混入が増加する。
3層 Ⅲ層ブロック層 しまりやや強。粘性やや弱。崩落した壁土か。。
4層 2層に近似するが、直径2～3㎜の暗茶色粒子をやや多く含む。
5層 褐灰色弱粘土質シルト しまり弱。粘性やや強。有機質に富んだ暗褐色土が薄く挟在する。
6層 Ⅲ層ブロック・Ⅴ層・暗褐色土の混成土 しまり・粘性共やや弱。



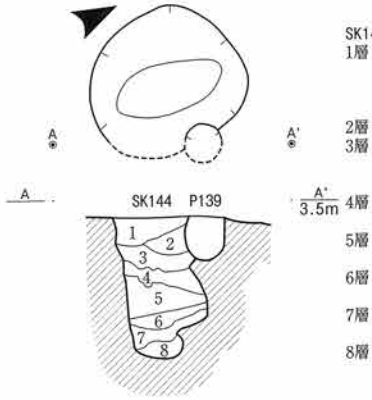
SK133
1層 灰黄褐色砂質シルト しまり強。粘性やや弱。Ⅲ層ブロックが少量、灰色砂がやや多く混入する。マンガン粒子をやや多く含む。
2層 灰黄褐色砂質シルトとⅢ層ブロックの混成土 しまり強。粘性やや強。マンガン粒子を少量含む。
3層 灰黄褐色弱砂質シルト しまり・粘性共やや強。灰色砂が少量混入する。マンガン粒子を微量含む。
4層 灰黄褐色シルト しまり・粘性共やや強。Ⅲ層ブロック・灰色砂が多量混入する。
5層 黄褐色砂質シルト しまり強。粘性弱。灰色砂が少量混入する。マンガン粒子をやや多く含む。
6層 灰黄褐色シルト しまり強。粘性やや強。Ⅲ層ブロックが層上位に多量混入する。灰色砂がやや多く混入する。マンガン粒子を少量含む。
7層 灰黄褐色粘質土 しまり・粘性共やや強。Ⅴ層ブロック・灰色砂がやや多く混入する。
8層 灰黄褐色粘質土 しまり・粘性共やや強。灰色砂が少量混入する。
9層 褐灰色粘土質シルト しまり・粘性共やや強。褐色粘質土が多量混入する。
10層 褐灰色弱粘土質シルト しまり・粘性共やや強。Ⅵ層ブロック・褐色粘質土が少量混入する。
11層 Ⅲ層ブロック層 しまり強。粘性やや強。
12層 浅黄色シルト粘土 しまり・粘性共強。



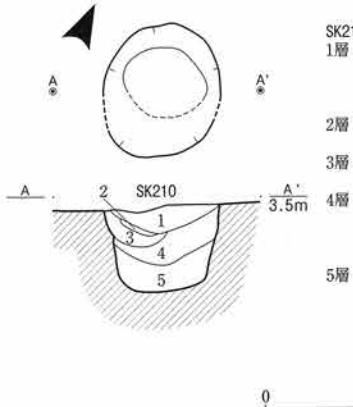
SK134
1層 灰黄褐色シルト しまりやや強。粘性弱。炭化物粒子を少量含む。Ⅴ層ブロックが多量、灰色砂が少量混入する。
2層 1層と同質であるが、Ⅲ・Ⅳ層ブロックが微量混入する。
3層 Ⅴ層と灰黄褐色シルトの混成土。 しまり・粘性共やや弱。炭化物粒子をわずかに含む。
4層 黄褐色シルト しまり・粘性共やや弱。炭化物粒子を少量含む。灰色砂がやや多く混入する。
5層 黄褐色砂 しまり・粘性共弱。Ⅴ層に近似し、炭化物粒子を少量含む。
6層 黄褐色シルト しまり弱。粘性やや弱。炭化物粒子を少量含む。Ⅳ層ブロック・灰色砂が少量混入する。
7層 6層と同質であるが、木炭を多量含む。



SK180
1層 黄褐色シルト しまりやや強。粘性やや弱。炭化物粒子を少量含む。マンガン粒子を含む。

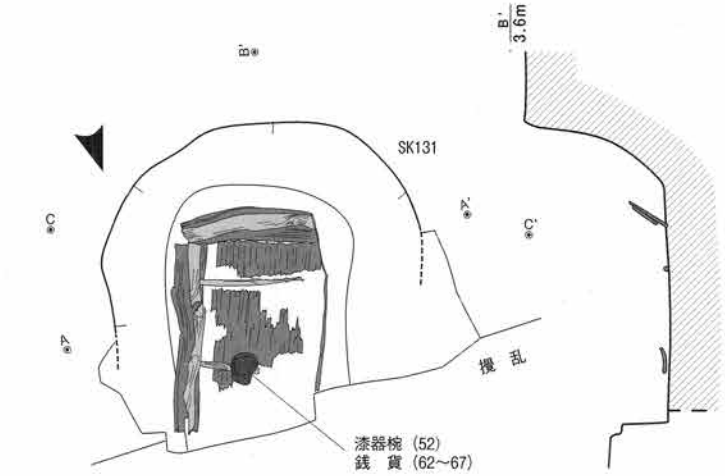


SK144
1層 褐色砂質シルト・Ⅲ層ブロック・褐灰色シルトの混成土 しまりやや弱。粘性弱。上位に炭化物をわずかに含む。マンガン粒子多量含む。
2層 1層と同質であるが、砂分減少する。
3層 黄褐色砂質シルト・Ⅲ層・Ⅳ層ブロック・褐灰色シルトの混成土 しまりやや弱。粘性弱。
4層 3層と同質であるが、Ⅲ層・Ⅳ層ブロックの混入増加する。 しまり・粘性共やや強。
5層 灰黄褐色砂質シルト しまり・粘性共強。Ⅳ層ブロックがわずかに混入する。
6層 5層と同質であるが、Ⅳ層ブロックは混入しない。
7層 灰褐色シルト しまり・粘性共強。Ⅴブロックが少量混入する。
8層 灰黄褐色砂質シルト しまり強。粘性やや強。酸化鉄分がやや多くみられる。

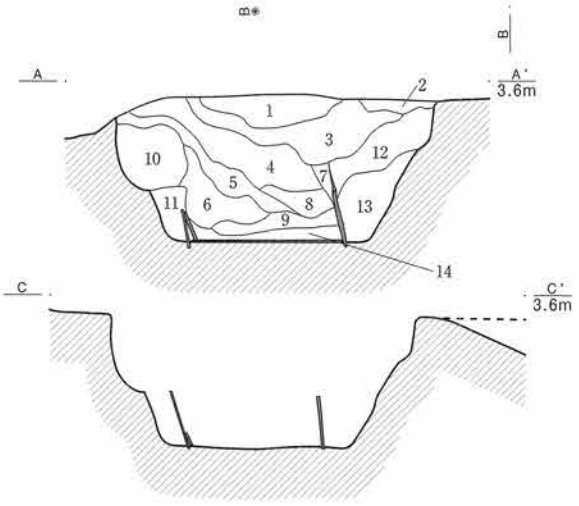


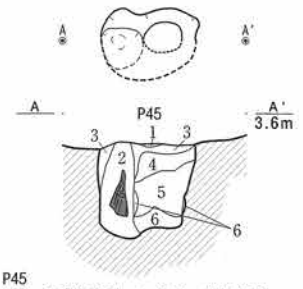
SK210
1層 褐灰色弱粘土質シルト しまりやや弱。粘性弱。炭化物粒子を少量含む。Ⅲ層小ブロックが混入する。酸化鉄斑・マンガン粒子をやや多く含む。
2層 灰白色粘土 しまり・粘性共強。酸化鉄斑が大半を占める。
3層 1層と同質であるが、細砂が混入する。マンガン粒子を多量含む。
4層 褐灰色シルト しまりやや弱。粘性弱。炭化物粒子を微量含む。灰白色粘質土・細砂が混入する。マンガン粒子を多量含む。
5層 灰黄褐色弱粘土質シルト しまり・粘性共弱。炭化物粒子を微量含む。Ⅲ層ブロックが少量混入する。下位中央に灰白色シルト質粘土が微量混入する。マンガン粒子を少数含む。

0 (1:40) 2m

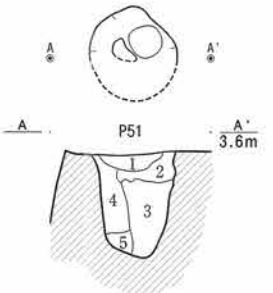


SK131
1層　褐灰色砂質シルト　しまり・粘性共やや弱。Ⅲ層ブロックがやや多く混入する。マンガン粒子を少量含む。
2層　1層と同質であが、Ⅲ層ブロックを殆ど含まない。
3層　褐灰色砂質シルト　しまりやや弱。粘性やや強。Ⅲ層ブロックが多量混入する。マンガン粒子を少量含む。
4層　褐灰色シルトとⅢ層ブロックの混成土　しまり・粘性共やや強。
5層　褐灰色弱粘土質シルト　しまりやや弱。粘性やや強。Ⅲ層ブロックが少量混入する。
6層　4層と同質であるが、Ⅲ層ブロックの混入少ない。
7層　褐灰色弱粘土質シルトとⅢ層ブロックの混成土　しまり・粘性共やや強。
8層　褐灰色弱砂質シルト　しまり・粘性共やや強。砂質強い。Ⅲ層ブロックがわずかに混入する。
9層　6層に近似するが、Ⅲ層ブロックの混入はわずか。
10層　褐灰色粘土質シルト　しまり弱。粘性やや強。Ⅲ層ブロックが微量、灰色砂が多量混入する。
11層　褐灰色弱粘土質シルトとⅢ層～Ⅵ層ブロックの混成土　しまりやや弱。粘性やや強。
12層　褐灰色弱粘土質シルト　しまりやや弱。粘性やや強。Ⅲ・Ⅵ層ブロックがやや多く混入する。
13層　10層に近似する。13層との境に褐灰色土が挟在するため分層。
14層　10層に近似する。12層との境に褐灰色土が挟在するため分層。

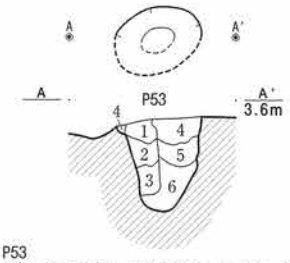




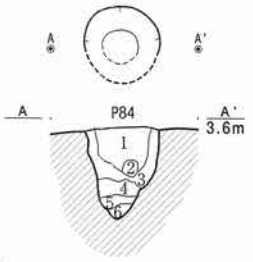
P45
1層　灰白色細砂　しまり・粘性共弱。
2層　褐灰色粘土　しまりやや強。粘性強。炭化物粒子を少量含む。上部に細砂が混入する。
3層　褐灰色シルト質粘質土　しまり・粘性共やや強。Ⅲ層ブロックが少量混入する。
4層　3層に近似するが、Ⅲ層ブロックの混入はみられない。酸化鉄斑・マンガン粒子を多量含む。
5層　褐灰色シルト質粘質土　しまり・粘性共強。
6層　灰白色シルト　しまり・粘性共やや強。5層がブロック状に混入する。



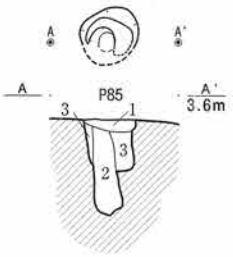
P51
1層　褐灰色シルト質粘質土　しまり・粘性共やや強。酸化鉄斑・マンガン粒子などを少量含む。Ⅲ層ブロックが混入する。
2層　1層と同質で、Ⅲ層ブロックの混入は増加する。
3層　1層と同質であるが、炭化物粒子を少量含む。Ⅲ層ブロックの混入はわずかである。
4層　2層と同質であるが、Ⅲ層ブロックは小径である。
5層　Ⅵ層ブロック。



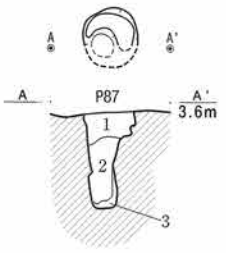
P53
1層　褐灰色シルト質粘質土　しまり・粘性共やや強。酸化鉄斑・マンガン粒子を少量含む。
2層　1層と同質であるが、Ⅲ層ブロックがわずかに混入する。
3層　1層に近似するが、粘性強く、炭化物粒子を微量含む。
4層　1層と同質である。
5層　灰黄褐色シルト　しまり・粘性共やや強。Ⅲ層ブロック状が混入する。酸化が強しい。
6層　1層と同質であるが、酸化鉄斑・マンガン粒子は含まれない。



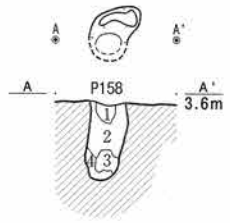
P84
1層　褐灰色シルト質粘質土　しまり・粘性共やや強。下部に2cm大の炭化物を含む。
2層　1褐灰色シルト質粘質土　しまり・粘性共やや強。炭化物粒子を微量、酸化鉄斑・マンガン粒子を少量含む。Ⅲ層が僅少混入する。
3層　1層と同質であるが、炭化物は含まない。Ⅲ層が多量混入する。
4層　2層と同質である。
5層　3層に近似するが、Ⅲ層の混入はみられない。
6層　6層と同質であるが、粘性は強い。



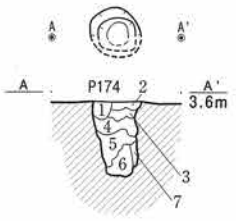
P85
1層　褐灰色シルト質粘質土　しまり・粘性共やや強。酸化鉄斑・マンガン粒子を含む。
2層　褐灰色シルト質粘質土　しまり・粘性共やや強。酸化鉄斑・マンガン粒子を少量含む。Ⅲ層ブロックが混入する。
3層　2層に近似するが、Ⅲ層ブロックの混入はみられない。



P87
1層　褐灰色シルト質粘質土　しまり・粘性共やや強。Ⅲ層ブロックが混入する。
2層　1層に近似するが、Ⅲ層ブロックの混入は少ない。炭化物を少量含む。
3層　褐灰色弱シルト質粘土　しまり・粘性共やや強。

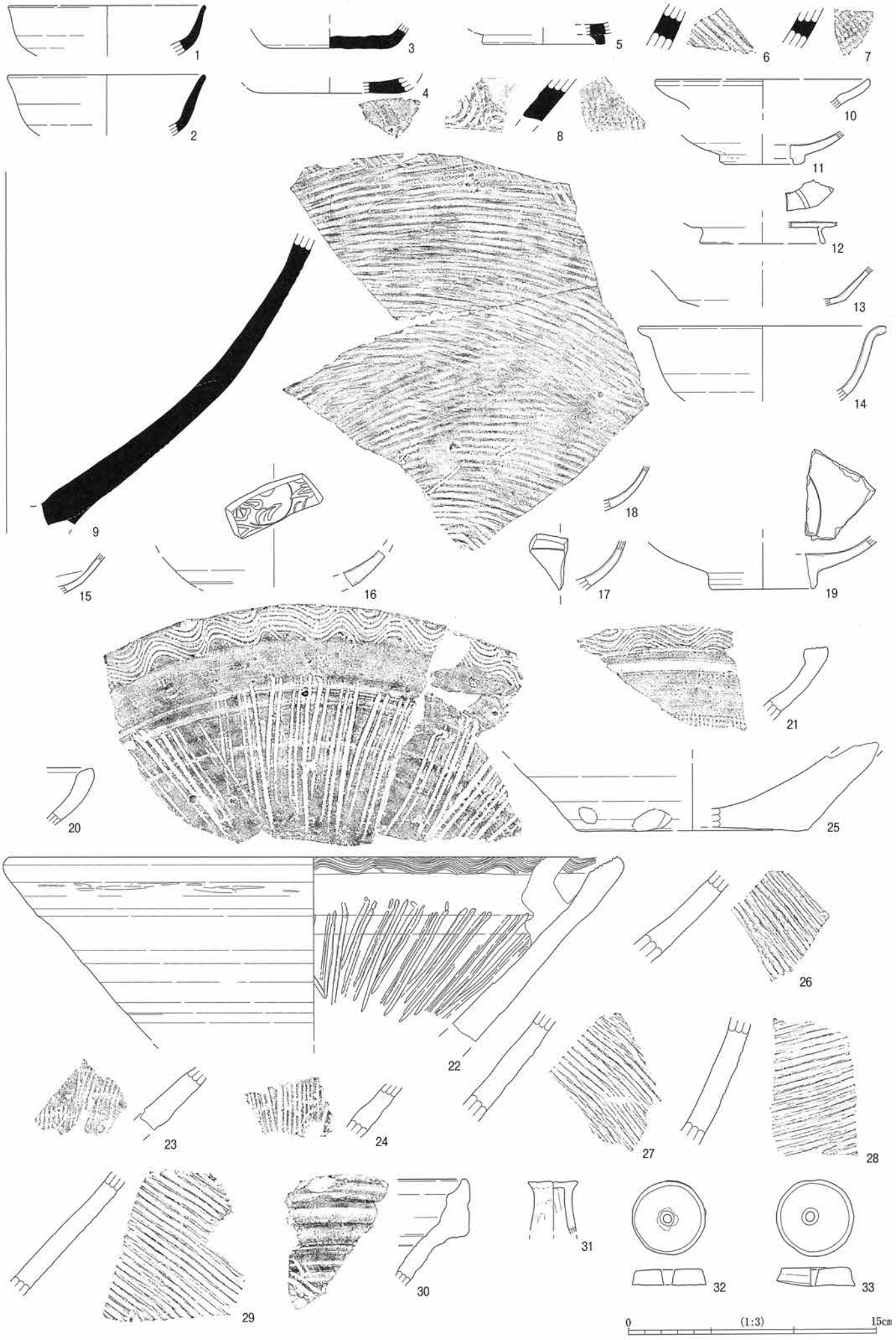


P158
1層　灰色シルト質粘質土　しまり・粘性共やや強。炭化物粒子・酸化鉄斑・マンガン粒子などを少量含む。
2層　1層と同質であるが、Ⅲ層ブロックが多量混入する。
3層　灰色シルト質粘質土　しまり・粘性共やや強。1層より土色暗い。炭化物粒子を微量含む。
4層　灰黄褐色シルト質粘質土　しまり・粘性共やや強。炭化物粒子を微量含む。Ⅲ層ブロックが多量混入する。壁に沿って酸化鉄の薄層が形成される。

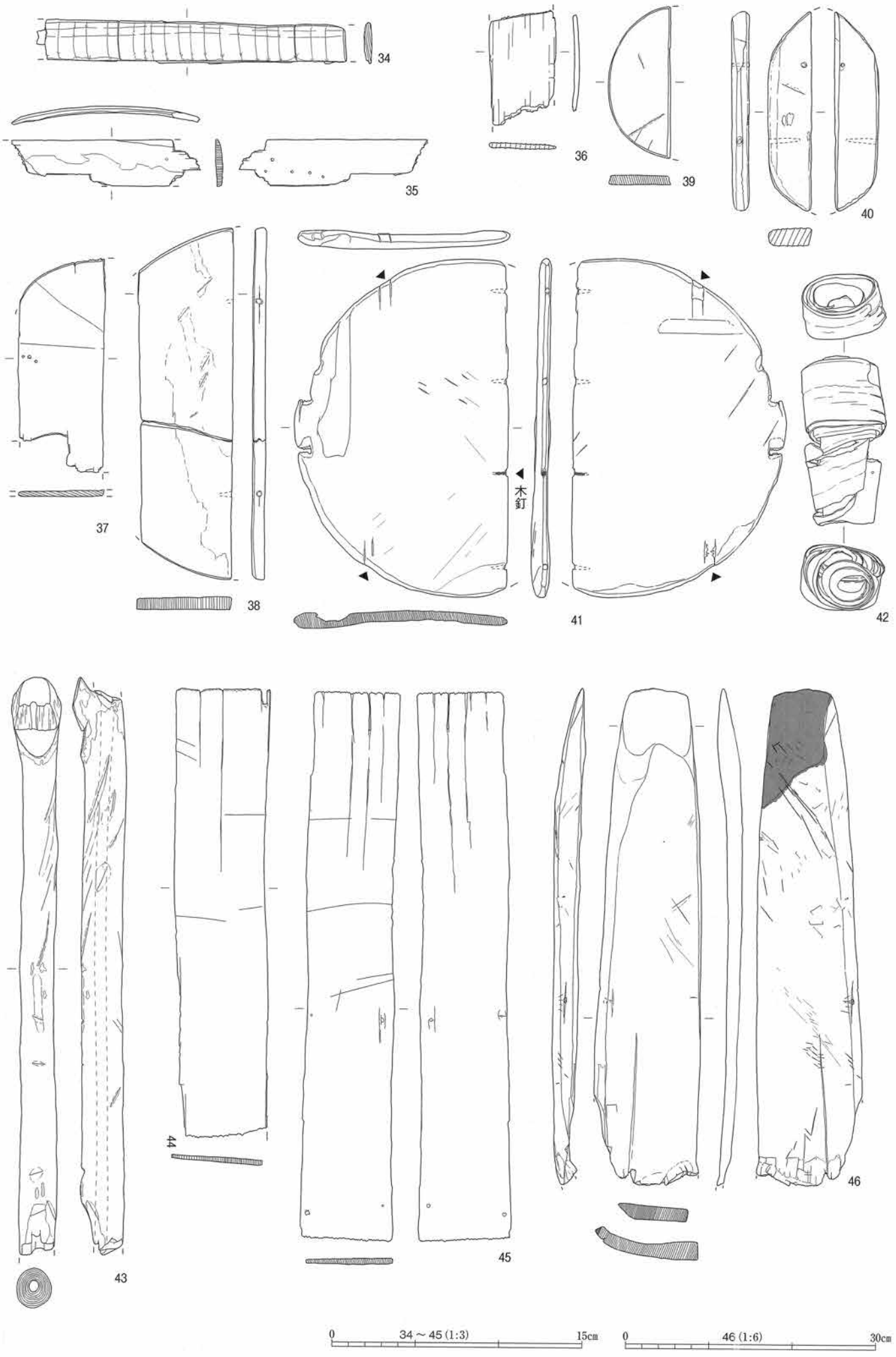


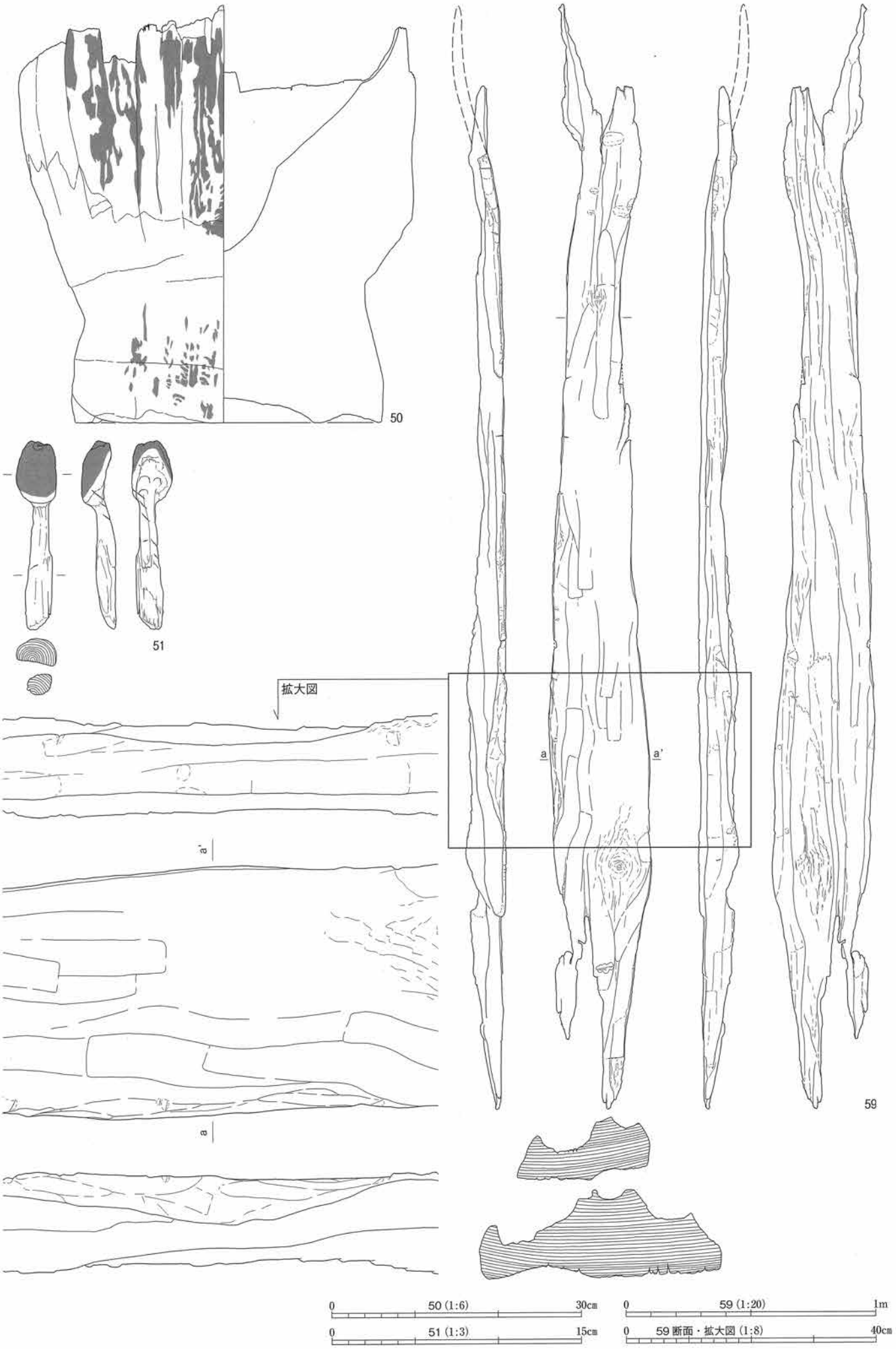
P174
1層　灰色シルト質粘質土　しまり・粘性共やや強。酸化鉄斑・マンガン粒子などをやや多く含む。Ⅲ層ブロックが少量混入する。
2層　1層と同質であるが、Ⅲ層ブロックの混入はみられない。
3層　1層と同質で、Ⅲ層ブロックの混入は増加する。
4層　1層と同質であるが、Ⅲ層ブロックの混入は減少し、わずかである。
5層　3層と同質である。
6層　暗灰色シルト質粘質土　しまり・粘性共やや強。有機質に富む。
7層　灰黄褐色弱シルト質粘質土　しまり・粘性共やや強。

0　(1:40)　2m

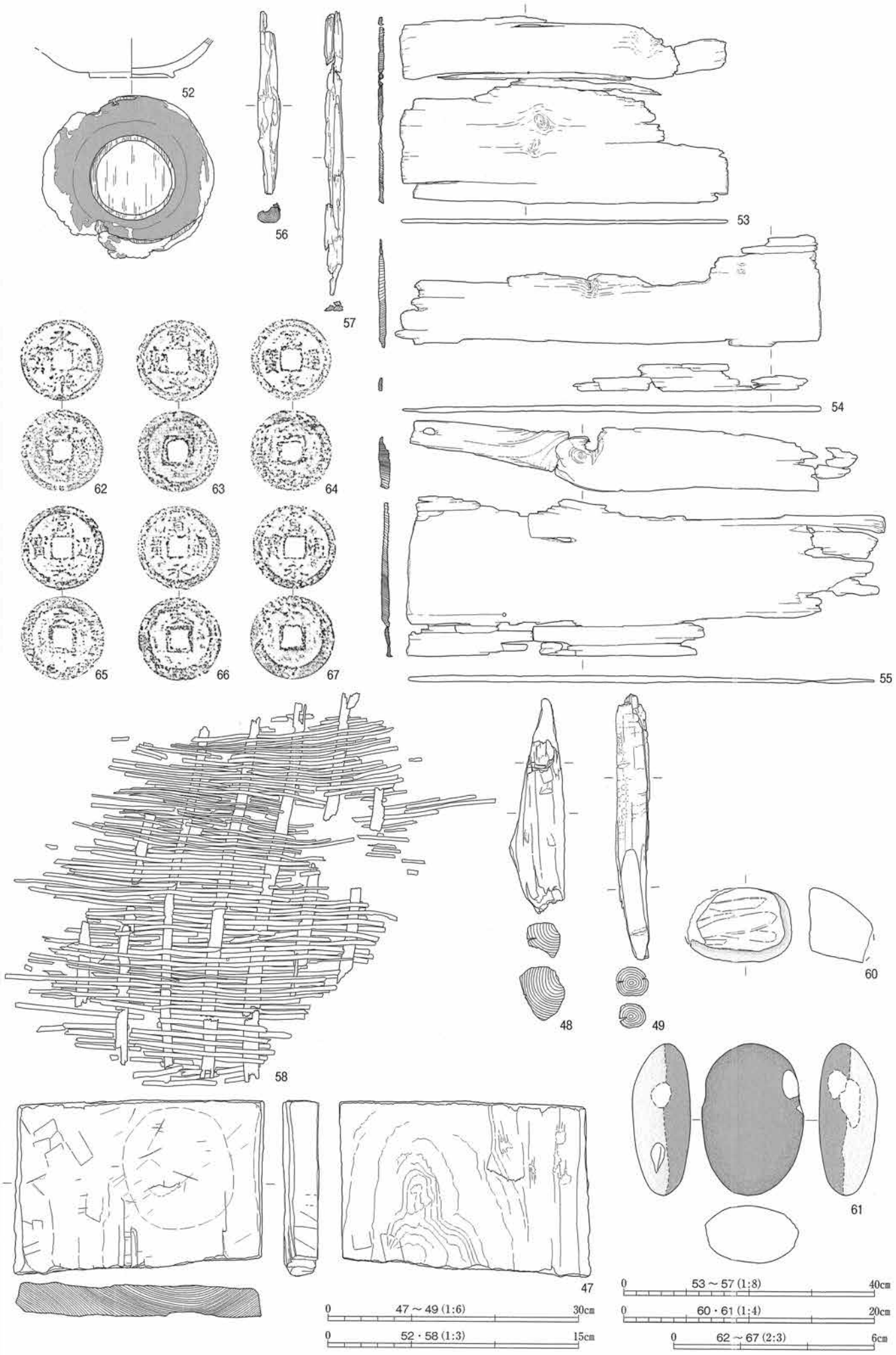

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
0
(1:3)
15cm

桜林遺跡遺物実測図（2） 木製品（1）



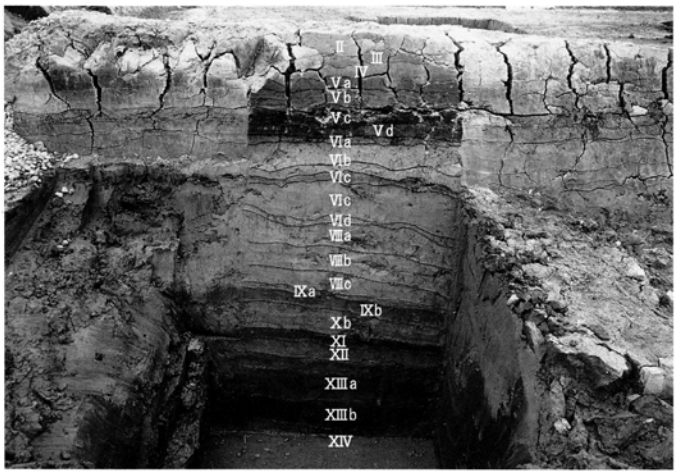

50
51
拡大図
a
a'
59
0　50 (1:6)　30cm
0　51 (1:3)　15cm
0　59 (1:20)　1m
0　59 断面・拡大図 (1:8)　40cm

桜林遺跡遺物実測図（4） 木製品（3）



自然流路・遺物出土状況（西から）

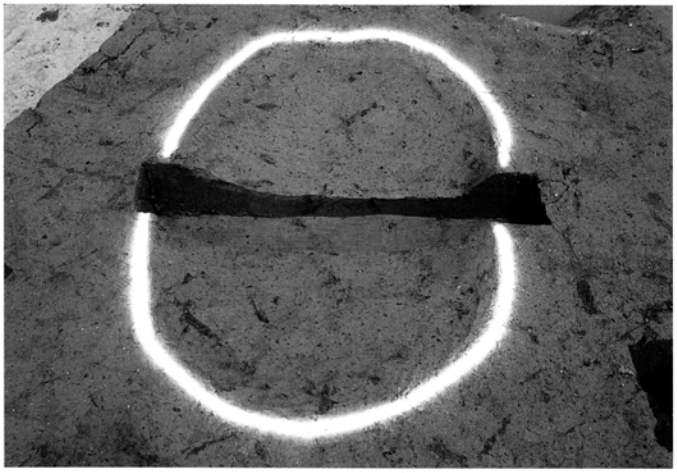
遺跡近景（南から）



基本層序（T2・西から）

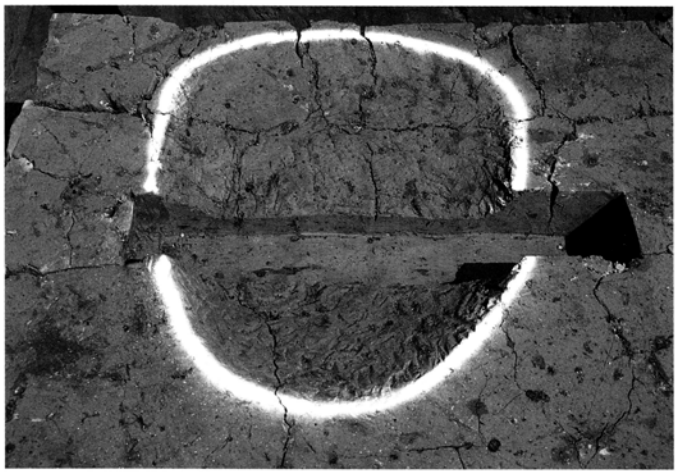
杭 1 検出状況（東から）

SK1 断面（南から）



SK1 完掘（南から）

SK2 断面（西から）



SK2 完掘（西から）

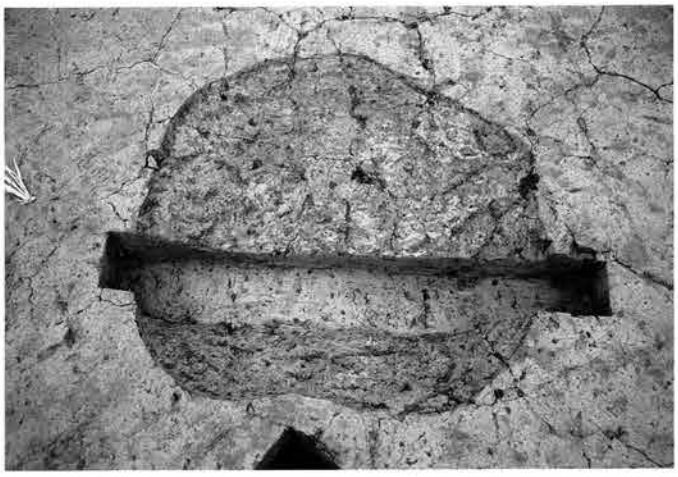
SK3 断面（南から）

SK3 完掘（南から）

SK4 断面（東から）

SK4 完掘（東から）

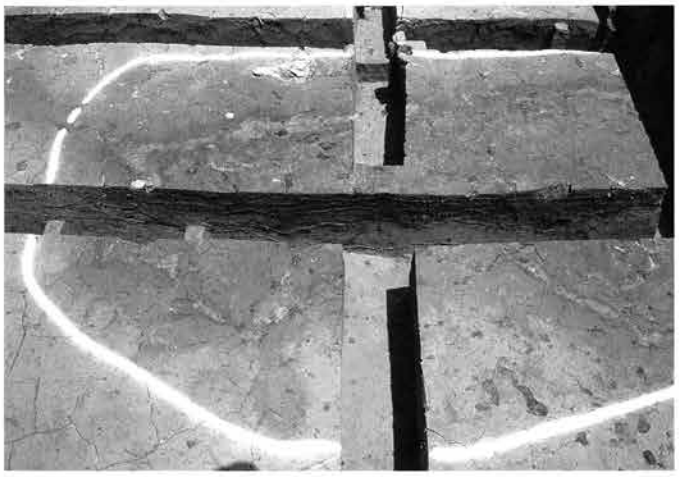
SK9 断面（南東から）



SK9 完掘（南東から）

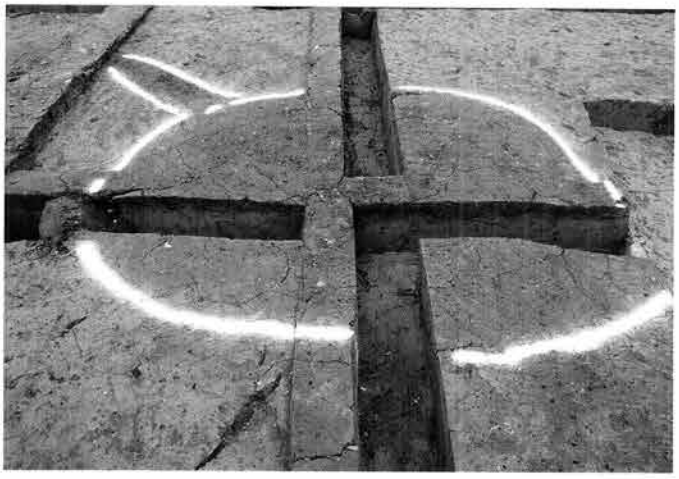
SK10 断面（北から）

SK10 完掘（北から）

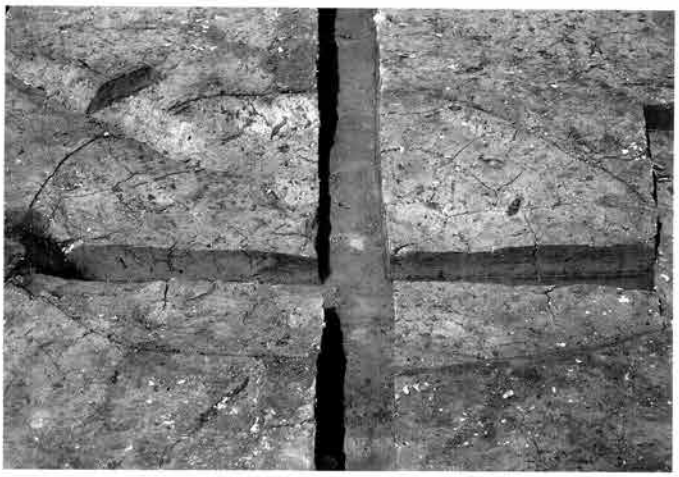


SK16 断面（南から）

SK16 完掘（南から）

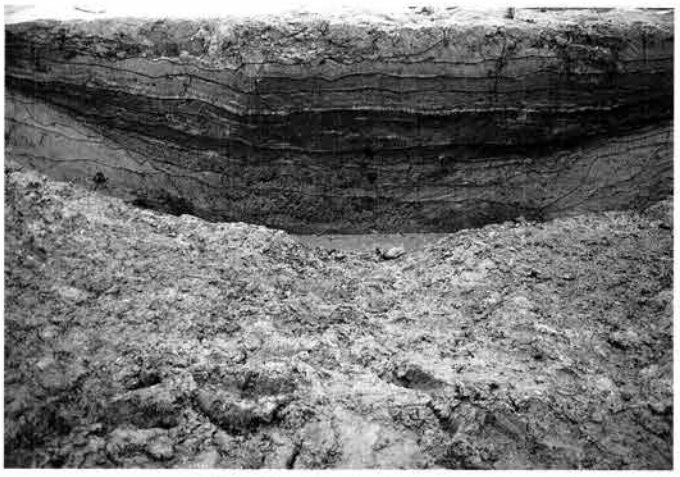


SC101 断面（南から）

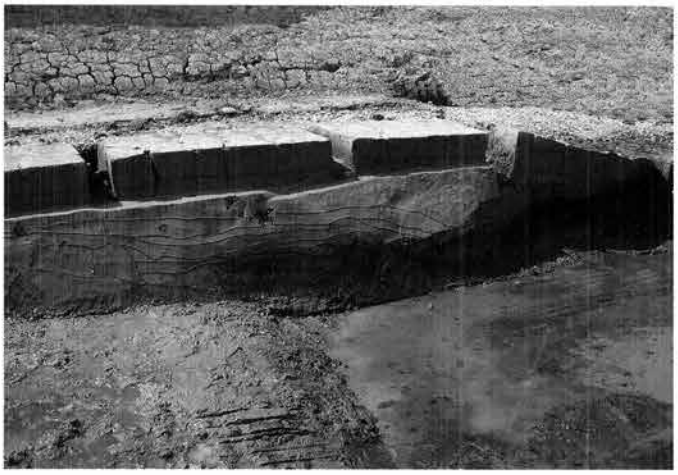


SC101 完掘（南から）

流路１と北岸遺物検出状況（東から）

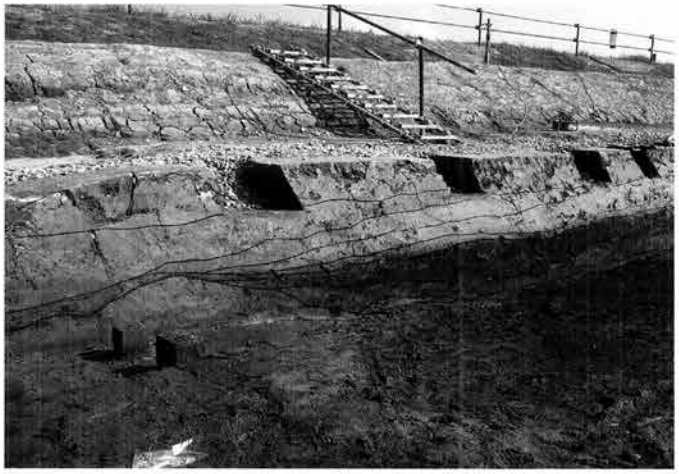


流路１断面（B-B'・東から）



流路２断面（A-A'・東から）

流路１・２断面（B-B'・東から）



流路２断面（C-C'・西から）

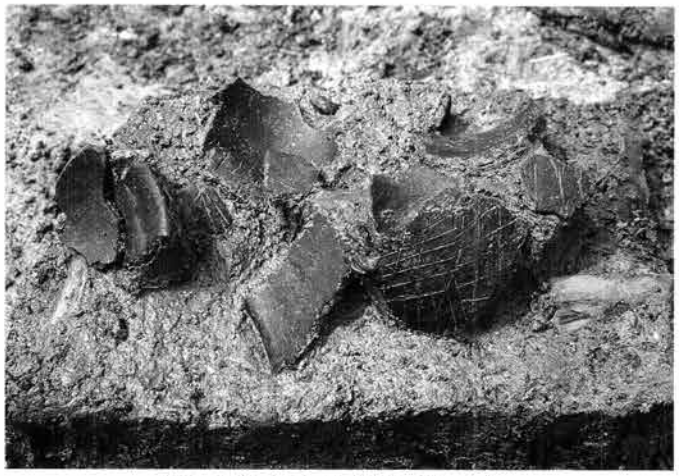
流路２断面（C-C'・西から）

流路１完掘（西から）

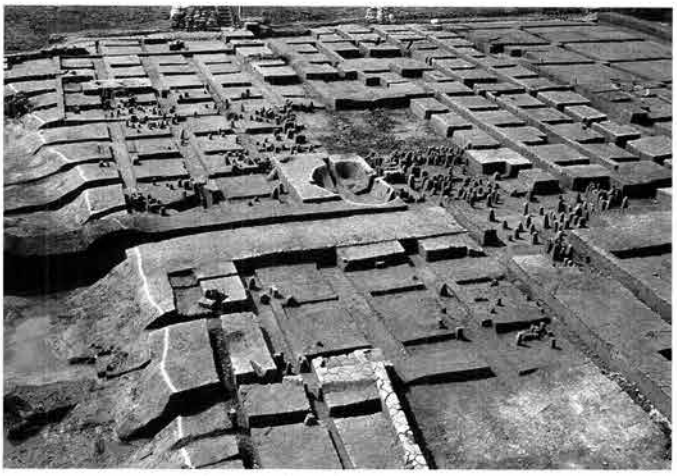
流路２完掘（西から）

流路２遺物出土状況（東から）

流路２遺物出土状況（東から）



流路２遺物（15）出土状況（東から）



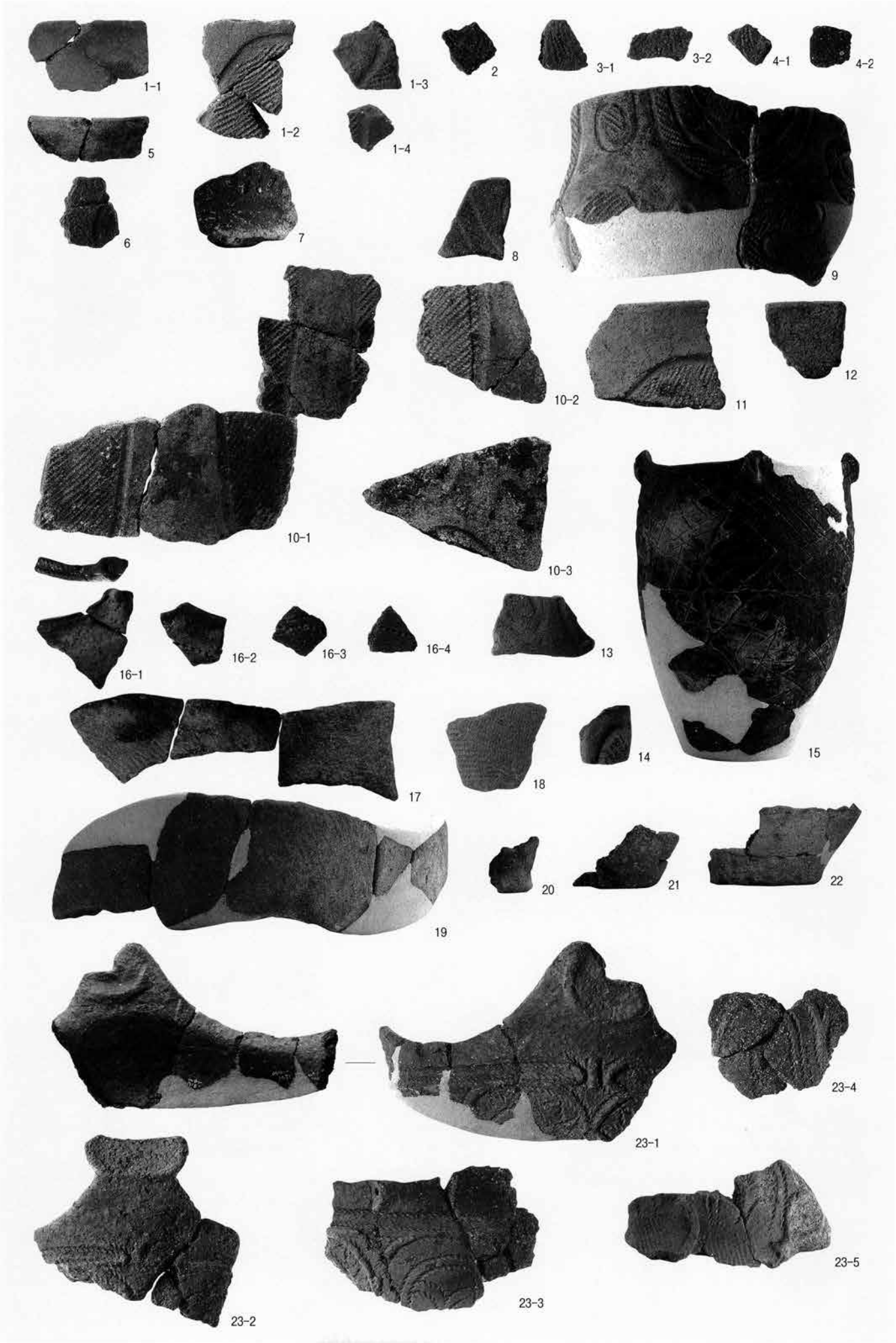
流路北岸遺物出土状況（東から）

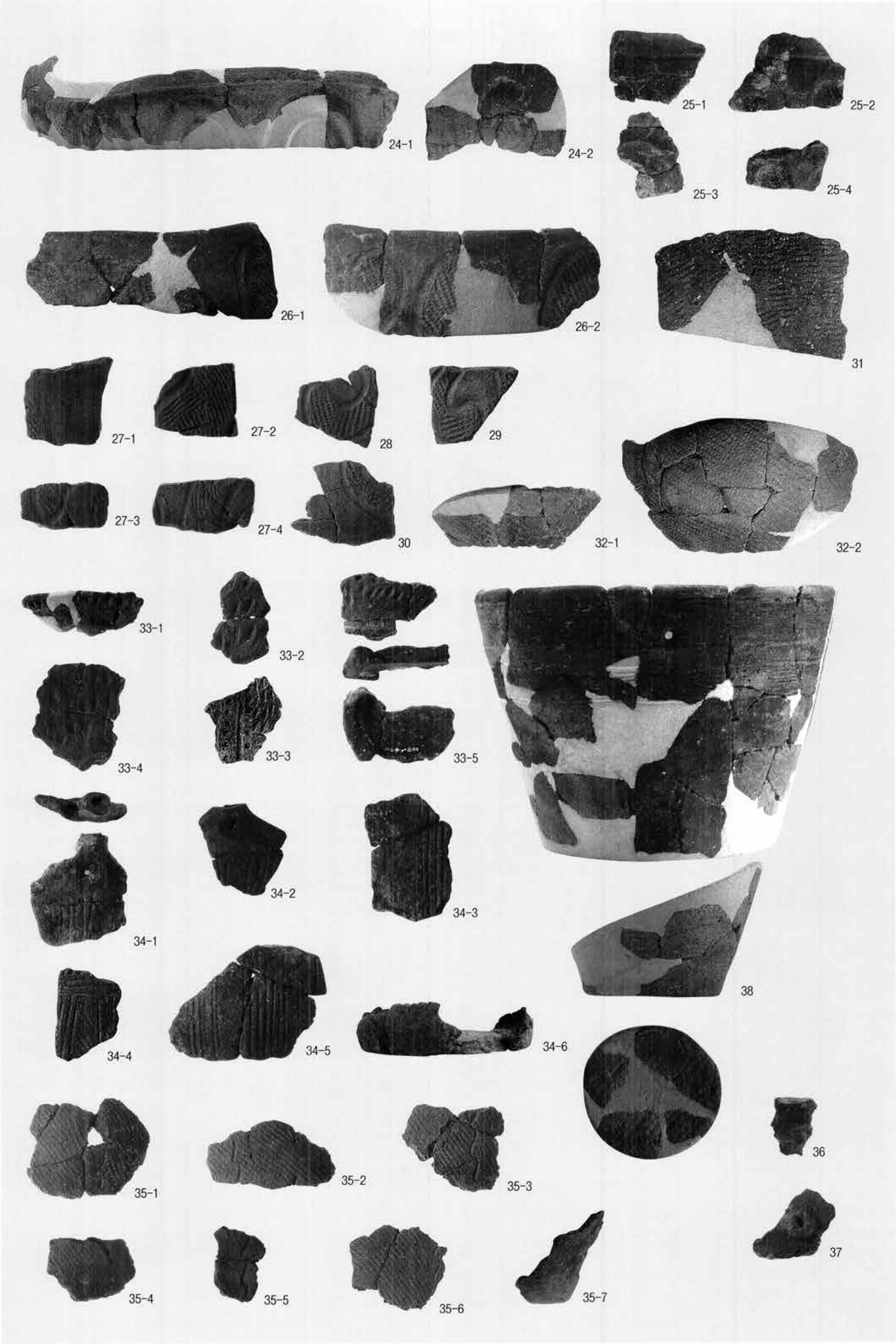
流路北岸（11C・12D）遺物出土状況（東から）

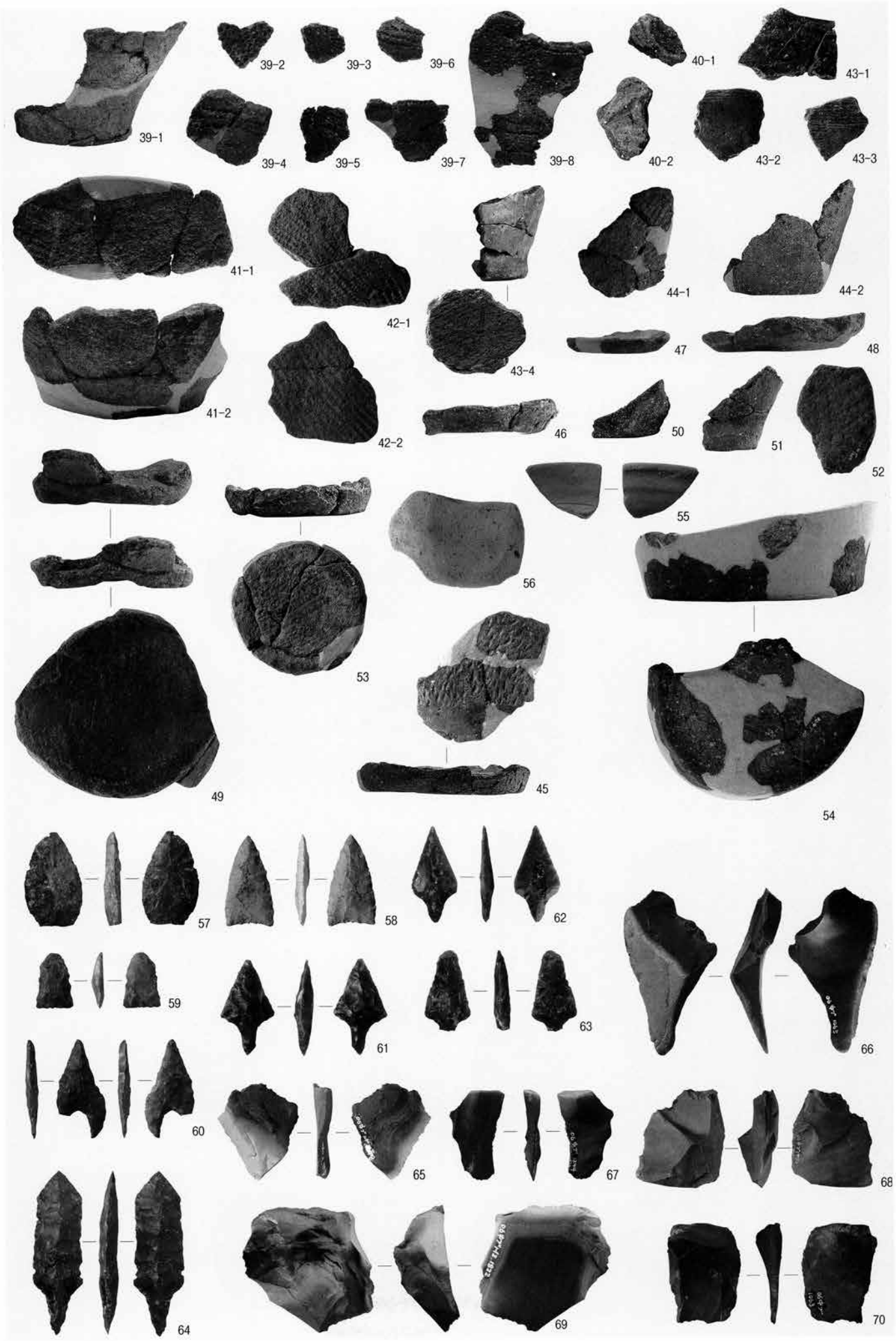
流路北岸（11C）遺物出土状況（東から）

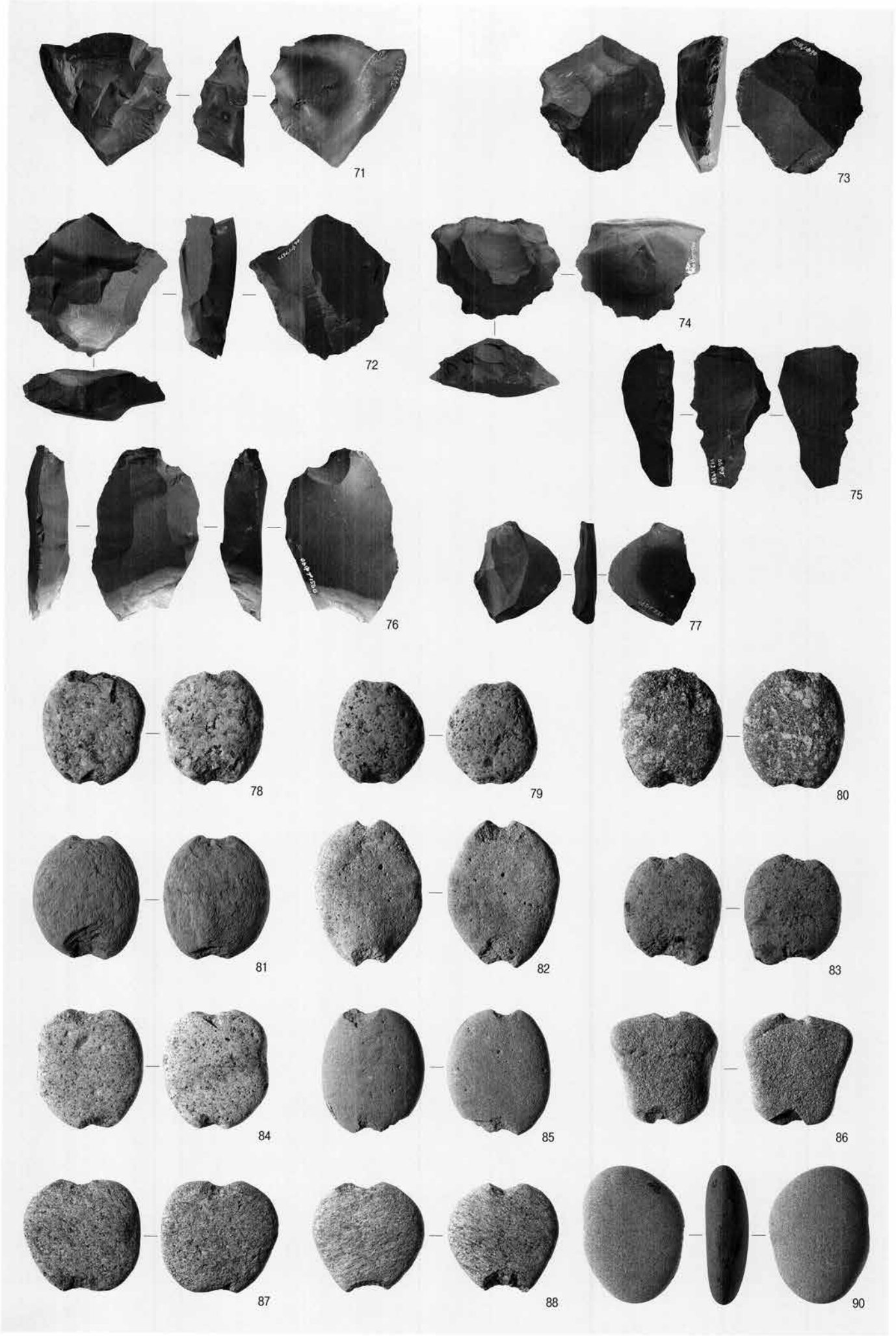
流路北岸（11B）遺物出土状況（西から）

流路南岸（8B）遺物出土状況（東から）

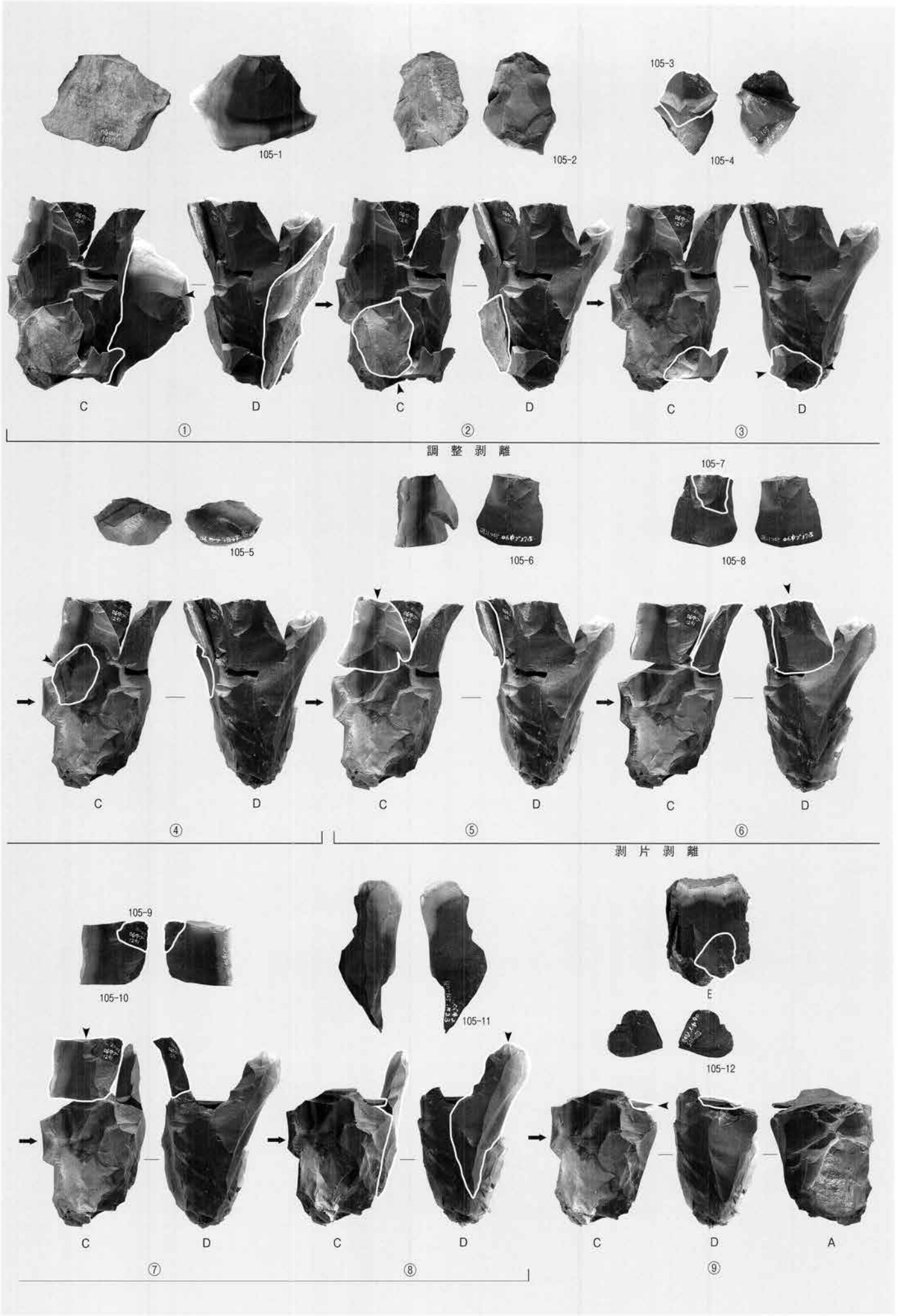

1-1
1-2
1-3
2
3-1
3-2
4-1
4-2
5
1-4
6
7
8
9
10-2
11
12
10-1
10-3
16-1
16-2
16-3
16-4
13
15
17
18
14
19
20
21
22
23-4
23-1
23-2
23-3
23-5


24-1
24-2
25-1
25-2
25-3
25-4
26-1
26-2
31
27-1
27-2
28
29
27-3
27-4
30
32-1
32-2
33-1
33-2
33-4
33-3
33-5
34-2
34-3
34-1
38
34-4
34-5
34-6
36
35-1
35-2
35-3
37
35-4
35-5
35-6
35-7


39-1
39-2
39-3
39-6
39-4
39-5
39-7
39-8
40-1
40-2
43-1
43-2
43-3
41-1
42-1
44-1
44-2
41-2
42-2
43-4
47
48
46
50
51
52
55
56
53
49
45
54
57
58
62
59
61
63
66
60
65
67
68
64
69
70


71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
90

89
91
93
97
92
94
95
96
98
100
104-1
104-2
104
99
102-3
102-2
102-4
102-1
102
101-1
101-2
101
103-1
103-2
103
E
A
B
C
D
105

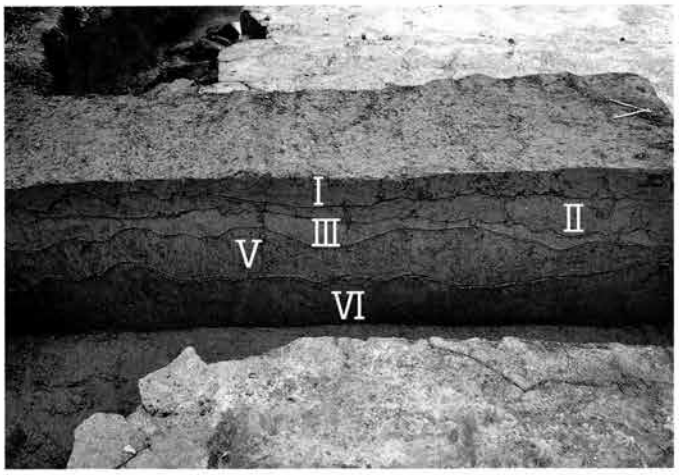

105-1
105-2
105-3
105-4
C
D
C
D
C
D
①
②
③
調 整 剥 離
105-5
105-6
105-7
105-8
C
D
C
D
C
D
④
⑤
⑥
剥 片 剥 離
105-9
105-10
105-11
E
105-12
C
D
C
D
C
D
A
⑦
⑧
⑨

遺跡近景（南東から）

遺跡近景（北から）

北区遺構分布状況（上空から）

桜林遺跡と金屋集落（西から）

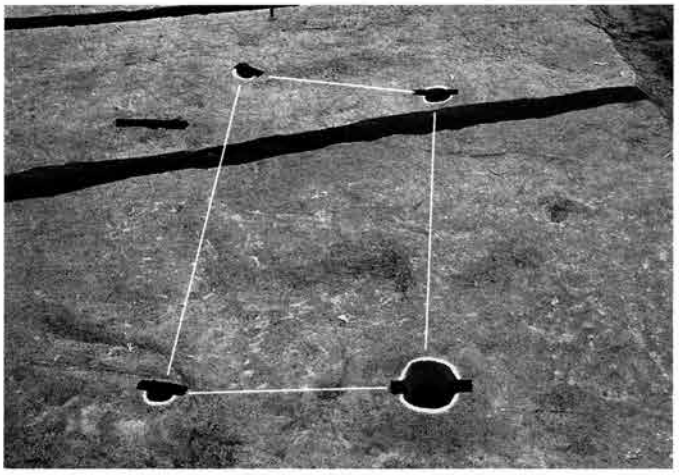


基本層序（14C10・南から）

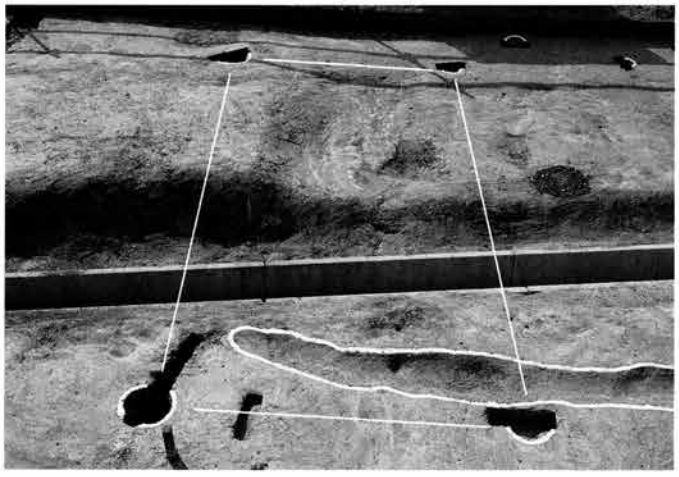
北区南端遺構完掘状況（北から）

SB4 ～ 6 周辺遺構完掘状況（西から）

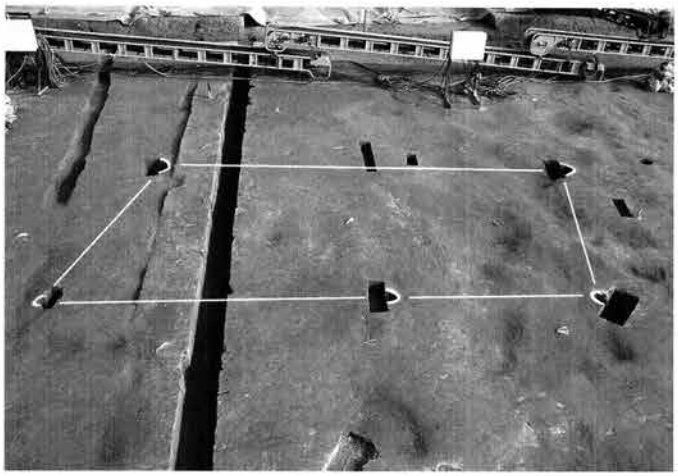
遺構掘削風景（井戸）


SB1 完掘（北から）

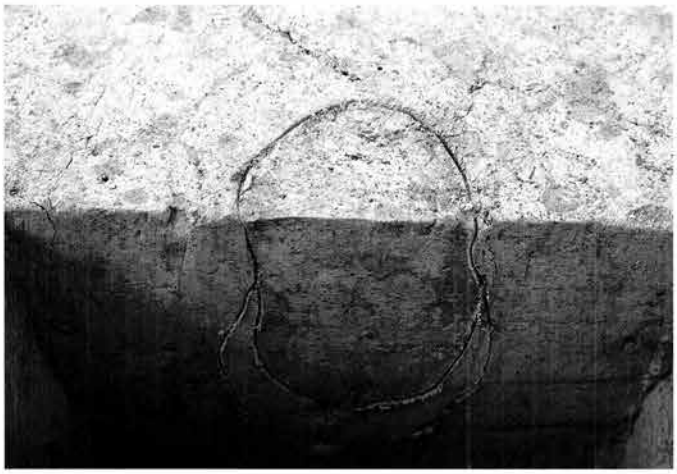
SB1・P173 断面（南から）


SB2 完掘（北から）

SB2・P146 断面（東から）


SB3 完掘（西から）

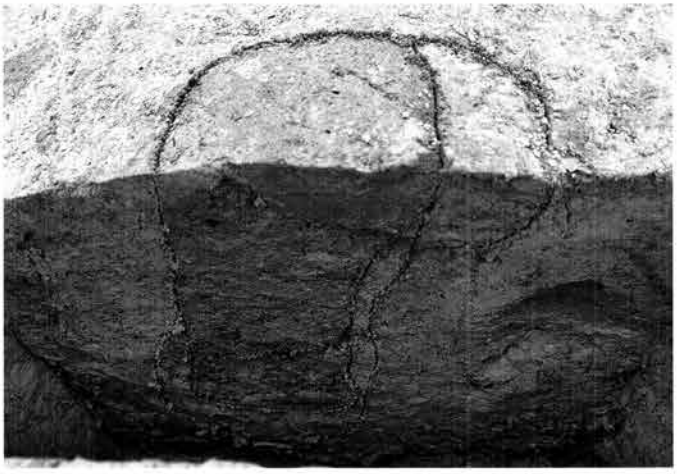
SB3・P188 断面（北から）


SB4・P27 断面（東から）

SB4・P27 完掘（東から）

SB5・P121 断面（南から）

SB5・P121 完掘（南から）


SB6・P125 断面（南から）

SB6・P125 完掘（南から）

SE3 断面（西から）

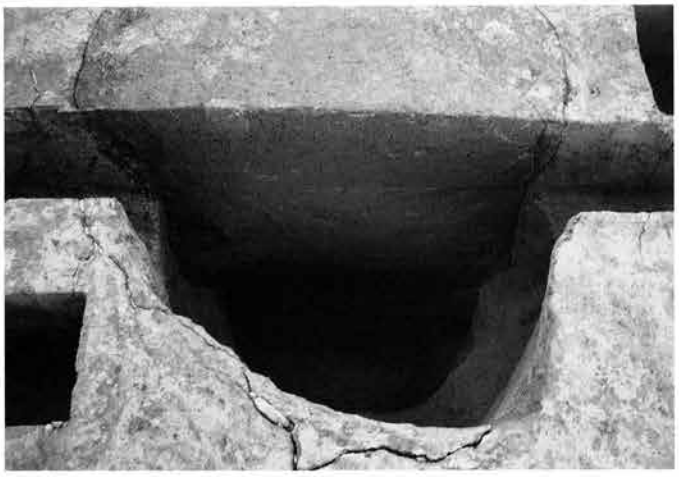
SE3 完掘（西から）

SE4 完掘（西から）

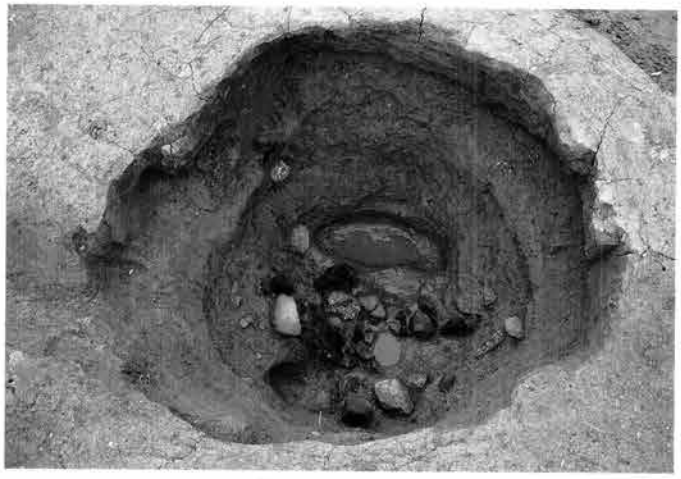
SE26 完掘（西から）

SE41 断面（南から）

SE41 完掘（南から）

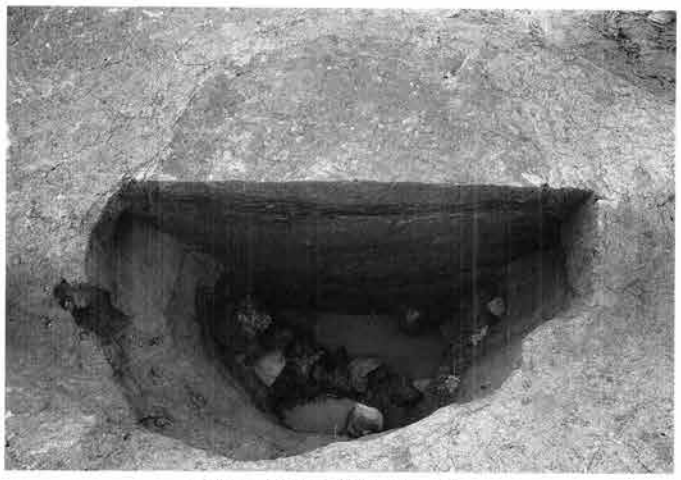

SE66 断面（東から）

SE66 完掘（東から）

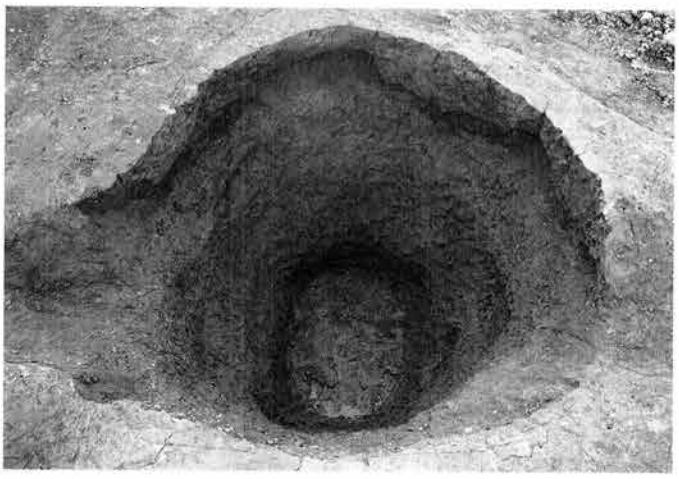


SE102 焼礫出土状況（東から）

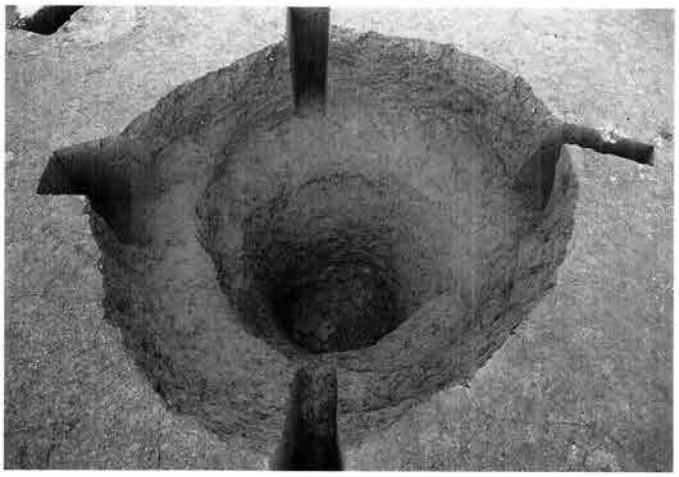
SE102 完掘（東から）



SE103 焼礫出土状況（東から）



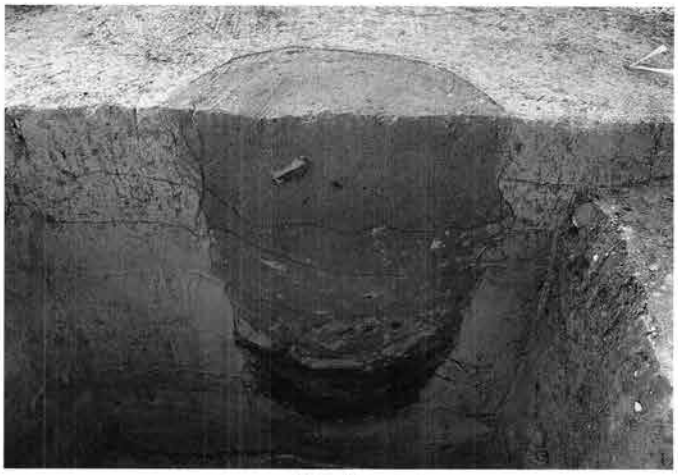
SE103 完掘（東から）



SE127 完掘（南から）

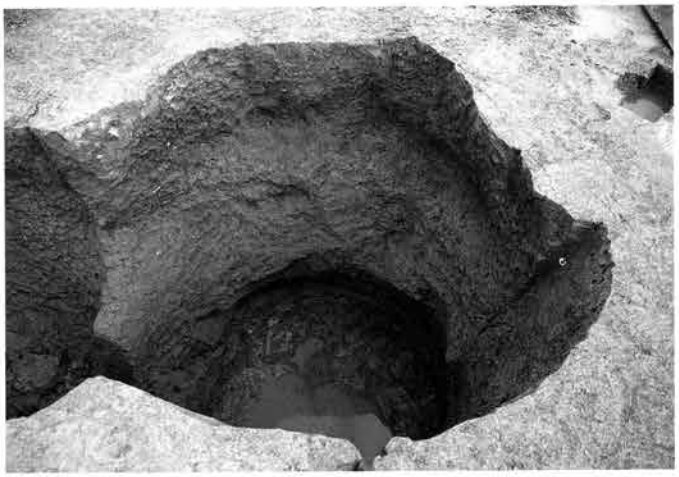
SE130 完掘（西から）

SE141 完掘（西から）



SE142 断面（北から）

SE142 完掘（北から）



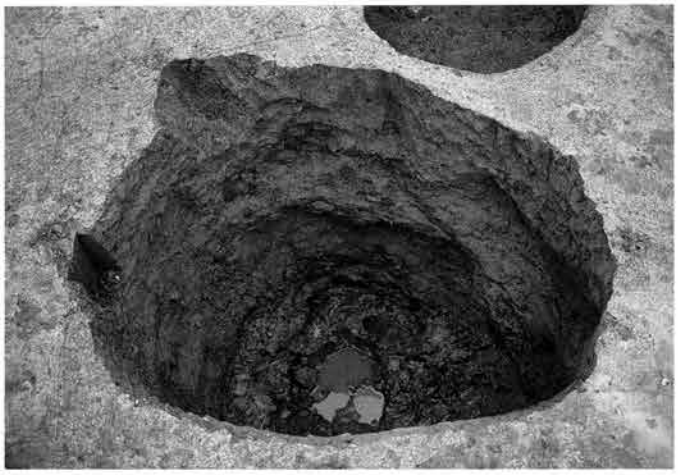
SE145 完掘（南から）

SE149 大型礫出土状況（南から）

SE149 木製臼出土状況（南から）

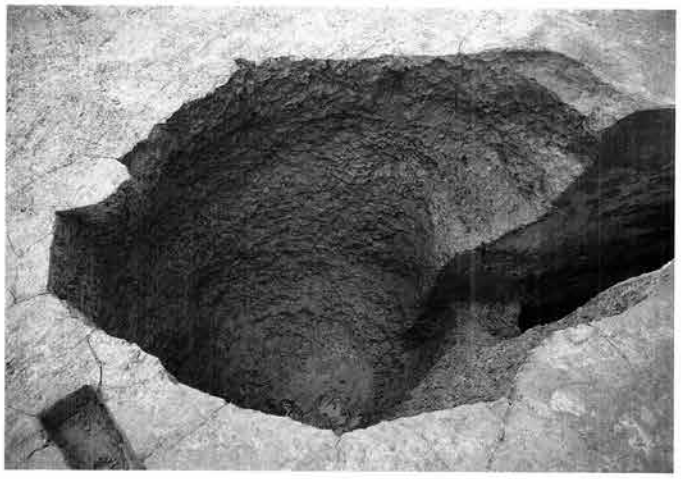
SE149 完掘（南から）

SE161 完掘（東から）



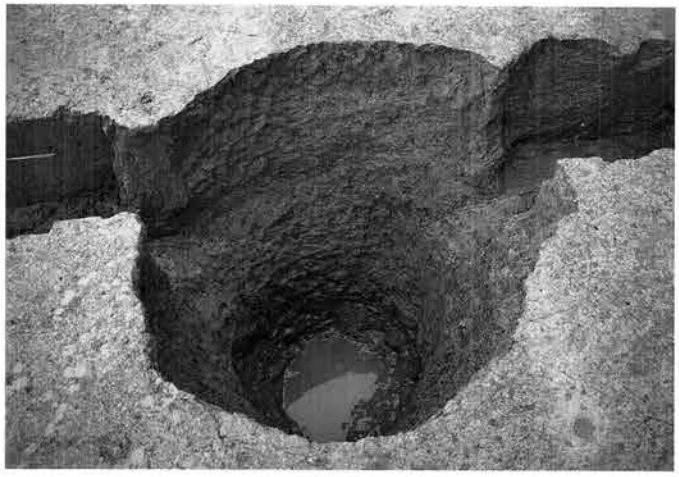
SE162 断面（西から）

SE167 断面（南から）



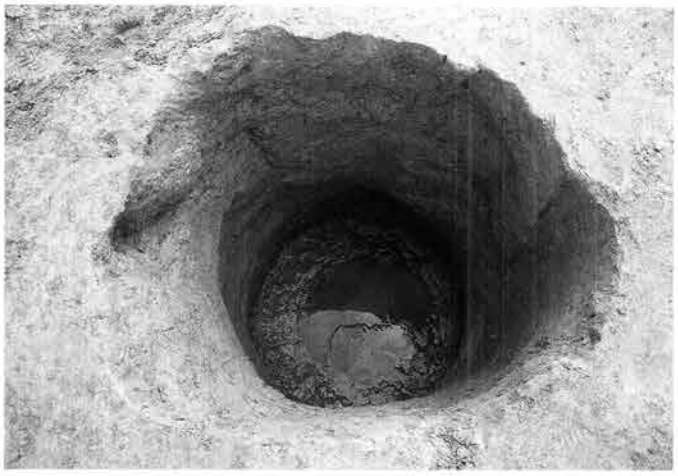
SE167 完掘（南から）

SE168 完掘（東から）

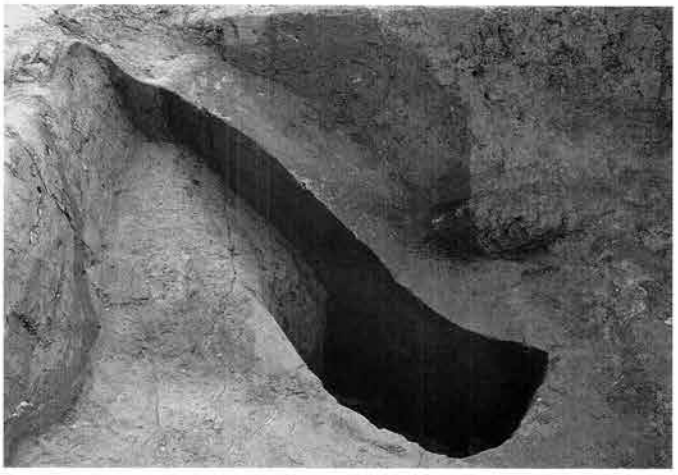


SE169 完掘（南から）

SE189 断面（西から）

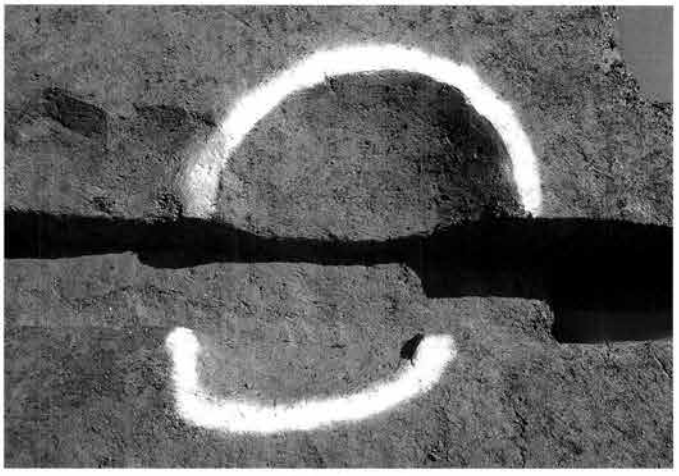


SE189 完掘（西から）



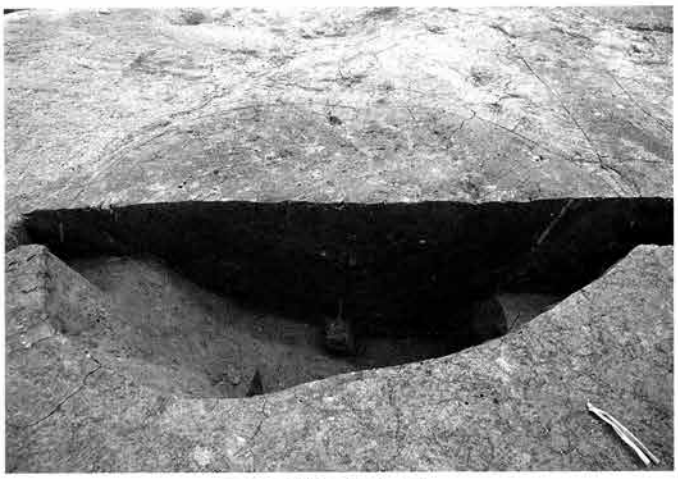
SE191 断面（北から）

SE191 礫出土状況断面（西から）

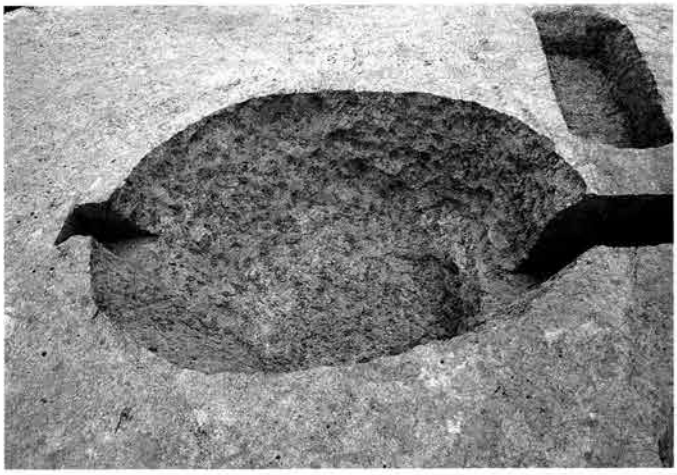


SK13 完掘（西から）

SK128 完掘（南から）

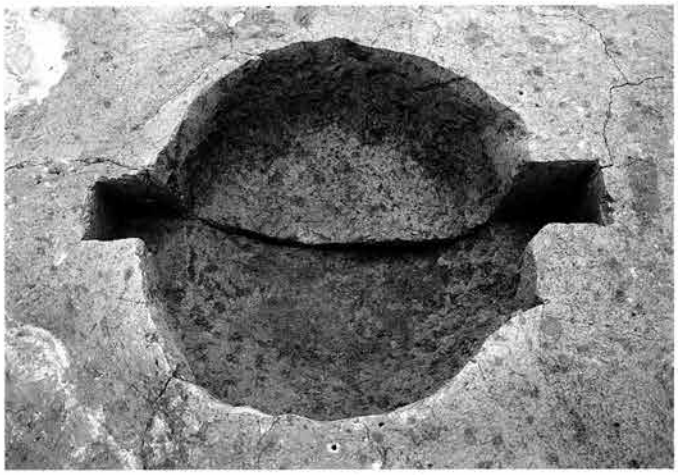


SK129 断面（西から）

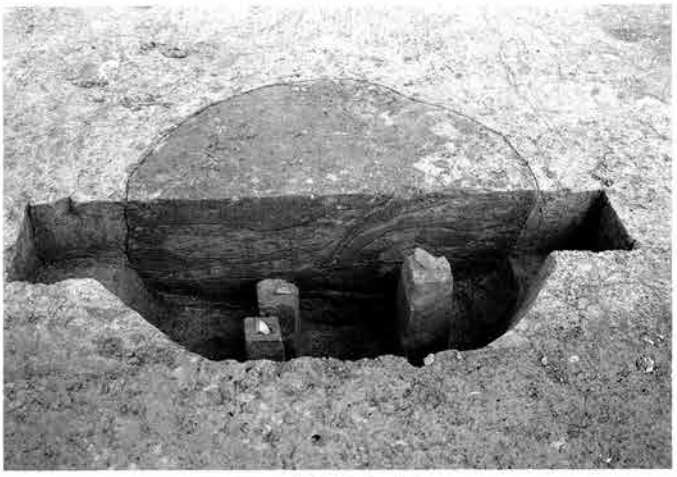


SK129 完掘（西から）

SK132 断面（北から）



SK132 完掘（北から）

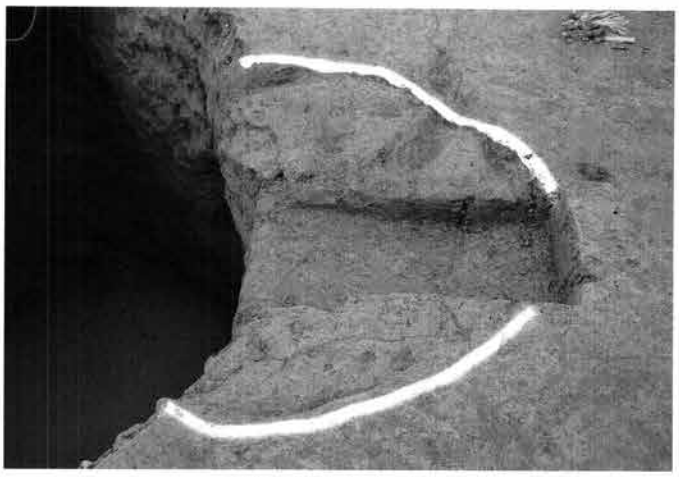


SK133 断面（南から）

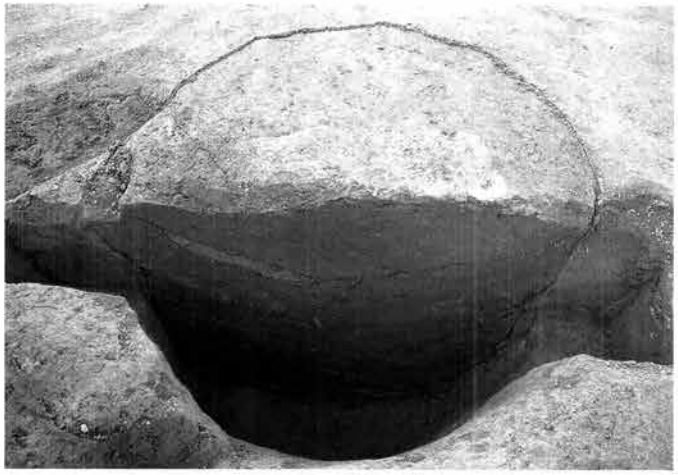
SK133 完掘（南から）

SK134 完掘（東から）

SK144 完掘（東から）



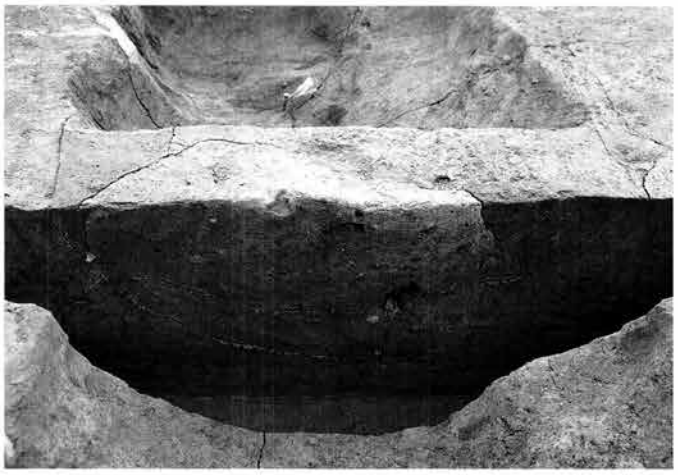
SK180 完掘（南から）



SK210 断面（南から）

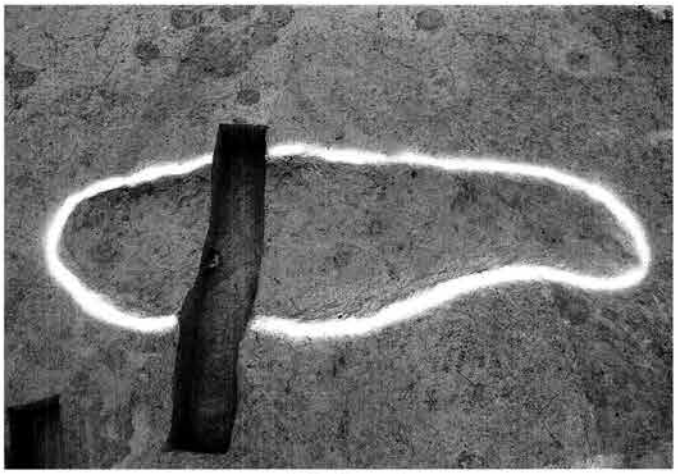
SK210 完掘（南から）

SD1 完掘・礫出土状況（西から）



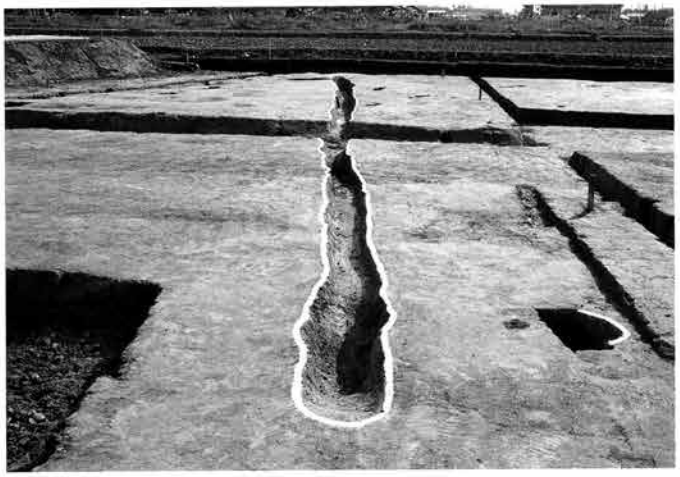
SD1 断面（西から）

SD1・SD31 完掘（北から）

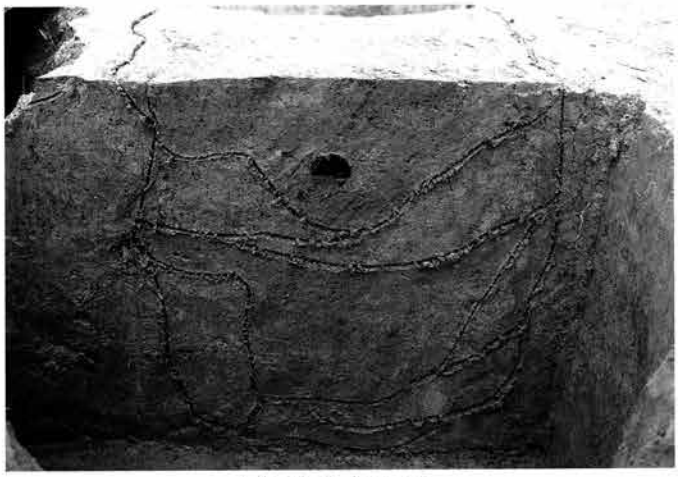


SD2 完掘（南から）

SD148 完掘（北から）



SS179 完掘（西から）



SD178 断面（西から）

SD204 完掘（北から）

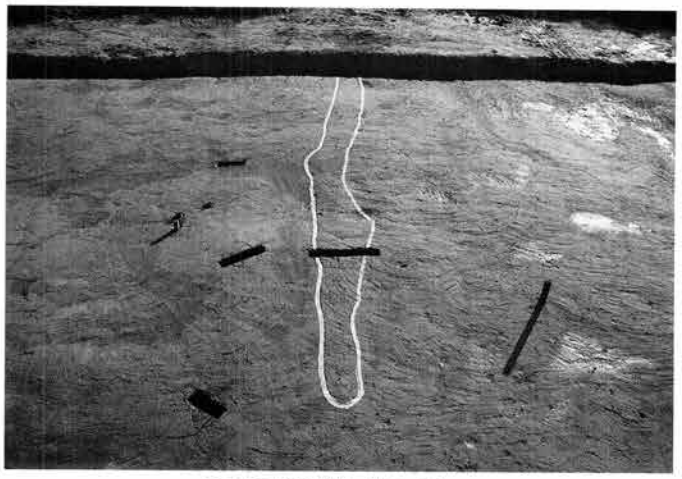
SD204 断面（北から）

SD205 完掘（東から）

SD205 断面（東から）

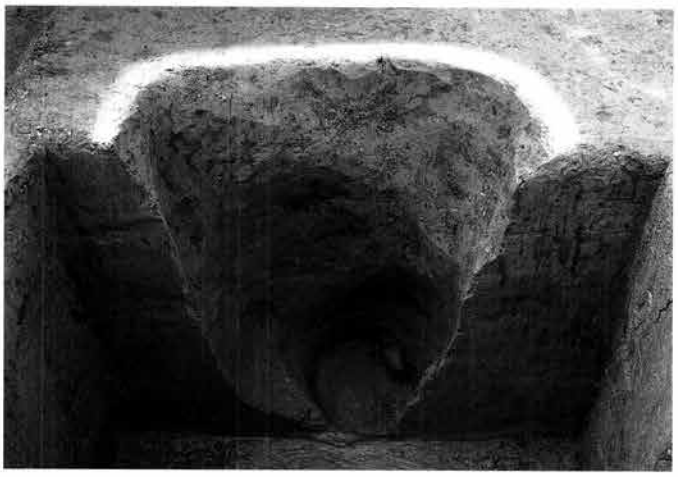
SD208・SD209 完掘（東から）

SD208 断面（東から）

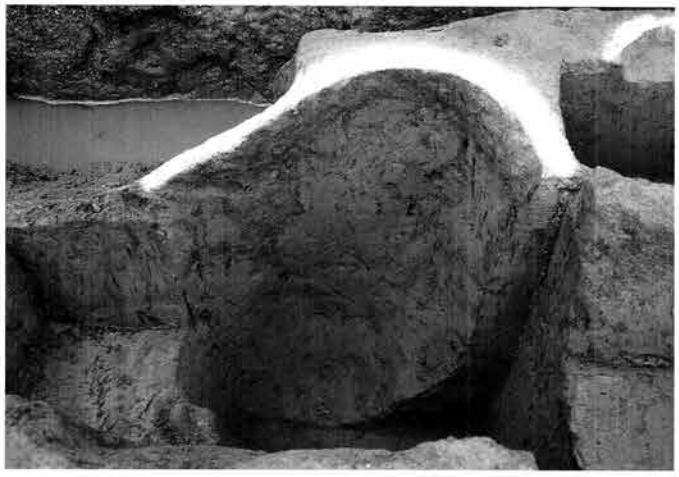


SD212 検出状況（北から）

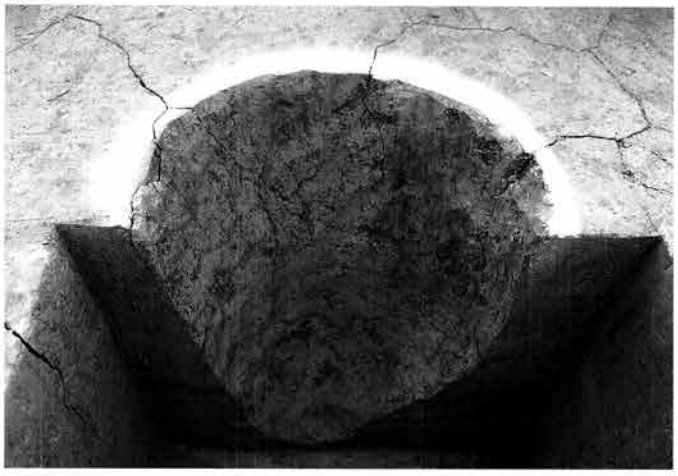
P45 完掘（北から）



P51 完掘（東から）



P53 完掘（北から）



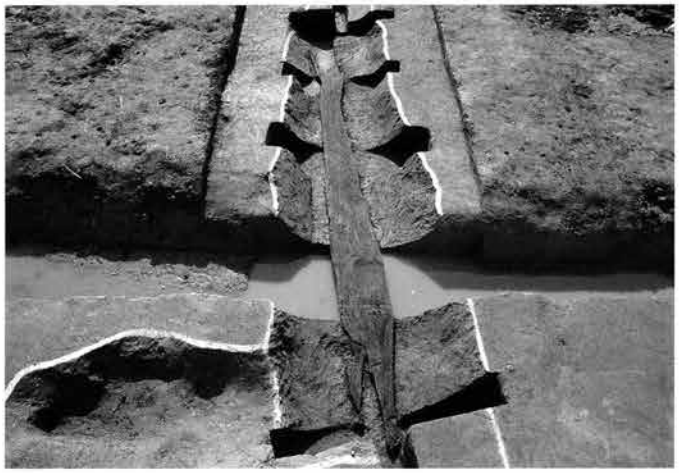
P84 完掘（北から）

P85 完掘（北から）

P87 完掘（南から）

P158 完掘（東から）

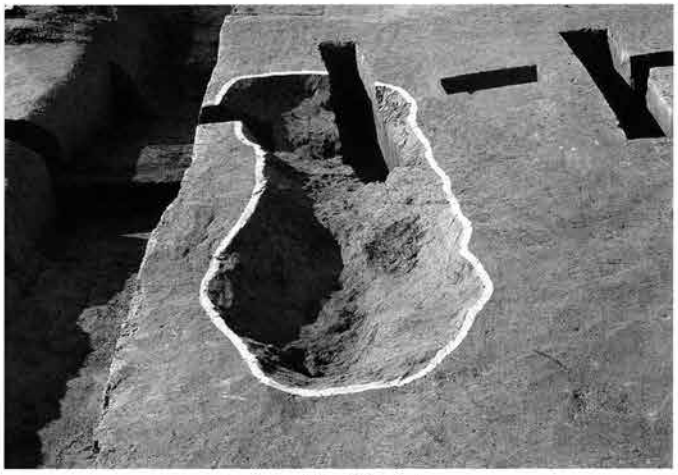
P174 完掘（東から）



SX203 加工木出土状況（北から）

SX203 断面（南から）

SX203 加工木検出状況（北から）



SX207 完掘（東から）

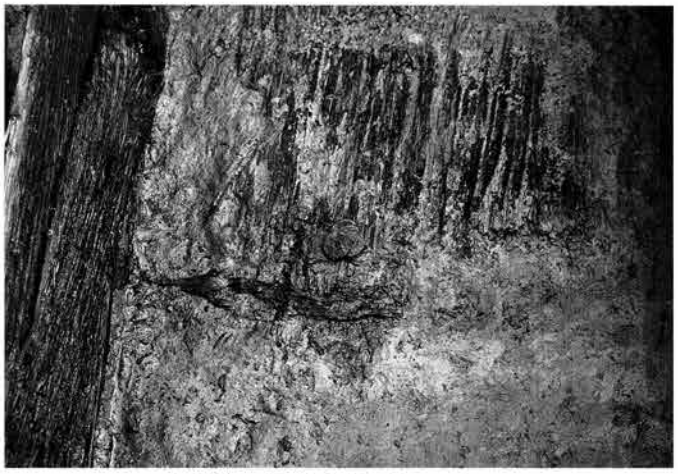
SX207 断面（北から）

近世墓　木棺検出状況（北から）

近世墓断面（北から）

近世墓　漆器椀出土状況（東から）

近世墓　銭貨検出状況（北から）



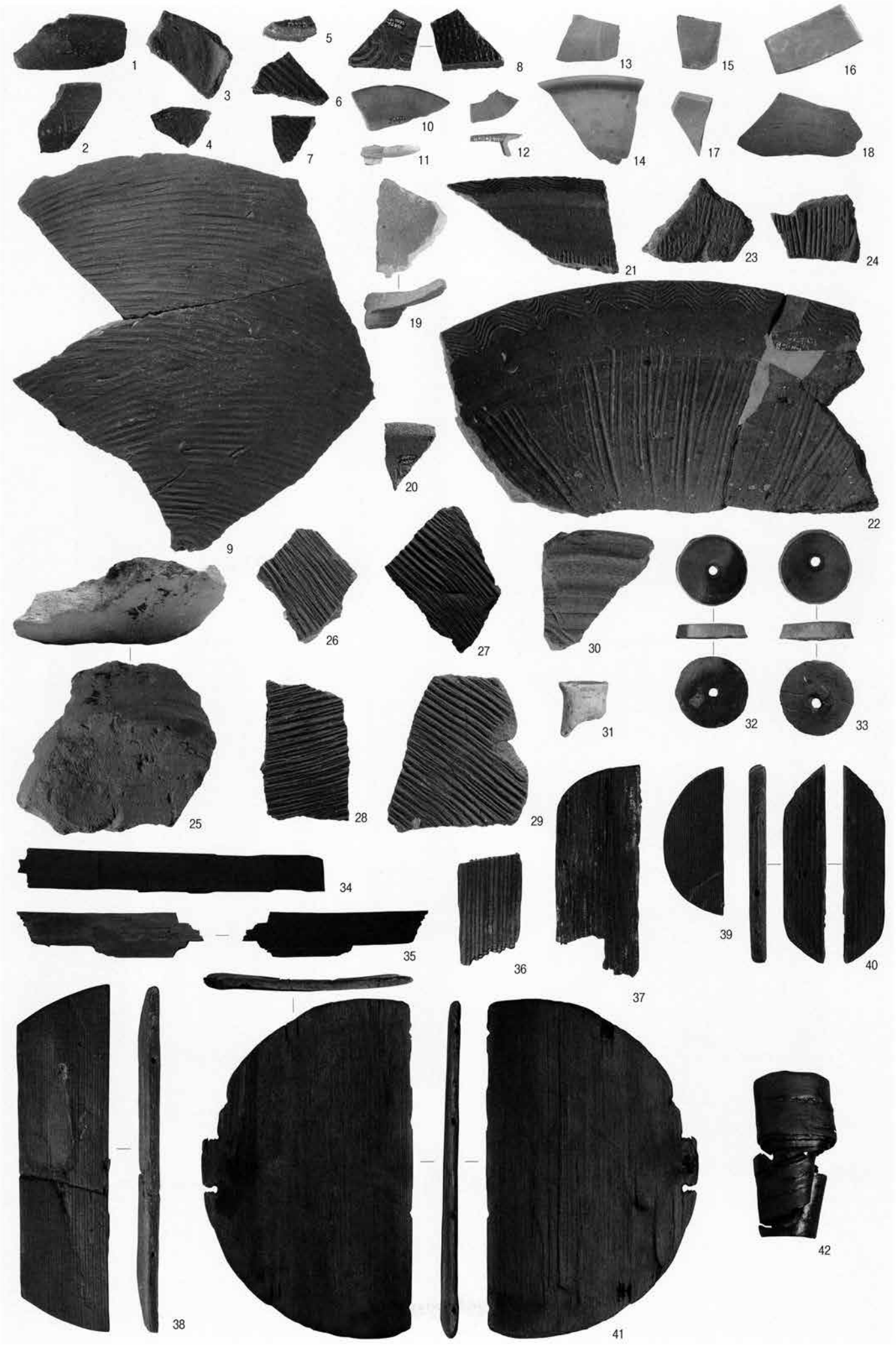
近世墓　底面出土銭貨（北から）

近世墓　木棺構造（横木と側板・西から）

近世墓　木棺構造（側板と横木・西から）

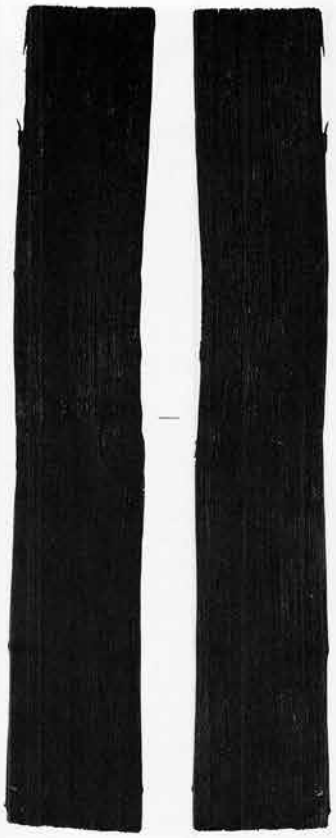
近世墓　底面の樹皮状繊維質（北から）

近世墓　完掘（北から）


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42

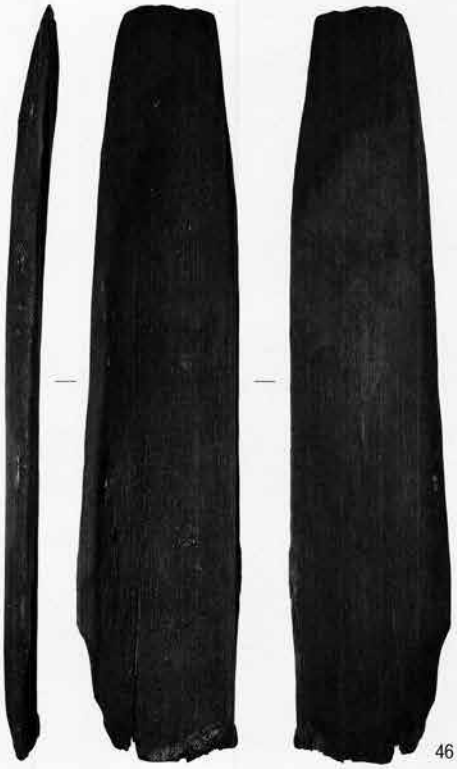
50

43



45

44



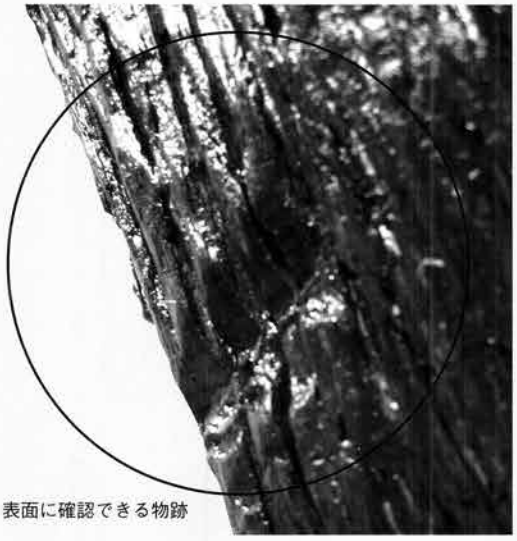
46

51

52
56
57
54
53
62
63
64
65
66
67
55
58
49
48
60
47
61

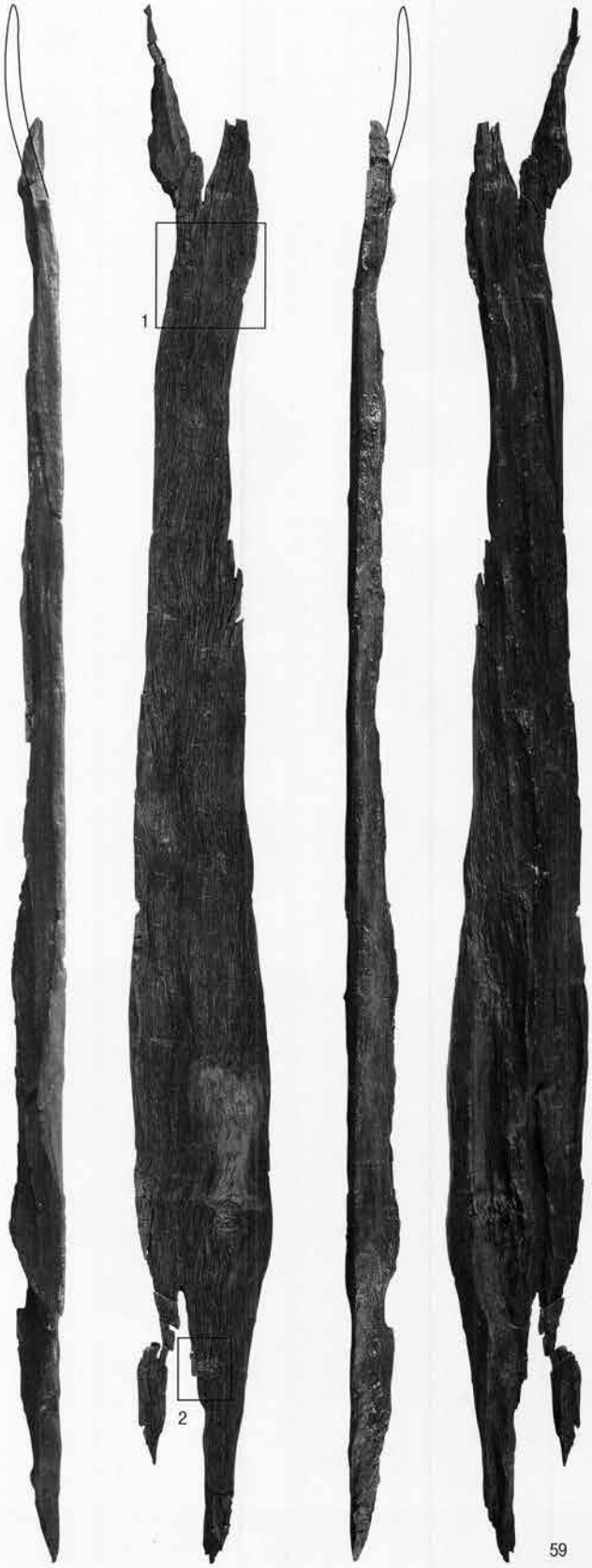
1

表面に確認できる物跡（上二つは不明瞭）



2

表面に確認できる物跡



59

報告書抄録

ふりがな	ちゅうぶきたいせき・さくらばやしいせき
書名	中部北遺跡・桜林遺跡Ⅱ
副書名	日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書
巻次	XXV
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第179集
編著者名	石川智紀（財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団） 継 実 松井 智 山本友紀（株式会社 吉田建設）
編集機関	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団・株式会社 吉田建設
所在地	〒956-0845 新潟県新潟市秋葉区金津93番地1 TEL 0250(25)3981
発行年月日	西暦2008（平成20）年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
ちゅうぶきたいせき 中部北遺跡	にいがたけんいわふねぐんかみはやし 新潟県岩船郡神林 むらおおあざうしや あざちゅうぶ 村大字牛屋字中部 1048ほか	15583	224	38度 09分 23秒	139度 26分 18秒	20060403～ 20060824	3,620㎡	日本海沿岸東北自動車道建設
さくらばやしいせき 桜林遺跡	にいがたけんいわふねぐんあらかわ 新潟県岩船郡荒川 まちおおあざかなやあざさくらばやし 町大字金屋字桜林 1372ほか	15582	77	38度 08分 04秒	139度 25分 13秒	20060825～ 20061116	3,263㎡	日本海沿岸東北自動車道建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中部北遺跡	集落跡	縄文時代中期前葉～後期中葉 平安時代(9世紀後半～10世紀)	縄文時代：土坑7基・炭化物集中1か所・ピット4基・自然流路2 平安時代：杭1本	縄文時代：土器(大木7b式・大木9～10式・三十稲場式・南三十稲場式・加曽利B1式など)・石器(石鏃・不定形石器・石錘・敲石・打製石斧・その他の石器・接合資料) 平安時代：須恵器・土師器・木製品(杭)	自然流路北岸の微高地から出土した石器から、当時の狩猟・漁労などを行う食糧採集の場であったものと考えられる。
桜林遺跡	集落跡	中世・近世前期(14世紀後半～16世紀末・17世紀後半) 奈良・平安時代(8世紀代) 弥生時代前期頃	中世：掘立柱建物6棟・井戸20基・土坑8基・溝8条・ピット142基 近世：木棺墓1基 奈良・平安時代：土坑2基・溝2条 弥生時代前期：性格不明遺構1基 時期不明：性格不明遺構1基	中世：舶載陶磁器(青磁・白磁)・国産陶磁器(珠洲焼・瀬戸・備前)・土師器(皿)・木製品(搗臼・陽物形木製品・ザル・曲物・綴紐用樹皮・板状/棒状木製品・杭など)・石製品(砥石・敲磨石)・金属製品(刀子) 近世：木棺・銭貨(六道銭)・漆器椀 奈良・平安時代：須恵器(杯・甕)・土師器(坏) 弥生時代前期：加工木材 古墳時代中期：高杯 時期不明：円形土製品	遺跡の主体は中世後期の農村と考えられる。 近世の墓は単独で存在する事から、当地の有力者の墓と考えられる。 弥生時代前期の加工木材は、当時の木材加工技術を伝える貴重な資料である。

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第179集
日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書ＸＸＶ
中部北遺跡・桜林遺跡Ⅱ

平成20年3月30日印刷
平成20年3月31日発行

発行　新潟県教育委員会
〒950-8570　新潟市中央区新光町4番地1
電話　025（285）5511

財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒956-0845　新潟市秋葉区金津93番地1
電話　0250（25）3981
FAX　0250（25）3986

印刷・製本　株式会社　第一印刷所
〒950-8724　新潟市中央区和合町2-4-18
電話　025（285）7161

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第179集『中部北遺跡 桜林遺跡Ⅱ』正誤表

2021年11月追加

頁	位置	誤	正
図版37	下から３段目	６６	７１
図版37	下から２段目	６５	７０
図版37	下から２段目	６７	７２
図版37	下から２段目	６８	７３
図版37	下から１段目	６９	６５
図版37	下から１段目	７０	７４
図版38	上から１段目	７１	７５
図版38	上から１段目	７３	６７
図版38	上から２段目	７２	６６
図版38	上から２段目	７４	６８
図版38	上から３段目	７５	６９
図版38	下から１段目	９０	９３
図版39	上から１段目	８９	９２
図版39	上から１段目	９１	９４
図版39	上から１段目	９３	９０
図版39	上から１段目	９７	９８
図版39	上から２段目	９２	８９
図版39	上から２段目	９４	９１
図版39	上から３段目	９８	９７